

竈門炭治郎になったけど妹まで同類だった

シスコン軍曹

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

竈門炭治郎になったけど禰豆子まで自分と同じ状況だった件!!
とりあえず二人ともアニメ勢だけど頑張っていこうと思う

目次

兄妹だけどほぼ他人	1
鬼狩りと兄妹、それぞれの想い	6
旅の始まり	12
兄の覚悟	18
鍛錬の日々	24
錆兎と真菰	30
最終選別	39
水と雷	47
帰還と初任務	54
沼鬼との戦い	63
都会の鬼	69
鬼であり医者	77
再会	87
鬼屋敷と猪、そしてタンポポ	94
鬼屋敷の戦い	102
集う三人の鬼殺隊士	110
那田蜘蛛山	118
操られる者たち	126
たった一人の少女を守る為に	133
偽物の家族	142
兄の家族	150
竜	157
再会と逮捕	166
鬼殺の柱とお館様	175

視えたもの	327
祭りの神	318
盲目の鬼	309
新たな任務の前哨戦	302
鬼の始祖の現状	299
為すべき事	294
新たな決意	286
夜明けの時	278
地獄の連鎖	268
悪夢の終焉	261
悪夢の延長と目覚める者たち	254
下弦の壺	247
目覚め	235
竈門炭治郎	229
夢幻の世界	223
無限列車	217
花の心	212
胡蝶の夢	206
柱との稽古	197
蝶屋敷	190
会議の終わり	183

兄妹だけどほぼ他人

転生した。

転生しちゃいました……『鬼滅の刃』の世界に……憑依という形で……。

……嫌アアアアアアアアアアア!!!

しかも名前が……『竈門炭治郎』だつてき。ハッハッハ……はあ。先に行つておくと、俺はアニメ勢であつて原作の詳しい話は知らない。けど、俺は実はネタバレを気にしない人間で、先の展開やラストを勝手に見ている。だから当然知っている。

みんなのトラウマ……というか、最終決戦で何が起こるのかを。……嫌だなあ。

「……目が覚めたら血まみれの小屋が目の前にあるのを無視できる程には嫌だなあ……」

そう、気が付くと俺は雪の上で寝そべっていた。慌てて起き上がったみたら目の前には誰かの死体と、血塗れになったボロ小屋。

それだけでは俺は自分自身が誰なのかは気づけなかったが、突如として、『竈門炭治郎』としての記憶が俺の頭に流れ込んできたのだ!

(棒コ○ン風)

そう言う訳で、俺としては全く知らないはずなのに知っていると妙な感じになっていて困っているのだが、取りあえず放置はダメだよな? な? (威圧)

「……死体……埋めるか」

正直抵抗感が凄い。触りたくない衝動に駆られる。けど……流石にちよつとかわいそうっていうか……。我慢だ我慢!

「……あれ? そういや、禰豆子ねづこがいなくない?」

確か原作ではこの辺りで弟を庇つてたりしていたはずだが……あつ。

「俺が寝てたから凍死したのか?! それとも、勝手に人を襲いに行つたとか?! 嘘だろそれはやばいって!!」

原作は禰豆子ちゃんが居たから何とかなつた場面も多い(と思う)。

なので彼女無しに原作を生きるというのは少し無理がある。

「いやでも……禰豆子ちゃんに俺の言葉が届くとは思えないな……
だって俺、偽物だし」

勝手にお兄さんの体乗っ取ったやつにいい顔はしないはず。というか喰われる。絶対喰われる。

「あれ？もしかしなくても詰んだ？……えっ？」

思わず諦めモードになっていると、家の庭……畑みたいところから口の端から血が流れる禰豆子ちゃんが現れた。

やつべ……どんな顔して会えばいいんだよ……とりあえず挨拶？

いや、無事でよかったか聞く方がいいのか？

「あの一」

「ちよつと待って今考えてるからちよつと待って」

「ちよつと待って二回言った。っていうかこつち向いて」

「痛い！ チョップはやめて!! お前鬼になってるんだから力が強い……」

「えっ、何で鬼になってるって分かるの？」

待って。なんで禰豆子ちゃん俺を襲ってこないの？ それどころかなんでこんな構ってムード出してるの？

えっ？ 兄妹の力で鬼の本能を乗り越える感動話は？ いや俺に

出来るとは思えないけど。

てか今更だが……、喋ってない？

「……あの、俺……ついさっき目が覚めて、いつの間にか竈門炭治郎になつてたんですけど……」

「…………貴方も？」

オウマイゴッド。……もってことはやっぱり……そういうことなの？

「……起きたら種族変わってるし、目の前には誰か知らない人の死体があつてビックリしました」

禰豆子がそう言う。……あ、ふくん。……もうやだ。

「詰んだ」

「酷くない!?!」

「ていうかなんで喋れるんだよ……?」

「私が聞きたい。鬼なのに知性あるし」

「鬼って普通に喋れなかったっけ?」

「鬼は強くなるほど人間から離れていくからその影響で人間の記憶も飛ぶ……はず」

「曖昧だな」

「だって原作読んでないもん」

Oh……そんなところまで同じなのか。

「後私、ネタバレが嫌い」

「あ、そこは違うのね」

俺はネタバレを気にしない質だが、禰豆子(?)は違うらしい。

「……あれ? 家の中に死体がない?」

「私が埋めておいた。途中凄い飢餓感が来て泣きそうだったけど」

「えっ? 大丈夫なのそれ!」

「勿論。何かギリギリ大丈夫だった」

「えっ、でも口の端から血が流れてるけど」

「……、」

禰豆子は無言で口を拭くと、こちらに向き直り、額に冷や汗を滲ませながら言った。

「……ギリギリ大丈夫だったから」

「いやアウトだよな!! 思いつきり喰ったよな!!」

「生きてないからセーフ」

「アウトだよオオオオオオオオオオオオオオオオオオ—— ツツツ!!!!」

思わず俺は叫ぶが。

「うるさい」

「アベシ!」

何故か禰豆子にチョップされる。いや、怒りたいの俺。チョップしたいの俺。

「大体、それなら珠世さんの輸血だってギリギリアウトになるんじゃない?」

「いやあれは……セーフなのか?」

「じゃあ私もセーフ」

「鬼の価値観が分からない……」

思わず膝をつく。

「とりあえず……呼び方はどうする？ 前世の名前とか覚えてる？」

「転移ならともかく、憑依ならなるべく、その人物の名前でいきたい」

「お前がそれでいいならいいが……」

「よろしく炭治郎お兄ちゃん」

ぐフツ!? これは強烈……!

……まあ、でも……。

「正直、これでよかったのかもな」

「？」

「俺が憑依したのついさっきだから、竈門炭治郎として原作の禰豆子に顔を合わせられる自信が無かったし」

「……、」

「目が覚めたら寒い雪の中で一人だったし……『鬼滅の刃』の話を誰にも出来ないのはちよつと寂しいっていうか……なんていうか……。それに、俺が竈門炭治郎なら、この先過酷な修行とかも——」

「大丈夫」

すると、弱音を吐いていた俺を禰豆子が抱きしめた。……暖かい。

「……禰豆子」

「主人公とか、そんなの関係ない。貴方は貴方だから」

「……、」

「それに、私もちよつとだけ不安だった。どんな顔して炭治郎に会えばいいのか分からないから」

「禰豆子……」

一応……妹のはずなんだけどなあ……。

「なんなら、私は人間に戻れなくてもいい。だから、貴方が望むなら……ッ!?」

すると、禰豆子が唐突に俺を引き剥がし、投げ飛ばす。

それと同時に、ただでさえボロかった小屋が更に破壊された。

「……、」

「クソっ、一体何が……?!」

俺は痛む頭を押さえながら起き上がると、

「……、」

「……何のつもりだ？」

そこでは、刀を禰豆子に向けて、威嚇するような動作を取る男性と。

「……、」

俺を背に、庇うように無言で立つ禰豆子がいた。

鬼狩りと兄妹、それぞれの想い

「……、」

「……、」

鬼と鬼狩りが、互いに睨み合う。

そんな状況を、俺はただ呆然と見ているしかできなかつた。目の前の現象を、まるで夢か何かの様に認識していた。

「うゝうゝ……!」

「禰豆子……? ……ッ!」

禰豆子が威嚇するように呻き声を上げる。

だが、俺は気づいた。彼女の息は荒く、足がガクガクと生まれただの小鹿のように震えており、どう見ても怯えていた。

そんな彼女の姿を見て、俺はハツと意識を現実に戻し、近くに会った斧を取りつつ、彼女を庇うように前に立って説得を試みる。

「待ってくれ! この子を傷付けるのはやめてくれ!!」

目の前の男性は恐らく、富岡義勇。鬼殺隊の柱の一つ、水柱で、凄まじい實力を持つ剣士だ。到底、俺の敵う存在ではない。

だからこそ、どんな相手にも通じる言葉で対抗しようとしたが、

「断る。俺の仕事は人食い鬼を切ることだ」

当然だろう。富岡義勇は鬼殺隊の任務に忠実だ。こんなことで納得するような人物ではない。

尤も、鬼殺隊であれば、鬼を庇う存在など誰も許しはしないだろう。そう考えれば、富岡義勇はだいたい譲歩しているほうだ。

「なら尚更待ってくれ! 禰豆子は生きてる人を食ったことなんてないし、これからも決して襲いはしない!! 信じてくれ!! お願いだから彼女を殺すのは——」

「ならそれをどうやって証明するつもりだ?」

「……………これ以上は話して無駄だろう。」

俺は富岡義勇の言葉を聞き、無言で斧を構える。武器なんて……ましてや、斧どころかナイフだって振ったことのない俺だけど、禰豆子を守らないと。

たった一つの、繋がりなんだ。俺を独りぼっちにしない、唯一の存在なんだ。絶対に死なせはしない……！

「……そうか」

俺の戦う意思を汲み取ったのか、富岡義勇も矛先を俺へと変えた。

「はあっ！」

瞬間、俺は斧を横向きにし、スコップで削るように、雪を掻き出し、富岡義勇へと放つ。

その瞬間、雪でしつかり隠れるように斧を上空へと投げ放った。よし、これで準備は整った！

「ちっ」

腕では防ぎきれないほどの雪の量に、思わず彼は少し後退した。

それでいい。なるべく禰豆子から離れば、それだけ彼女の生き残る確率は上がる。

「……今度は守る」

俺は後悔の感情を滲ませた言葉を呟き、富岡義勇へと駆けていく。かつて、俺には妹がいた。頼りがいがあつて、優しくて……自慢の妹。例えば、禰豆子になった女の子はどこか、俺の妹にそっくりだ。だからこそ、あの子に抱かれた時、あんなにも安心したし、暖かいと思つたのだろう。

いざという時に緊張したり、怖がつたりするところなんかもそっくりだった。けど、あの子は強がりだったから、絶対に認めようとはしなかつたな。

……あの暖かさを、決して失わせない。……もう二度と。

(……ただ突っ込んでくるだけか)

そんな俺に、どこか呆れたような、失望の感情を顔に滲ませた富岡義勇は、目にも止まらぬ速さで俺の背に肘打ちを放とうとする。

……やっぱり来た！

「？」

俺は全力でその攻撃を横にカツ飛んで躲す。来ると分かっている攻撃、しかも手加減されているのだから、避けることは……全力でやればなんとかなる。

再び俺に向かって構えなおす富岡義勇だが、突如不審がつて俺に聞く。

「お前、斧はどうした……まさか!?」
「!」

富岡義勇が上空へと目を向けた。

それと同時に、俺は全力で富岡義勇に飛び掛かる。

「ちっ、面倒だ……なに?」

何度目かの疑問の声を漏らす富岡義勇。俺は飛び掛かる直前で停止し、斧が富岡義勇に降りかかるのを待った。

当然、と富岡義勇は飛んできた斧を刀で弾くが、その僅かな隙の間に一気に富岡義勇に飛び掛かり、彼の肩を掴む。

(よし!)

「……力比で俺に勝てるつもりか? 浅はかだぞ」

「分かっている。……だから!」

だから……俺がこの状況で、唯一この男に勝っているものを使うしかない。

「はあああああツツツ!!!!」

「ぐっ……! 頭突き……!」

俺が富岡義勇に勝っているもの。確証はなかったが、それは竈門炭治郎本人が持つ頭の固さだ。

しかし、頭突きした俺も痛い。俺だから、本人のような頑丈さは出せないのか?

「関係……あるかあああああ——ツツツ!!!!」

俺は再び二度目の頭突きを放とうとする……が。

「ガフッ!」

「……二度も同じ手は食わん」

その言葉を最後に、俺の意識は刈り取られた。

……彌豆子は……もう……、逃げ……た……かな?

「……………傷つけさせない……………絶対に!!」

「!? ……お前は……………」

炭治郎を庇いながら、烈火の如く富岡義勇を睨みつける。こんなことをしても、彼が怯みはしないのは分かっている。それでも、戦わないといけない。

私と炭治郎は、例え血で繋がっていても、兄妹ではないのだろう。……………でも、それでも、私のたった一つの繋がりで……………私を守ってくれた人なんだから。

私たちの行動を見て何を思ったのか、富岡義勇は刀を鞘に納める。その動作を不審がったが次の瞬間、富岡義勇の姿が消える。

辺りを見渡して搜索しようとするが、

「うぐっ!?」

首筋の衝撃によって、私は意識を手放した。

「……………」

雪の上で倒れながらも、お互いに手を繋ぎ合う禰豆子と炭治郎を見て、富岡義勇は思考に耽る。

(……………俺が敵になると分かった途端、説得をやめ、俺に生殺与奪の権を握らせないよう立ち向かう兄。敵わないと分かっているながらも、咄嗟の機転で、俺の油断を見抜き一撃を与える行動力と洞察力、そして幸運。そして、俺の不意打ちから咄嗟に兄であろうこの少年を守る為に動き、俺の気迫に怯えながら何も出来なくなっていたのが、こいつを倒した途端、猛然と拳を振るってきた鬼の少女。……………恐らくこの鬼の少女は、つい先ほど変質したばかりで、飢餓状態にあるはずだ。それを押し殺し、兄の為だけに己を奮い立たせ、立ち上がる心持ち……………)

「……………この二人は、何か違う」

そんな、根拠の無い確信をもって、富岡義勇は呟いた。

旅の始まり

——ごめんね。

……声が、聞こえる。……聞いたことのないはずなのに、どこか懐かしい声だ。

——何もかも貴方たちに押し付けてしまつてごめんなさい。

……謝る必要はないはずだ。だって、俺だって……！

——辛いことを押し付けしちゃうかもしれない。でも、どうか負けないで。

……当たり前だ。禰豆子は、俺が守る……絶対に……！

——ありがとう。

——俺か■も頼■。禰豆子■守つ■■つて■れ。そ■て、お前の妹も……！

……待て。お前は——

「……はっ！」

背筋に感じる雪の寒さに震え、目が覚めた。

今のは……夢？ 多分、最初の奴は母親だろう。でも、最後の奴は一体……。

ふと、辺りを見渡してみると、横に上着をかけて眠っている禰豆子

がいた。そして、奥の方には富岡義勇がいる。

「起きたか。狭霧山の麓に住んでいる、鱗滝左近次という老人を訪ねろ。富岡義勇に言われて来たと言え。今は日が差していないから大丈夫なようだが、妹を太陽の下に連れ出すなよ」

一方的に言うだけ言った富岡義勇は、一瞬で俺たちの前から消えた。

その後、無事に目覚めた禰豆子と一緒に、残っていた死体を埋葬した。

「……なあ、禰豆子」

「？」

「この人たちの死体、結構綺麗だったけど、ホントに食べたのか？」

「……食べようとはした。でも、なんとなく、それをしたら戻れない気がしたの。それでも耐えられなくて、せめて血を飲もうとしたら、貴方が来て……吹いた」

吹いたって……ああ。だから口元が血で濡れてたのか。

「……行くか」

「……うん」

そうして、俺達ははぐれないよう、手を繋ぎながら山を下りた。

「すみませんが、あそこの箆と竹を少々いただけますか？」

山を下りた村で、俺は一人の村人に尋ねる。

「そりゃあ構わねえけど……箆には穴が空いてるぞ？」

「問題ないです。自分で埋めるので」

「そうかい。じゃあ勝手に持ってけ」

どうやらタダでくれるらしい。やったぜ。

俺は取りあえず必要なものを貰っていき、禰豆子が隠れている洞穴

に戻る。

「籠持ってきたぞ引き籠り」

「誰が引き籠りよ誰が」

「昼間っから穴掘って寝てるやつが引き籠りじゃない訳がない」

「しようがないでしょ?! 一応鬼なんだから!」

禰豆子は別の生物へとジョブチェンジするのがマイブームらしい。

俺は取りあえず竹で籠の穴を塞ぎ、禰豆子のもとに持ってくる。

「ほーらほーら。これが新しいお家ですよー?」

「シルバニアファミリーでももつとマシな家建てるわボケ!」

ブータラ文句垂れてないでさっさと入れよ全く。

禰豆子が渋々、体を小さくして籠の中にすっぽりと収まる。俺はその上に布を巻き、直射日光を完全にシャットアウトする。これで昼間も動けるのか。直射日光じゃなきゃなんでもいいのかね鬼つてのは。

そして、先ほど籠を譲ってくれた村人に礼を言い、再び移動を開始する。一応、狭霧山の場所も聞いているので迷いはしない。

「……にしても、結構慣れてきたんじゃないか? 大正時代の暮らしってやつ」

「現代っ子からすればちよつと不便だけどね」

今はすっかり夜なので、禰豆子も横に並んで一緒に歩いている。

「まあ、ウオシユレットがないのは確かに不便だな」

「デリカシーない。ぶん殴るよ」

やめて。怖いから。

すると、明かりのついた御堂を見つけた。

「……なあ、あれって……」

「あれね。間違いない。鬼の気配もする」

えっ、嘘? マジで? いつの間にそんな能力身につけたの?

「……匂いしないの?」

「全然しない」

炭治郎は鼻が利くのが売りなのに、鼻が使えないとか終わってんじゃない。

そんなことは置いておいて、俺達は御堂へと向かっていく。

「……行くぞ?」

「うん」

俺は勢いよく襖を開ける。

そこでは……、

「ッ!!」

分かってはいた……分かってはいたが、それでも惨い。

恐らくはこの御堂の主であるだろう男性が、鬼に貪られていた。

すると、こちらの存在に気づいたのか、鬼はこちらを振り向き言う。

「なんだおい、ここは俺の縄張りだぞ。俺の餌場を荒らしたら……許さねえぞ!」

その殺意と気迫に、呑み込まれかけるが、この程度で怯んでいては、到底禰豆子を守ることなどできない。

そう思い、俺は恐怖を押し殺して鬼に叫ぶ。

「お前……その人から離れ——」

瞬間、俺の体は御堂から飛び出していた。何が起こったのか分からなかった。

考えられるとすれば、蹴り飛ばされたか、殴り飛ばされたか。

「ガハッ!」

俺が痛みを堪えて視線を向けると、俺にマウントを取る鬼が、にやりと笑って左手を伸ばしている。その腕で俺の首を絞めるつもりか。或いは突き刺すつもりか。

いずれにせよ、俺が今できるのは一つ。

「そんな簡単に……やられるかああああああああああ——
——ッッッ!!!!!!」

「な——!?! げぶッ!」

気合とともに俺は斧を縦に振り下ろす。

その行動が予想外だったのか、鬼は一切抵抗もせず真っ二つになった。

「……えっ?」

正直、止められるか、当たって腕一本取れば上等だと思ったのだが、まさかこんなチーズみたいに裂けるとは思わなかった。グロい。

「ぐおおっつ……！ やりやがったなテメエ……！」

うそーん。いや、死なないのは分かってたけど、半分になった状態で喋るなよ。トムとジェリーかおい。

「くそっ！」

俺は斧を刀を振るう様に構えるが、さっきのようなラツキーはもう訪れないだろう。正直勝てる自身が無い……っていうか、禰豆子は何をして……。

「……、」

「食うなよ!! 駄目だからな!! ……そんなキラキラした目を向けるな! 駄目なものは駄目……っていうか、唐突に無言になるな! 怖いから!!」

どうやら、富岡義勇との戦いで鬼としての本能が目覚めてきたらしい。滅茶苦茶涎を垂らしてるけど、耐えられるかなあれ……?

「畜生……舐めやがって……!!」

「いや舐めてないです。出来ればさっさとどっか行ってくださいお願いします」

「ここは俺の縄張りだったつたろ! 出ていくのはオメーらだ!!」

あつ、そう言えばそうだった。っていうか、いい加減裂けるチーズから戻ってくれない?

「テメエ……マジで許さねえからな」

なんでき。

「……待たせた」

すると、禰豆子が俺の隣に戻ってきた。いや遅いよ。別にいいけど。

それに合わせ、向こうも右半身と左半身を接着した。

「……行くぞー!」

「うん!」

俺が左から、禰豆子が右から攻める。

「ちっ……まずは女からだ!」

俺に切り下されたのを警戒しているのか、鬼は禰豆子の方から狙いだした。

鬼は禰豆子に拳を振るうが、彼女はそれを片手で受け止め、反撃として溝に蹴りを入れる。

「ぐおおお……テメエ、鬼か!! なんて人間なんかとつるんで——」
「隙あり!」

怯んだ鬼の足を斧で両断する。

こいつが人を食った鬼だからか、それとも何か別の理由か、鬼を傷付けることへの抵抗が薄れている。

けど、好都合だ。いずれはもつとたくさんの鬼を切らなければならぬのだ。今のうちになれておくべきだろう。

「はあああああああああ—— ツツツ!!!!」
「ギヤアアアアツツツ!!」

禰豆子が蹴りを、俺が斧を逆に持ち、バットでボールを打つように振り抜いた。

鬼は断末魔とともに吹き飛ばされ、森へと入った。

「まずっ……! 逃げられる!」
「追いかけるよ!」

「ああ!」
飛ばした鬼を追いかけるために、二人で森へと入る。

鬼は失った足を生やし、俺達から逃げるように奥深くへと走って行く。

それを追いかけていると、

「ねえ、一つ聞きたいんだけど」

「なんだ?」

「……もし私が、人を喰ったら、どうするの?」

その禰豆子の問いに、思わず呼吸を忘れた。

兄の覚悟

「……どうなの?」

彌豆子が俺に、先ほどの問いの答えを求めてくる。

「……迷うよ」

それは、嘘偽りない言葉だった。

「迷う。いざその時になったら、例えば今、どんな綺麗事並べたって、迷う。迷って迷って迷って、迷い続ける」

当然だ。

命を懸けてでも守りたい相手を殺すだなんて、考えるだけでも億劫なのに、それを実際にやらなければならぬなど、余りにも残酷すぎる。

……でも、

「……それでも、切るよ。最後は必ず、お前の首を切る。そして、俺もすぐに逝く」

結局、これは責任だ。鬼を連れて行くということは、その鬼を殺す覚悟を持つことと同じなのだ。

だから、迷っても、死ぬほど迷っても、最後には必ず切る。どれだけ涙で顔を濡らし、顔がくしゃくしゃになっても、その時が来てしまったら、他の誰でもない、俺が殺さなければならぬんだ。

「……うん、ならいい」

すると、彌豆子は安心したように微笑む。

そしてこの時、俺は気づいていなかった。俺達を背後の木から見つめる、天狗の面を被った老人の存在に。

「あれ? そういえばあいつどこに行った?」

「……こつち」

あ、そっか。彌豆子は気配わかるのか。危ない危ない、危うく完全に見失うところだった。

「! 籠ある?」

「あるけど……、どうかしたのか？」

「もうすぐ朝日が昇るかも」

「えっ？ それつまり、俺一人であの鬼と戦えと？」

「ガンバ」

そう言つて、そそくさと禰豆子は背負っていた籠の中に入っている、布を被せた。

にしても、こつちつってたけど、何処だ？

そう思いあたりを見渡していると、冷たい何かを感じた。まるで、怯えているような何かを。

俺はそれが気になり、何かが強くなっていく方へと歩いていく。すると、

「……あ、いた」

「!? て、テメエ……いや、あの鬼の娘が居ねえ……へへっ、ついてるなオイ」

森を抜けた先の崖で先ほどの鬼を発見した。

にしても、禰豆子がいないと分かった途端強気になるとか、小物の鑑だな。

「生憎、禰豆子ならこの籠の中にいるぞ。それと、気を付けたほうが良いぜ」

「ああ？ 何がだよ。テメエはただの人間だつてことは分かつてんだ。油断なんてもう——」

「夜明けだよ」

俺が呟いた瞬間、東から光が差し込んだ。

太陽が昇つたのだらう。にしても、これが徹夜つてやつか。初めてやったぞ。

「な——!? ぐっ、おおおおお——ツツツ!!!!」

最後の言葉を残すこともなく、鬼は灰となった。

「……あつ、埋葬しないと」

あの御堂の人を埋めないとな。

そう思い、御堂まで戻つたのだが、

「あれ？」

いつの間にか血濡れた部屋は掃除され、死体が無くなっていった。

「……まさか」

俺はある仮説とともに、御堂を飛び出し庭へと向かう。

「……来たか」

居た。

天狗の面を被った老人。間違いない、鱗滝左近次だ。

「……えっと、俺は——」

「俺は鱗滝左近次だ。富岡義勇の紹介は、お前で間違いないな？」

「あ、はい。竈門炭治郎といえます。妹は禰豆子で……」

「そうか」

……え、それだけ？ 他になんかないの？

「お前なりの覚悟を持っていることは既に見させてもらった。ならば、俺から言うことは何も無い」

……もしかして、俺と禰豆子の会話を聞いてたのか？

「これから、お前が鬼殺の剣士として相応しいかどうかを試す。妹を背負ってついてこい！」

「……はいー」

ついに来た。過酷な鍛錬の日々。その序章だ。

鱗滝さんが御堂を走っていき、俺はその後を追いかける。

（いや、速ッ?! 分つてはいたけど、なんて速さだ！ 足音もマジで聞こえない……あの速度で走って足音がないって何気に凄かったんだな……）

全く追いつけない。俺にその速度で走れるようになるのか甚だ疑問だ。だが、それでもやらないといけない。

俺は、禰豆子を守る為に、もっと強くならないといけないんだから。それこそ、原作の炭治郎よりも。

そして、夕暮れになるまで走り続け、ついに鱗滝さんの家についた。 「はあ……はあ……!!」

死ぬ。普通に死ぬ。現代のマラソン選手並みに走った気がする。呼吸が整えられない……足が震える……立っていられるのがやっただ。

「妹を小屋に置いていけ。その後、山に登るぞ」

「はあ……はあ……はいい……」

俺はいつの間にか眠っていた禰豆子を、小屋の中で布団に寝かし、鱗滝さんの後をついていった。

鱗滝さんはだいぶ山を登り、霧の濃い場所で止まる。

「ここから山の麓の家まで下りてくること。夜明けまでは待たんぞ」
すると、鱗滝さんの姿が霧に吞まれて消えた。

「……さて、どうするか」

俺は原作のように鼻が利くわけじゃないし、多分利いても嗅ぎ分けられないと思う。

出来るとしたら、罨の場所を覚えるくらいだが……そんなことをしても、場所を変えられたら終わりだ。

「……考えるのは後回しだ！ 今は、降りることだけを考える！」

そう思い、俺は下山を開始した。

「うおっ!？」

そして早速躓いた。

「いてて……ってあぶねっ!？」

足元の縄に足を取られていると、横から石が飛んできた。石は何とか躲せたが、バランスを崩し尻もちを搗いた。

しかも運悪く、その場所は落とし穴だった。俺は重力に従い落下していく。

「うぐぐ……いーくそっ、腰が死ぬんじゃないかこれ?」

でも、ようやく分かった。この山から下りる方法が。

下山を阻止したくて罨を張るなら、必然的に罨のある場所が目的地への道筋ってことだ。リスクはあるが、罨に引っかかれば引っかかる分だけ、ゴールに近づくということ。

「……くたばらないでくれよ体。二徹いけるなら三徹もいける！」

……あ、夜が明けたらダメなんだった」

落とし穴から脱出し、俺は移動を開始する。この山は空気が薄い。

呼吸は必要最低限で、なるべく空気中の酸素を消費しないようにしないといけない。でないと、あつと言う間に酸欠になる。

走っていると、うつかり仕掛けに引つかかり、丸太がトラックの様に俺に向かって突っ込んできた。

「ちよっ！」

なんとかそれは躲すが、正直やばい。

ただでさえ足がもつれそうなのに、休憩もせずこのどう見ても殺しに来てると思えない罠を突破するというのは中々キツイ。

「だからって……諦めるわけには、いかない！」

彌豆子が待つてるんだ。それに、任されたんだ。

とにかく、罠を察知する方法を探さないと。

「匂い……駄目だ。やっぱりわからない。そもそも、どれが何の匂いかも分からないのに、罠の匂いなんて……」

……いや、そもそもどうして俺は匂いで判別しようとしていたんだ？

「……そうだ。別に匂いを嗅ぐ必要はない。そんなことが出来る人間なんて稀だ。……俺のやり方で、突破すればいい」

なら、どうやって？

「……直感……いや、罠の気配を察知？」

そう言えば、あの鬼の気配っぽい何かを感じたような……試してみるか。

俺は近くにあった、無視すれば別に被害に遭うこともないであろう罠を、敢えて踏み抜く。

そして、目を瞑って意識を集中させる。

(……目で見るな。音を探るな。匂いを感じるな。五感は邪魔だ。必要なはその先、第六感だけだ)

……余計なものを排除して、感じ取るんだ。

「……後ろ!!」

俺は声に出しつつも、実際に振り返らずに前転する。

その次の瞬間、背後からブオンツ！という音が聞こえた。

「……マジか」

背後から丸太が飛んできていた。あのまま留まり続けていたら、あれに背骨を折られていたかもしれない。

けど、出来た。俺は一步進んだ。

「……さつき、後ろの方で何か……よく分からないものが近づいてくる感覚を感じた。多分、無機物が接近してきたときの気配だ。それも、人工物」

そして、それは今も感じる。

意識を集中すれば、視界の先全体で、人の手が加えられた無機物の気配を感じ取れる。

これなら少なくとも、今までより移動のスピードは上がる。

まあ、あくまでもそれは普段のスピードで動けるというだけで、身体能力が上がっているという訳ではないが。

「……行くぞ」

「……戻、り……まし、た……はあ……はあ……はあ……」

危ない。今の暗さだと、多分今は朝5時30分……もしかしたら、もう少し進んでいるかもしれない。

初見でよくここまで突破できたなど、自分で自分を褒めたくなるほどだ。

「これ、で……はあ、はあ……俺を、認め……て、くだ……さい、ます……か？」

「……そうだな、よく戻ってきた。……お前を認めよう、竈門炭治郎」
……やった。

余りの達成感と、ようやく終わったと同時に、疲労感が一気に増し、俺はそのまま倒れてしまった。

鍛錬の日々

鱗滝さんに認めてもらった翌日、二徹であったためかこれだけ寝ても体の疲れが取れていないような気がした。

だが、その程度で止まっているわけにはいかない。俺は鱗滝さんについていって再び山を登る。

あれから、禰豆子は原作通りに眠りについた。この調子では、最終選抜の時までは起きないだろう。

「儂は「育手」だ。文字通り、剣士を育てる。育手は山ほどこいて、それぞれの場所、それぞれのやり方で剣士を育てている。鬼殺隊に入るためには、藤襲山で行われる最終選別で生き残らなければならない。最終選別を受けていいかどうかは儂が決める」

「はー。」

正直、日記を付けようか迷った。けど、禰豆子は多分、俺が何をしているかちゃんと理解しているだろうし、自分で言うのもなんだが、字が汚い。

日記をつけても読めないだろうし、それを書いている時間があるなら休んだ方がいいと思ひ、日記はつけないことにした。

(よし！ 行くか！)

今日も今日とて鍛錬だ。ひたすら山を登っては下り、登っては下りを繰り返す。

正直、酸欠以前に高山病にならないか心配になるが、今のところは大丈夫だ。最近は罌の気配どころか、鱗滝さんの気配も漠然とだが分かるようになってきた。

……ただ、気のせいかな、霧の奥から誰もいなはずなのに視線を感じる。けど、その視線は監視というより、見定めているものや、懐かしむようなものばかりだ。

大体予想は出来ている。恐らく、最終選別であの大型の鬼に殺された鱗滝さんの弟子たちだろう。

(けど、一々構っていられる余裕はない。俺がするべきなのは、ただ強くなること……！ それも、原作の炭治郎よりも……！)

そうすれば、彌豆子が危険な目に遭う確率はぐっと減る。

俺は飛んでくる丸太を見もせず躲し、そのまま死角から飛んできた大量の包丁をしゃがんで回避する。相変わらず殺意が高い。こんなトラップいつ仕掛けたんだ？

けど、もうすっかりこの訓練も慣れた。体が以前よりも軽くなつて、重りから解放されたかのようなようだ。自分の思った通りに動き、息切れの回数も減っている。その度に、成長を感じられてより励める。

「……ふう」

休憩を挟むために、足を止める。呼吸を整えるためにゆっくりと息を吸い、吐き出す。

俺は左手で持つ刀を見て、ため息を吐いた。実は、先ほどまでの山登りでは刀を片手に行っていた。

正直、最初は邪魔で仕方がなかった。最近は大抵だけど、まるで鍛錬を始めた初日の様に罫に引っかかり続けた。

「……戻ったな。では素振りだ」

山を下りて小屋に戻ると、鱗滝さんに次のメニューを言い渡される。

この素振りも中々キツイ。見ているのと実際にやるのとは違うというのを思い知らされた。

幾ら刀の重さになれていても、素振り1000回はヤバイ。その上終わった時に時間が余っていれば回数をプラスされる。夜になっても終わっていないければ続けさせられる。

だが、泣き言は言つてられない。これくらいは原作の炭治郎もやってた。俺はそれを超えなければならぬ。

「刀は折れやすい」

ある日、素振りではなく、実際に藁人形を切るとき、鱗滝さんにそう言われた。

縦の力には強いけど横の力には弱い。

刀には、真っ直ぐに力を乗せること。刃の向きと刀を振る時、込める力の方向は全く同じでなければならぬ。

まあ、これは問題なかった。元々そのことは原作を読んで知ってい

たから、素振りの時の合間にそれを意識しながらやっていたので、実際にやっても特に問題はなかった。

因みに、刀を折ったらお前の骨も折ると暗に脅された。

「うぎやああああああ——ツツツツ?!?!」

今日は投げられ祭り。言い換えれば受け身の鍛錬。鱗滝さんに回転させられて転ばされ、直ぐに起き上がる鍛錬だ。目が回った。何回か吐いた。

その後、鱗滝さんと実戦をする。俺は真剣、鱗滝さんは素手……まあ、勝てないんだが。ビツクリするほど勝てない。

剣道は前世でも学校の授業でやっていたが、鱗滝さんが教えるのはまるで違うので役に立たなかった。

「今日はお前に、全集中の呼吸、そして型を教える」

ついに来た。全集中の呼吸……水の呼吸とその型だ。これが無ければ鬼には到底立ち向かえない。

水の呼吸の型は全部で十個あり、イメージは体の隅々の細胞まで酸素を行き渡らせるというもの……らしい。体の全治癒力を高め、精神の安定化と活性化をもたらすそうだが……、全然イメージつかない。というか、大正時代にはもう細胞の概念ってあったのか？ 文系だから理科勉強してなくて分かんないけど。

「上半身はゆったりと、下半身はどっしり構える。よし呼吸！」

「はああ……ぐフツ！」

「違うー！」

思いつきり腹パンされた。失礼だが、物凄いぶん殴りたくなった。その後、なんとか呼吸法の方は具合がよくなってきた。全集中の呼吸はこの調子なら、全てを教わる前に習得できそうだ。あれ？ 錆鬼の出番なし？

「次、型！」

「教わってません！」

「人に聞くな。自分の頭で考えられんのか！」

「理不尽?!」

思わず頭を抱えた。だが、どうやらタダのジョークだったらしい。

ということとで、ちゃんと型を覚えてもらい、実戦する。

「こうですか!?!」

「違う!」

「じゃあこうですか!?!」

「それも違う!」

「ならこうですか!?!」

「それは雷の呼吸だ! 何故できる!?!」

知らないです。

その後、滝のある崖まで連れ来られた。なんでも、水と一つになれとか。そのために今から滝の下までダイビングしろとのことだ。

俺は滝の下までの高さを目測で測り、

「ふっ、今日はちよつとお腹の調子が悪いからまた今度に——」

「早く行け」

「アアアアアアアレエエエエエエ——ツツツ!?!?!?!」

そう言われ鱗滝さんに蹴り落とされる。相変わらず鱗滝さんは今日も理不尽だ。

水泳選手のように頭から直角に落ちればダメージも少なかったのかもしれないが、生憎、体全体から落ちてしまった。滅茶苦茶痛い。

その後は滝に打たれた。

みんな知ってた? これ凄い痛いんだぞ? 俺は知らなかったよ。

知りたくもなかったよ。

「……にしても、禰豆子が目覚めなくなってもう半年か」

時間が過ぎるといふのは本当に速い。禰豆子は鱗滝さんが医者に診せたが、当然異常は見られなかった。

っていうか、人間の医者に、鬼の体のことが分かるのか? その辺りどうなんでしょうか吾峠先生?

禰豆子の体は今、変化を遂げているのだろう。睡眠によって回復を行える体へと。俺に出来ることは、禰豆子が起きた時、彼女が安心してきるくらい強くなること。

それから、鍛錬はより過酷なものへと変わった。

場所はより空気が薄い場所へと変わり、何度も死にかけた。けど、

それを乗り越えるたびに、俺は自分が強くなっている気がした。

けど、まだ足りない。俺が得るべき強さに上限はない。彌豆子を守る為に、今のままで満足してはダメなんだ。

そう思い、俺は鱗滝さんに内緒で、山下りの際に、重りを持ったり、より行動を制限し、鍛錬を自分で厳しくした。

今までの鍛錬を乗り越えて居なければ絶対に出来なかったであろうことが、今は出来る。

「はっ！ やっ！」

飛んできた包丁を刀で切り払う。更に、背後からくる丸太を振り返ると同時に真つ二つに両断し、両隣から落下してくる竹林を、一つの竹を足場に踏み越える。

こんな動きも、前までは出来なかった。それに、最近は全集中の呼吸も完全にマスターしている。この調子なら、鱗滝さんが用意する大岩も簡単に両断できるかもしれない。

そう思うと、俺はどこか心が軽くなるのを感じた。原作の炭治郎よりも強くなっているのでは？ という感覚が、心に余裕を取り戻させてくれる。

そういえば、最近は強くなることに必死で、体を酷使しすぎていた気がする。もう少しハードルを下げて、体を休めたほうが良いかもな。

「もう教える事はない。後はお前次第だ。儂が教えた事を消化できるかどうか。ついてこい」

またある日、鱗滝さんに唐突に言われた。

ついにこの日が来た。最終選別への最終試験……ややこしいな。兎に角、これを終えたら、俺は剣士となれる。

そう思い、俺は鱗滝さんの後をついていったのだが、

「この岩を斬れたら最終選別に行くのを許可する」

「……………えっ？」

俺の目の前には、俺の身の丈の五倍ほどの大岩があった。

……………あれ？ どう見ても原作の岩より大きいと思うんですがあの……………。

(えっ？　なんでこんなに大きいの？　おかしくない？)

思わず鱗滝さんのほうを見るが、当の本人は黙って去っていった。本気で俺を最終選別に行かせたくないのか？　いや、気持ちには分かんなくてもないけど、流石にこれはやり過ぎというか、大人げないというか……ええ……。

……これはあれか？　俺の力が原作よりも上だから、それに合わせて難易度も上がったのか？　……うそーん。

「……はぁぁ……」

しかし、これを切れと言われた以上、切らなければ話は進まない。全集中の呼吸を行い、万全の状態に整える。

……行くぞ。

「はぁーっ！」

そして、俺は全力の一刀を振り抜いた。

錆兎と真菰

「……駄目か」

俺は大岩に僅かに食い込んだ刀身を見て呟いた。

残念ながら、全集中の呼吸を使っても、この岩を切ることは出来なかったようだ。型を使えば切れるかもしれないが、それで切っても意味はない。

技を使うことなくこの岩を切るからこそ、意味がある。

「……何度も同じ場所に打ち込んで……いや、それじゃ採掘と同じだ」そのやり方はツルハシと同じだ。刀でやることではない。

ならばどうするか。どうすればこの大岩を一刀のもとに切ることが出来る？

「……初心に戻る。定番だが、これしかない」

そう思い、俺は再び山下りの鍛錬を行うことにした。

と言っても、今までと違い、前まで襦豆子を運ぶのに使っていた籠を使い、その中に石などを入れて重りとすることで、より負荷を与え、更なるパワーアップを測ろうという結論に至った。

まあ、それも三か月程度でやめた。何故って？ 頭打ちになったんだよ。

そう。この方法でのパワーアップが限界に来ていた。ここ最近はその作業のように感じてどうも時間を無駄にしている気がした。

なので、そろそろ別の方法を試すことにした。

「すうう……はああ……」

俺が今やっているのは、睡眠を含む二十四時間一日中、全集中の呼吸を行う、全集中の呼吸・常中というものだ。

尤も、これは鬼殺隊の最上位の存在、柱への入り口とも言われている技術。まさに奥義と呼ぶべきものだ。

当然、並大抵の時間で身に付くものではない。その上、効果が出るのにも時間が掛かる。けど、俺に残された道はもうこれしかない。

「はっ！ はっ！！ やあっ！！」

もちろん、劍の鍛錬も忘れない。

素振りは勿論、全集中の呼吸を行いながら、重りを背負って山を下りる。その際、罨がいつもよりより鮮明に感知できるようになった。

……けど、このままで大丈夫なのだろうか。今のままで、俺は本当に最終選別に行けるのだろうか。この大岩を切れるのだろうか。

原作の炭治郎よりも強くなると頑張ってきたが、だからこそ、原作を越えている出来事を目の前に、不安がこみあげてくる。

「弱気になるな……！ 彌豆子を守るんだろ！！ 余計なことは考えるな……！！」

「やかましい。男が喚くな。見苦しいぞ」

そんな声が、背後から聞こえた。

思わず振り返るとそこには、灰色の髪の狐の面を被った少年がいた。

「……お前は」

「フン！」

すると、狐の少年は俺に向かって木刀を振るった。

俺はそれを刀で防ぐが、狐の少年は刀を滑るように木刀を動かし、俺の防御を抜け、横腹に一撃を叩き込む。

「ガハッ!!」

「その程度か？ 鱗滝さんの教えを受け、力を得ていながら、その程度の実力しかないのか？」

「なっ……！！ 俺だって必死で——！！」

「言い訳は要らない。現にお前は、俺に翻弄され一刀を受けている。俺の刀が真剣なら、お前は今で死んでいたぞ」

……確かに、その通りだよ。理解は出来る。けど、納得なんてできない！

だったらどうしろっていうんだよ!! 俺にこれ以上、何処へ進めというんだよ。

「お前の動きには無駄が多い。兎に角余分なものしかない。だからお前の刀は、この大岩を切れない。本来なら既に切り捨てるだけの力が

ありながら、お前の無駄なものが邪魔をしている」

無駄なものと言われても、即座に浮かんでは来ない。

教えてくれる師がないから、俺の剣の何処が悪いのか分からない。
い。

「はあっ—」

「くっ……—」

突如、狐の男性が再び切りかかってくる。

俺はそのスピードと技に翻弄されるばかりで、防御を行うのが精一杯だ。

稀に反撃を行おうとしても、それを出す前に一撃を入れられてしまう。
う。

「がッ……—」

「どうした？ もう立てないのか？」

「うる、さい……ッ—」

なんで……足がふらつく。視界が揺れる。刀を持つ手がブルブルと震える。

どうなっているんだ。この攻撃より痛い目にだって合った。今更この程度、なんともないはずなのに。

「ふん。随分と脆い自信だな。鱗滝さんの教えを叩き込みこそすれど、心は成長していないようだ」

「なっ——!?」

「違うとは言わせないぞ。たかだか数回、俺との打ち合いに敗れただけ
で自信を失うような男が……いや、そんなものを男とは言わない
！」

狐の少年の声が、森に響き渡る。

俺はその迫力に気圧され、へたりと座り込んでしまう。

「何をしている!? 立て！ 立って構えろ!! そんな弱腰で、妹を守
れると思うのか!」

狐の少年はそれを見てさらに叫ぶ。

……………。

そうだ。何をしているんだ。俺は彌豆子を守るんだろ。そのため

に、強くなるために……ここまで来たんだろ。

出来る。ここまでだつてやってこれたんだ。俺は出来る。自分を信じて！

己を鼓舞して、俺は狐の少年に構える。もう、震えは収まっていた。

「はあああああ—— ツツツ !! !! !!」

俺は叫びとともに狐の少年に走り、刀を振り下ろす。

狐の少年はそれを横に躲し、回転しながら俺の顎を打ち上げた。

「ガハッ!?」

顎への衝撃で脳が揺れ、俺は意識を失った。

「……はっ!?」

そして、次に目を覚ました時、俺は空を見ていた。寝そべっているのか。

起き上がると、右横に狐の面を被った少女がいた。

「……えっと、君は……」

「真菰。さっきのは錆兎っていうの」

……あつ、そうだ。思い出した。

確か、この山に住み着いている……。

……いや、今はそんな事どうでもいい。

「……なあ、俺も、錆兎みたいになれるのか? いや、錆兎よりも強く

……!」

「大丈夫。そうなれるように、私が見てあげる。貴方は呑み込みが早いから、直ぐに出来るよ」

……こういうのもなんだが、誰かに褒められるのは久しぶりだから、ちよつと嬉しいかも。

そして、真菰との鍛錬が始まった。彼女は俺の悪いところ指摘し、無駄な動きとして癖になっている部分を直してくれた。

癖である分、完全に直すのには時間が掛かったけど、それでも、動

きがいつもより洗練されていくのを感じた。

「……うん。流石だね、炭治郎は」

「二人はどこから来たんだ？」

「ふふっ」

俺の質問に、彼女はただ微笑みだけだった。やっぱり不思議系なんだな。

そして、鍛錬を行って、およそ九か月が過ぎた。

俺はその日も、大岩の前に行く。そこで待つ、錆兎に勝つために。

「……来たか。いい顔つきになった。覚悟を持った、男の顔だ」

「そりやどうも。……行くぞ」

その時、錆兎は真剣を持っていた。

俺は腰を落とし、今までの成果を詰め込むように、一切隙のない構えを取る。それに応えるように、錆兎から発せられる気迫が、かつてないほど膨れ上がっている。

けど、負ける気はしない。

「……、」

互いに沈黙が続く。

それが何十分にも感じられたが、実際はほんの数秒だったのだろう。

ただ、一つだけ言えるのは、

「ツ」

俺たちは全く同時に動き、一瞬で互いに背中合わせの状態になる。ぶんぶんという音とともに、上空から刀が落ちてきて、地面に突き刺さった。

錆兎の手に、刀は握られていなかった。

「……ふっ」

錆兎が軽く笑う。多くは語らないということだろう。でも、それだけで十分だった。

きつと……錆兎はまだ余力があったと思う。でも、俺は勝った。今

の錆兎を乗り越えた。これからの錆兎を乗り越えるのは、その時考えればいい。

「……やったね。炭治郎」

「真菰……ああ。あとは……」

俺は目の前に聳え立つ巨大な岩を見て、刀を強く握りしめる。

これを切る……前までの俺なら、必ず心のどこかで不安があった。迷いがあった。

でも……今なら。

そう思うと、ふと、錆兎たち以外の気配がした。振り返るとそこには、竹に背中を預け、腕を組む鱗滝さんの姿があった。

「全く……お前という奴は」

「鱗滝さん……」

いつの間に来ていたのやら。

ふと、錆兎たち視線を向けるが、すでに彼らの姿はなかった。

「……見ててください」

「ああ」

俺は大岩に刀を構える。

呼吸を整え、全力を振り絞る。今の俺に出来る、最高の一刀。

「はああああ——ツツツツ!!!!」

カアアン！ という音が響く。そして、俺は自分の持つ刀が軽くなっていることに気づいた。

目を向けると、刀身が半分ほどの長さになっていた。折れたのだ。

「……炭治郎」

「鱗滝さん……俺……、やりました」

上空から、折れた刃が地面に突き刺さる。

それと同時に、大岩は綺麗に真っ二つになった。

それを見た鱗滝さんは、

「戯けえ！」

「ぐぐらッ!?」

何故か腹パンを繰り出した。

「ちよ、何するんですか!?!」

「刀を折るなど言っただろう！ 本来なら骨一本へし折っているところだったぞ」

うぐつ、それを言われると何も言い返せない。

すると、鱗滝さんは俺の頭にぽんつと手を置き、優しい声で言った。「だが……よく頑張った。……お前はよく無理をして、ボロボロになる自分を気にもせず鍛錬に打ち込んでいた。このままではいつか壊れてしまうのではないか。そう思い、この岩を用意したんだ」

「……鱗滝さん」

「お前が壊れるのを見たくなかった。この岩は絶対に切れない。これでお前も諦める……そう思っていたんだがな。……お前は変わった。今のお前なら、安心して送り出せる。よく頑張ったな。最終選別、必ず生きて戻れ。俺も妹もここで待っている」

そう言つて、鱗滝さんは俺を抱き寄せた。

……久しぶりだな。こうやって誰かに抱かれるの。暖かい……。

無意識のうちに、俺の瞳から涙が零れる。今までの努力が報われたのを感じ……いや、この気持ちは、きつと言葉では表せない。

ふと、自分の手を見た。「豆だらけで、しかも潰れているのもあった。

兎に角ボロボロで、痛々しい……が、俺の努力の証だ。

「つてー！ 何この豪華料理!？」

普段は割と質素なご飯なのに、今日は豪勢だった。

これは……すき焼きか？ それとも鍋？ そういや、原作でもそれっぽいのご馳走になってたっけ？ 鍛錬ばかりで全然覚えてないや。

「全ての修業を終えた祝いだ。遠慮せず食うといい」

「はいー」

鱗滝さんに言われ、ガツガツと鍋料理を頬張っていく。

美味い……禰豆子にも食わしてやりたい。……いつか一緒に。

そう思いながら、次々とお代わりをし、あつという間に食べきってしまった。

その後、髪が随分と伸びていたので、鱗滝さんに切るように言われたので、何となくの感覚で髪を切っている。手鏡が欲しいなせめて。

「なあ炭治郎。鍋はうまかったか？」

「そりやもう。あんな美味しいご馳走は久しぶりですし」

本当に久しぶりだった。二年間の間の生活でもあんな料理は滅多に出てこなかったし、前世でもあんな料理はあんまり食べなかった。

「お前のような食べ盛りは、食った分だけ力もつくし、体は大きくなる。だが、それは鬼も同じ。覚えておけ、基本的に鬼の強さは、人を喰った数だ」

「人を喰う数……」

「そうだ。力は増し、肉体を変化させ、怪しき術を使う者も出てくる。お前の気配を察知する力も、より極めれば、鬼が何人喰ったかわかるようになるだろう」

マジか。

そういや、最近この気配察知能力がドンドン強力になってる気がしたけど、成長してたのか……。

すると、鱗滝さんが狐のお面のようなものを俺に渡してきた。

「これは？」

「厄徐の面という。お前を災いから守るようにと、まじないをかけておいた」

その面は、錆兎や真菰が被っていたものと、作りが同じだった。壊さないようにしましょう。

そして翌日。

俺は鱗滝さんにこの日に合わせた服と日輪刀を借り、それらを身につけ、禰豆子が眠る部屋へと向かう。

「禰豆子……絶対に生きて戻ってくる。こんな序盤でくたばったりはしないからな」

答えが返ってくるはずはない。分かっているにしても、言わずにはいら

れなかった。

「……頑張つて」

「!? ……ああ!」

ただの寝言だろう。でも、十分に元気を貰った。

「妹の事は心配するな。儂がしっかり見ておいてやる」

「はい! お願いします!」

一礼し、俺は軽くジヨギングの感覚で山を下りる。

振り返りはしない。必ず戻ってくる……また会うのだから、今は、必要はない。

「行ってくるよ。錆兎、真菰」

最終選別

「……………ここは」

鱗滝さんの家を出て、しばらくすると、藤の花と呼ばれる花が咲く道に差し掛かった。

「どうやら、目的地に着いたらしい。」

「……………ついた」

恐らくは最終選別の会場らしき場所にまで到達する。

俺のほかにもたくさん人がいた。しかし、この中のほとんどが皆、この試験に生き残れず死ぬと思うと、少し心苦しい。

俺の目的は、あくまでも彌豆子を人間に戻すこと。だけど、それはここで死ぬ人たちを見過ごす理由にはならない。せめて、俺が目につく限りで、助けられる人は助けていこう。

「皆様。今宵は、鬼殺隊最終選別にお集まりくださって、ありがとうございます」

すると、奥の方から子供の声二つが重なって聞こえる。

片方は黒い髪、もう片方は白い髪の少女。顔立ちはそっくりとか瓜二つだ。

「確か、鬼殺隊の偉い人……………だっけ？ アニメでは詳しく言われてないと思うけど、結構偉い人……………のはず。にわかだから分かんないや。」「この藤襲山には、鬼殺の剣士様が生け捕りにした鬼が閉じ込められており、外に出る事は出来ません」

「山の麓から中腹にかけて、鬼共の嫌う藤の花が、1年中狂い咲いているからでございます」

「確か、黒い方が男の娘で、白い方は女の子なんだっけ？ どう見ても両方女の子に見えるから世の中って不思議。」

「しかし、ここから先には、藤の花は咲いておりませんから、鬼共がいまず」

「この中で7日間生き抜く。それが最終選別の合格条件でございます」

「では、行ってらっしゃいませ」

これ、食料とかはどうすればいいんだろ。一応初日の分でおにぎりは持ってきたが、初日しか持たない。

まあ多分、森の中に木の実とかでもあるのだろう。ないなら、おにぎりを分けて、長持ちさせるしかない。

そんなことを考えながら、俺は山の中へと入っていった。

「さて、まずは東だな」

山に入つてすぐ、俺は行動を開始した。

鬼は日の光を浴びると死ぬ。だからこそ、彼らは皆、午前中は動かない。ならば、太陽の光が一番早く差す場所を陣取るのが、この試験での最善手だ。

そして、それは当然、朝日が昇る東。この山の最も東の場所を目指す。

「!? 鬼の気配……!」

間違いない。数は二体。……後ろ……それも上だ!

「いた!」

「キシヤアアアアツツ!!!!」

上空から奇声を上げて飛び掛かってくる一体の鬼。

だが、それだけではない。背後からも気配がする。俺は上からの鬼の攻撃を躲し、さらに左へ跳ぶことで背後からの鬼の攻撃も回避する。

「てめえ! 横取りしようとしてんじゃねえ! てめえは向こうに行け!」

「知るか! 貴様が失せろ!」

……ホント仲悪いなこいつ等。だから付け入る隙を与えるつのに。

「ヒュウウウウ……!!」

行くぞ。鍛錬の成果を試す時だ!

「全集中、水の呼吸……【肆ノ型 打ち潮】ツ!!」

入り乱れるような動きで、言い合いをする鬼たちの頸を切り落とす

ていく。

彼らは自分の身に何が起こったのかさえ理解できないままその命を終わらせた。

少々卑怯かもだが、こっちも命が掛かっている。主人公補正のようなものは存在しない以上、気を抜けば死んでしまうかもしれないのだ。

「……鬼の攻撃を見もせず躲けた。そして奴らの頸を取れた。それだけで十分だ。あの鍛錬は、無駄じゃなかったんだ……！」

感動の余り思わず涙が出そうになる。こんなにも努力が報われたことを嬉しく思ったことはない。

だが、余韻に浸るのは後回しだ。初日の夜を越えるためにも、まずは東を目指す。

一応、鱗滝さんに鬼なら、鬼を人間に戻す方法を知っているかもしれないと言われたが、鬼ではなく珠世さんに会うほうが手取り早い。

「……ごめん」

俺は自分が殺した鬼に謝罪をし、先を急ぐ。いくら自分を殺そうした存在でも、人間と同じ言葉をしゃべり、それ以前にもとは人間だったのだ。

人を殺した罪悪感……とまではいかない。だが、それでも幾分か申し訳なきが出てくる。

「うぎゃああああああ!!!」

「!? 叫び声——!?」

突如、後方から叫び声が聞こえた。

慌ててそちらに向かおうとすると、金色の物体が俺のもとに走ってくる。

「えっ、ちよ——!?」

「助けてエエエエエ——ツツ!!!! ベブラツ!?」

前を見ていなかったのか、俺と思いつ切り衝突し、俺を巻き込んで転がっていく。

ある程度進んだところで、木に当たって回転は止まった。

「いてて……大丈夫か？」

「うう……あ、うん。ありがと」

「……礼を言うのはまだ早いぞ」

俺は金髪の少年の後方へと視線を向ける。

そこには、四足歩行でこちらに接近してくる鬼がいた。

「ひいひいひいひい——ツツツ!!!!」

「下がってろ！ 水の呼吸【壺ノ型 水面斬り】ツ!!」

金髪の少年を後ろに置いていき、俺は鬼へと走っていきながら、壺ノ型を構える。

そして、素違い様にその頸を切り落とした。

鬼は灰となり、消滅する。

「ふう……さて、大丈夫か——」

「うわああああああ——ツツツ!!!! ありがとオオオオオツツツ!!」

「……うん。分かったから取りあえず離して。俺は竈門炭治郎。君は？」

すると、金髪の少年は俺の服から手を放し答える。

「あがつませんいつ我妻善逸……さつきは本当にありがと……」

「気にするな。それじゃ——」

「待ってくれ！」

先を急ごうとした俺を、善逸が引き留める。

「俺このままだと死んじゃう！ 頼むよオ、助けてくれよオ！」

「ええ……大丈夫だって。きつと生き残れるよ」

「無理だって！ お前俺のこと舐めんなよ！ めちやくちや弱いんだぞー！」

「そんな自信たっぷりと言われても……」

我妻善逸と言えばこれだが、正直今は邪魔だ。というか、なんでこの段階でもう出会ってる訳？

「頼むって炭治郎オ……！——」

「……はあ。分かった」

「ホント!? やったアアアア！ これで俺は生き残れる！」

全く、とんでもねえ善逸だ。

そんなことを考えていると、

「……なんだ、この気配……?」

先程の鬼とは比較にならない、邪悪で強大な気配を感じる。

直後に、ズシンツ、ズシンツという地響きが鳴り響いた。まるで、大きな何か歩いているかのような音が。

「ひいひいひいッ!? 何々!? 何なの!?!」

「……近い。もしかして……!」

この会場にいる鬼の中で、恐らくは最強と言える存在。

それがこの近くにいる。

「逃げるか……戦うか。なら、答えは決まっている」

「ちよ、どこ行くの炭治郎くん!?!」

俺は地響きができる方へと走っていく。善逸も俺の後を追って……というか、一人になるのが怖いんだな。

確かに、俺も怖い。だから善逸の事はあまり責められない。

けど、この程度の鬼も切れない様じゃ、到底、鬼舞辻無惨を倒す事など出来ない。

「うわぁー!! 聞いてない! こんな聞いてないぞ!!」

恐らく参加者の一人であろう人の叫び声が聞こえた。それと同時に、彼を追いかける異形の鬼の姿も。

それを確認した瞬間、俺は迷わず走った。

すると、異形の鬼……確か、手鬼だったか。は、その長い手を転んだ少年に伸ばしていた。

「させるか! 水の呼吸【式の型 水車】ッ!!」

その腕を縦に両断し、少年を庇うように前へと立つ。

彼は俺がやられているのを好機と見て逃げ出すが、それは構わない。彼の実力ではこの鬼の前ではかえって足手纏いだ。

すると、突然の乱入者に眉をひそめていた手鬼は、俺の頭にある狐の仮面を見てニヤリと笑う。

「また来たな。俺のかわいい狐が」

「ちよ、ななな、何なのこいつ!?! 幾らなんでもデカすぎでしょ!?!」

巨大な鬼の姿を見た善逸が、驚きの声を上げる。

……こんな時に言うのもあれだが、c v子安だと狂気度高いなマジで。

そして、鬼が今は明治何年かと聞いてきたので、俺は今は大正だと答えると、

「大正……？ ……うわあああああツツ!! 年号がああああツツ!! 年号が変わっているうううツツ!!」

突如叫びだし、全身を引つ掻く手鬼。

マジで見ているこつちが痛々しいからやめて欲しい。

「まただツ!! また俺がこんな所に閉じ込められている間にいいいいいいツツ!!!! ああああああツツ!!!! 許さん! 許さああああん!!!! 鱗滝め! 鱗滝めえ!! 鱗滝めえええツツ!!!!」

「……どうしてそこで鱗滝さんの名前が出るんだ」

知っている。けど、一応聞いておくべきだろう。

すると、手鬼は俺の問いに、イライラした態度を隠そうとせず答える。

「知ってるさ……俺を捕えたのは鱗滝だからな。忘れもしない47年前、あいつがまだ鬼狩りをしていた頃だ! 江戸時代……慶応の頃だった」

今にして思えば、江戸時代から鬼殺隊はあったのか。

一体大ボスの鬼舞辻無惨はいつから生きてるんだ?

「嘘だ! そんなに長く生きてる鬼はいないはずだ! ここには人間を2、3人喰った鬼しか入れてないんだ! 選別で斬られるのと鬼は共喰いするからそれで……」

「でも俺はずっと生き残ってる。藤の花の牢獄で50人は喰ってなあ……!」

「アンタは逃げろ! こいつは俺が何とかするから!」

俺は後ろの人にそう言って、じりじりと間合いを詰める。

そんな俺の様子を見た手鬼が、沢山ある手で何かを数えだした。

「11、12、13……で、お前で14だ!」

「何がだ……」

「ひひひひ。俺が喰った鱗滝の弟子の数だよ。あいつの弟子はみんな殺してやるって決めてるんだ」

……………

「そうだなあ……特に印象に残っているのは二人だな。あの二人、珍しい毛色のガキだったな。一番強かった、獅子色の髪をした、口に傷がある。もう一人は、花柄の着物で女のガキだった。小さいし力もないがすばしっこかった」

……………

「その面。目印なんだよ。その狐の面がなあ。鱗滝が彫った面の木目を、俺は覚えている。あいつが着けていた天狗の面と同じ彫り方。厄徐の面と言ったか？ それを着けているせいで、みんな喰われた。みんな俺の腹の中だ。鱗滝が殺したようなもんだあ。くひひひひ！ これを言った時女のガキは泣いて怒ってたなあ。その後すぐ動きがガタガタになったからなあ。ひひひひひ！ 手足を引きちぎってそれから——」

「もういい。くたばれ」

自分でも驚くほど、低く暗い声で呟く。

吐き気を催す邪悪というのは、こういうことを言うのだろう。九か月も俺を鍛えてくれた存在を、こんな輩が語るのが、許せない。

この鬼も、悲劇を抱えている。それは知っている。だが、それを差し引いて尚、こいつを許すことはできなかつた。

「ひひひ！」

気色の悪い笑みを浮かべて、手鬼はその大量の手を伸ばしてくる。

これは、ただ切るだけじゃだめだな。それに合わせ回避もしなければ。ば。

つていうか、今気づいたが、善逸ビビり過ぎて気絶してるな。

「水の呼吸【参ノ型 流流舞い】ツ!!」

大量の手を切り裂き、さらに回避しながら間合いを詰める。

大丈夫だ。こいつは憎いが、呼吸は乱れていない。ちゃんと動きを見れば躲せる。

「ふっ、はっ！」

だが、このままではジリ貧だ。

俺は型をやめ、リスクは大きいが一気に走って間合いを詰めることにする。

(?! 地面から鬼の気配……!!)

走っていると、地面から目の前の鬼と同じ気配がすることに気づいた。

俺は自分の勘を信じ跳躍すると、地面から鬼の手が大量に、イソギンチャクのように飛びだしてくる。

危ない……アニメだともっと後の段階で使っていたけど、その感覚で行ってたら今のにやられてたな。

「避けたか……だが、空中では躲せまい!!」

「! ……水の呼吸【陸ノ型 ねじれ渦】ツ!!」

すると、手鬼は大量に腕を伸ばしてくる。

俺は左右から向かってくる腕をねじれ渦で切り裂くが、正面から遅れてきた腕が俺に向かって伸びてきた。

(まづっ……!!)

俺は原作の炭治郎みたいに頭が固いわけじゃない。頭突きで攻撃の回避などできないし、先ほど呼吸を使ったせいでその状態に至れない。

このままではやられる。何かないのか、この状況を覆す何かがある。

俺はこの状況を打開する方法を模索するが、目の前を死を前に思考が上手く纏まらない。

「シイイイイ……」

そんな俺の耳に、そんな呼吸音が聞こえた気がした。

水と雷

「ひひひー」

目の前の巨大な鬼が、そんな気味の悪い声を出す。聞いてない。こんな鬼がいるなんて話、誰もしなかった。

俺は邪悪な音を立てる鬼にただ震えることしかできずにいる。

そのうえ、この鬼は、炭治郎の、会話の内容から恐らく兄弟子であろう存在を喰い続けているそうさ。

「もういい。くたばれ」

その話を聞いた炭治郎の声は、凄まじい嫌悪に満ちていた。

だが、それもすぐに収まり、目の前の怪物へと悠然と構えている。なんて凄いやつなんだと思った。もし俺の兄弟子がこいつに喰われているなんて分かったら、俺は恐怖のあまり逃げ出すだろう。

今でも、標的があくまで炭治郎に向いているから、なんとか逃げ出さずにいられる。もし、これを俺に向けられていたらと思うと……。

俺も何かしたい。

炭治郎がこの鬼に勝つために、何かがしたい。そう思っても、俺の体はちつとも動いてくれない。前へと足が動いてくれない。

誰かの役に立つ……そんな俺になりたい。なのに、現実の俺はこんなにも惨めだ。

自分で勝手に自分を追い詰め、俺はどうとう、鬼への恐怖と自分への自己嫌悪に板挟みにされ、失神した。

「シィィィィ」

だから、これは夢だ。

我妻善逸が見る、夢。自分を助けてくれた恩人の為に、一步を踏み出す夢。

けれどその夢は、確実に恩人を救うための一手となり得る。

「……雷の呼吸【壱ノ型 霹靂一閃】」
瞬間、雷が駆ける。

突然の事だった。

俺の正面へと延びていた手が、何かに切断されたのだ。それも、ほんの瞬きの間の一瞬で。

よく見ると、傷口が電気のようなものを帯びているのが分かる。更に視線を端に向けると、腰の鞆に刀を収める瞬間の善逸を目撃した。

「はっ……っ？ は、はああああああああああ—— ツツツツ！！！！」

「!? だ、誰だアアアア—— ツツツ!?!?!? 俺の邪魔をする奴はアアアア—— ツツツ!!!!」

「……サンキュー、善逸」

俺は恐らく聞こえていないだろう本人へと感謝を述べ、手鬼が伸ばした腕を足場とし走っていく。

そうして距離を詰めていく俺にギョツとし、残りの腕を俺に向けてくるが、その程度では足止めにもならない。

型を使うこともなく、俺は一気に手鬼の頸元へと到達した。

「全集中、水の呼吸……」

（間合いに入られた!? ……いや、大丈夫だ。俺の首は固い、こいつには斬れない！ 首を斬り損ねた所で頭を握り潰してやる！ あいつと同じようにツ!!）

その時、俺は見た。

手鬼の頸に、線のような、亀裂のようなものがあるのを。

原作の炭治郎は、鋭い嗅覚から、隙の糸なるものを見ることが出来た。恐らくこの亀裂は、それと同質のモノだろう。

名付けるならば、“隙の亀裂”といったところか。

【壱ノ型 水面斬り】—— ツツツ!!!!」

その亀裂をなぞるように、俺は一閃を繰り出した。
手鬼の頸はキレイに切り落とされ、跳ね上がる。

「……さようならだ。きつといつか、鬼なんかにならない、鬼なんかいない、そんな世界で生まれてこれますように」

頸は切った。なら、これ以上彼に憤る理由はない。

最後に彼にしてやることは、彼の来世を祈ること。ただそれだけだ。

俺が手鬼の手を握り、彼に黙祷を捧げていると、

——ありがとう。

ふと、そんな声を聞いた気がした。

俺が目を開けると、既に手鬼の死体は消失していた。

「……よし。おい、善逸ーっ！」

「ンあつ？ ……あれ!! さっきの奴は!!」

「……もう倒したよ。ありがとな」

「え、何が？」

あつ、そうか。寝てるから記憶ないのか。

「……まあ、色々あつたんだよ」

「………そうか。まあ、深くは聞かないよ」

善逸は俺の様子を見て何を思ったかは分からない。けど、それ以上追及はしてこなかった。

なんでこいつモテないんだ？ 普通に良い奴なのに。

「さて。じゃあ行くか」

「えっ、行くつてどこに？」

「東だよ。そこが一番早く日の当たる場所だから……あれ？ さっきの人もいなくね？」

「あ、ホントだ。逃げたのか？」

まあいいや。頑張ってもらおう。

そう思い、俺は善逸と一緒に走り出した。

「……なあ、炭治郎はどうして鬼殺隊に？」

すると、善逸が俺にそんなことを聞いてきた。

そういや、善逸は借金返済の為なんだっけ？

「……妹がいるんだ」

「？」

「鬼になった、妹が」

「!? それって……!」

「誤解のないように言っておくけど、妹は一度も人を喰ったことはないんだ。俺は、妹が人間に戻れる方法を探す。それが、俺の目的なんだ」
善逸が驚愕の表情を見せる。

当然だろう。鬼を狩るのが仕事の鬼殺隊が、鬼を匿っているのだ。

「……凄いな」

「そうか？ 一応俺はお兄ちゃんだから、これくらいは当然だ」

「だから凄いなよ」

「……なんか照れるな。」

「……うっ、眩しい」

「朝か。取りあえず初日はこれで何とかかなりそうだな」

俺たちは走り続けて疲れたので、近くの切り株に腰を掛ける。

だが、朝日に照らされながらも、虚脱感に耐えられず眠りについた。

そして、七日が経った。

俺たちは鬼との戦いの最中、彼らに鬼が人間に戻る方法はないか聞いたが、よくよく考えれば、そんなこと知っているならまず自分で試すであろうことに気づいた。

誰もみんながみんな、望んで鬼になった訳ではない。全ての元凶がいて、そいつに踊らされているだけなんだ。

「……随分と減ったな。最初は20人くらいいたのに、今は4人か……」

「死ぬわ死ぬ死ぬ。ここで生き残っても結局死ぬわ俺……」

あれから色々あつて善逸もすっかり鬱モードになっている。

全く、しつかりしてくれよ。それ寝てる時に聞かされると夢見が悪いんだよ。

にしても結局、生き残るのは原作と変わらないのか。モブに厳しい世界だなホント。

「お帰りなさいませ」

「おめでとうございませ。ご無事で何よりです」

すると、七日前に見たあの双子がそう言う。

でも、ほんとに生き残れたのか。あの二人を見ると、その実感が湧いてくる。

すると、チンピラみたいな奴が二人を見据えて言う。

「で？俺はこれからどうすりやいい？ 刀は？」

「まずは隊服を支給させていただきます。体の寸法を測り、その後は階級を刻ませていただきます」

「階級は十段階ございませ。甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸……今現在の皆様は、一番下の癸でございませ」

えっと、誰だっけアイツ？ 全然覚えてないや。

っていうか、さらつとあの二人、モヒカン君の言葉無視しやがったぞ。

「今現在皆様は一番下の癸でございませ」

「刀は？」

「本日、刀を作る玉鋼を選んでいただきますが、刀ができあがるまで、10日から15日かかります」

「んだよ……」

「その前に」

すると、白い髪の女の子が、手を二回叩くと、カラスが肩に飛んできました。

「今から皆様に、鎧鴉をつけさせていただきます」

「鎧鴉は主に、連絡用の鴉でございませ」

「鴉……？ これ雀じゃね？」

善逸が自分の所に来た雀を見てそう言う。
すると、鎧烏の鳴き声が辺りに響き渡る。

「ふざけんじゃねえ！ どうでもいいんだよ鴉なんて!!」

苛立ちを隠す様子もなく、白髪の子に掴みかかるモヒカン。

モヒカンに髪を掴まれ、その髪が乱れている。

「刀だよ刀。今すぐ刀よこせ。鬼殺隊の刀、色変わりの刀!!」

「やめろ」

俺はモヒカンの腕を掴み、やめるよう言う。

「ああ?! なんだテメエは?!」

「この手を放せ」

「……舐めてんのか」

俺は握った手に力を籠める。それこそ、腕を折らんばかりの力を。

こつちも疲れてるんだ。話を遮るな。

「ぐっ、がアっ?!」

すると、力が籠められなくなったのか、モヒカンは手を離した。

それに合わせ、俺もモヒカンから手を放す。

モヒカンは俺を憎々しげに睨んだ後、少し下がる。

「お話は済みましたか?」

「……一応は」

「チツ」

「それではこちらから、玉鋼を選んでくださいませ」

すると、奥の机から岩のようなものを差し出される。

「鬼を滅殺し、己の身を守る刀の鋼は、ご自身で選ぶのです」

「多分すぐ死にますよ俺は……」

流石にうるさい。ちよつと静かにしろ善逸。

「……どれ選べばいいの? 全部同じに見えるんだけど」

思わず思ったことを口にした。だが、他の人も中々決めあぐねているようだ。

「……どーれーにーしーよーうー」

「それで決めるの?! 雑過ぎるでしょ?!」

善逸にツッコまれたので渋々やめる。

にしても、ホントにどれを……ん？

「……じゃあ、これ」

何となく、その玉鋼が目に入った。

なので、俺はそれを手に取る。きつと、それが一番だという、自分の直感を信じて。

こうして、最終選別は幕を下ろした。

合格者5人という結果を残して。

帰還と初任務

「……あー疲れたー。善逸は泣きついてくるし、距離が遠いし」
あの後、善逸が「俺を置いてかないでくれよオオオオ!!」と泣きじやくるから、説得に凄い苦労した。

こつちも疲れてるのによくそんな元気があつたな。マジでちゃんと戦えやと思つたのは内緒。

「……禰豆子も鱗滝さんも待つてるんだ。早く帰らないと……!」
すると、俺は足がもつれて転んでしまう。

くそっ、これだからロクに技術の発達してない時代は嫌い……ではないけど、不便なんだ。

帰りくらい専用のバスとか電車くらい用意しろよ。
そう思いながら、俺はついに山の麓までやってきた。

「……やべ、いい加減倒れそう……ん?」

すると、俺の前方で、小屋の扉が勢いよく開かれた。
そして、その中から現れたのは、

「……ははっ、やっとか……」

「炭治郎!」

ほんと、起きるの遅いよ禰豆子。

禰豆子が俺をぎゅっと抱きしめる。やっぱり、暖かい。
その温もりに包まれて、俺はどうとう意識を失った。

「う、ううん……?」

「起きたか」

「鱗滝さん……俺は」

「疲れていたのだろう。今はゆっくりと体を休めろ」

「……はい」

いつの間にか、布団の上で眠っていた。

隣には再び眠っている禰豆子。

「そうだ、実は……」

俺は鱗滝さんに最終選別で起きた事を話した。

手鬼の事、最終選別で出会った善逸の事。結局、鬼には何も聞けなかったこと。

「そうか。異形の鬼をやったか……ついにな。……本当によく帰ってきた。……鬼にはいくつか種類がある。血鬼術という特殊な術を使う鬼は、異能の鬼だ。今後は、そのような鬼とも戦うことになるだろう。その者達との戦いは、これまで以上に困難を極める。……だが、お前ならきつと大丈夫だ」

「はい……」

俺を認めてくれる言葉。その嬉しさを噛みしめつつ、しっかりと返事を返す。

「あの……禰豆子は、どうして眠っていたのでしょうか？」

「……これは憶測だが、禰豆子は人の血肉を喰らう代わりに、眠ることで体力を回復しているのかもしれない」

確か、鬼になってすぐは飢餓状態で、すぐくエネルギーを消費しているはず。

だから二年も眠っていたのか。

人間じゃ絶対に無理だな。っていうか、匂いとか大丈夫なのか？

まあ、鱗滝さんだしその辺のカバーもばっちりだろ。うん。

—十三日後—

「……ん？ 風鈴の音？」

部屋で片付けをし、旅立ちへの準備を進めていた頃。

突如小屋の外から、風鈴の音が聞こえた。

何事かと思ひ玄関をの扉を開けると、

「……えっと」

「俺は鋼鐵塚という者だ。竈門炭治郎の刀を打ち、持参した」

「あ、どうも！」

もう来たのか。あと二日はかかると思ってたんだがな。

すると、鋼鐵塚さんが入口付近の石に腰掛け、背負っていた荷物を下ろす。

「？」

「これが日輪刀。俺が打った刀だ。日輪刀の原料は、太陽が一番近い山で取れる、猩々緋砂鉄と猩々緋鉍石……それで日の光を吸収する鉄ができる。陽光山は一日中日が差している山だから」

「いや聞いてないです」

なんでこの人はこっちが聞いてもないことをベラベラと喋るんだろうか。

すると、鋼鐵塚さんが勢いよくこちらを振り向く。

「うわっ!! ひよつと!!」

間近で見ると怖い。

「ん？ んん？ ああお前、赫灼の子じゃねえか。こりや縁起がいいな」

「えっ、あ、どうも……?」

なんだっけ赫灼って？

……あ、確か縁起がいい奴だ！（うろ覚え）

「こりや刀も赤くなるかもしれんぞ。なあ、鱗滝！」

「……ああ」

奥から鱗滝さんが答える。

そして、取りあえず上がってもらい、刀を渡してもらおう。

「さあさあ。抜いてみな。日輪刀は別名、色変わりの刀といってな。持ち主によって色が変わるのよ」

色変わり……何度聞いても、原理が分からない。

まあ、それを行ったら全集中が一番意味不明か。そう思い、ゆつく

りと刀を鞘から抜く。

「……………おお……………おん？」

「む？」

「あん？」

刀は確かにその刀身の色を変えた。

変えたのだが……………、

「……………えっ？」

「変わった……………のか？」

「……………分かり難いが、変わってるな……………銀色だ」

……………銀色って……………鉄の色とほとんど変わらないんじゃないのそれ？

っていうか、黒色じゃないのか。てつきり黒に変わると思ってたんだが……………、どういうこと？

「……………銀色は……………、初めて見たな。珍しい色と言うなら黒や白もあるが……………」

「俺は鮮やかな赤い刀身を見れると思ったんだが……………まあ、初めて見る色ってことで勘弁してやるか」

「あ、どうも」

ふう……………よかった絞められなくて。

そう安堵していると、窓の方に鏖鴉が飛んできた。

「竈門炭治郎、竈門炭治郎！ 指令ヲ伝エル！」

「え、とりっぴー？」

「ナンダソレハ？ ソンナコトヨリ、北西ノ街ニ向カエ！ ソコデハ少女ガ、消エテイル！ 毎夜毎夜、少女ガ消エテイル！ ソコニ潜ム鬼ヲ見ツケ出シ、討ツノダ!!」

ついに来た。最初の任務。

でも、やれる。あの最終選別も、鱗滝さんの鍛錬も突破したんだ。出来ないはずがない。

「竈門炭治郎、心シテカカレ！ 鬼狩リトシテノ最初ノ仕事デアル！」

「……………はい！」

鏖鴉に敬礼をし、俺は鬼殺隊の隊服に着替える。

その上にいつもの緑の羽織を纏う。

「炭治郎。お前が鬼殺隊の任務を始めるにあたって、説明しておきたいことがある」

鱗滝さんの説明は、隊服の事と日輪刀のことだった。

隊服については知っていたので適当に相槌を打っていたが、

「お前の持つてる日輪刀、持ち主によって色が変わり、それぞれの色ごとに特性がある。しかし、銀色の刀身というのは、未だかつて発現させた者はおらん」

俺は自分の傍らに置いた日輪刀を見て、鱗滝さんに言う。

「……それでも、俺はやります。この刀の変化に、どんな意味があるのかは分からないけど、俺は俺に出来ることを背一杯やります。必ず、禰豆子を……！」

「ああ、そうだな。そうなると儂も信じている。それと、これを。……昼間妹を背負う箱だ。非常に軽い霧雲杉という木で作った。岩漆を塗って外側を固めたので強度も上がっている」

そう言つて、濃い茶色をした箱を渡してくる鱗滝さん。

持ち上げてみるが、本当に軽かった。大正時代の木つてすごいな。

「おーい禰豆子ー。この中に入るんだぞ」

「……分かつてる」

すると、布団の中で猫のように丸まっていた禰豆子は、体を小さくして箱の中に入る。

そして、箱を背負い、俺は小屋を出た。

「……では、行きます」

無言で頷き、俺を見送ってくれる鱗滝さん。

俺は道中何度も振り返り、鱗滝さんに手を振る。そして、完全に見えなくなったところで、少し歩みを早めた。

「これ以上は未練が出るしな。早くいくか」

『誰も聞いてないよ』

「……寝てたらどうだ禰豆子?」

『暇だし、そんな簡単に寝付けない』

まあ、体力回復したから、そんなに眠る必要が無いのか。

『にしても、13日で刀が届くとはね。これはもしかして……行けるんじゃない?』

「? 何がだ?」

『忘れたの? ほら、沼鬼の時の……』

「……あ!」

思い出した思い出した。

確か、婚約してる人がいて、その奥さんが犠牲になるんだっけ……?

『忘れてるの?』

「こちとら二年間も修行漬けだったし、単行本やアニメを見返せるわけじゃないしな。所々は忘れてるぞ?」

『……仕方ない。私はその辺はサポートしてあげる』

「お、ホントか? 流石我が妹」

『はいはい』

そんな話を話し合っているうちに、北西の街らしきところに来た。大きな建物がなく、城下町のような風貌だ。

「……でも、どうやって見つけようか……?」

俺は炭治郎のように匂いが分かるわけじゃない。

気配こそ感じられるが……昼間は鬼は出ない以上、どうやっても使えない。

「聞いた? この間も若い女の子が一人、夜中に消えたんですって」

「まあ、近頃は物騒ねえ」

歩いていると、道の端でそんなことを言い合う女性の声が聞こえた。

「さらに……、」

「……近頃は本当に物騒ですね、和巳さん」

「大丈夫だよ里子さん。僕が君を守るから」

そんな話声も聞こえた。

年の頃は15, 6といったところだが、この時代では別に珍しい事でもないのだろうか。

『お兄ちゃん。今の……』

「今の……? ……あ!」

『後を付けて』

「了解」

つまり、あの二人が襲われる人たちということか。

ラッキーだ。まさかこんな早い段階で出会うことが出来るなんて。

俺は周囲に人に怪しまれないようにしつつ、二人にも気づかれないうように後を付ける。

「……でも、あの二人が襲われるのっていつなんだ?」

『分かんない。けど、もうすぐだと思う』

気づいたときには、すっかり暗い夜だった。

二人が家の間の、路地のような場所を通りかかる。近道だろうか?

その間も、二人は談笑して、互いに幸せそうな表情をしている。

「……匂いが分かれば、幸福の匂いってのも分かるのかね」

『さあ?』

「まあでも、幸せオーラは出てるな」

『分かるの?』

「なんとなく、そんな気配がするだけ」

『それでも十分凄と思う。いつの間にそんなハイスペックになったの?』

言われてみれば、随分と万能になった俺。

そんなことを感慨深げに思っていると、

「!? ……彌豆子」

『……鬼の気配……近いよ』

間違いない。最終選別で何度も感じた気配。

だが、今感じているのはそれよりも一際強い気配だ。間違はなく、人を喰った鬼。

「……行こう。初仕事だ」

『頑張ってるね』

「……手伝ってはくれないのな」

まあ、彌豆子は鬼だし、むやみやたらに出てこられても困るしな。

相手が三人でも、接近戦はそこまで強くない敵だったはずだし、何

とかなるか。

「あのー、すみません」

「ん？」

「はい、なんででしょうか？」

鬼の気配は里子さんの足元付近で停止している。随分と接近されたな。

「いえ、ただ、そこから動かないでください」

「？ それはどういう……」

「おい、そもそも何なんだアンタ？ まさか、最近流行ってる人攫い——」

強い警戒心とともに、和巳さんが一步を踏み出した。

その瞬間、鬼の気配も動いた。今までのゆつくりな動きと違う、こちらを警戒し、迅速にことを済ませようとする動きだ。

「まずっ……！……！ 下がってー！」

「きやつ！」

「おい！ アンタ——！！」

俺は里子さんを無理やり下がらせ、地面から伸びてきた腕を切り裂く。

腕からは噴水のように血が噴き出すが、直ぐに止まった。これも鬼の再生力による賜物か。

「ひっ！！」

「な、なんだそれ……！！」

後ろ見ると、里子さんを抱きしめる和巳さん。どうやら、俺が付き飛ばしたのをキャッチしてくれたみたいだ。

「先ほどの事は謝ります！……けどどうか、今は俺の言うことに従ってください！……その方が狙われています！」

「……えっ？ 私……？」

「はいー！」

俺は焦り気味に答えるが、内心は少し安堵していた。

彼女は本来なら死ぬはずの女性だ。それを救えるかもしれない……先ほどの幸せそうな二人を見ていると、尚の事、守りたいという

思いが強くなる。

すると、完全に再生した腕が地面に引っ込み、代わりに腕の持ち主である鬼がゆっくりと出てくる。

……だが、

「お前！ 歯軋り五月蠅いぞ！ 近所迷惑だろうがッ!!」

「そこ!?!」

後ろで和巳さんがツッコんでくるが、言わずにはいられなかった。

沼鬼との戦い

ギリギリギリという歯軋りを鳴らしながら、ゆっくりと出てくる沼鬼。

眉をひそめるその表情は、明らかに不機嫌そうだった。

「……お二人とも、俺の傍を離れなでください」

俺はその鬼に刃を向けつつ、二人を背に庇うように立ちまわる。

(……今だ、行くぞ！)

俺は気配のする方向に走り、複数で襲ってくるのを警戒し、捌ノ型の構えを取る。

瞬間、俺の足元から、俺を沼へ引きずり降ろそうとする鬼が、二体現れる。

(なに?! もう一体は……?!)

もしかしたら……だが、今は目の前に二人に集中だ!

「……水の呼吸【捌ノ型 滝壺】ツ！」

「ガ——ッ?!」

取った!

確かな手応えだ、確実に頸を切った!

その俺の予想通り、二体の鬼は灰となって消滅した。

「動くな」

すると、背後で声が聞こえた。

慌てて振り返ると、先ほどの鬼と同じ姿をした沼鬼が、二人の頸筋に爪を突き立てていた。二人は恐怖で声も出ないようだ。

「刀を捨てろ。……まさか、俺が二人ともやられるとはな」

「くっ……!」

人質。……迂闊だった。

人数が少なくなっていて、前に踏み込み過ぎたんだ。俺の間合いから外れた二人を、危険に晒してしまった。完全に俺のミスだ。

「……ん? お前の背負っている箱、何故開いている? 先ほどまでは閉まっていたはず……」

「えっ……?」

すると、沼鬼が俺にそんなことを聞いてきた。

後ろを見てみると、確かに箱が開きっぱなしになっていた。

……ちよつと待て、じゃあ禰豆子はどこに……？

「よつこらせえー！」

「ガハッ?! ……バカな、まだ仲間が……!!」

瞬間、何かが地面に叩きつけられる音と、何かが折れるような音とともに、沼鬼の絶叫と、禰豆子の叫びが響き渡る。

どうやら、禰豆子が沼鬼にジャーマンスープレックスを掛けたようだ。

けど、一体いつ外に……、そうか！俺が行動を起こすと同時に、箱から出て様子を窺っていたのか！全く、抜け目のない奴だな。

「助かった禰豆子！」

「全く、すっかりしてよね」

「ああ！もう油断はしない！」

日輪刀でなければ、鬼は殺せない。

先程の禰豆子の一撃で、骨が折れる音が聞こえたが、向こうが堪えた様子はなかった。

「くつ、よく見れば、その女、鬼じゃないか！ 貴様！ 何故人間の味

方をする?!」

「貴方達の味方をするよりはマシなだけ……というか、私はお兄ちゃん

の味方だから」

「くそっ！」

「あつ！ 逃がすか!!」

不利だと判断したのか、沼の中に潜って逃げようとする沼鬼。

「禰豆子！ 二人を頼むぞ！」

「合点承知の助！」

何それ……、まあいいや。

俺は沼鬼の作った沼の中に入り込む。

(……沼の中だから呼吸は出来ないと思ってたけど、一応空気があるんだな。薄いけど)

水の中ということで警戒していたが、全く行動できないわけではな
いらしい。

まあ、呼吸が出来なきや技も使えないから当然と言えば当然か。

(?! これは、着物……?)

沼の中には、大量の上質な着物が散りじりになって浮いていた。
恐らく、沼鬼に殺された人の着物だろう。

(……助けられなかった……いや、悔やむのは後だ!)

「ハハハハっ! 苦しいか、小僧? この沼の中には、ほとんど空気も
ない。さらにこの沼の闇は、体にまとわりついて重いだろう? 地上
のように動けんのだ! ザマアみる!! 浅はかに自ら飛び込んで
きた、この愚か者が!」

すると、下の方から沼鬼の声が聞こえた。

舐めるなよ。鍛錬の方がよっぽどきつかったぞ。

「べー」

「なっ?! 貴様ア——ッ!!」

俺は沼鬼に向かって、下を出し、目元を指で引つ張って挑発する。
自分が優位に立っているときほど、挑発には乗せられやすい。沼鬼
は単調な動きで俺に突進してくる。

(水の呼吸【陸ノ型 ねじれ渦】ッ!!)

「ガハアッ!!」

ねじれ渦は、水の中でも十分な威力を發揮する技。

沼鬼が単調の動きだったというのもあり、簡単に頸を取ることが出
来た。

(よし、戻るか——?!)

やばい。超苦しい。調子乗ってたけど普通に辛いわ。

俺は大急ぎで地上へと戻る。

「ブハッ?! ゲホッ、ゲホッ! ……ふう、生きてるな、俺……」

「お兄ちゃん!」

何とか戻ってこれた俺に、禰豆子が駆け寄ってくる。

「……大丈夫? 何処か痛むところとか」

「大丈夫だよ。どこも怪我してない。みんな無事だ」

そう。みんな無事だ……ここに居る者は。

(……どうか、安らかに)

俺は先ほどまで沼があつた場所に、手をついて黙祷をささげる。

助けられなかった。間に合わなかった。……俺に出来るのは、彼女たちの来世を祈ることだけだ。

「……禰豆子、あの二人は？」

「気絶させた」

「えっ」

禰豆子の発言に思わず振り返ると、白目をむいて壁にもたれかかる和巳さんと、その彼にしなだれかかる里子さんがいた。

「えっ、なんで？ 何やってるの？」

「……ダメだった？」

「あ、大丈夫です」

頼むから涙目にならないでくれ。何でも許せちゃうから。

仕方がない。あの様子じゃ多分朝まで起きないと思うけど、俺達じゃどうしようもないし、生きてるんだから大丈夫だろ。

そう思い、この場を見られない様にそそくさと逃げるように去る。

「ほら、禰豆子」

「ん……」

俺は背負っている箱を開き、禰豆子に入ってもらおう。

「……さて、次はどうすればいいんだ？」

『鏝鴉が新しい任務を持ってくるまで適当に時間を潰したら？』

適当にって言われても……特にやることないんだよな。

『あ、じゃあ、鍛錬の時とか、最終選別の話が聞きたい！』

『ええ……でも、禰豆子は知ってるだろ？』

『いいじゃん！ 原作とは違うんでしょどうせ』

どうせって……まあ、違うんだけどさ。

仕方ない。暇だし、カラスも来ないから話すか。

『山下りはどうだったの？』

「大変だったぞ？ 罨の場所を覚えようとしても、鱗滝さんは毎日毎日罨の場所を変えるせいで、覚えても無駄だったし」

『へえ〜』

「だから、とにかく罨の気配を察知しようと思つて」

『ちよつと何言つてるか分かんない』

……確かに。

今にして思えば、罨の気配つてなんだ？ 無機物に気配なんてある

のか？ まあ、感じ取れたんだが……。

『ついに人間やめちやつたんだね』

「失礼だな?! ……まあ、そう言う訳だ。そして、鱗滝さんに岩を切

れつて言われた」

『おお……それでそれで?』

「岩は何故か俺の五倍くらいあつてな」

『五倍?! 原作より大きいじゃん!』

そうなんだよ。

正直普通にくじけそうになった。

「全集中の呼吸・常中とか、鍛錬をよりハードにするとか、色々頑張つ

たんだが、どうにも切れなくてな」

『それだけやつてどうして切れないの?』

「そしたら、いつの間にか、狐の面を付けた男が現れたんだ!」

『錆兎だね。でも、どう考えてもお兄ちゃんのほうが強いと思うけど

……』

そうでもないぞ? なにしろ、俺は錆兎には九か月経たないと勝て

なかつたんだしな。

俺の剣には余分なものが多すぎて、剣に力が乗り切つてなかつたん

だ。

『……九か月つて、大丈夫だったの? 最終選別の時間に間に合った

の?』

「錆兎と出会つたのが三か月後だったし、十分間に合ったぞ。……ん

?」

遠くから、鏖鴉がやってくる気配を感じた。

その方向に視線を向けると、やはり鏖鴉が俺の方へとやってきて、

肩に止まり叫ぶ。

「次ハ東京府、浅草！ 鬼ガ潜ンデイルトノ噂アリ！ カアー！」

「うげっ、もうかよ……」

まだそんなに時間経ってないのに……。

しかし、任務なら行かざるを得ない。

「……じゃ、出発だ」

『うん。おやすみ』

そう言っつて、禰豆子は眠りにつく。

それと同時に、太陽の光が差し込んでくる。

「さて、頑張りますか！」

必ず、禰豆子を人間に戻して、普通の生活を送れるようにするために！

都会の鬼

「はあ……疲れた。にしても、ここが浅草か」

あれから一日中歩き、ついに東京にやってきた。

現代人からすれば遅れていると言わざるを得ないが、やはりこの時代だと相当都会なのだろう。

道行く人の服装が、今まであつてきた人物と全然違う。夜でも明かりがあるというのが、こんなにも心強いのだと再確認させられた。

「……さて、この街から鬼を探すのか」

人が密集している中じゃ、気配を察知することも出来ないな。

だったらやっぱり目で探すしかないが、時間が掛かり過ぎるし……一度、上から見てみるか。

そう思い、近くの路地裏へと入って、壁キックで建物を登っていく。屋上に辿り着き、一息つきつつ鬼探しをする。

「ふう。……眺めはいいけど、逆に分かり難くないかなこれ……？」

上から眺める限りでは、鬼らしき存在は見当たらない。まあ、見えるほど目良くないけど。

「……やばいな。原作じゃどうしてたんだ？ 確か、匂いを嗅いでた

と思うけど……」

匂い……ダメだ。空気の匂いしかない。……空気の匂いつてなんだろ。

「にしても、他の街と比べるとホントに人が多い——」

「何をしておるのじゃ小僧？」

「!?」

背後から声を掛けられると同時に、俺は直感的に刀を抜いて背後に立つ存在を薙ぎ払う。

だが、俺の一刀は躲され、一撃は空を切った。

刀の先を見ると、毬を片手に持つ黒と橙色の着物を着た少女……否、鬼がいた。

「……何者だ」

「知れたことを。刃を振るった時点で、私の素性など見抜いておるの

だろう？ その問いかけに何の意味がある？」

いや、咄嗟に振っただけで別に見抜いてないですね。

っていうか、人だったら俺今頃殺人犯だったんじゃない……。

「……………俺は鬼殺隊、竈門炭治郎！ 今からお前を切る！」

「いや、さつき切る気満々だったじゃろうが……………まあよい」

俺は宣誓し、再び刀を構え直す。

すると、毬の鬼はキャハハと笑い、上の服を脱ぐ。……………えっ？

「ちよー！ おまつ、なんで脱いで……………！」

「何を慌てておる？ そんな様では……………死ぬぞ？」

すると、黒い下着に覆われた胸元から、四本の腕が新たに生える。

ちよつと待て。こいつ知ってる……………というかあれだ！ 無惨に騙

されてる鬼の朱紗丸！

(まさか、こんなところで会うなんて……………まあ、指パッチンでやってくるくらいだし、街に潜伏はしてたんだろうけどさ)

流石に予想外だ。

だが、それ以上に好都合だ。原作ではこの鬼と一緒に、矢琶羽という方向を操る鬼がいた。

この二人のコンビネーションが抜群に良いのだが、基本的に鬼は群れない。大正コソコソ話でも言っていたが、彼らは無惨に呼ばれるまで会ったことがないはずだ。

つまり、ここで彼女を倒せば、いずれ起こるかもしれない矢琶羽との戦いも一対一になり、楽になる。

「はああああーっ！」

全集中の呼吸で身体能力を高める。全集中の呼吸・常中は今のところ十二時間程度しか持続できないが、いずれは一日中出来るようにしたい。

俺は朱紗丸へ攻撃を仕掛ける。それに対し彼女は、毬を一つ、凄まじい力で投げつけてきた。

「水の呼吸、【漆ノ型 雫波紋突き・曲】ッ！」

斜めから曲線に突くように、刀を突きだす。朱紗丸の投げた毬がそれに衝突して、刀が毬を貫通した。

俺はそのまま、刀に突き刺さる毬を、刀を振って落とし、朱紗丸へと接近する。

「チツ、面倒な……い、ふん！」

朱紗丸は六つの腕全てで毬を持ち、連続で投擲を開始する。

咄嗟に「参ノ型 流流舞い」を使い、攻撃をすべて回避し、逆に更に間合いを詰めた。

俺が接近したことで、朱紗丸の表情に焦りが生まれた。

「ここだ！ 【壱ノ型 水面斬り】 ツ！」

腕を十字に交差させ、勢い良く水平に刀を振るう。

「くッ！」

その一撃は朱紗丸の腕を切り落とすが、一瞬で再生し、生えかわる。だが、分が悪いと思ったのか、屋上から飛び降りて撤退しようとする。

「まづっ……い、アイツ人前に……い！」

俺はすぐに後を追うために、建物を飛び降りる。

この程度の高さ、鍛錬の時に崖渡りをしたのと比べたらなんてことない。

「ふっ」

「な——ッ！」

だが、下で朱紗丸が毬を構えているのを見て、瞬時に彼女の思惑を察し、血の気が引いていくのを感じた。

俺を誘い出したのだ。空中では回避が出来ないと思っ

「キャハハ！ これで貴様も終わりだ！」

朱紗丸が毬を大きく振りかぶる。

その姿を見て回りの通行人が怪訝な目を向けているが……その中で一人、白い帽子を被った洋装の男性が、不愉快そうな視線を向けているのを感じた。実際、そう言う気配を放っている。

俺は思わずその姿に目が行った。何故なら、その人物を俺は知っていたからだ。

鬼舞辻無惨。……全ての元凶にして、最強の鬼。彌豆子を鬼した男。無論、向こうはそんな事覚えてもないだろう。

だが、関係ない。いずれ必ず倒す。

「うぐツ!!」

そんな、余計な思考をしていたせいだろうか。

防御を行ったが体勢が崩れ、打ち落とされる。幸い、下には屋根があり、そこで受け身を取ることが出来たので、ダメージは大きくない。けど、軽いわけでもない。

痛い……骨は折れてないけど、結構痛い。というか、禰豆子にダメージ行っていないよな? 大丈夫だよな?

「くっ!」

『ちよつと?! 急にどうしたの?!』

やべっ、禰豆子を起こしちゃったか? 鬼舞辻いるから出てきて欲しくないんだけど……。

というか、なんでアイツずつとこっち見てるんだよ。そしてなんで朱紗丸はそれに気づかないんだよ……ああ、鬼舞辻に関すること言えないから、分かっても言えない。もしくは、鬼舞辻が溶け込み過ぎて気づいていないだけか? まあどうでもいいけどさ。

取りあえず、禰豆子には静かにしてもらおうと言って、俺は朱紗丸に向き直る……が。

「おい! 何をしている!!」

すると、横合いから怒号が響く。

恐らくは警察組織の人間だろう。俺達の戦いを見た人が通報したのか、それともただ通りすがっただけか。

まあ、そこはどうでもいい。問題なのは……、

「なっ、君! 何故刀を持っている!!」

「……チツ、余計な……」

警官の一人が、俺を指差して叫び、それを聞いた朱紗丸が舌打ちした。

そして、その人が俺の方にやってきて手錠を掛けようとする。

「ちよ、待ってください!」

「詳しい話は後で聞く。抵抗は——」

「危ない!」

俺は咄嗟に警官の人を転ばせる。

次の瞬間、警官の人の頭があつた部分に毬が飛んできた。転ばせたので本人には当たらなかつたが、毬は近くの店に衝突し、店を半壊させた。

その破壊力を見て警官の人は顔を真っ青にし、静寂が辺りを包む。そして、誰かが叫び声を上げると同時に、パニックが始まった。人々が叫び声を上げて我武者羅に逃げ惑う。

警察の人が落ち着くように言うが、聞く耳を持っていない。

「キャハハ！ さあ、行くぞ小僧！」

朱紗丸が俺に向かつて六つの毬を構える。

人が入り乱れるこの場所では、迂闊に刀が振るえない。かと言って、逃げるわけにはいかない。鬼舞辻がいるとはいえ、これだけ目撃者……いや、人間がいるなら、何人かが襲われるかもしれない。

それはあつてはならない。俺の目的は彌豆子を人間に戻すことでも、そこに犠牲があるのは許容できない。

「くそっ！」

「ほれっ！ ほれっ!! どうした、こんなものか!!」

好き勝手に毬を投げつける朱紗丸。

俺は広く、人の少ない場所に移動しようとするも、朱紗丸がそれを妨害するかのように、周囲の人を巻き込みかねないような一撃を何度も放つため、上手く移動できない。

俺は巻き込まれそうになっている人を庇いつつ、彼女の攻撃を捌き続ける。

(せめて……もう一人味方が居れば……!)

しかし、そんな俺の想いとは裏腹に、助けがやってくることはない。彌豆子に助けを求めるのはダメだ。怪我でもされたら困るし、なにより鬼舞辻がいる。アイツに彌豆子のことを知られるのは少しまずい気がする。

せめて善逸がいれば……いや、気絶してくれないと意味が……人を逃がすことくらいは出来るか？ っていうか、警官はなにしてるんだ？ さっさと避難を……。

「……おいおい、警官いねーし。まさか、みんな逃げたのか？」

それでいいのか公務員。一般市民守るのが仕事だろてめーら。マジで税金泥棒かよ。

「キャハハ！ 守るべき側から見捨てられるとは、哀れな奴じゃのう！」

思わず俺は顔をしかめる。

この状況で助けが来ないというのは少しやばい。俺の背後には、高そうな紫色の着物を着た女性と、書生のような恰好をした少年がいる。

幸い、表情を見る限りパニックは起こしていないようだが、このままでは守り切れない。せめて広い場所に出れば、毬の攻撃を捌けるくらい範囲の広い攻撃で……。

「広い場所？」

「これで終いじゃー！」

俺が呟いた瞬間、朱紗丸が再び投擲を行う。

俺は後ろにいる人たちを無理やり退かすが、二球ほど体に掠つてしまった。直撃していたら死んでいただろうから、本当に助かったが、掠つただけで凄い痛みだ。

けど今、朱紗丸は無手。今度こそ、決めるなら今しかない。そう思い俺は跳躍し、近くの壁を蹴って勢いよく朱紗丸に突撃した。

「バカめ！ 何も学ばんかったのか!! いい的じゃー！」

それは先ほど、空中で朱紗丸の攻撃を受けた時のことだろう。

だが、あの時は考え事をしていただけで反応が遅れただけで、実際は十分対処することが出来た。

目の前に迫る弾幕に対し、俺は刀を構える。

「水の呼吸……【肆ノ型 打ち潮・乱】ッ!!」

朱紗丸が放った六つの毬を、全て切り落とす。

空中で発動し、攻撃を行える技、【打ち潮・乱】。これにより、朱紗丸の放った毬を打ち落とし、一気に懐に入り込む。

「!? しまっ——！」

「終わりだー！」

一閃。

朱紗丸の頸を、俺の刀が通り過ぎ、その頸を落とす。

「……バカ、な……」

呆然と、地面に転がり頭だけになった朱紗丸が、呟いた。

彼女はどうして自分が死ぬのか理解できないと言った表情をし、頸のない体がおかを求めるように腕と足を動かす。

だが、不安定な上に死にかけなせいか、バランスを崩して倒れこんだ。

「……、……ま……り」

「……、」

毬。

彼女の力を象徴するものだ。

俺は一つだけ、自分の足元に転がっている毬を手に取り、倒れた彼女の体の手に渡す。

「！……な、にを……」

「……分からない。自分でも何やってるんだって思うよ。……でも、俺は君を憎んでない」

「……、」

「だから、君には安らかに成仏してほしい。……人として」

その言葉に、朱紗丸は大きく目を見開いて……うら若い少女のように、無邪気な笑みを浮かべて言った。

「……ねえ、またいつか、一緒に……あそ——」

最後まで言い切る前に、朱紗丸は灰となつて消えていった。

……俺はゆつくりと立ち上がると、完全に興味を無くしたのか、この場から去ろうとしている鬼舞辻無惨に向かって叫ぶ。

「鬼舞辻無惨!! 俺はお前を切る。今は無理でも、いつか必ず!

精々不可能だと鼻で笑っている!! 鬼^{悲劇}を生み出すお前を、俺は許さな

いッツ!! 必ずお前に刃を振るって見せるッ! 頸を洗って待つて

いろッツツ!!!!」

……言いたいことは言った。

既に鬼舞辻の姿は見えなくなっている。俺もこの場を離れないと、警察に捕まってしまう。

「いって……傷が……これ、次の任務までに治るか？」

「よろしければ、私が診察しましょうか？」

「えっ……？」

俺が守っていた女性が、その声を掛けてくれた。どうやら、彼女は医者らしい。

「えっと……貴女は？」

「失礼。……初めまして、珠世と申します。以後、お見知りおきを」

珠世と名乗った女性は、丁寧に頭を下げ、その隣にいる少年は、忌々しそうにこちらを睨んでいた。

鬼であり医者

「……」

カツ、カツ、カツという足音が、暗い路地裏に響く。明るい表を避け、ポケットに手を突っ込み、白い帽子を被った色白の洋服を着た男は、その赤光する瞳を闇の中へと向けている。

その男、鬼舞辻無惨は、先ほどまで自分の目の前で起こっていた事件について考えていた。

耳に花札のような耳飾りを付けた、赫灼の子供。緑と黒の羽織を羽織る鬼殺隊士。唯一、黒い日輪刀を持っていなかったのは、彼にとつて幸いだった。

「……来い」

闇に向かって、ぼそりと呟く鬼舞辻。すると、どこからともなく、首に数珠を下げ、目を閉じている男が姿を現した。

鬼舞辻はその男に、振り返ることなくただ命じる。

「耳に花札のような飾りを付けた鬼狩りの首を持ってこい。いいな？」

「御意」

男は即答し、瞬時に姿を消した。

鬼舞辻もまた、その場を静かに去っていった。

「改めて挨拶を。私は珠世。こちらは愈史郎です」

「ご丁寧にどうも。……えっと、俺は竈門炭治郎です。こっちは妹の……」

「禰豆子です」

浅草での戦いの後、俺と禰豆子さんは珠世さんに連れられ、彼女の自宅で療養していた。

俺は傷を負った場所に薬を塗ってもらい、大分楽になっている。

それより俺が気になるのは……。

「えっと、そのう……」

「……分かっております。……愈史郎、炭治郎さんたちをそんなに睨まないで」

「はいー……、」

こちらを睨む少年、愈史郎。俺が見てる感じではずつと不機嫌だ。

しかも、珠世さんの言葉に元気よく答えたのに、まだこちらをじつと見ている。

そんな彼に珠世さんはため息をつき、俺に謝ってくる。

「……すみません」

「え、あ、ああ……、お気になさらず。……それより一つ、お伺いしたいのですが……」

「なぜ私が、……いえ、我々が鬼なのに、医者などしているのか？　です」

珠世さんは目を伏せ、そして語った。

己が鬼舞辻無惨を滅ぼしたいこと、鬼舞辻の呪いを外していること、愈史郎を自分の力で鬼に変えた事、輸血によって血を少量飲むだけで無事になっていることを。

すると、珠世さんも禰豆子の事を聞いてきたので、少しだけ掻い摘んで説明した。

この辺りは俺も禰豆子も既知の知識だ。そして、俺が今から話すものも、どちらかと言うと確認の為に、問いかける。

「珠世さん。鬼になった人間を、再び人に戻すことはできますか？」

禰豆子は……日の下を歩けるようになりますか？」

正直に言うと、これに関しては確実な情報が欲しかった。

この世界は漫画やアニメのようにいくとは限らない。だから、禰豆子が人間に戻れない可能性もあった。考えたくはなかったけど。

「鬼を人に戻す方法は……あります」

……ふう。よかった……。

どうやら、俺達の知識通りらしいなこれは。

「なら、お願いします！　どうかそれを、教えてはいただけませんか？」

「どんな傷にも病にも、必ず薬や治療法があるのです。今の時点で鬼を人に戻すことはできませんが、それもきつと……。……ですが、私達は必ず、その治療法を確立させたいと思っています」

「……それは、俺が生きている間に確立できるのでしようか？」

「……保障は出来ません。しかし、最善を尽くすつもりです」

じゃあ心配ない。俺は嘘の匂いとか嗅ぎ分けられないけど、きつと大丈夫だ。根拠はないけど、そんな気がする。

「……俺にも、何か手伝えることはありますか？」

「勿論。私からも、貴方をお願いすることが二つありますから。一つは、妹さんの血を調べさせてほしい。二つ、できる限り鬼舞辻の血が濃い鬼から、血液を採取してきてほしい。治療薬完成には、沢山の鬼の血を調べる必要があるでしょうから」

「鬼の血……」

珠世さんは俺の呟きにうなずき、言葉を続ける。

「禰豆子さんは今、極めて稀で特殊な状態です。2年間眠り続けたとのお話でしたが、おそらくその際に体が変化している。通常、それほど長い間、人の血肉や獣の肉を口にできなければ、まず間違いなく凶暴化します。しかし、驚くべきことに、禰豆子さんにはその症状がない。この奇跡は、今後の鍵となるでしょう」

すると、珠世さんは表情を暗くし、もう一つのお願いの説明を始めた。

「もう一つの願いは過酷なものとなるでしょう。鬼舞辻の血が濃い鬼とはすなわち、鬼舞辻により強い力を持つ鬼ということですよ。そのよくな鬼から血を取るのには、容易な事ではありません。それでも、あな

たはこの願いを聞いてくださいますか？」

「勿論です」

こちらの即答に、珠世さんが目を丸くした。

まあ、そりゃ驚くだろう。ただでさえ鬼との戦闘は死と隣り合わせなのに、より自分が死ぬ可能性のある敵と戦えと言っているのを、あつさり了承するのだから。

俺はそんな彼女に微笑みながら言葉を続ける。

「彌豆子が人として生きていけるなら、なんだってやる。ずっと前にそう決めて、今までやってきたんです。それは、これからも変わりません」

「……彌豆子さんのこと、大切にしていらっしゃるのですね」

「ええ、勿論」

そういつて珠世さんが微笑む。それにつられて俺も思わず微笑み返した。

……その時——

「!? これは……!」

「珠世様! 術が破られました!」

「なんですって!?!」

今更だが、俺達のいる家は、愈史郎の血鬼術で隠蔽されている。

なので、普通は招かれない限り誰も入ってこれないのだが……。

「……外から気配を感じます。数は一人……先ほどの鬼よりも強いです!」

「どうしてここが……」

「決まっています! その鬼狩り達を連れてきたからです! 俺の目隠しの術も完璧ではないんです! あなたにもそれはわかっていきますよね! 建物や人の気配、匂いは隠せるが、存在自体を消せるわけではない! 人数が増えるほど痕跡が残り鬼舞辻に見つかる確率も上がる! だから鬼狩りに関わるのはやめましょうって——ッ!」

「愈史郎!」

俺たちを非難する愈史郎に、珠世さんが声を荒げ、僅かに怒る。

……やっぱり、俺達のせいかな。

「彌豆子、二人を頼む」

「……うん」

俺は部屋を飛び出し、外にいるであろう鬼のもとへ行く。

「……ほう。そちらから出てくるとは都合がいい。耳に花札のような耳飾りを付けた鬼狩り……お前で間違いないな」

そういった数珠を首からぶら下げる鬼は、俺に向かって両手を構える。

「……というか、もしかして俺、鬼舞辻にマークされてるのか？ だったら都合だ。アイツはよっぽどのことがない限り配下を使うから、戦えば戦うほど強い鬼が現れる。」

そうすれば、珠世さんの条件も達成できる。正直、俺は狙われないんじゃないかと思っただが、この辺りも上手くいって何よりだ。

「あぐツッ!!」

突如、俺の体が不自然に飛び、建物に叩きつけられる。

背中から来る凄まじい衝撃に、俺は肺の中の空気をすべて吐き出して過呼吸に陥る。

だが、こんなものでは終わらなかった。

「ほれほれどうした？ あのお方に名指しで始末すると言われるから、どれほどのものと思っただが、よもやこの程度終わることはないよな？」

地面。壁。上空。様々な場所に空が勝手に飛ばされる。まるで何かに引っ張られるかのようにだ。今のところは向こうも手加減しているから、致命傷は負っていない。だが、このままじゃ、本当にまずい。

アイツは多分、矢印を使う鬼だ。原作にもいたのを覚えている。名前前は確か……矢琶羽だ。矢印を使ってベクトル操作を行う敵……序盤に出ていい奴じゃないだろ絶対。

……にしても、矢印が見えないぞホント……!! 何処からどんな方向に、どんな向きで攻撃が来るか分からないから、回避しようがない。

これ、初見じゃ柱でも苦戦するんじゃないか？

(くそっ……、どうすれば……!)

「おい！ 何やってるお前！ 矢印を見る！ ……つたく」

いきなり、後ろから声を掛けた愈史郎が、俺に向かつて紙のようなものを投げつける。その紙が俺の額に張り付くと、あちこちから迫る矢印を捉えることが出来た。

俺は右から迫ってくる矢印を回避しつつ、愈史郎に礼を言う。

「助かった！ 迷惑かけた分の借りは返す！」

「……フン。御託はいいから、さっさとその鬼を切れ！」

「ああ！」

俺は矢琶羽に向き直り、刀を構える。それに対し矢琶羽は再び大量の矢印を放ってくる。俺はそれを躲し、一気に懐に入り込む。

こいつのベクトル操作は、見えないから厄介だったが、見ればこつちのものだ。触っても無駄など、他にも情報はこちらにある以上、負ける理由はない。

……そう、思っていた。

「儂の傍に寄るな！」

「な——ッ!!」

刀を振るった瞬間、自分のいた場所が、文字通り後ろにスライドし、矢琶羽の目の前で振り下ろされる。

しまった。死角からも矢印を飛ばせるのか。情報で勝っていると言ったが、よく考えれば名前も忘れかけるほどの臃げな記憶じゃ無理があった。

しかも、ベクトル操作ともなればそんな簡単に行くはずもない。

「くっ！」

更に横合いから飛んでくる矢印を躲すが、そつちに気を取られ腕に巻き付く矢印に気づかなかった。

巻き付かれた右腕が、凄まじい力でねじれていく。

「すべて儂の思う方向じゃ！ 腕がねじ切れるぞ！」

「チッ！」

俺は舌打ちしながらその場で跳躍し、矢印の方向に回転する。すると、矢印が唐突に消失した。

この矢印は、役割を終えると消滅するというのが弱点だ。こういう

攻撃をされても、ずっと回り続けなければいけない訳じゃないから、幾分かやりやすい。

だが、実際どうする？ アイツの矢印は結構早い。目に見える矢印を躲すのは問題ないが、矢印に気配を感じないから、死角からの矢印を回避できない。

その上、矢印自体は俺に当たるまで消えないし、触れたら矢印の方向に飛ばされる。

(……横水車。これしかない！)

水の呼吸【式ノ型・改 横水車】。原作炭治郎が編み出した、水車の横バージョン。

原作ではこれを使い、矢琶羽を倒していた。ならば、これを使うしかないだろう。

(……あれ？ この技、どうやって使うんだっけ？)

……終わった。えっ待って。確か【ねじれ渦】と【水車】……あともう一個……、なんだっけ？

横水車は無理そうだな。……他を考えるか。

(そうだ。矢印を出ないように、あの手の目玉を潰せばいいんだ！)

矢琶羽の手には、矢印のマークがついた目玉がある。それが彼の血鬼術の源。ならば、それを切ってしまうえば、矢印を使えないはず！

なら、アイツの手を切るにはどうすればいい？ 俺はそれを探るために、奴の手を見るが……。

(キモイー。何だあの目？ 原作では気にならなかったが、実際に見るとリアルで気持ち悪い！)

そんな感想は要らないと分かっているのに、どうしても思ってしまう。

そして、その隙が仇となった。

「ガッ——ッ！」

矢印……それも、今までよりも一際強い矢印に引つ張られる。これをそのまま食らえば、体がグチャグチャだ。何とか技で受け身を取らないと。

【式ノ型 水面斬り】ッ！」

背後に迫る壁に対し、技を使って威力を殺す。だが、完全には消しきれず、僅かに体に衝撃が来た。

クソッ、こんなに強かったのか矢琶羽は。正直、十二鬼月じゃないと侮っていた。それに、朱紗丸を倒したこともあって己の力を過信していた。

俺は十分強いと思っていたが、向こうからすれば全然そんなことはなかった。事実、俺は結構追い詰められている。矢印が見えれば勝てると思ったのに、状況がまるで変わっていない。

「くたばれ！ 汚らしい小僧めが！」

矢琶羽が再び矢印を放った。俺はそれを回避しようとするが、ダメージで足が纏れて倒れこんでしまった。

俺は目の前に迫る矢印に対し、目を閉じて身を固くすることしかできず――

「危ない！」

そんな俺を、誰かが抱きかかえていった。

目を開けると、目付きが鋭く、鬨気を見せる禰豆子がいた。

「禰豆、子……？」

「私も戦う！」

禰豆子は俺を下ろすと、矢琶羽に対し拳を構える。

……ああ、そつか。俺は、一人じゃないもんな。

「……すまない。頼むぞ、禰豆子！」

俺は立ち上がり、刀を構える。いつもよりも体が軽い。誰かと一緒に戦うのは、こんなにも心強いのか。

二人で同時に駆けだし、左右から挟むように攻め込む。禰豆子の額には、俺と同じ紙が張り付いていたから、矢印を捉えることはできるだろう。

「チッ、何故鬼が鬼狩りと……近寄るな汚らわしい！」

再び大量の矢印を放つ矢琶羽。だが、俺たち二人に放つ分、一人一人に向けられる矢印の量が少ない。これなら十分躲せる。

矢印を躲している間に禰豆子のほうを見るが、向こうも問題なく回避出来ていた。

「はああああ——っ！」

「ガハッ!! き、貴様——！」

彌豆子のパンチが鳩尾に入り、怯む矢琶羽。そして、彼女に気を取られているうちに、俺が一気に勝負を決めるために技を繰り出した。

(全集中……水の呼吸【壺ノ型 水面斬り】 ツ!!)

腕を十字に、薙ぎ払うように刃を振るうと、矢琶羽の頸が一気に刎ね飛んだ。よし、何とか倒した！

だが、油断してはならない。原作ではここから相打ちに持ち込もうと血鬼術を使ってくる。俺は慎重に、矢琶羽の手の目玉を潰した。

「おの、れ……おのれ、おのれおのれおのれツツ!!!! お前の頸さえ持ち帰れば、あの御方に認めていただけたのに!! おのれええええええええええツツツ!!!!!!」

断末魔を上げ、恨み節を俺に吐きつけながら、矢琶羽は灰となって消える。

その寸前、矢琶羽の体に小さなナイフのようなものが刺さり、彼の血を吸い取った。

血を吸い取られたことにも気づかない矢琶羽は、そのまま消えていき、地面には血を吸い取ったナイフがポツンと落ちていた。

珠世さんが、そのナイフを手に取り、呟く。

「この血が治療薬を作るための、手掛かりになるとよいのですが……」

炭治郎さん、間もなく夜が明けます。一度、屋敷の中へ」

「……はこ」

俺と彌豆子は珠世さんに連れられ、屋敷の中へ移動する。

「一つ、お話が。……私達は、この土地を去ります。鬼舞辻に近付き過ぎました。早く身を隠さなければ危険な状況です」

愈史郎の血鬼術が破られたからか。……俺のせいだ。

思わず俯く俺に、珠世さんが優しく諭す。

「貴方のせいではありません。気にしないでください。……炭治郎さん、彌豆子さんは私達がお預かりしましょうか？」

「えっ?」

珠世さんの提案に、俺ではなく隣にいた愈史郎が驚愕し、こつちを

睨んでいる。絶対にやめると、目が訴えている。

……彼女に預ける方が禰豆子が安全なのは間違いないだろう。

禰豆子がじつとこちらを見ている。……俺の判断に任せるってことか。

「……提案は本当にありがとうございます。けど……うん。やっぱり、俺は禰豆子と離れたくない。……一緒にいたいんです」

嘘偽りない、俺の気持ちを伝える。別にシスコンを拗らせたわけじゃない。ただ、今は傍にいて欲しい。いつかいなくなると分かっているけど、それでも、今だけは……。

俺の返答に、珠世さんはただ、そうですかと言って頷く。

「では、武運長久を祈ります」

「じゃあな！ 俺達は痕跡を消してから行く。お前らはさっさと行け………気を付けろよ」

「！……はい！ 行くぞ禰豆子！」

「うん！」

俺の呼びかけに、禰豆子は笑顔で答える。

そして、いつもの箱を背負い、禰豆子を入れて出発した。

「カー！」

すると、すぐさま鎧鴉が飛んできて、次の指令を伝えに来た。

「南南東！ 南南東！！ 南南東！！ 次ノ場所ハ南南東！！」

「相変わらずブラック！！！！」

俺一応怪我してるんだけど、この仕事にはいつ休みが入るんでしょうか？

……次辺りに休みが入ることを信じながら、俺は南南東へと向かった。

再会

「997、998、999……、1000！ ……ふう、とりあえず今日の筋トレ終わりっつと」

彌豆子が入った箱を背負いながらの腕立て伏せは結構きつい分、やりがいがあるな。その上腕立てしながら前進するのだから余計負荷がかかっている。その上全集中の呼吸・常中もやってるしな！ ……まあ、そのせいで到着に凄い時間かかって鋳鴉に怒られたんだが。つていうか、鍛錬のせいで少しお腹減ってきたな。

「……ん？ なんか聞こえる——」

「頼むよーっ！！ 頼む頼む頼むツツツ！ 結婚してくれーっ！！
！ いつ死ぬかわからないんだ俺は！ だから結婚してほしいというわけで！！ 頼むよオオオオオ——ツツ！」

俺が叫び声の方に視線を向けると、青い着物の女性に縋りついて、泣き喚きながら求婚するという、男としてのプライドをかなぐり捨てたような人物がいた。

確認しなくても分かる。善逸だ。

「ちゅん！ ちゅんちゅん！」

俺が善逸の所業に呆れていると、俺の手元に雀が飛んできた。

なにやら鳴いているが、生憎俺は日本語以外は受け付けないから分からない。……まあ、言いたいことは何となく分かるけど。

「頼むよ！ 俺には君しか！ 君しかいないんだアアア——ツツ！！」

「じゃあ俺と一緒に行ってやるからその人から離れる善逸。迷惑してるだろ？」

「……へっ？ っ、この声は……」

俺が善逸のもとまで行って声を掛けると、こちらに気づいた善逸が今度は俺に縋りついてきた。

「うわああああああ——ツツ！ 炭治郎オオオオ！！ もう死ぬかと思つたよオオオオ——ツツ！」

「生きてるからいいじゃないか……すみません。本当にすみません」

俺は巻き込まれていた女性に善逸に代わって謝罪し、退散してもら
う。

「全く、雀を困らせるなよ。あと、そうやって恥をさらすのもやめてく
れ」

「恥は言い過ぎだろ?! あの娘は俺に優しくしてくれたから、俺のこ
とが好きに違いなんだ!」

「妄想と現実の区別をつける訓練から始めようか善逸」

「酷すぎでしょ?!」

全く、相変わらずうるさいな。頭のネジちゃんと足りてるのか?

「あ! 今絶対俺に向かって失礼なこと考えただろ?! 音で分かるも
ん!」

「ソ、ソソナコトナイヨー」

「棒読み!! 少しは本心隠す努力して傷つくから!」

すると、泣き叫んでいた善逸が俺の背負う箱を見て問いかけてき
た。

「あれ? その箱に入ってるのつてもしかして……」

「ん? ああ、そうだよ。前に話した……妹だ」

「へえ……ねえ、一目でいいから——」

「駄目だ」

「……ああ、そっか。今は日中だからね。じゃあ夜になったら——」

「駄目だ」

「ナンデ?!」

当たり前だ。ケダモノに妹はやらん! 俺はぜんねずなんて認め

ない! (血涙)

ぐうぐ。

……突如、腹の虫の音がした。

「……善逸?」

「叫んでたら腹減ってきた……」

「はあ……ほら、これ上げるから」

俺は昼飯用を持ってきていたおにぎりを善逸に渡す。

「あ……、ありがとう。……炭治郎は食わないのか?」

味なんだけど……まあ本人自覚ないし伝わらないのは無理もないか。
そうこうしていると、木々に囲まれた大きな屋敷を見つけた。中か
らは鬼の気配をビシバシと感じる。

「今までで一番強い鬼の気配だな」

「えっ、炭治郎気配とか分かるの？　　っていうか、それよりなんか音し
ない？」

「音？　いや、全然聞こえないけど……ん？」

善逸が耳を澄ましているが、俺には全く聞こえない。……そういえ
ば、善逸は耳が良いんだっけ？

そう思っていると、背後から子供の気配を感じた。振り返ってみる
と、そこには怯えた表情でこちらを見つめる少年少女がいた。

「君達、こんな所で何してるんだ？」

「ツッ！」

あ、相当怖がつてるな。

「うーん……ま、いつか。善逸、中に入るぞ」

「え、嘘でしょ？　この中鬼がいるんでしょ？　嫌だよ」

いやお前鬼殺隊だろうが。

内心ツツコムが、善逸が怖がりなのは今に始まったことではないの
で、無理やり引きずって入ろうとする。

すると、

「ま、待ってー！」

「ん？」

「そ、その中に入るの……？」

少年少女……恐らく兄妹であろう二人の、お兄ちゃんの方が、半泣
きで俺達に声を掛けてきた。

「まあそうだけど……ここは二人の家なのか？」

「ち、違う！　違う……ここは……ば、バケモノの家なんだ……だから
危ないよ！　夜道を歩いてたら、お兄ちゃんもバケモノに連れて行か
れて……！　俺達には目もくれずに……！」

「そっか……でも大丈夫」

「……えっ？」

俺は二人を安心させるように笑い――

「俺たちは鬼殺隊……まあ、君たちが見たような化け物をやつつけるのが仕事なんだ。だからとつても強い。心配はいらないよ。君たちのお兄さんも俺たちが連れ戻すから、ね？」

「え、もしかしてその俺たちの中に俺も入ってる？ 嫌だよ俺弱いし」

「あの珍妙なタンポポの言うことは無視してね」

「珍妙なタンポポ!!」

すると、先ほどまで半泣きだった二人がアハハと笑い出す。そんなに面白かったのか？

俺は善逸と見つめ合って首を傾げる。

「つていうか、さつきから……鼓つづみの音が聞こえるんだけど……」

「鼓ねえ……そう言われても……——ツ!!」

善逸が再び屋敷を見上げてそう言うので、俺も振り向くと、ポン、という音が聞こえた。

そして、人の気配を屋敷の二階から感じ取った。

俺はそれと同時に屋敷に走ると、二階の襖が開き、中から血塗れの男性が飛び出してきた。

それを見た善逸が絶叫を上げ、俺はその男性を助けるために動く。

「ギヤアアアア——ツ!!」

「危ない！」

屋敷の壁を蹴り、空中に飛び上がって男性を抱きかかえて、地面の土を滑って削りながら着地する。

男性の顔色は悪く、体の至る所から出血している。明らかに重傷だが、致命傷になるような傷は見た感じ確認できない。

「善逸！ 何か敷くものはないか!! 寝かせるにしても、傷口に地面の雑菌を触れさせたくない！」

「……え、ええ!! そ、そんな急に……と、とりあえずこれで……」

善逸が羽織っていた黄色い羽織を脱いで、地面に敷いてくれる。俺はその上に男性を寝かせ、懐から前に鱗滝さんに貰った傷薬と、念のために買っておいた包帯を取り出す。

大丈夫だ。手当てをすればまだ助かる。この人は助けられる！

俺は手遅れにならないよう、男性の傷の深いところから薬を塗り、包帯を巻いて止血をする。どうやら痛みが強すぎて気絶してるみたいだな。

すると、俺の治療するところを見ながら、善逸が問いかけてきた。「随分手際がいいけど、慣れてるのか？」

「慣れてるってわけじゃないけど……姉さんによく治してもらったから」

「……あれ？ 炭治郎ってお姉さんいるの？」

あ、しまった。つい前世の姉のことまで話してしまった……。まあ、別に大丈夫か。

「まあ、うん……そんなところ……よし、応急処置は完了だ。俺は医者じゃないから詳しくは分からないし……善逸、頼めるか？」

「この人を連れて医者のもとに行けってこと？ ……それは別にいいけど……この人って、あの二人の……」

俺たちは二人に視線を向けるが、二人は突然現れた死体っぽい見た目の男性に恐怖を抱いて涙を流しながら、無言で首を横に振った。

どうやら、この人は二人のお兄さんじゃないみたいだな。

「よし。二人とも、危ないからここに居てくれ。大丈夫だ。バケモノは日の下にはやってこれないから、太陽が出てる間は安心してくれ。もし太陽が沈むまでに俺が戻ってこなかったら、迷わず家に帰るんだ。いいな？」

「う、うん……」

俺の注意に二人が頷く。

よし、次だ。

「善逸、この人の生死はお前に掛かってる。頼むぞ」

「う、うう……わ、分かったよお……鬼と戦わないでいいなら俺も頑張るけど……炭治郎はやっぱり……？」

「……あの二人のお兄さんを助けないといけないからな。それに自分、お兄さんだけじゃないと思うんだ。捕まってるのは」

既に二人捕まっている人がいる以上、あと何人かの人が捕まってると考えた方がいい。その人たちの為にも、急いで鬼を倒さないと。

「……あ、そうだ、二人とも。もしもの時のために、この箱を置いていく。この中には俺の妹がいるから、何かあつたら二人を守ってくれ。でも、絶対に太陽の下で開けたらダメだぞ?」

「妹……?」

「ああ。とつても強いんだ。な?」

『……ん? なに、どうしたのお兄ちゃん?』

俺は彌豆子の入っている箱を木陰に置き、彌豆子に話しかける。向こうもどうやら今起きたようで、グツと伸びをする雰囲気を感じた。

そういえば、彌豆子は二年間寝てたから原作知識があるのか。じゃあ、今何が起きてるのかもわかるのかな?

まあ、そんなことは置いといてだ。

「じゃ、行こうか善逸」

「な、なあ! ……死ぬなよ、炭治郎」

「! ……当たり前だ。善逸も頼んだぞ」

善逸は男性を抱え、医者のもとに。俺は鬼を倒す為に……それぞれ
の目的の為に歩みだした。

鬼屋敷と猪、そしてタンポポ

「……よし、とりあえずは誰もいないな。お邪魔しまーす」

能天気にもふるまいつつ、欠片も警戒を怠らないで屋敷に入る炭治郎。

この鬼は、今までよりも気配が濃いのが分かる。なにしろ、根城にすら気配がこびり付くのだ。

襖を開き、鬼を探しながら少しづつ家の構造を把握し、迷わないよう気を付ける。

「……さっきの二人は……よし、追ってきてはいないな。禰豆子が相手をしてるのか？」

禰豆子は普通とは違い、普通に人として他人と接することが出来る上に、鬼の本能を押さえつける事にも人一倍……いや、鬼一倍長けている。

彼らを喰らうということはまずないし、むしろ守ってくれるだろう。

そんな優しい彼女でも、鬼であるというだけで抹殺対象になる。それ故、一刻も早く人間に戻してやらねばならない。

ここに居る鬼が鬼舞辻無惨に近い鬼なら、以前出会った珠世という鬼医者が、鬼を人間に戻す薬を作るための手助けになるはず。

そう思い、炭治郎は新たに襖を開けると、

「……は？」

その先には、真つ暗な部屋の中、猪の被り物をし、腰に刃毀れの酷い日輪刀を携えた男性がいた。

上半身は何も着ていない。文字通り半裸である。腰には鹿の毛皮と鬼殺隊の隊服のズボン。どう見ても普通の装いではなかった。

「ん？」

すると、男性の方も炭治郎の存在に気づいたのか、彼の方を振り向く。

「……なんだテメエ？」

「それはこっちの……セリフって通じるかな？ ……まあいい。俺は

竈門炭治郎だ！」

「かまぼこ権八郎？」

「いや誰だ!？」

「お前だろ。何言ってるんだ頭おかしいのか？」

「違うわ！ 俺の名前は竈門炭治郎だ！ 間違えるな！ それだと食べ物みたいで、ちょっと美味しそうとか思われるだろうが！」

「そうか悪かったな。代わりに俺様の名前を教えてやるよ。俺は嘴平伊之助だ！」

「そうか、いい名前だな！」

「そうだろう！ 何しろ俺の名前だからな！」

最初の文字にそが三回続く会話を繰り返しながらさりげなく自己紹介をする二人。

「君はどうしてここに？」

「三日くらい前に鬼の気配を感じて入った。だが、どういう訳か部屋が急に変わりやがるせいで見つけらんねえんだ」

「それはつまり三日もここに居たということか!! あと、それは恐らく鬼の血鬼術だな！」

「血鬼術？」

「ああ。鬼は強くなると異能の力を扱うんだ。それを血鬼術という」

「つまり、この屋敷の鬼は部屋を入れ替える力を使うってことか？」

「推測だが恐らくそうだろう。……なあ、君も鬼殺隊だろ？ 一緒に鬼を探さないか？」

「断る！」

炭治郎の提案を考える間もなく拒否する伊之助。

「ええ!! それはどうして……」

「この屋敷の鬼を殺すのは俺だ！ お前に横取りされてたまるか！ じゃあな！」

「うわっ!!」

短く別れを言い、伊之助はすごい勢いで部屋を飛び出していく。

それをただ呆然と見つめていた炭治郎だが、突如鼓の音が響き、部屋が切り替わった。

目まぐるしく変化していく部屋に、炭治郎が警戒心を強めていると、今までより断然広い部屋で変化が止まった。

部屋は天井に明かりが六つぶら下がっており、二階分の高さがあった。

そして、炭治郎は出入り口の方から、強い鬼の気配を感じ取り、腰の刀に手を添えながらそちらを振り向く。

「……、」

そこには、全身に鼓が埋め込まれ、赤い瞳をした灰色の肌の鬼がいた。

無言で佇むその姿は、今まで対峙したどの鬼よりも強い威圧感を放っており、炭治郎は無意識に冷や汗を流す。

しかし、逃げるつもりはない。己の弱さは既に痛感している。慢心は絶対にしない。

その決意を胸に、鬼へと声を掛けた。

「お前！ この屋敷の主だな！ 俺は竈門炭治郎。今からお前を斬る！」

「……、」

炭治郎の言葉に答えるどころか、欠片も反応を示さない鼓の鬼。

炭治郎はそれを、戦闘で言葉を交わすつもりはないんだなと勝手に解釈し、水の呼吸を使って勝負を決めに行く。

(水の呼吸【壱ノ型 水面——?!）

水を纏った刃が、横一線と振るわれ、鬼の頸元へと到達する瞬間、部屋が回転し、炭治郎は重力に従い落下する。

そのせいで体勢が崩れて技が不発になってしまったが、この特殊な血鬼術を見て、炭治郎は思い出した。この鬼の正体を。

(……そうだ。この鬼は、確か響凱きやうがい！ 元十二鬼月で、確か『稀血』の子供を狙ってる……)

だが、相手の情報が分かったとしても油断してはならない。矢琶羽の時にそれで痛い目を見たのを忘れてはならない。

さらに、彼のことを思い出すと同時に、炭治郎は伊之助の事も思い出した……が、今は関係ないのでいったん頭の隅に追いやった。

そして再び、炭治郎から見て壁に張り付いてるような立ち方をする響凱に対し、刀を構える。

「あいつらさえ……あいつらさえ邪魔しなければ……!」

そこで初めて言葉を発した響凱。そして炭治郎は、この部屋に向かつてくる新たな気配を感じ取った。

鬼のものではない。ならば、必然的に該当する者は一人。

「ハハハハハ——ツツ! 猪突猛進! 猪突猛進ツ!!」

凄まじい叫びとともに、部屋の襖を破って侵入してくる伊之助。

伊之助は刀を抜いて着地するが、直後に炭治郎の存在に気づき、憤りを見せる。

「おい! なんでテメエがここに居る権八郎!」

「だから俺は……もういい! それより、アイツがこの屋敷の主だ!」

「知っている! そして、それを破るのは俺だ!」

そういつて伊之助が真正面から響凱に向かって突進する。しかし、響凱は再び鼓を叩くことで部屋を回転させ、伊之助の態勢を崩させて攻撃を失敗させる。

「ヒヤハハハハ! 部屋がぐるぐる回ったぞ! 面白いぜ! 面白いぜえーっツ!」

しかし、伊之助はそれを意にも介さず、むしろ楽しんですらいる。

そんな伊之助に、炭治郎が忠告する。

「真正面から行ってもダメだ! 作戦を練ろう!」

「あア!? 俺に指図してんじゃねえ!」

伊之助が苛立った様子を隠そうともせず、手に握る刀で炭治郎に切りかかった。

突然味方だと思っていた人物に切りかかれ動揺するが、なんとか受け止める炭治郎。

「へえ……俺の攻撃を止めるとは、少しは出来るみてえだな! オラツ!」

伊之助から振るわれる連撃を、なんとか耐えきる炭治郎。

「ちよ、よせ! お前も鬼殺隊だろ! 鬼を無視するのか!」

「うるせえ知るかア!」

「虫め…消えろ…死ね！」

炭治郎と伊之助が言い合っていると、響凱が業を煮やしたのか、鼓の一つを叩く。

ポン、という音ともに、嫌な予感がした炭治郎と伊之助がその場を飛び離れる。

すると、先ほどまで二人のいた場所がまるで爪に引っかかれたかのように裂けた。もし、まともに食らっていれば即死だろう。

再びポン、ポン、と。鼓の叩く音が響く。それを拍子に部屋が回転するが、その動きには規則性があることをすでに炭治郎は見抜いている。

(出来れば伊之助には協力してほしい…けど)

チラリ、と。伊之助のほうを見るが、次々部屋が回転することに興奮していて、完全に炭治郎の存在を意識の外に追いやっているのが分かる。

こんな状態では作戦を練るなど不可能だろうし、そもそも伊之助がそれを聞き入れるとは思えない。

更によれば、まだあのお兄さんを見つけていない。とにかくやることが多いので、今更だが善逸に来て欲しいと強く思った炭治郎だった。

「ハハハハハ——ッ！ さア、屍を晒して俺がより強くなるための、踏み台となれエー！」

そういつて、伊之助が響凱に突貫した…その瞬間、

「うおッ!! くそ、またこれか!」

鼓の音が鳴り、部屋が切り替わった。響凱の姿は消え、部屋には伊之助と炭治郎だけが残る。

だが、響凱は鼓に手を触れてはいなかった。それはつまり、部屋の切り替えは彼の意志ではないということ。

どうやら、部屋を切り替える鼓は響凱以外の誰かが持っているらしい。

「チッ！」

「あ、おい！」

伊之助は再び鬼を探す為に部屋を出ていった。それを引き留めようかと思つたが、ぶつちやけると戦いになるのが面倒なので、放つておくことにした。

三日間この屋敷にいたというなら、ちよつとやそつとではやられないだろうし、とりあえず最優先はあの二人のお兄さんを見つけることだ。

だが、そこで問題が発生した。

「あれ？ お兄さんって……どんな姿なんだ？」

そう。炭治郎はお兄さんの特徴を、何一つとして聞いていなかったのだ。

それは人探しにおいては致命的過ぎる。なので、炭治郎は予定を変更し、お兄さんを探しつつ響凱を撃破することにした。

この屋敷に巣くう鬼を倒せば、必然的にお兄さんの安全は確保されるからだ。

「よし、行くか」

そうして、炭治郎は部屋を出てお兄さんと響凱を探すために走つた。

一方そのころ、屋敷の外では。

「……大丈夫かな、炭治郎さん」

『大丈夫大丈夫。お兄ちゃん意外と強いから』

「い、意外となんだ……」

屋敷の外で待ち続ける少年少女……正一とてる子は、箱の中にいる

炭治郎の妹である禰豆子と話しをしていた。

最初は禰豆子も鬼であると知って恐れた二人だが、禰豆子が怖くない鬼だと分かると安心しきって、すっかり打ち解けていた。

「ハア……ハア……あれ？ どうしたの二人とも」

「あ、善逸さん」

すると、怪我を負った男性を医者のもとまで運んでいた善逸が荒く息を吐きながら戻ってきた。

汗をびっしりと掻き、相当急いで走っていたことは、その額に掻く汗や竹まいから容易に想像がついた。

「えつと……あの人は？」

「だ、大丈夫だって。応急処置がすっかり施されていたから命に別状はないってさ……ハア、ハア」

「……だ、大丈夫ですか？」

「え、へ、平気平気！ これくらい爺ちゃん修行に比べたらなんてことないから！」

そういつて軽快に笑いかける善逸。

「えつと、この中にいるのが炭治郎の妹さん？ 初めまして、俺は我妻善逸です」

『……どうも、竈門禰豆子です』

「おお……！ 凄い、鬼の音がするのにちゃんと話が出る！ しかも女の子！ もう最高じゃん！」

『……えつと、善逸さんはどうしてここに？ 屋敷の中にはいかなんですか？』

「へ？ いや、俺が入っても死ぬだけだし、炭治郎の足を引っ張るだけだしね。うんうん」

そういつて腕を組んで頷き、自分を納得させるように言う善逸に、禰豆子がいった。

『私、善逸さんのカッコいいところみたい……！』

「待ってる炭治郎今行くぞオオオオオ——ツツ！」

先程までの怖がり様が嘘のように元氣いっぱい屋敷へと突入していく善逸。

その後ろ姿を見届けながら、正一とてる子は彌豆子のほうを見る。
『あ、私寝るから……猪の被り物してる男の人来たら起こして。……
スヤア』

「……え、ホントに寝たの？」

マイペースな彌豆子に振り回された二人であった。

鬼屋敷の戦い

「駄目だ、見つからない……どこにいるんだお兄さんは……？」

散々屋敷の中を歩き回る炭治郎だったが、一向に探し人であるお兄さんを見つけないことが出来ずにいた。

ただでさえ広い屋敷なのに、途中で鼓の音とともに構造が変わっていくせいで、全く進展していなかったのだ。

一つずつ扉を開け、中をじっくりと確認するが、人つ子一人見当たらない。

「……もしお兄さんが鬼に襲われて死んでいたら、あの子たちに示しが見つからない。早く見つけないと——!?!」

廊下の突き当りを曲がり、先へ進もうとした時、手のようなものが出てきて炭治郎の進路を塞ぐ。

そのまま突っ込めば頭を握りつぶされていたかも知れない。なにしろ、その手の持ち主は——

「避けたな。随分生きのいい人間だ。おめーの肉は抉り甲斐がありそうだ」

鬼だった。

体は凄い肥満で、肉付きが凄い。筋肉というよりは脂肪の塊に近い鬼だった。

「悪いが、人を探してるんだ!」

「ほー、それは柿色の着物を着た稀血の餓鬼か？ 俺も探してるんだよ」

柿色……この屋敷で生きている子供なら、もしかするとその子がお兄さんかもしれない。

そう思い、お兄さんの情報が得られて内心ほっとしつつ、鬼への警戒を高めてる炭治郎。

刀を抜き、水の呼吸の構えを取る。

「はあー!」

「正面から向かってくるとはいい度胸——」

「水の呼吸【肆ノ型 打ち潮】 ツ!」

「ちよ、待ちやがれ小僧！」

「いやいやいや無理無理無理ツ！ これは無理だつて！ 来ないで来ないでやめてえええええーツ！」

善逸は近くの襖をあけ、頭から飛び込んだ。

「ひっ!!」

「……ん？ 君は……」

その部屋には、足に怪我を負った柿色の着物を着た少年が、鼓を持って座り込んでいた。

彼は善逸……より正確に言えば、彼の背後に佇む鬼を見て怯えていた。

「へへっ、こりやついてるな。まさか例の稀血の餓鬼を見つけちゃうとは」

「いぎやあああああああーツ！ 追つて来てたあああああああああーツ!!」

涙で顔をぐちゃぐちゃにしながら、柿色の少年の近くまで下がる善逸。

「え、ちよ、なんでこっちに!!」

「ごめんね君！ 俺なんかのせいで危ない目に遭わせちゃって！ 出来れば君だけでも逃げてお願い！ 俺はもう恐怖が八割足に来て無理なんだ！」

「そ、そんなこと出来ないですよ！」

え、滅茶苦茶いい子じゃん、と善逸は思った。

見ず知らずの彼を置いて逃げる事などできないと、怪我を負って恐怖で涙を流しながら言う少年の姿は、善逸にはとても尊いものを感じた。

せめて彼だけでも守らないと、可哀そうだ。そう思い、なんとか立ち上がって刀を抜こうとするが、

「へへへっ……お前たちの脳髓を耳からじゅるりと啜すすってやるぞ！」

「あ、無理」

瞬間、まるで眠るように気絶する善逸。

「え、ちよつと!! 危ないですつて、早く逃げないと！」

「なんだそいつ……？」

敵の前で眠る善逸に鬼が疑念を持つが、柿色の着物の少年の血の匂いに、その疑念を頭の隅に追いやった。

「あ、あああ……！」

柿色の着物の少年が絶望の表情で鬼を見て、そんな彼を見た鬼は下種な笑みを浮かべて舌を変えろの様に伸ばした。

少年は思わず目を瞑り、いずれ襲ってくるであろう痛みを備えた。

鬼の舌が少年と善逸の二人の頭を真つ二つにしようとする……その瞬間――

「……えっ？」

いつまで経っても襲ってこない痛み疑問を抱き、少年が目を開けると、顔を俯かせた状態で立つ善逸がいた。

「な、なんだ……？」

舌を切り落とされた鬼が、困惑の声を上げる。

いつの間にか畳の上に落ちている舌。刀を持って起き上がった善逸。それらを確認し、漸く自分が助かったことを自覚した少年。すると、そんな彼に、仕草で下がっているよう伝える善逸。無言で鬼に立ち向かうその姿は、先ほどまでの情けない姿とはまるで別人のように頼りがいがあった。

「雷の呼吸……【壱ノ型】――」

腰を落とし、刀を納刀した状態で対峙する。

そして、ほんの刹那の瞬間、善逸の刀が抜かれた。

「――霹靂一閃」

いつの間にか、善逸は鬼の背後にいた。そこまでの間に、電気が迸っているのが見えたが、少年は気にもならなかった。

チャキン、と。刀を鞘に納める音が部屋に響く。その瞬間、鬼の頸が飛び、傷口から血が噴水の様に噴き出す。

鬼は自らがなぜ殺されたのかも理解できないまま、絶命した。

「……嘘……だろ」

「うう……うん？ あれ？ 鬼は……あ」

体が灰となって消えたことで、鬼はこの世から消えた。

それと同時に、眠っていた善逸は目を覚めますが、いつの間にかいなくなっている鬼に戸惑いを見せた。

「もしかして……君が？」

「えっ」

瞬間、嬉し涙を流しながら少年に縋りつく善逸。

「うおおおおおッ！ もうそんなに強いなら最初に言つてよおおおおおッ！ ありがとうおおおッ！ おお——ッ！」

少年は、目の前で何も知らないと言った感じで縋りついてくる善逸を見て、ただただ困惑していた。

そのころ、伊之助は。

「ハハハッ！ ようやく見つけたぜ、屋敷の主！」

「……、」

散々走り回った中、いきなり変わった部屋で、響凱と二人つきりになっっていた。

高笑いを上げながら、二本の日輪刀を構えて、響凱へと殺気を飛ばす伊之助。

「……忌々しい……」

ポン、と。

響凱が鼓を叩くと、部屋が回転する。しかし、既に伊之助はどの鼓を叩けば部屋が回転するのか、完璧に記憶していた。

唯一分からないのが部屋の切り替えだが、それは次の時に見極めればいい。そう思い、響凱へと突貫していく。

「行くぜ！ 獣けだものの呼吸【壺ノ牙 穿ち抜き】ッ！」

「チッ！ 消えろ虫けら！ 超速鼓打ち！」

伊之助が全力で二刀を使って突きを放つ。

響凱は回転が把握されたと分かるや否や、目に見えないスピードで鼓を何度も叩き、部屋を縦横無尽に回転させた。

伊之助の刃は響凱には届かず、彼は回転する部屋で次々と方向が変わる重力に振り回される。

「うはははははッ！ すげえすげえ！ 何だこの技、凄すぎるぜ！ 見た事もねえ！ 面白れえ！」

「!? す、すごい……？」

一瞬、響凱の動きが止まった。

それに合わせ部屋の回転も止まり、伊之助が地面を蹴って加速した。

「ハハハッ！ テメエはすげえ！ だが、俺の方が凄い！ 獣の呼吸

【参ノ牙 喰い裂き】ッ！」

「ガ——!?」

間合いを詰め、交差した腕から放たれた二刀の振り抜きが、響凱の頸を跳ね飛ばした。

宙を舞う響凱の頸が地面に落ち、彼の体が灰となって崩れていく。

己の死を実感しながら、響凱は伊之助に問いかけた。

「おい、小僧……」

「ん？」

「小生の血鬼術は……凄かったか？」

一瞬、血鬼術とはなんだと思う伊之助だが、炭治郎が響凱が使う部屋を操る力だといっていたことを思い出す。

「おう！ 凄かったぜ、この俺の次にな！」

「……ふっ、小生を破ったのだから、劣るのは必然。だが、それでも次、か……それだけあれば、じゅう、ぶ……」

完全に消滅した響凱を見ながら、伊之助は思う。

（今までそんなこと聞いてくる鬼はいなかった……なんなんだ？）

響凱の頸を切った刀を見ながら考えるも、答えは出てこなかった。

「……なんだ、この感じ……？」

屋敷を走り回っていた炭治郎が、突如違和感に気づく。

今までの先の見えない迷路のような雰囲気を纏っていた屋敷から、
そう言った気配が完全に消えた。

集中すれば、屋敷から感じていた鬼の気配も感じなくなっている。
「鬼はみんなやられたのか？ 伊之助がやったのか？ それとも
……」

「ヒイイ！ なんて鼓消えたの?! もうどういいうこと?!」
すると、近くの襖から善逸の叫び声が聞こえてきた。

炭治郎は急いで声の聞こえる部屋へ入った。

「善逸！」

「うえ……? 炭治郎……?! うわあああああーっ！ 怖かつ
たよおおおおおおおーっ！」

泣きじやくりながら炭治郎に縋りつく善逸に、炭治郎は苦笑いを浮
かべる。

「なあ、善逸、そっちの子は……?」

「ああ。えっと、名前は清っていうんだ。多分だけど、あの子たちのお
兄さんだと思う」

「そっか。善逸が守ってくれてたのか。ありがとうな」

「えっ、いやいや、俺清君に守ってもらってたんだよ？ 勘違いしない
でね?」

真顔で言う善逸に、炭治郎は複雑な笑みを浮かべた。

そして、三人で出口へ向かう。清は怪我をしていたので、善逸がお
ぶさって運んでいる。

「なあ、善逸。あの男性は大丈夫なのか?」

「命に別状はないってさ。炭治郎の応急処置のおかげって言ってた
ぞ」

「……そっか」

自分の行動で人の命が救われた。そう思うと、炭治郎は自分の胸に
熱いものがこみあげてくるのを感じた。

しばらく歩いていると、遂に出入り口までやってきた。

外から伊之助の気配しないから、禰豆子が襲われている心配はなさ
そうだ。

そう思い、内心安心する炭治郎。

扉を開くと、すぐ近くで箱に向かって話をする二人を見つけた。

「あっ！ お兄ちゃん！」

「てる子！ それに正一！」

「ぶ、無事でよかったあ……！」

兄妹感動の再会だった。彼らの流す涙が悲しみの涙にならなくてよかったと、ほっと胸をなでおろす炭治郎。

すると、

「猪突猛進ッ！」

そんな叫びとともに、二階の部屋から伊之助が飛び出してきた。

集う三人の鬼殺隊士

「うわっ！ 伊之助!」

突如、二階から飛び出してきた伊之助に、炭治郎が驚きの声を上げて、それ以外の全員が怯えた視線を向ける。

「ああ？ テメエ、権八郎じゃねえか」

「あ、その声！ 五人目の合格者！ 最終選別の時に誰よりも早く入山して、誰よりも早く下山した奴だ！ せつかち野郎！」

善逸が思い出したように言う。

その言葉を聞き、伊之助も同期だったことに気づいて驚愕する炭治郎だったが、伊之助の次の行動でその思考が停止した。

「おっ、見つけたぜ。しゃあ！ 死ぬ、鬼！」

この場においてそれをさす人物は一人だけだ。

禰豆子。

伊之助は禰豆子を鬼だと見抜き攻撃しようとしている。

「……や、めろ……！ やめろ伊之助！」

「ああ!」

伊之助と籠の間に炭治郎が割り込む。

両手を広げ、これ以上先にはいかせないという意味を示している。「なにやってる権八郎！ そこ退け！」

「退かない！」

「えっ、権八郎ってなに？ まさか炭治郎のこと？」

すると、伊之助は刀を炭治郎の頸に掛ける。

「退け。テメエとそこの鬼を斬るぞ」

「退かない！ それに知らないのか？ 隊員同士でいたずらに刀を抜くのはご法度だぞ！」

「ほう……じゃあ、素手でテメエをぶっ倒して、鬼を斬る！」

そういった伊之助は、刀を放り棄て、拳を握って炭治郎に一撃を放つ。

伊之助の貫手を右手で払い、反撃の一撃を放つ炭治郎だが、伊之助

はそれを身を低くして躲し、まるで四足獣のような動きと俊敏さで迎え撃つ。

戦いが始まった以上、どちらかが倒れるまで止まらない。伊之助は彌豆子を殺すつもり満々で、炭治郎はそれを絶対に阻止したい。ならば、戦うしかないのだ。

「ハハッ！ やっぱ面白れえなお前！」

「くっ！」

伊之助が後ろから振り上げるような蹴りを放ち、それを身を引いてギリギリで躲す炭治郎だが、振り上げた足を今度は上から叩き落すように蹴り落とす。

炭治郎は両腕を交差させ、伊之助の蹴り下ろしを防ぐと同時に、自身も伊之助に足で攻撃を行う。

だが、それさえも伊之助は腕だけで飛び上がり、回避した。炭治郎の腕から足が外れ、炭治郎は交差した腕を再び伊之助に向けて構える。

「ハァー！」

気合の入った声とともに、回転しながら炭治郎に頭突きを放つ伊之助。それを前方に腕を交差させて防ぐ炭治郎。

伊之助はそこから体勢を変え、炭治郎に貫手を放つ。それをはたき落とすことで防ぐ炭治郎だったが、いい加減限界に来ていた。

(クソ、いつまでこうしていたらいいんだ!! 伊之助は姿勢が低いせいで攻撃が当てづらいし……!)

どれだけ伊之助より下を取ろうとしても、伊之助の関節の異常な柔らかさには敵わず、攻撃を受けてしまう。

このままではジリ貧……否、炭治郎の敗北は必然だった。

(何かないのか……この状況を打破する何かは!! ……そうだ、鱗滝さんの!)

かつて鍛錬で、鱗滝に何度も転ばされた記憶が蘇る。

彼の使っていた技で、伊之助を転ばせて上を取る。今考えれるのはこれだけだった。

「オラァー！」

(今だ！)

伊之助が突進してきた瞬間、記憶にある限りの鱗滝の動きを再現し、なんとか伊之助を転ばせることに成功した炭治郎。

急いで上にのしかかり、両腕両足を押さえつけて動きを封じた。

「クソツ、離せ！」

「頼む伊之助、俺の話を聞いてくれ！ 禰豆子は違うんだ！」

「知るか！ 退けクソ野郎！」

「頼む……！」

ジタバタと暴れる伊之助だが、炭治郎が四肢を押さえつけているため、動くことが出来ずにいた。

それでもなんとか抜け出そうとするが、やがて糸が切れたかのように動きを止めた。

「……ちっ、分かったよ。今回はテメエの勝ちにしてやる。どのみちこれじゃ動けねえから鬼は斬れねえしな」

「伊之助……！」

「だが！ 次は俺が勝つ！ いいか、覚えとけよ！」

炭治郎はゆっくりと伊之助の上から退き、彼を解放した。

それに合わせ、伊之助も飛び上がり、ウンと伸びをする。

なんとか伊之助を傷付けることもなく、和解出来た。その事実にはホッと胸をなでおろす炭治郎。

すると、伊之助は投げた刀を拾い上げ、何処かへ行こうとする。

「ちよ、何処に行くんだ？」

「うるせえ。新しい鬼を狩りに行くんだよ」

「待ってくれ。まだ屋敷の中に鬼に殺された人がいる。埋葬してやらないと……」

「ハア？ 生き物の死骸なんぞ埋めて何になるんだ。俺はやらねえ」

確固たる意志で炭治郎の要求を拒否する伊之助。

すると、そこへいつの間にか起きていた禰豆子が口を挟む。

『そっか。疲れたんだね。死体を運ぶのは大変だから、疲れてるんなら仕方ないね』

「ああ?! 何言ってるんだこの鬼！ ぶった斬られたいのか?!」

『いいのいいの。分かってるから。でも、死体も埋められないよ
うな人じゃ、百年経っても私には勝てないと思うけどな』

その言葉で、伊之助の怒りは頂点に昇った。

「上等だこのクソアマアツ！ 百だろーが二百だろーが埋めてや
らああああああアツ！」

怒りの叫びをあげて屋敷の中へと走り去っていく伊之助を、呆然と
見送る炭治郎達。

そして、一連の流れを見ていた善逸は呟いた。

「彌豆子ちゃんって……実は悪女？」

伊之助の協力により、死体の埋葬が手早く終了したので、速やかに
三兄妹を家に送り届ける炭治郎たち。

「駄目だー！ 駄目駄目駄目だあああああーツ！ 清君は
行っちゃだめだあああああーツ！ 俺はこれからも清君に
守ってもらうんだああああアツ！」

だが、山を下り分岐に入った後、ここからは自分たちでも帰れると
言った清に、善逸がしがみ付いて放そうとしなかった。

「清君は強いんだ！ 清君に俺は守ってもらうんだああああああ
アツ！」

「やめんかゴラア！」

「アギヤツ!!」

恐ろしく早い手刀を善逸の首筋に放つ炭治郎。

すると、いつの間にかやってきていた炭治郎の鎧鴉が、清くんの手

を出すように促した。

何事かと彼が手を出すと、体の胃酸とともに口から小包のようなものを吐き出した。

その汚さに顔を真つ青にする清。

「なんなんだそれ?」

「コレハ藤ノ花ダ! 鬼除ケニナル!」

藤の花は鬼が嫌うもの。それならば、稀血という特別な存在である清も安全を確保できるだろう。

そこで彼らは分かれ、炭治郎と善逸と伊之助は三人で山を下りていった。

「いいか!? 俺は隙を見てお前にも勝つし、お前の妹にも勝つ!」

「いや、出来れば妹には勝たないで欲しいんだが……」

「いいや勝つ!」

「もういいっての……」

炭治郎と伊之助の言い合いをうんざりして顔で聞き流す善逸。

そして、山を下りた辺りで、鏖鴉が炭治郎たちに自分についてくるように言い渡した。

彼らがそれについていくと、藤の花の家紋のついた門がある旅館の前に到着した。

「休息! 休息! 炭治郎負傷ニツキ、休息!」

「えっ、休息とかあるの? 俺、前の怪我治る前に戦わされたんだけど。まあ、戦闘に支障はなかったけど」

「……ケケケ」

「ケケケじゃねーよ」

「……こいつ食おうぜ」

「ナヌ!?」

ぼそりと呟いた伊之助に、鏖鴉が驚きの声を上げる。

すると、家紋のある門が開き、中から背の小さな老婆が現れた。

「あ、こんな夜分にすみません」

「お化けだ! お化——」

「失礼だろうがやめろ!」

老人には優しくしろと教わらなかったのか、と内心愚痴をこぼす炭治郎。

そして、頭を下げる老婆に近づいた伊之助が言った。

「なんだてめえは！」

「鬼狩り様でございますね？」

「弱っちそうだな」

「アホバカやめろ!!」

老婆の頭をつつく伊之助に、炭治郎が怒鳴る。

そして、老婆に連れられ、炭治郎たちは旅館の中へと入っていく。

「お召し物でございます」

襖を開けた先にはいつの間にか移動していた老婆が着物を用意し

ており――

「お食事でございます」

服を着替え、新たな部屋に入った先ではいつの間にか老婆が夕食を

用意しており……

「妖怪だよ炭治郎！ あのばあさん妖怪だ！ 速いもん異様に！ 妖

怪だよ妖怪ババア！」

「失礼だろうが！」

そして、三人は差し出された夕食を食べ始めたが……

「えっ、ちよつと待って！ 伊之助何その顔!!」

「ああ？ 俺の顔に文句でもあるのかコラ」

猪の被り物を脱いだ伊之助の顔は色白で、女性のような顔をしてい

た。

「あつ！ 伊之助、俺の天ぷら取るなよ！ どうせ食べるのならこつ

ちのニンジンを――」

「それ炭治郎の嫌いなモノ押し付けてるだけだよな？ ちゃんと食べ

ろよ」

こんな時だけ真面なことを言う善逸。

そして、夕食を終え、次の部屋に行くと……

「お布団でございます」

この後、再び善逸が妖怪と言ってついに炭治郎に殴られたのと言う

までもない。

「早い者勝ち！ 俺がこつちだ！」

「ん？ 別に布団はどこでもいいぞ俺は。善逸も好きなどころに――」

「違ええええええええッ！」

「フガッ!!」

奇声を上げて善逸に枕を投げつける伊之助。

そして、老婆によつて部屋に医者が連れられ、炭治郎達の診察を行つた。

「はい。全治一週間です」

「えっ」

全治一週間ほどだそうだ。

それほど重症じゃなくて、拍子抜けする炭治郎。

そして、渡された薬を飲んで早めに就寝に入る三人。

「……なあ、炭治郎。ずっと気になってたんだけどさ……」

「何がだ？」

炭治郎は善逸に禰豆子のことは話してるので、それ以外に何か聞かれるようなことがあつたか思考を巡らせる。

「いや、なんでさつきから全集中の呼吸してるんだ？」

「ああ……これは全集中の呼吸・常中っていうんだ」

「なんだそりゃ？」

伊之助も知らないもののように、炭治郎に聞いてくる。どうやら、禰豆子のことはすっかり忘れてるらしい。

「えつと、一日中全集中の呼吸をすることで身体能力の増強を図る……らしいっ」

「曖昧だな……」

「俺もまだ一日中出来るわけじゃないからな。眠りながら全集中の呼吸は出来ないし」

「眠りながらとか意味分かんないけど」

そもそも、一人でやっていると思つている時に正しい呼吸が出来るか分からないのだが、当の本人は気づいてない。

「そうだ、二人もやってみたらどうだ？」

「ええ!!」

「面白そうだな！」

数分後。

「はあ……はあ……！ 無理いいーッ！」

過呼吸になって倒れる善逸と伊之助がそこにいた。

「えっと、俺も習得には時間が掛かるし、すぐにはできないって……」

「無理！ 俺もうやんない！ おやすみ！」

「あ、あはは……」

完全に不貞腐れて眠りに入る善逸。炭治郎は伊之助はどうかと見てみるが、疲れからか善逸と同じように不貞腐れたからか、反対側を向いて眠っていた。

これ以上は起きていても仕方ないので、炭治郎も目を閉じて眠りに入った。

「……ん？ あれ、炭治郎寝ながら全集中の呼吸してない!!」

那田蜘蛛山

藤の花の家紋の旅館で一日を終えた翌日。

朝六時ほどで、炭治郎は目を覚ました。この日も日課の鍛錬をこなす。

「さて、と」

いそいそと着替え、顔を洗い歯磨き、身支度を終え、刀を持って庭に出る。

腕立て伏せ、走り込み。その他諸々の筋トレ。モブ敵の世界ではトレーニングは欠かせないのだ。

「ふう。しっかりと休んだからか、いつもより体が軽いな」

そもそも、全治一週間の怪我を放置した状態で戦闘を続けていたほうがおかしいのだ。

痛みを全く感じないわけではないし、間違いなく今までの戦闘に僅かでも違和感を覚えさせていただろう。

「ちよつと休憩……ん？」

「禰豆子ちゃああああんツ！」

一息入れようかと思ったが、善逸の奇声を聞いて部屋に戻った。

そこでは、

「結婚してええええええええええええーッ！」

「私より強い人じゃないと無理です」

「ゴフツッ!!」

禰豆子に求婚をきっぱりと断られた善逸が吐血していた。

しかしすぐさま起き上がり、部屋に戻っていた炭治郎に詰め寄った。

「俺に全集中の呼吸・常中を教えてくださいっ！」

「べ、別にいいけど……」

あまりにも必死すぎるその形相に、思わずドン引きの炭治郎。

すると、今の今まで寝ていた伊之助も起き上がり、

「おい権八郎！ 特別に、俺に教えさせてやる！」

何処までも偉そうに言う伊之助だった。

そして、それから彼らの過酷な一週間が始まった。

「ぎゃあああああああーッ！」

ある時、善逸は悲鳴を上げ……

「ぐおおおおおおおおおーッ!?!」

伊之助は叫び……

「いいから休んでください。悪化させたいんですか？」

「……はい、すみません」

自分も訓練を怠らないのはいい事だが、今は休めと、医者に圧を掛けられる炭治郎。

そんなこんなで一週間は、あつと言う間い過ぎていった。途中、善逸が禰豆子に何度かアタックするも撃沈し、炭治郎が心でガッツポーズをし、伊之助は禰豆子のことをすっかり忘れ慣れてきた全集中の呼吸・常中の訓練に励んでいた。そう、彼らは僅か一週間で、常中を獲得しつつあったのだ。既に伊之助は15時間。善逸は13時間と、凄まじい成長速度で、炭治郎も目を見張るほどだった。

というか、炭治郎は「ここまで完成させるのに数か月かかっているので、自分には才能がないのでは？」と思っていたが、現代人の感覚が抜けきっていないのだから仕方がないのである。

つまるところ、現代人の感覚では、既に眠りながらも出来る炭治郎は十分超人なのだ。

「完治です」

そんな時、炭治郎が医者に完治を言い渡される。

「……決して、無理はしない様に」

「はいー!」

医者に健闘を祈られ、元気よく返事を返す炭治郎。

そして、いつもの隊服に着替え、出発の準備をした。

「北北東! 北北東! 次ノ場所ハ北北東! 三人ハ那田蜘蛛山ニ行ケ! 那田蜘蛛山ニ行ケ!」

「那田蜘蛛山?」

「既ニ調査ニ向カツタ隊士ノ数名ガ行方不明ニナツテイル!」

鎧鴉の伝令に従い、旅館を出る。

その前に……

「では行きます。お世話になりました」

そういつて、炭治郎と善逸が頭を下げる。伊之助は意味が分からないのか、何もしなかった。

老婆はそれに眉一つ動かさず、懐から火打石を取り出した。

「では、切り火を」

「はい。……あ、伊之助、今からやるのは切り火と言ってだな……」

炭治郎が伊之助は知らないだろうと思い、切り火について説明する。そして案の定、伊之助は知らなかったようで、善逸が引いていた。

老婆にお清めしてもらい、次の任務の為に走る炭治郎たち。

「なあ伊之助。そう言えば聞いてなかったんだけどさ」

「なんだよ」

「伊之助はどうして鬼殺隊に？」

「……鬼殺隊の隊員って奴が、俺の山の中に来やがったから、力比べして刀を奪ってやった」

（その鬼殺隊士は不幸だな……）

（というか、やってること山賊じゃないか）

そして、その時にその鬼殺隊士に最終選別の存在を聞き、飛び入り参加したという訳だ。

更に伊之助は、他の生き物との力比べだけが唯一の楽しみだという。

「だから！ 俺はいずれお前に勝つぞ権八郎！」

しばし悩んだ炭治郎は、

「うーん、そういうことなら、偶にはいいけど……」

そういつて伊之助の挑戦を了承する炭治郎。

だが、味方同士での戦いというのは拒否感が出るな、とも思った。

そして、山道を進んで数時間。すっかり日も暮れ夜になり、

「待ってくれ！ ちょっと待ってくれないか！」

絶妙に決まった顔で炭治郎たちに待つよう促す善逸。

「無理」

「ヤダ辛辣！ というか怖いんだ！ 目的地が近づいてきてとても怖

い！」

「何座ってんだこいつ？ 気持ち悪い奴だな」

「お前に言われたくねえ猪頭！」

善逸は座り込んだ状態で、先に続く那田蜘蛛山を指差し、叫ぶ。

「目の前のあの山から何も感じねえのかよーッ！」

「そんなこと俺に言われても……ぶつちやけ鱗滝さんの鍛錬の方がよっぽど怖かったし」

「どんな鍛錬してたんだよ!？」

「やつぱ気持ち悪い奴」

「気持ち悪くなんてない！ 普通だ！ 俺は普通で、お前らが異常だあぁッ！」

いや、鬼殺隊が鬼の出ると言われた場所でしり込みするのは異常だと思うが。

そんな感想を抱いた炭治郎だったが、流石にらちが明かないので無理やり善逸を引っ張ることにした。

なにしろ、状況が状況だ。禰豆子に聞いた限りでは、この山では十二鬼月が出るらしい。

それも、相当強い上に、群れて行動しているらしい。

鬼は基本群れないという前提を知っているからこそ、逆に異常な存在である十二鬼月の鬼に、炭治郎はゾツとするが、先ほども言ったようにしり込みしていても仕方ない。

「……ん？ 人の気配……?？」

「おい、何かいるぞあそこに」

「えっ……?？」

伊之助が指さす方を見ると、体中血塗れでボロボロの、鬼殺隊の隊服を着た男性が、涙目で俯せになり倒れていた。

思わず炭治郎が、「大丈夫ですか!？」と駆け寄ると、

「あ…助け——うわあああああッツ!! 繋がっていた!! 俺にも……た、助けてくれえええええええええッツ!!」

「あ、待て！」

炭治郎が手を伸ばすが、みるみる距離が離れていく。

「私が行く」

すると、女性の声が響き、それを聞いた炭治郎は誰かに頭を踏まれて倒れる。

「はあー!」

「えっ——うわああああッツ!」

危うく山の中に連れ去られるところだった隊士は、間一髪のところ
で、炭治郎の背負っていた箱の中から飛び出した禰豆子に救われる。

禰豆子に抱きかかえられた隊士は、白目をむいて気絶した。

「おい、氣い失つてるぞ。使えねえ」

「そう言うな伊之助。きつと強い鬼が居て、命からがらここまで逃げ
てきたんだ」

言つて、白々しいと炭治郎は内心自嘲する。

鬼がいる。そんなことは分かっている。もつと早くここに来れば、
この人がこんなに傷つくこともなかったのではないか。

そう思わずにはいられない。

(——悔やむのは後だ。今は俺のやるべきことを……!)

「行こう、伊之助、善逸」

「俺に命令してんじゃねえ! そういうお前こそ、ガクガク震えなが
ら後ろをついてきな。——腹が減るぜ」

「腕が鳴るだろ……」

「……ははっ」

思わず口元から笑みがこぼれる。

そんな炭治郎を無視して、伊之助は意気揚々と山の中へと入ってい
く。

炭治郎もそれを追って善逸を引っ張りながら走っていく。善逸は
終始泣き叫んでいたが、誰も聞き入れはしなかった。

そして、入り口に入つてすぐ、ついてきた禰豆子が脇道に逸れたこ
とに、誰も気づかなかつた。

「……それにしても、凄い量のクモの巣だな」

「邪魔くせえな」

「てか、クモの音カサカサして気持ち悪いんだけど!」

炭治郎が周囲を見回して眩き、伊之助が腕を振り回して纏わりついたクモの巣を取り払い、善逸は泣きながら耳を塞ぐ。

そうこうしていると、生き残りの隊士の一人が脂汗を滝のように流しながら、周囲を警戒しているのが見えた。

炭治郎たちは状況確認のため、その隊士のもとへ走る。

「応援にきました！ 階級突、竈門炭治郎です！」

「!? ……突? ……突!? なんで柱じゃないんだ!? 突なんて何人来ても同じだ、意味がない！」

瞬間、伊之助の放ったグープンチが、隊士の顔に突き刺さる。

「ハア!? おま、伊之助おま、何やってんのマジで!」

「うっせえ！ 意味のあるなしで言ったら、お前の存在自体、意味がねえんだよ！ さっさと状況説明しやがれ弱味噲が！」

「な、何なんだこいつ……俺の方が先輩なのに！」

突然の伊之助の奇行に驚愕する善逸を他所に、伊之助は隊士の頭を掴み、状況説明をせがむ。

そして、仕方なく隊士は説明を始めた。

彼が言うには、鴉からの伝令で、十人ほどの隊士と那田蜘蛛山に入り、しばらくすると、隊士の中の一人が殺し合いを始めたらしい。

その後も、他の隊士も刀を抜いて仲間を斬り始め、混乱状態になったそうだ。

「なあ、炭治郎。さっつきから気になったんだけどさ」

「どうした善逸？」

「変な音しないか？ なんか、凄いカタカタ言ってるんだけど……」

「ヒイイ!」

すると、善逸の発言に、隊士が情けない声を上げて縮こまる。

「ど、どうしたんですか!?」

「そ、その音だ！ その音が聞こえたら急にみんなが……！」

「おい、俺にも聞こえてきたぜ」

伊之助がそういうと、炭治郎の耳にも件の音が聞こえてくる。

「……な、なあ、炭治郎……」

「……なんだ？」

「あ、あれってさ、み、味方だよな？ 俺たちの所まで逃げてきたんだよな？」

善逸が震える声で、ある方向を指差す。

その方向に三人が目を向けると、

「……俺としても、その方がよかったよ」

炭治郎が、目の前にやってきた、何処か人形じみた動きの鬼殺隊士たちを見て、そう言った。

その次の瞬間、彼らが突如、炭治郎たちに牙を剥く。

「うわっ?!」

「ははっ、こいつらバカだぜ！ 隊員同士でやり合うのはご法度だつて知らねえんだ！」

「いやつい最近覚えたばっかのお前が何言ってるんだ?! ててて、つていうか、これってやっぱりあれなのかな?! 鬼の血鬼術なのかな?!」

善逸が叫んでいるのを聞き流し、炭治郎は隊士たちを観察する。

そして、彼らに違和感を感じ、その正体を瞬時に掴んだ。

「はあッ！」

炭治郎は隊士の一人……その背中から伸びる糸を斬る。

すると、文字通り、糸が切れたように、その隊士は倒れこんだ。すでにこと切れているようで、起き上がる気配はない。

「二人とも、糸だ！ 彼らは糸によって操られている。背中の糸を斬れば彼らの動きは止まる！」

「めんどくせえ！ 全員ぶった切れればいいだろーが!!」

「駄目だ！ まだ生きてる人も混じってるんだ！ それに、彼らは仲間。その死体を傷つけるのは……なんていうか、よくないと思う！」

崇られる気がする！」

「そんなこと言ってる場合じゃないだろバカ！ は、早く何とかしてえー！」

「善逸も戦ってくれ！ 糸を斬るだけでいいんだ！ 動きも遅いし、そもそも相手は鬼じゃない！」

「そうじゃないんだって！ この人たちの糸を斬っても意味ないんだよおー！」

「どういうことだ？」と、炭治郎が尋ねると、善逸は涙目で、足元で動き回る白い体表のクモを指差した。

「こいつら、さつきから俺に飛びついてくるんだ！ しかも、何か糸巻き付けてきてきア！ 多分だけど——」

「……そのクモたちが糸を出してる……？ じ、じゃあ——！」

炭治郎が、既に糸を斬って倒れた人たちを見る。

そこでは案の定、倒れた隊士が再び、操り人形のような動きで迫ってきていた。

「なら、そのクモを皆殺しにすればいいんだな！」

「出来るわけないだろバカ！ 何匹いると思ってるんだ!! しかも、こいつら凄く小さいし！」

「……くそ、どうしたら……？ ね、禰豆子、何か……あれ？ 禰豆子？」

自分より知識のある妹に頼ろうと、その名を呼ぶ炭治郎だったが、何故か返事は帰ってこない。

慌てて周囲を見渡すが、禰豆子はどこにもいなかった。

操られる者たち

走る。走る。走る。

刺激臭の強くなる方向へと、足を進める。

暗い森の中を、黒い髪、一人の少女……否、鬼娘が駆けていた。

「……迷った。……仕方ない」

鬼娘……彌豆子が空を見上げると、小屋のようなものが、白い糸でつるし上げられており、その周囲には同じく糸で吊られる、鬼殺隊士がいた。

一人は頭から髪が抜け落ちており、またある一人は手がクモのような方に変化しており、明らかに異常な光景だった。

その光景に思わず吐き気が込み上げてきた彌豆子だが、なんとか堪え、その下手人であろう鬼へと言葉を発する。

「やい！ 出てきやがれインテリ野郎！ こそこそ隠れて毒を撃ち込むだけって、恥ずかしくないんですかあ!!」

すると、その言葉を聞いて彌豆子の存在に気づいたのか、小屋の中から、まるで巨大な蜘蛛のような姿をした鬼が、逆さまの状態で姿を現した。

文字通りの人面蜘蛛。手足は六本で、尻のあたりから細い糸を垂らし、宙に浮いているかのような状態を演出している。

小屋や、辺りに張り巡らされた糸を見ると、まるでそこが、その鬼の巣であるかのようにだった。

「何なんだお前？ いきなりやってきて訳の分からないことを……と
いうか、鬼だと？ ……へっ」

鬼は彌豆子が鬼であると分かった途端、なるほどと言った様子で厭らしい笑みを浮かべ、こう切り出した。

「なるほど、お前も累の力を分けてほしいのか？ いいだろう、俺から口利きして……」

「お前の弟の場所を吐け。私がぶっ殺してやる」

「……はあ？」

本物の馬鹿を見るような目で、彌豆子を見つめる鬼。

そして、いきなり高笑いを上げて言った。

「ハハハハッ！ お前頭がおかしいのか?! 累を殺す？ 鬼のお前が？ 鬼狩りでもないのに？ とんだ笑い話だぜ！」

「御託はいい。吐かないならアンタから斬る」

「おうおう、随分と強気だねえ。まあ、聞けつて。そもそも、俺達は同じ鬼だろ？ 争ったって何の意味もない」

「意味はある。累を倒せば、お兄ちゃんに万が一が来ることもない」
「……はあ。やっぱり馬鹿だな、お前」

心底呆れたようなため息を吐き、鬼は告げた。

「お前みたいな奴放つておいたら、累に何言われるか分かんねえ。だから死ぬ」

そして、鬼同士の殺し合いが始まった。

先に仕掛けたのは敵の蜘蛛鬼だ。口から紫色の液体のようなものを、禰豆子に吐きつける。

彼女はそれを走って回避し、周りの木を盾にしながら、回り込むように走る。液体は地面に落ち、その土を溶かすことで、まるで隕石でも落ちたかのようなクレーターが生まれる。

「チッ、木が邪魔だな。お前たち、やれ！」

鬼が何者かに指示を出す。

それに嫌な予感を感じた禰豆子が、慌てて後ろ振り返ると、

「クソッ、人面蜘蛛多いって！」

そこには、体がクモで、顔は人間、しかし頭から髪が完全に抜け落ちて禿げ上がっていた、謎の生物がいた。

禰豆子はその正体を知っている。

（彼らは、アイツに蜘蛛にされた鬼殺隊士だから、傷付けることはできない！）

そう。

あの鬼には、人を蜘蛛にすることが出来る毒がある。それは鬼である禰豆子にまで通じるのかどうかは分からないが、少なくとも、当たらない方がいいのは確実だ。

それにその毒は、目の前の完全に蜘蛛にされた人たちも扱える。

それ故、禰豆子は彼らにも気を付けねばならなかった。

毒には気を付ける。しかし、戦ってはならない。余りにも集中を使う行為であり、そして、それは禰豆子が行うにはあまりにも高度だった。

そして、それは致命的な隙を生む。

「ッ!! し、しまっ……!」

飛びついてきた鬼殺隊士を、思わず振り払う形で傷つけてしまった。幸い、死んではないが、その事実は禰豆子を激しく動揺させた。そして、そのことに動揺した禰豆子の隙を突いて、鬼が再び毒液を吐き出す。

「危ないっ!」

「えっ——」

「何っ?!」

毒液が禰豆子の全身に降りかかる直前、雷光が彼女を搔つ攫った。

「大丈夫、禰豆子ちゃん?」

「……善逸、さん……?」

禰豆子は自分を救いだした少年の名を呼び、そして目を見開いて呆然としていた。

「おい三太郎。アイツに任せて大丈夫なのかよ?」

「善逸はいざという時はちゃんとやってくれるから、心配はいらない。それよりも……」

死に体の仲間から放たれる刃を打ち払い、その背中から伸びる糸を切り裂き、地面に群がる蜘蛛を踏みつぶした炭治郎は、

「くそっ、やっぱり蜘蛛を潰すのは駄目だ。次から次へと湧いて出てくる! 操っている鬼を見つけて、倒さないと終わらない!」

「チッ、だったら仕方ねえ!」

伊之助は両手に持っていた刀を地面に突きさし、まるで壁に手を付けるような構えで、技を発動する。

「獣の呼吸【漆ノ型 空間識覚】」

優れた触覚をさらに研ぎ澄まし、大気の微細振動を捉える事で、幻惑の術の類を無視して広範囲の索敵を行う技。

これにより、伊之助は敵の位置を正確に捉える。

「見つけたぜ！ あっちだ！」

伊之助はある方角を指差し、得意げに叫ぶ。

「ありがとう伊之助！ こっちはこっちで何とかする。それから、えっと……」

炭治郎が、一緒に戦っている地味な鬼殺隊士に目を向ける。

向こうもそれに気づき、名乗りを上げた。

「……む、村田だ！」

「村田さん、ここは任せても大丈夫ですか!!」

「あ、ああ！ これ以上情けないところは見せられないからな。先に行ってくれ！」

「ありがとうございます！ 伊之助、案内してくれ！」

「へっ、親分についてきな！」

伊之助が先行し、それに炭治郎がついていった。

「あん？」

「どうした、伊之す……」

突如、伊之助が立ち止まり上空を見上げたので、炭治郎もつられて見上げる。

その先には……、

「……僕たち家族の静かな暮らしを邪魔するな」

月の光に照らされる、少年の姿をした鬼がいた。足元には糸が張り巡らされており、まるで宙に浮いているかのようなだった。

特別強い気配は感じない……だが、それ故に不気味だと思った炭治郎。

「お前らなんて、すぐに母さんが殺すから」

「母さん……？ それが、操り糸の鬼か！」

「オラアッ！」

すると、伊之助が木を足場に跳躍し、少年に刃を振るう。

だが、あと一步のところまで届かず、伊之助の攻撃は空振りに終わった。

それを一瞥し、完全に興味を失ったのか、少年は無言で立ち去っていく。

「くっそ！ どこ行くんだテメエ!!」

「待った伊之助！ 操り糸の鬼を倒すのが先だ！」

「……チツ」

頗る不機嫌な様子で舌打ちし、渋々操り糸の鬼の居場所を目指して走る伊之助と、その後続く炭治郎。

すると、再び糸が背中から伸びる鬼殺隊士と遭遇した。

「また出やがったぜ……」

「駄目……こつちに来ないで。……誰か、階級が上の人を連れて来て……そうじゃないと、みんな、殺してしまう……!」

髪を後ろで結び、涙を流しながら懇願する女性隊士。

その周囲には、彼女の仲間のものであろう屍が、無造作に散らされていた。

「――逃げてー!」

女性が叫んだ……その瞬間、素早い動きで刀を振るう……否、振るわされる女性隊士。

その一撃を防ぐ炭治郎に、女性が言う。

「操られてるから……動きが全然、違うのよ! 私達、こんなに……強くなかった! あ、あああああッ!」

グギゴギツ、と。

鈍い音が響き、女性隊士が嗚咽をもらす。

無理やり動かされているから、体に異常が起ころうとお構いなしなのだろう。

しかし、それでも倒れない炭治郎達に業を煮やしたのか、倒れていた隊士たちも立ち上がらされた。

「……殺してくれ……!」

まだ息のある隊士が、歪な形になった腕で刀を振り回しながら、そう頼んでくる。

どうやら、手足の骨だけでなく、内臓もやられているようだ。このままでは、いずれは息絶えてしまうだろう。

「……伊之助、走るぞ」

「あア？」

「ここに居る人たちを無視して、一気に鬼のもとに行くんだ！」

「それが出来たら苦勞はしねえよ！ さっきの奴らならともかく、こいつら地味に速えんだよ！」

「……糸を斬れば、また繋げ直すのに少し時間が掛かるはずだ。その間に切り抜ける！」

そういつた炭治郎は、迫ってきた隊士たちの糸を斬り、全速力で駆け抜けた。

伊之助も置いていられないようにそれに続いていく。

「おお！ 抜けたぜ！ よっしゃー！ このままいくぞ、ついてこい紋次郎！」

「炭治郎だ！ ……でも、意外と上手くいったよ」

「けど、アイツ等放っておいていいのか？」

「操り糸の鬼を倒さないと終わらないんだ。仕方がない……」

そうやって、顔を俯かせる炭治郎。

すると、近くから物音が聞こえてくる。

「なんだ？」

「へっ、やっぱり出たな……って、あア!! こいつ、頸がねえ！」

伊之助の言う通り、物陰から現れたのは、頸のない鬼だった。

腕はまるで刃物のような形をして、カマキリを連想させた。

頸無し鬼は、その両腕を振るって伊之助たちに攻撃を仕掛ける。

「チィッ！」

伊之助は二本の日輪刀を使い、その攻撃を受け流す。

そこへ脇から飛び出した炭治郎が、水の呼吸【式ノ型 水車】を使い、右腕を切り落とした。

それで隙を見せた鬼に、今度は伊之助が、残った左腕を切り落とした。

「よし、一気に決めよう！」

「けど、こいつ頸ねえぞ！ ないもんは斬れねえ！」

「頸がなくなれば鬼は灰になる！ この鬼には、まだ頸と呼べる部分が少し残ってるんだ！ だから、そこを切り落とせばいい！」

「……なるほど。で、どうすればいいんだよ？」

炭治郎はじつくりと頸無し鬼を観察し、

「袈裟斬りにするんだ！ 右の首の付け根から左脇下まで斬れば、きつとー！」

「なるほどな。じゃあ、こいつは俺が斬ってやるよ。操り糸の鬼は、あつちの方向にいる。お前はきつさとぶった斬ってきな！」

「えっ、いいのか?! なら、任せるぞ伊之助！」

そういつて、伊之助が示した方向へと走っていく炭治郎を見届けながら、伊之助は、腕を無くして蹲る頸無し鬼へと刃を向ける。

「テメエの相手はこの俺、嘴平伊之助様だア！」

たった一人の少女を守る為に

「えっと……どうして、ここに……？」

禰豆子が自身を抱きかかえる善逸に問いかける。

そもそも、彼女は黙ってここに来たので、誰かがその後を追いかけてくるまでには相当時間が掛かるはずだ。

しかも、禰豆子の危機的状況に偶然間に合う……そんなことが、普通起きるのか？

「俺は禰豆子ちゃんのいるところなら、何処へだって駆けつけるよ」「えっ……」

「そしてこんなところからはさっさとおさらばしたい所存ですウウウウツツ！」

一瞬、善逸の言葉に胸が高鳴るのを感じた禰豆子だったが、すぐに気のせいだと思った。

自分を抱えたまま敵前逃亡を図る善逸に、彼女は、

「ちよ、降ろしてください！」

「いやダメダメダメ！ あんなキモイの相手にしてらんないし、禰豆子ちゃんにも近づけたくないって！ って、邪魔すんなお前ら！」

来た道に戻ろうとする善逸の行く手を、人面蜘蛛たちが塞ぐ。

「逃げられると思うなよ、鬼狩りめ。そもそも、何故その鬼を守る？」

「ハア!? ンなもん決まってるだろ！ お前らより何十倍、いや何百倍もいい子で可愛いからだよ！ あと、すっごい優しいし！」

「ちよ、善逸さん……」

「っていうか、お前らなんなの!? お前、なんか超デカいし！ こっちの奴も滅茶苦茶気持ち悪いしっ！」

(なんなんだこいつ……?)

恥も外聞もなく泣き叫ぶ善逸を見て、逆に困惑した鬼。

「何やってるの、兄さん?」

「——ツ!? る、累!?」

「えっ」

すると、鬼がぶら下がっていた小屋の天井から、声が聞こえた。

全員が一斉にその方向へ視線を向けると、恐らくは十歳前後であろう少年の姿をした、累と呼ばれた鬼が、異様な雰囲気で見つめていた。

「そんな奴ら、さっさと殺してよ」

「……あ、ああ。わ、分かっている。ただ、少し遊んでてな……」

「ふうん……ん？」

すると、累は禰豆子に視線を向けて、

「……なに、ソイツ？ 鬼？」

「……見つけた、十二鬼月ッ！」

「ちよ、禰豆子ちゃん!!」

累を睨みつけ、凄まじい跳躍力で累に迫る禰豆子。

「へえ……」

まるで、面白そうな玩具を見つけた表情で、右手を禰豆子へと向ける累。

瞬間――

「――ッ!! ガ、ああ……ッ！」

いつの間にか、禰豆子が糸によって縛り上げられていた。

体中に巻き付けられ、食い込んで血が噴き出している。激痛から

か、禰豆子は嗚咽を漏らした。

「……こんなものか。少しは楽しめると思ったけど」

「禰豆子ちゃん!! おいお前! 禰豆子ちゃんを離せ糞餓鬼ッ！」

怒り心頭の善逸が、木を伝って跳躍し、累へと肉薄する。

目の前の鬼は、あの巨大な蜘蛛鬼と違い、気迫も何も感じない。そ

れ故、善逸は不思議と鬼相手なのに、恐怖を感じず動けた。

だが、

「鬱陶しいよ」

「――ゲボッ!!」

「! ……ぜ、善逸さんッ！」

善逸が刀を抜くより早く、累が善逸の横腹を蹴り飛ばした。

飛んだ時よりも早いスピードで地面に叩きつけられ、肺の中の空気がすべて吐き出された。

更に叩きつけられた衝撃で、地面に僅かにヒビが入る。

「あ、があ……！」

「……もういいよ。兄さん、早いとこ片づけてね」

「あ、ああ……任せとけ」

すると、累はあつという間に姿を消した。

そして、近くから累の気配がしなくなったことを確認した兄蜘蛛は、ホッと、安堵の息を漏らす。

「ふう……さて、と」

すると、兄蜘蛛は吊るし上げられ、苦悶の表情を見せる禰豆子に近づき、

「へっ……、斑毒痰ッ！」

「!? ガアアアアアアア——ッツ!?!?」

兄蜘蛛の吐き出した液体が、禰豆子の右腕に掛かった瞬間、彼女の腕が瞬時に溶けだした。

いきなり右腕を溶かされ、悲鳴を上げる禰豆子。

そして、その声を聞き、少年が立ち上がる。

「お、まえ……何やってんだ……何やってんだ蜘蛛野郎ッ！ ……ぐッ——！」

「はっ、さっきの累の攻撃であばらが折れたか。そこで見てな、この鬼の四肢が順番に溶かされていくのをな！」

「て、メエ……！」

善逸が痛む体に鞭を打ち、無理やり雷の呼吸の構えを取る。

しかし、善逸が攻撃するよりも先に、人面蜘蛛となった鬼殺隊士たちが攻撃を仕掛けた。

善逸はその攻撃を躲すのが精一杯で、禰豆子のもとへ行けない。

(早くしないと……禰豆子ちゃんを助けないと……！)

善逸は耳がいい。

それこそ、寝ている間に話しかけられたことが分かることもあったくらいだ。人の感情を、その人物が発する音で、感じ取ることすら造作もない。

だから、分かるのだ。禰豆子が、兄蜘蛛に対して怯えの感情を持っているのを。それを必死に隠しているのを。

(俺しかないんだ……俺が助けるんだ！ 絶対に!!)

不思議と、震えはなかった。先程までの様に、兄蜘蛛に対して恐怖の感情が湧いてこなかった。

「雷の呼吸……【壱ノ型 霹靂——】」

「チツ、させるか！」

兄蜘蛛が善逸に毒液を吹きかける。

それを咄嗟に横に飛んで躲し、再び壱ノ型の構えを取る。だが、その度に妨害される。そんな状況が続いたせいも、遂に見抜かれてしまった。

「はっ、さつきから馬鹿の一つ覚えのように同じ構え……お前、一つの技しか使えないな？」

「——ッ！」

(見抜かれた?! ……クソッ、俺が壱ノ型以外の技も使えたら……!)
「この程度が鬼狩りとは笑わせる……消えろ。どうせその怪我では大した脅威にはならないだろ。特別に見逃してやる」

兄蜘蛛の言う通り、善逸は雷の呼吸の技を、壱ノ型しか使えない。それで何度、自身の育手である、桑島慈悟郎に怒鳴り散らされ、殴られたのか分からない。

だが、そんな彼が残した言葉が、善逸の脳裏に蘇る。

——極めろ。泣いていい、逃げてもいい。……ただ諦めるな。信じるんだ。地獄のような鍛錬に耐えた日々、お前は必ず報われる。(そうだ。諦めるな……どんなに辛くても、楽な方に逃げるな！ そこに禰豆子ちゃんを助ける方法はない!)

『消えろよ』

(……えっ)

それは、師の言葉ではない。

自身の兄弟子、かいがく 獺岳の言葉。

いつも修行から逃げてばかりの善逸に投げかけられた、否定の言葉。

兄蜘蛛が放ったのと、同じ言葉。

『何度も言わせんじゃねえ。消えろよ』

——そうだよ。俺に何か出来るはずがない。

『先生が、お前に稽古をつけた時間は、完全に無駄だ!』

——じーちゃんの期待には答えられないよ。早く逃げよう。

(……うるせえ。うるせえんだよ……)

——親のいない俺は、誰からも期待されない。誰も、俺が何かを掴んだり、何かを成し遂げる未来を、夢見てはくれない。

誰かの役に立ったり、一生に一人でいいから、誰かを守り抜いて幸せにする、ささやかな未来ですら……。

(……でも爺ちゃんは、何度だって俺を、根気強く叱ってくれた。何度も何度も逃げた俺を、何度も何度も引きずり戻して……)

善逸の脳裏に、師範によってボコボコにされる記憶が浮かぶ。

(明らかにあれ、ちよつと殴り過ぎだったけど……俺を見限ったりしなかった)

「うるさい!」

「……あ?」

「……禰豆子ちゃん?」

突如、叫びだした禰豆子に、兄蜘蛛は怪訝そうな目を向け、善逸も彼女を見上げる。

「善逸さんは、いつつも頑張ってた! 常中を習得するときも、どれだけ泣いたって諦めなかった! この程度? アンタが善逸さんの……善逸の何を知ってるの?! お前みたいな奴が、勝手に、善逸の事を決めつけるな!」

「……チツ、喧しい娘だ。どうやらよつぽど死に急ぎたいらしいな」

そういった兄蜘蛛は、今度は禰豆子の左足へと毒液を吹きかける。

「——ツ!!」

「なに……?」

溶かされた足から感じる激痛で、絶叫を上げそうになる禰豆子だが、歯を食いしばって堪える。

その姿に思わず疑問の声を漏らす兄蜘蛛を他所に、

(善逸だって苦しいんだ……! 累は十二鬼月……、その攻撃をまともに受けて、更に地面に叩きつけられて、痛くないはずがない! 辛

くないはずがない！ 怪我だって、私みたいに治らない！ ……それでも、私の為に耐えて、戦ってくれてるツ!!」

ならば、自分がこれ以上、泣き叫ぶのは許されない、絶対に。

そして、その姿を見た善逸は自然と、刀を握る手に力を籠める。脇腹から感じる痛みが遠のいていくのを感じる。

いつもより一層……集中する。

「……ありがとう、禰豆子ちゃん。……そっか、俺のこと、ちゃんと見てくれてたんだ。……雷の呼吸——」

「バカめ！ お前たち、飛び掛かれ！」

技を放とうとした善逸に、大量の人面蜘蛛たちが飛び掛かる。

その様は、まるで砂糖菓子に群がる蟻のようだった。その様子を見て勝利を確信する兄蜘蛛。

だが、次の瞬間、群がっていた蜘蛛たちが弾き飛ばされた。

「!?」

(な、なんだ……?)

空気が、揺れる。まるで雷雲が発生した空のように……重い。

間拔けな声を発した兄蜘蛛が、善逸のほうを見て、思わず地面まで落ちるほど、驚く。

「【壱ノ型 霹靂一閃——】」

善逸の雰囲気が変わるのを感じた兄蜘蛛は、咄嗟に小屋まで飛び上がる。

それと同時に、善逸が動いた。

「——六連】 ツツ!!」

一瞬だった。

「……えっ?」

いつのまにか、兄蜘蛛は地面でなく、空を見上げていた。

頸を動かそうとするが、頭から下の感覚がなかった。

そして、上空には、既に鞘に刀を収めようとする善逸がいた。

(……斬ら……れた……? 俺が、あんな奴に……?)

そこまで確認し、漸く自身が斬られたことに気づいた。

そして、同時に疑問が生まれた。

アイツは一つの技しか使えないはず。今の技は何なんだ？
だが、その疑問に答える者はいない。最後まで思考し続け、兄蜘蛛は消滅した。

「……………うぐっ——！」

善逸が小屋の上に落下する。

幸い、距離が開いている訳で放ったから、落下によるダメージは少なかった。

痛む体に鞭を打ち、這いずってでも動こうとする善逸。

(まだ終わってない……………禰豆子ちゃんを糸から解放しないと……………！)

「善逸さん！」

えっ、という言葉が、善逸の口から洩れる。

禰豆子を縛っていた糸は、兄蜘蛛のものではない。故に、兄蜘蛛を倒しても、糸は消えない。

だからこそ、善逸は這ってでも助けようとしたのだが……………。

「再生した腕で引き千切りました！」

「あ、さいですか……………てことは、もう治ったの？」

「はい。足はもう少し、時間が掛かりそうですけど……………それより、善逸さん！ どこか、蜘蛛に噛まれたところはありませんか?!」

「えっ、いや、特に、ないけど……………」

「ほ、本当に?! よ、よかったあ……………」

心の底から安心する禰豆子に、目を見開く善逸。

以前まではもっと辛辣だったが、いつの間にか親密になっていた。いや、別に親密なのが嫌ではない。寧ろもっとお願いしますではあるが……………それでも気にはなる。

だが、今はそれを聞いている暇はない。

(！ そうだ……………こうしてる間にも、炭治郎達は……………！)

「ぐッ……………！」

「ちよ、大丈夫ですか?!」

「こ、これくらい、平気……………いや無理。無理だわこれ」

善逸、折れる。

というか寧ろ、今までよく頑張ったと褒めて欲しいとすら思う。

「……禰豆子ちゃん、炭治郎のところに行ってくれ……」

「えっ？」

「俺、ちよつと動けないからさ……お願いだ」

「そ、そんな……もし他の鬼に見つかったら……」

「だったら尚更……ここに居たらダメだよ……もし君に何かあったら、炭治郎に怒られる、からさ」

「……ごめんなさい」

「ん？」

突如、謝りだす禰豆子に、善逸が怪訝な目を向ける。

「私……勝手なこととして、みんなに迷惑かけてばかりで……本当に、ごめんなさい……」

「……大丈夫だよ」

「……えっ……？」

ボロボロと涙を流す禰豆子の目元を、そつとぬぐい、頬を撫でる善逸。

「俺が君を守るから……だから、君はどこまでだつて走ってくれ。俺は必ず追いついて、君を守るから。どれだけ躓きそうになっても、俺が引つ張つてあげるから」

「……あ」

「頼む……行ってくれ」

「——ッ！」

その言葉に、弾かれるように動いた禰豆子が、あつと言う間に走り去っていく。

禰豆子が走っていく姿を見ながら、ほつと息をつく善逸。

そして、思い出したかのように呟いた。

「……そっか、俺、初めて鬼を倒したんだ」

別に初めてではない。善逸は今までも鬼を倒してきた。ただ、寝ているせいで気づいていないだけで。

だが、だからこそ、善逸は一步を踏み出した。自分の意志で、心で、鬼に立ち向かったのだ。

「……爺ちゃん……俺、少しは強くなれたかな？」

そう呟いた善逸は、薄れゆく意識の中で、

(炭治郎……伊之助……禰豆子ちゃん……無事で、いてくれ、よ……)
ただただ、仲間の無事を祈っていた。

一方そのころ、炭治郎は……。

「何なの、お前？」

「……こつちが聞きたい」

背に、操り糸の鬼を庇った状態で、累と対峙していた。

偽物の家族

伊之助に後ろを託し、目的地へと走る炭治郎。

木々をかき分けて進んでいき、ついに操り糸の鬼を見つける。

「いた！」

「!? ひい——！」

炭治郎の存在を確認した途端、凄まじい怯えようを見せる操り糸の鬼を見て少し困惑するが、刀を構えて技を使おうとする。

その時、

「俺の家族に……近づくなアアアアアアツツ!!」

「何っ!?」

横合いからいきなり現れた、白い髪の毛、今までで一番蜘蛛のような顔をした鬼が、凄まじい巨体を惜しげもなく晒しながら、腕を振り回して近づいてくる。

炭治郎は咄嗟に飛び退き、自身に向けられた拳を躲しつつ、その腕に縦から刃を振り下ろす。

「はあー！」

炭治郎の日輪刀が僅かに食い込み、少しだけ血が流れるが、全く堪えた様子を見せない巨大な鬼に、炭治郎が冷や汗を流す。

明らかに今までとは格が違う、圧倒的な力。それを肌で感じ、ガタガタと刀が振るえる。

（恐れるな！ 大丈夫だ……俺なら勝てる！ 自分を信じろ！ 諦めるな!!）

「水の呼吸【式ノ型 水車】ツ！」

縦に回転しながら、車輪のような動きをする炭治郎が放った斬撃で、鬼の二の腕が千切れ飛ぶ。

それを見た炭治郎が勝利を確信した。この鬼は斬れる。勝てない相手じゃない。

僅かに心に余裕が戻り、冷静な思考を巡らせる。

（この鬼……明らかに理性が飛んでる。攻撃も大雑把だ。躲すの容易！）

その考え通り、炭治郎は鬼の連続攻撃を完璧に見切つて躲し、再び技を使って反撃する。

「【参ノ型 流流舞い】ツ!!」

水が流れるような動きで、鬼の手を斬り飛ばしつつ、その懐に潜り込んだ。

そこで技を止め、腕を手前で交差させながら鬼の頸元までジャンプする炭治郎。

「【壹ノ型 水面斬り】ツツツ!!」

勢いよく水平に放たれた横一線の刃が、いとも容易く鬼の頸を斬つた。

鬼は後ろへ倒れこみ、体の節々が炭化していく。

炭治郎はその様子を流し見ながら、今度は操り糸の鬼へと目を向ける。

「……、」

その女性……鬼は、何故か先程と違い怯えの表情が失せ、逆に無言で頸を差し出してきた。

その行動にギョツと目を見張る炭治郎だったが、それを望むならと、構えを取る。

近くまで行き、間合いに入つて刀を構え、技を放とうとした……その瞬間、

「——ッ!!」

「ねえ、何やってるの、母さん?」

「……えっ?」

自身の首元に白い糸のようなものが飛んできて、咄嗟に身をかめることでそれを躲し、距離をとる炭治郎。

そんな彼の事など無視して、突如介入してきた鬼の少年、累が、操り糸の鬼を、静かな怒りを込めた視線で射抜きながら言う。

「今、勝手に殺されようとした? 家族を見捨てて? それが母親のやることなの?」

「え、あ、いや……その、違つ——」

「——もういいや。新しい母さんを探すよ。だから、古い母さんはも

ういらない。朝まで縛って、燃やすよ」

「……ちよつと待て。何を言っているんだお前は……？」

わなわなと肩を震えさせる炭治郎が、顔を俯かせながら問いかける。

すると、累はまだ居たのかという呆れた感情を滲ませながら、炭治郎の問いかけに答える。

「……何って、そのまんまだけど？ 家族を置いて勝手にいなくなるうとするような母さんは、要らないって言ってるんだ」

「——ふざけるな！ お前たちが家族……？ 奴隷の間違いだろう！

お前たちの間に家族の繋がりなんて微塵も感じない……お前たちは端から家族なんかじゃない、だからお前は逃げられるんだ！」

気配から、炭治郎は察していた。

操り糸の鬼が累を恐れていること。そこに強い悲しみと恐怖の感情が渦巻いていることを。死を渴望するほど、苦しんでいることを。

故に、解放しようとした。だが、それすらも許さないのか、この鬼は。

「……ねえ、今、何て言ったの？」

瞬間、周囲の温度が数度、下がるのを肌で感じた。

今まで感じなかった圧倒的な重圧、空気が重くなるのを感じる。その変化の差は、まるで眠る前の善逸が眠った時のようだった。

ドス黒い気配、強烈な殺気を炭治郎に向けながら、半場脅すかのように累が言う。

それに対し無言で刀を構える炭治郎。

「おつ、丁度いいくらいの鬼がいるじゃないか」

突如として、一触即発だった彼らの間に割り込んできた鬼殺隊士。僅かに笑みを浮かべ、小物臭い言葉を吐きながら、腰に携えた刀を

抜き放つその少年に、全員の意識が向けられた。

「こんなガキの鬼なら、俺でもやれるぜ」

「な、ちよつと待てー！」

その言葉は聞き捨てならない。

累の力は炭治郎が今まで戦ったどの鬼よりも強い。それは、先ほど

の威圧感からすぐに分かった。

そして、介入してきた隊士は、お世辞にも強いとは言いがたかった。少なくとも、炭治郎より弱いというのは間違いない。

故に、声を掛けた。無惨に命を散らして欲しくないがゆえに。

だが、

「お前は引つ込んでな。俺は安全に出世したいんだよ。出世すりや、上から支給される金も多くなるからな。俺の隊は殆ど全滅状態だが、とりあえず俺は、そこそこの鬼を一匹倒して下山するぜ」

そういつて聞く耳を持たない。

そこにいるのはそこそこの鬼などではない。そう叫びたいが、少年の傲慢な態度から、今の自分が何を言っても聞かないだろうというのは目に見えていた。

なんとか彼に、累の力を伝え、助けを呼ぶよう頼めないものか。そう、炭治郎が思考を巡らせていると、

「オラァー！」

「なっ、よせ——ッ！」

思わず手を伸ばすが、遅い。

「え——」

少年の全身に、蜘蛛の巣を形作った糸が投げやりに放たれる。

間拔けな声を上げ、一瞬で細切れにされた少年。そのバラバラの死体を見ながら、思わず口元に迫る吐き気を堪える。

初めて見た、人が殺される瞬間。今までも死体は見たが、それは既に事が済んでいるものだったし、それ以外でも瀕死の重傷を負うものとも会ったが、何とか助けることが出来ていた。

気分の悪さに涙目になるが、ギリギリで吐くのを耐えて累を睨む。

「……ねえ、もう一度言っつてよ。君、今、何て言ったの？」

「分からないなら、何度でも言おう。……お前は間違っている！ 今のお前は独りぼっちだ。お前に……お前の傍に、本物の家族なんていない!!」

ブチリ、と。何かが切れるような音が聞こえた気がした。

「……お前、簡単には死ねないよ」

それが、開戦の合図だった。

一瞬で、炭治郎の視界全体に、大量の赤外線センサーのように張り巡らされる白い糸。それが一気にあらゆる角度から、順番に炭治郎へと押し寄せてくる。

最初のうちは何とか躲せるが、少しづつ体に掠るようになってきた。それに危機感を覚える。

このままでは、いずれは四肢も切られて……。

「チッ！ 〔陸ノ型 ねじれ渦〕ッ！！」

体を振り、回転しながら斬撃を繰り返す。

四方八方からやってきた糸が、一瞬で切り裂かれた。

（今だー！ ヒノカミ神楽ッ！）

ゴオオオオツツ！！ と。

今までとは一風変わった呼吸音に、累が少し警戒する……が。

「……クソ、できない……！」

「……なんだ、コケ脅しか」

ヒノカミ神楽。

原作の竈門炭治郎の切り札とも呼べる技を、今の炭治郎は使えなかった。勿論、失敗したのは、今日が初めてではない。

今までも何度か、ヒノカミ神楽を使おうとし、失敗してきた。使えないのだ、炭治郎は。どれだけ己を磨いても、記憶の中の呼吸を、舞を再現しても。

今まではそれでも、水の呼吸で何とかなってきたが、今回は難しい。

糸は斬れたから、絶対に無理とは言えないが、それでも不安は残る。

「君、さっきの奴より僕のこと舐めてるよね？」

「くっ、うるさい！ 水の呼吸 〔玖ノ型 水流飛沫・乱〕ッ！」

木を足場に、回り込むように動き死角から累へと刀を振るう。

その刃が頸に届く……その時、

「ふんっ」

「!? がアッ……！」

無造作に振るわれた右腕に、右頬を殴られる。

咄嗟に受け身を取ってダメージは減らしたが、頬のズキズキと来る

痛みに少し集中が途切れそうになる。

「……お前はあとでいいや。先に母さんを縛らないと。逃げられたら困るし」

「えっ……？」

ふと、思い出したように、腰が抜けて倒れこんでいた操り糸の鬼へと視線を向け、右手を向ける。

その手から放たれた糸が、操り糸の鬼の四肢に巻き付き、引き千切れそうなほど縛り付ける。

激痛で声にならない叫びをあげる操り糸の鬼だが、累は関係ないと言わんばかりに力を強めた。

「やめろオツツ!!」【肆ノ型 打ち潮】ツツ!!!!」

連続で繋がった斬撃が、操り糸の鬼を縛る糸を切り裂いていく。

それを見た累が、まるで珍種の生物を見るかのような目で炭治郎を見て、問いかけた。

「何なの、お前？」

「……こつちが聞きたい」

静かな怒りを滲ませて、炭治郎が言葉を返す。

「なぜ、彼女を狙う？ 彼女は俺たちの戦いに関係はない、少なくとも、今、傷付ける必要はないはずだ！」

「戦い？ 変なことを言うね。僕がやってるのは処刑だよ、勝負じゃない。それに、ソイツが逃げたら、僕の力を返してもらえないしね」

あつげらかんと、むしろ当然のことを聞かれて逆に驚いたように言葉返す累。

「……ふざけるな」

「僕は至って真面目だけど」

「黙れッ！ やはり俺は間違っていない！ おかしいのはお前だ!!」

「……よっぽど死にたいみたいだね。でも、僕は優しいから、その言葉を取り消すなら、一息で殺してあげるよ？ まあ、取り消さないなら、苦しめるけど」

まるであやとりをするかのように手元で糸を操りながら、再び炭治郎へと攻撃を仕掛ける累。

炭治郎は操り糸の鬼を抱きかかえ、糸を回避して距離をとる。

「……どうして」

「ん？」

「どう、して……私を助けるんですか？ 貴方は鬼狩り……私を殺しこそすれど、守る理由なんて……」

糸が上空から炭治郎の脳天に振り下ろされる。それを咄嗟に回避し、巻き上がった土煙を利用して操り糸の鬼を木陰に隠す。

そして、木を盾にしながら累を監視しつつ、質問に答えた。

「確かに、俺は君を斬るよ。俺は鬼狩りだ」

「……、」

「だけど、苦しませない」

「えっ……？」

炭治郎は操り糸の鬼の手を取り、真っ直ぐ目を見て訴えかける。

「君はきつと、今までもたくさんの人を殺してきたんだと思う。それは許されないことだ。だけど、死を望むというのなら、俺はそれを拒絶しない。君が自分の行いを悔いているなら、俺が優しく殺す」

「……、」

「……目の前で殺害予告されたらちよつと奇妙かもしれないけどさ。……俺はアイツが許せ^累ない。アイツに苦しめられる貴女を助きたい。貴方を斬るのは、その後だ。だから、ここに居てください。俺が貴女を斬る、その時まで」

それだけ伝えて、炭治郎は木の陰から出る。すでに土煙は晴れ、見渡しはよくなっていた。

そんな炭治郎の後姿を見ながら、操り糸の鬼は思う。

（分からない……彼は、私を殺す。勿論、この苦しみから解放されるなら、死んでもいい！……でも）

胸が熱い。心が、今までで一番軽い。

（心地良い……彼に守ってもらえてるのが嬉しい……どうしてなの？

こんなの、知らない……！）

それは、母親であるなら、必ず知っていないといけない感情。そして、長らく傷つけられて忘れていた、守られることの安心感。それが、

彼女の傷ついた心を少しだけ、癒していった。

偽物とはいえ、家族にも守ってもらえなかった少女は、皮肉なこと
に、自分を殺しに来た鬼狩りによって守られ、救われたのだった。

操り糸の鬼は、自分の高鳴る胸を抑え、戦闘へと目を向けた。

兄の家族

シン、と静まった森の中で、二人の少年が対峙する。

片方は全身が真っ白な肌で覆われ、その手は蜘蛛の糸であやとりをしていた。

もう片方は緑と黒のはんてんを羽織った、銀色の刀を構えるボロボロの少年だった。烈火の如き視線で、白い少年……累を睨みつけている。

「……少し、本気を見せてあげる」

ぼそり、と。累が呟いた瞬間、彼の掌が血の色に染まり、それが糸に伝わって糸の方も変色していく。

まるで本物のセンサーのように、赤い糸が周囲に罠のように張り巡らされた。

（しまった……この糸の強度は、ヒノカミ神楽ほどの技でないと斬れない……いや、拾ノ型なら！）

「水の呼吸【拾ノ型 生生流転】ッ!!」

水の流れが何かの生き物の形をした……緑に輝く瞳、蛇のようになる胴体。その姿はまさしく龍。

そのようなイメージを持たせられる剣技が、累へと迫った。その迎撃のため、累は強化した糸を使って炭治郎を切り刻もうとする。

だが、炭治郎はその糸に何度も刃を重ねる。最初ははじく、いなすことしかできずにいたが、回転するごとに一撃の威力が増して行き、

「やった……！」

「何?」

赤い糸を切り裂いて、勝ちを確信する。一気に止めを刺すため、より一層、柄に力を籠める。

（厄介だな……血鬼術・刻糸輪転こくしりんてん）

瞬間、炭治郎の目の前に竜巻のような渦を巻いた糸が、容赦なく襲い掛かってくる。

そして、直感で理解した。今のままでは、目の前の渦を裂くことはできない、と。

(どうする……？ どうすれば……！)

「危ない!!」

何かに突き飛ばされ、左の茂みに埋もれる。そして、肉の裂ける音が聞こえた。

誰かが身代わりになった、自分の。それを認識した瞬間、急いでその人物の介抱に当たろうと飛び起き、

「……え、禰豆子、子……？」

「う、うう……、大、丈夫……？」

片足の無くなった禰豆子が、地面に倒れ伏して炭治郎の安否を問いかける。だが、それどころではなかった。

この世の終わりかのような絶望の表情を見せ、すぐさま禰豆子に駆け寄る炭治郎。

「禰豆子！ 禰豆子、禰豆子!!」

『大丈夫か?! しっかりしろ!! 絶対に助けるから……死なないでくれ!!』

「……えっ?」

重なる。自分の知らない……否、よく知る人物と。

それは、前世。自分が竈門炭治郎を名乗るより前の話だ。

ある少年がいた。名は白銀竜也。

両親は死別したが、姉と、その姉が拾ってきた少女、義理の妹が一人。姉の名は白銀華。しろがねはな 義妹は白銀美優。しろがねみゆ

少しだけ特殊だった家庭、だが一般的な生活をし、普遍的な不自由な生活だった。姉は既に成人しており、少年も高校生。妹も中学に入学し、一年が経っていた頃だった。

幸せだった。口にすることはないが、そう思える生活だった。

一瞬で、崩れ去ったが。

(そうだ……あの時、帰りの電車が遅れて、家に帰るのが遅くなつて……)

今日の晩御飯は何かな、とか。そんなことを考えながら帰宅した。ただ、それだけだったのに。

家に着くと、何故か電気がついていなかった。そこで、僅かに疑問

に思ったが、二人とも家を出ているのか？　　と、思い、特に気にすることもなかった。

玄関前につき、ドアノブに手をかけ、何故か鍵が閉まっていなかったことに気づいた。不用心だなあ……それくらいにしか思わなかった。

いや、何かあるかと思いたくなくて、無意識にそう思うようにしていただけなのかもしれない。

扉を開けて、玄関で靴を脱ぐ。何故か、ボロボロだった。流石に、何かがおかしいと思わざるを得なかった。

『……は？』

リビングにやってきて、不安が、あり得ない妄想……非現実的な事実が、目の前にやってくる。

血まみれでグチャグチャの部屋。壊れた机や割れたテレビ。長い髪が乱れた女性……血を流しながら息絶え絶えのようすで、その脇から流れる出血は、もうその人物が長くないことを刻みつけていた。

だがそれでも、駆け寄って抱き起す。

『……アンタ……なんで？』

『なんでとかどうでもいいから!!　何があつたんだ!!　なんで、なんでこんな……!!』

ガサゴソと。近くから音がした。まさか、いや、そんなはずはない。

『おい、誰だそこにいるのは……?』

『?!　ひひい!　お、俺は悪くねエ!　いきなり家に戻ってきたせいづらが悪いんだ!　この時間は誰もいないはずなんだ!　なのになんで……!!』

見たこともない知らない男性。汚らしい格好をした40代後半の男だった。

強盗……いや、その男性の目的は空き巣だろう。どちらにせよ、そいつがどうしようもないクズだという認識が少年の中で出来上がっていることに、変わりはなかったが。

『……あ』

狼狽し、年下の少年にすら怯える情けない男……その足元には、片足の無い妹がいた……それを認識して、少年の理性は崩壊した。

そこから先のことは覚えていない。ただ、気が付くと自身は全身傷だらけで血まみれで、床には顔中が腫れ上がり、ボロボロのボロ雑巾のような男が横たわっていた。

『もういいから……救急車、美優を……』

『な、何言つて……二人とも助ける——』

『昔、言ったでしょ？ 私とあの子、どちらとも大変なことになってるなら、美優から助けろつて……。私はいいいから……早くしろバ……カ……カ……』

『！……、』

瞳から、光が消えた。最後に妹を託して、姉は死んだ。

涙も出ない。既に枯れてしまった。だから今は、これ以上失わないように……。

『お、兄ちゃん……？ 戻ってきたの……？』

『大丈夫か?! しっかりしろ!! 絶対に助けるから……死なないでくれ!!』

『……大、丈夫だ、よ……私、強い、し。将来、は某女子プロレスラーを……越えるんだよ……？ だから、泣かないで……』

こんな時まで兄を気遣う妹の優しさに、また胸が締め付けられた。何故だ、何故こんなことに。何も悪い事なんてしてなかったはずなのに。

疑問だけが渦巻く中、携帯で救急車を呼び、介抱する。

いつもの暖かさがなく、少しづつ冷たくなっている。

『……ああ、なんでなんだろう……どうしてこんなことになったのかな……？』

『……もう喋るな……お前はきつと助かる……だから……!』

『……お姉ちゃん、は……？』

『っ』

思わず口籠る。真実を告げるべきか、それとも隠すべきか。だが、そもそも口籠った時点で、答えているようなものだ。

少女は目を伏せ、そっか、とだけ呟き、何も言つてこなかった。その瞳から、悲しみの涙だけを流して。

世界は、思ったより残酷だ。優しい人物から死んでいく。それを、身をもって理解させられた。神様は最低だ。クズみたいな奴ほど生かしている。決して罰の一つも下さない。

『お前だけは……守り続けるから……もう二度と、こんな目には合わせない……必ず守るから……!!』

『お兄ちゃん……ッ?! お兄ちゃん!』

『?』

グサリ、と。背中に何かが刺さり、熱したように熱くなる。さらに、その熱さが胸にまで届いた時、少年の意識は暗転した。

心臓を突き刺された。即死だ。背後にいたのは、顔の腫れ上がった男。涙と鼻水で顔をクシャクシャにしている、見るに堪えない相貌となっている。

しかし、少女にはそんなことは関係なかった。最早その視界に映っているのは、屍となった少年だけだった。

もう、これ以上はいいだろう。そのまま妹も死んだ。最後に、少年への未練を残して。

「……あ、ああ……。彌豆子彌豆子彌豆子っ!!」

殺された後、何が起きたかは分からない。だが、想像はできる。

手元が震える……呼吸が乱れ、ただ名を呼び続ける。その姿は、人を守る鬼殺隊などではなく、大切なものを取り上げられそうになって怯える、一人の少年だった。

「……そ、の……女、まさか、兄妹……妹?」

震える声で、累が発した。

全くもって予想外。彼の表情が、その内心を物語っていた。

「妹は鬼……? それでも人間の兄を庇って……一緒に、戦って……そうか……」

ついに理解した。そう言わんばかりに歓喜の感情を滲ませ、言葉を続けた。

「これが……本物の絆!! 僕が求めるべきもの……欲しいッ!!」

そして、今までとは雰囲気が変わった様子の累が、炭治郎へと言葉を投げかけた。

「……坊や。話をしようか」

「話……だと……!!」

炭治郎の声が荒れる。

「ふざけるな！ 禰豆子を傷付けたお前と話すことなんて何も無い!!」

「そう言わないでくれ。僕はね、感動したんだ。君たちの絆を見て、体が震えた。この感動を表す言葉は、きつとこの世にはないと思う」

嘘偽りが感じられない。だからこそ、逆に不気味だった。胸に手を当て、穏やかな笑みを浮かべて言葉を続ける累。

「でも、君達は僕に殺されるしかない。悲しいよね、そんなことになったら。でも一つだけ……。それを、一つだけ回避する方法がある」

累は口元に人差し指を立て、

「君のその妹。君の妹を、僕に頂戴。大人しく渡せば、命だけは助けてあげる」

「……………あ？」

一瞬、本当に理解が出来なかった。まるで言語の違う外国人に話しかけられたような、そんな感覚。

だが、相手が話すのは日本語。当然、理解は追いついていく。

そして、

「何を言ってるんだお前は……」

「君の妹には僕の妹になってもらう、今日からね」

「殺すぞ？」

斬る、とか。倒す、とか。そう言った何処か誤魔化した表現ではない。もっと直接的で、それ故炭治郎の心境を明確に表していた。

ドス黒い殺意、慈悲の欠片も感じない気配。僅かに累が目を細めるが、咎めるわけでもなかった。

「……禰豆子はモノじゃない。自分の意志がある……禰豆子が望まないことを、強制するつもりはない……!」

「大丈夫だよ。心配いらない、絆を繋ぐから。僕の方が強いんだ。恐怖の絆だよ、逆らうとどうなるか、ちゃんと教える」

「貴様アアアアアアツツ!!!!」

吼えた。

最早、隠されもしない強烈な殺気が累に叩きつけられるが、当の本人は涼しい顔で、

「鬱陶しい……大声出さないでくれる？ 合わないね、君とは。もういいよ、殺して奪うから」

「お前を、殺す……!!」

炭治郎が殺意とともに刀を構える。

「威勢がいいなあ。できるならやってごらん。十二月月である僕に勝てるならね」

左目に掛かっていた髪をたくし上げ、そこに書かれる数字を見せつける累。

そして、再戦が行われた。

竜

十二鬼月。

鬼舞辻無惨に多くの血を与えられ、さらに沢山の人間を喰らうことで強くなり、鬼舞辻直々に認められ、数字を与えられた者。

その一人が、今、目の前にいる。

(下弦の伍……だが、関係ない！)

震えはない。むしろ、怒りでより力が籠もる。

繰り出す技は一つ、拾ノ型のみ。

「水の……」

「遅いよ」

シユン、と。空気を斬る音がし、累の手から糸が伸びる。白い糸だ。だが、それは炭治郎へと向けられたものではなかった。

咄嗟に、累の真意に気づき振り返るが、時すでに遅し。そこに、倒れて再生を待っていたはずの禰豆子はいなかった。

そして、ビチャリ、と。炭治郎の持つ刀に、赤い液体が掛かる。ゆっくりと、上を見上げると、

「ね、禰豆子ーっ！！！！」

「が、アアア……！！」

「今思い出したけど、こいつ、さつき僕に逆らった奴だね。少し、教育しないと」

「禰豆子を、離せエエエエエツツツ！！！！」

突貫。

技も出さずにただ突っ込むだけ。冷静さを失い、怒りで我を忘れた獣のように、累へ牙を剥く。

「うるさいよ。このくらいで死にはしないだろ、鬼なんだから。でも、しばらくは出血させる。それでも従順にならないなら、日の出までこのままにして……少し炙る」

恐ろしいことを口にしたが、炭治郎へと糸を伸ばす。怒りで回りが見えていない炭治郎は、一瞬で糸に殺されそうになり、

「オラア！！」

突如、右から何か衝突してきて、間一髪で回避できた。

「何やってんだテメエ！　ちゃんと相手を見ろや！　勝手にくたばってんじゃねえぞ！！　お前を倒すのは、この俺なんだからな！！」

「伊之、助……？」

猪の被り物をした、刃毀れの酷い日輪刀を二本持つ男、嘴平伊之助が、怒り心頭と言った様子で叫ぶ。

「さつきと立て、アイツは強エ。今まで戦ったどんな鬼よりも。けど、負けねえ。負けるつもりは毛頭ねえ。俺は鬼殺隊、嘴平伊之助だア！！」

勇ましい叫びとともに、累へと向かっていく伊之助。

「なんだお前……僕らの問題に関わるな、死ね」

「うるっせえゴミ糞がア！　獣の呼吸【肆ノ牙　切細裂き】ツ！」

前方向に素早く放たれた六連撃が、累を捉える。

だが――

「――なっ、刃が、通らねえ……！」

「当然だ。お前なんかじゃ、僕の体につけるどころか、糸すら斬れないよ」

少し離れ距離をとった伊之助に、累が呆れた様子で告げる。

そして、白い糸を伊之助に向けて放ち、

「ンだとオ！！　舐めんじゃねエエエ！！！！　【弐ノ牙　切り裂き】ツ！！」

勢いと同時に十文字に放たれる二刀。

そして、パキーンツ、という音が響く。

「な、折れ……」

「伊之助エ！　【陸ノ型　ねじれ渦】ツ！！」

危うく首元を切られる、その寸前に、炭治郎が割り込んで糸を切り裂いた。

(……俺じゃ斬れなかった糸を……こいつは簡単に……！)

伊之助が、自身の手元にある折れた二刀を見て思う。

助けるつもりが、逆に助けられた。その事実が、伊之助の自信にヒビを入れていく。

「伊之助！　ボーっとするな！」

「……えっ」

ドガツと。腹を蹴り飛ばされ、木に叩きつけられる。

呼吸で受け身を取り損ね、さらにダメージが広がっていく。

(まずっ……俺、足手纏いにしかなってねえ……)

「伊之助!!」

自身を呼ぶ声が、遠い。意識が朦朧とする。

(俺って、あんまり強くねえのか……? 畜生……)

そこで、伊之助の意識は暗転した。

「よくも伊之助を……絶対に許さない!! 水の呼吸【拾ノ型 生生流

転】ツ!!」

うねる龍の如く回転する剣技が、累へと迫る。

「何回同じ技を使うんだい? もう見切ったよ。血鬼術・刻糸牢」

蜘蛛の巣の檻のような技が、走る炭治郎を覆い隠す。

情けない。何度も敵の策に嵌り、窮地に陥る。今までは助けもあつ

てなんとか生き延びたが、これは無理だ。

だから、探す。ここから逆転する方法を、自分の中で。

(この糸を斬るにはまだ回転が足りない……死ぬわけにはいかない。

禰豆子も伊之助も、アイツに殺されてしまう!)

だが、どれだけ思考を巡らせても、打開策が浮かばない。

檻の迫る速度がゆっくりに感じるが、それでも、時間が圧倒的に足

りない。

(どうする……どうすれば……?)

『少年。呼吸だ。だが、ヒノカミ神楽ではない』

知らない声だ。だが、どこか懐かしさを感じる。

『君が使うのは、君だけの呼吸、君だけの舞いだ。怒りも、悲しみも、

守りたいという思いも、全てを込めて』

『大丈夫だって。アンタなら出来る、私の弟なら、それくらいやれつて

んだ』

『「お兄ちゃん!!」』

ドクンツ、と。心臓が鼓動する。

脳裏に廻る、竈門炭治郎の人生、竈門炭十郎が行う舞い。そして、自

身の人生。姉の声。二人の妹の姿。
殺すためじゃない、守る為に振るう刃。

「我流、竜の呼吸【銀しろがねノ舞まい】乱舞【ツ!!】」

現れたのは、銀色の竜。四足歩行で、背中から巨大な翼の生えた……しかし、何処か幼い、子どものような雰囲気を感じた存在だった。手足に長い尾、そして体表。そのすべてが銀色の鱗で覆われており、炭治郎の持つ『銀色の日輪刀』を彷彿とさせる、飛竜とも呼ぶべきもの。

そして、その竜が糸に喰らいつき、それと同時に炭治郎が刃を振るうと、糸の檻は簡単に砕け散った。

(な、に……なんだ、あれは……!!)

累が目を見開いて驚愕する。

今までとはまるで違う、異質な技。本来、鬼殺隊士の技は、その時に発生するエフェクトは、剣士の闘気が形となったイメージに過ぎない。

だが、目の前の竜は、イメージというには、余りにもはつきりしていた。まるで、すぐそこにいるかのような……

(いや、違う……あれは……!)

だが、やはり竜はいない。

それは、単なるイメージに過ぎない。では、何故そこにいるかのように感じるのか？ 答えは一つ。

(あの場にいるのはアイツだけ……僕が、アイツを竜だと思い込んでいる……?)

炭治郎から放たれる闘気が、対峙したものに竜というイメージを植え付け、幻想を見せていた。

十二鬼月である累に、それだけの闘気を見せつける。その事実を驚愕する暇もなく、

「く、そっ!」

ヒュンヒュン、と。赤い糸が、炭治郎を引き裂かんと縦横無尽に駆

け巡る。

糸は、独特な、今までとは一風変わった動きをする炭治郎を完璧には捉えられずに居るが、炭治郎のほうは限界が近かった。

(まずい……呼吸が最適じゃない。体にかかる負荷が大きい！ 一気に勝負を決めないと、こつちが先に倒れてしまう!!)

いきなり生み出して、即実践投入したせいか……強力だが、デメリットが大きい。

時間をかけて完成させればなくなるだろうが、今はできない。している場合ではない。

走れ。皆を守る為に。

「はああああああああああああああ—— ツツ!!!!」

(こ、いつ……!!)

張り巡らされた糸を次々と切り裂き、一気に懐へと近づく。

一瞬で近づかれたことに驚愕した累が、全力で後方へと飛んだ。それを追尾するように追い続ける炭治郎に、累は迎撃のため糸を、最高強度で放つが、刃が折れることはなかった。

木を使って入り乱れるように逃げる累を、炭治郎はどこまでも追いつける。途中木の枝に衝突するも、へし折って突き進んでいく。

最早、その目は累以外を見てはいない。己が敵を滅するため、力を振り絞る。

「こつ」

刃が、届く。その寸前まで累を追い詰めた炭治郎。だが、それと同時に、累の頸元と、炭治郎に向けて糸が伸びた。

片方は累が死を回避するための物、もう片方は飛び込んできた炭治郎を細切れにするためのもの。

逆転を確信し、ほくそ笑む累。だが、

(? ……何故、こいつは絶望しない……死を前にしているんだぞ……!!)

炭治郎は、その瞳は、決して諦めていなかった。

声が、届く。

まるで獣のような……それ以上の何か、竜のような咆哮が耳鳴りに木霊する。

「……お兄ちゃん」

真つ暗な世界。

見渡す限り何もない世界……そのある一点で、一際強く輝く光。銀色の輝き。

それが、禰豆子を照らす。

『——立って』

誰かの声が聞こえる。知らない声、だけど何故か、よく知っている声だった。

『お兄さんを守る為に、立って』

「……できない」

涙交じりに、禰豆子が呟く。

「守りたい……助けたい。なのに、体が動かないの……!」

どれだけ力を込めても、腕が上がらない。体が持ち上がらない。その事実には、ただ歯を食いしばることしかできずにいる。

そんな禰豆子へ、声の主の少女は、ほっそりとした手を伸ばし、

『じゃあ、一緒に立とう。貴女のお兄ちゃんを助けるの』

「……どう、いう……?」

ドクン、と。鼓動のような音とともに、掌が熱くなる。

その手には、燃える……紅蓮の炎。

「血鬼術……爆血ツ!!!!」

カツと目を見開いて、掌に籠る熱を解放する。

叫びとともに、周囲に張り巡らされた糸がすべて焼き切れた。

「何?」

(……だ！……しかない!!)

カンツ!! と。銀の刃が、大岩のような固さをした累の頸元に届き、音を鳴らす。

いつの間にか、炭治郎は炎を纏って燃え盛り、その背後で飛ぶ竜は、銀色の体表を、紅蓮に染めていた。

「これが俺達の……力きずなだああああああああ—— ツツツ!!
!!!!」

赤い閃光と、竜の咆哮が、森全体に駆け巡った。

(死ぬ……僕が？ あり得ない……どうして……)

死ぬ間際、累の脳裏に廻ったのは、失われた人間の記憶。

自信を強い体で産むことのできなかった母の懺悔と、死す時ともにいるという父の悲しい親愛。そして、それを裏切つて、自ら繋がりを断つた自分。

皮肉な話だ。誰とでも繋がる、糸という力を持ちながら、それは本当に斬つてはいけないものほど切り裂いてしまうのだから。

(……ごめんなさい……ごめんなさい……!!)

決して届かないだろう懺悔。そう分かつてはいても、言わずにはいられなかった。

そして、気づく。落ちていく自分の頭を、ジツと見つめる操り糸の鬼の視線に。

「(ごめん、ね……)」

ゆっくりと、彼女に向けて謝罪の言葉を口にした。伝わっているかは分からない。でも、せめて一言、言いたかった。

できることなら、届いておいて欲しい。最後にそう思つて、灰と なった。

「……さようなら、累」

祈るように手を握る操り糸の鬼が、小さく口にした。

「ハア、ハア、ハア……」

息切れが酷い。呼吸を維持できないほどに。

炭治郎がなんとか全集中の呼吸・常中を行おうとするが、余程負荷

が酷いのか、まるで呼吸が続かない。

出来ないなら仕方がない。そう思つて少し深呼吸をし、糸がなくなつたことで地面に落ちた禰豆子のもとに急ぐ。

「大丈夫か、禰豆子!?」

「……うん。平気……それより」

禰豆子が茂みから現れた操り糸の鬼へと視線を向ける。それは、どこか困惑したものだつた。

無理もないだろう。彼女が鬼である以上、人を喰らつた存在である以上、斬らなければならぬ。

だが、困惑の理由はそれだけではない。

「……あれ? なんかさつきと姿が変わつてる?」

今までの真っ白な肌はすっかりなくなり、黒い髪と黄色い瞳、明らかに別人ともいえる風貌となつていた。

「これが私の本当の姿なの……どうせ死ぬなら、せめてこの姿を見てほしかった」

「え、それって……」

「禰豆子、下がつてくれ」

ボロボロの体で、刃毀れが酷い刀を構える。

繰り出す技は一つだけ。

「水の呼吸——」

「貴方の背中を見て、胸が高鳴つた」

「!?」

刀が震える。いや、刀を持つ手が震える。

「ずっと考えて考えて……ようやく今、分かつたの」

「——【伍ノ型 干天の、慈雨】……!!」

緩やかな雨に打たれたような感覚が、操り糸の鬼の頸から全身に駆け巡る。

まるで痛みを感じない一撃。

「……ありがとう、累を解放してくれて。そして、私に、本当の恋を教えてください」

「っ」

その言葉を最後に、少女は泡となって消えた。

再会と逮捕

タツ、タツ、タツ、と。

ステップを踏むような足音と一緒に、蝶のような舞を連想させる動きで、一人の女性が木の枝を跳んでいた。

腰に携えるのは日輪刀。素顔には笑顔が張り付き、しかしどこか狂気を滲ませた、いつそ痛々しさすら感じる笑みだったが。

「先ほどの赤い光……鬼の気配はもうないと思つてましたが、あと一つ残つてますね。先程の女性の鬼と関係があるのででしょうか？」

女性の脳裏に、全身に紫の痣のようなものが広がり、悶え苦しんで死んだ鬼の少女の姿が思い起こされる。

「あら？ 近くに富岡さんとカナヲもいますね。これは、少し相手の鬼がかわいそうですね。仲良くできる鬼ならいいんですけど……」

口では素晴らしいながら、むしろ速度を加速させ、鬼の気配がする方向へと進む女性。

「……いましたね」

女性は腰の刀を引き抜く。

その刀は、刀というには形状が奇妙だった。刀身は切っ先だけを残して刃引きされており、明らかに頸を断つための武器ではない。

「じゃあ、さようなら」

仲良くできればいいのに。

そんなことを口にしながら、殺す気しか感じさせない言葉とともに、木々の隙間を抜け広い場所に出る。

歪な存在である彼女が目指していたのは……地面に崩れ落ちて涙を流す炭治郎と、それを背後から見守る彌豆子だった。

「………ッ!! 危ない彌豆子ッ!!」

「えっ………キヤアッ!!」

ガアンツ!! と。

鋼の打ち合う音と一緒に、火花が散る。

「………誰だ？」

「おや？ どうして邪魔をするんですか？」

不思議そうに小首を傾げ、視線は依然と、禰豆子を捉えたまま、謎の女性が問い返す。

疑問を疑問で返されたが、特に気にした様子もなく、炭治郎は答える。

「妹だ。俺の妹なんだ……俺の家族を傷つけるな」

「そうですか……じゃあ、優しい毒で殺してあげないですかね」

毒？ 唐突に出てきたその言葉に、炭治郎が首を傾げた。

鬼を殺すには、日輪刀で頸を斬らなければならぬ。当然、人間の毒など効くはずがない。

「名乗っておきましょうか。私は胡蝶しのぶ。私は鬼を斬ることはできませんが、鬼を殺せる毒を作った、ちよつと凄い人なんですよ？」

「な——！！」

それが本当なら、ちよつとどころの騒ぎではない。鬼は強い。体の頑丈さもさることながら、真に脅威なのはその身体能力。それに対抗するため、鬼殺隊は呼吸法や型を編み出した。

だが、この毒があれば話は別だ。なんなら、鬼を罠にかけた後、毒を打ち込むでもいいし、遠距離から弓矢などで射抜くという手もある。

相手に近づかなくても、鬼を殺せる。無論、鬼の身体能力ではそう簡単には行かないだろうが、鬼を殺す手段が一つに限られていた中で、新たな別口を作り出したのだ。

それだけでも称賛もの……それを「ちよつと凄い」で済ませられる女性、しのぶに、炭治郎は戦慄を覚えた。

（何者なんだこの人は……毒の存在は、もつと誇ってもいい物なのに……この人は一体、何を目指しているんだ……？）

「もういいですか？ じゃあ、殺しますね」

バツ!! と。

しのぶは一瞬で上空に飛び上がり、突きの構えを取って舞い降りる。

それを迎え撃つように、炭治郎は竜の呼吸の構えを取り――

「ガハッ!」

(ダメだ……今の体の状態じゃ、竜の呼吸は使えない……水の呼吸に切り替えないと……!)

激痛で呼吸が止まる。

竜の呼吸が掛けた体への負荷が、まだ完治していない。元々、作り立ての言わば試作品のような呼吸……反動がこの程度で済むのは寧ろ僥倖だ。

しのぶを迎え撃つため水の呼吸を使おうとするも、いつもよりも発動が遅い。一瞬、呼吸を止めてしまったせいで、素早く切り替えることが出来なかったのだ。

呼吸を整えている間に、既にしのぶは炭治郎の間合いにいる。

(まずい……!)

「させん」

ガアンツ!! という音とともに、影が割り込んできた。

片方ずつでデザインの違う羽織。悪鬼滅殺の字が彫り込まれた日輪刀を構える男。

水柱、富岡義勇が、そこにいた。

「えっ、どうして……?」

「……何やってるんですか、富岡さん?」

「退^ひけ、胡蝶」

短く、明確な拒絶を示す富岡。

流石に理解が出来ないと言った雰囲気、しのぶが再び問いかける。

「全く、鬼とは仲良くできないって言ってたくせに、何なんでしょうか?」

「鬼が人を喰らう限りは……そう言ったはずだが?」

「じゃあなんですか? その鬼の娘さんは、人を喰らったことがないと、そう言うんですか?」

「ああ」

「……富岡、さん……!」

かつての恩人、富岡の信頼に、胸を熱くする炭治郎。

出会いも、話した時間も、短い。それでも、信頼されている。

「行け。俺が時間を稼ぐ」

「はいー」

「あと——」

「なんですか!？」

彌豆子を箱の中に入れながら、富岡の言葉を待つ炭治郎。

「——我妻善逸という隊士に伝えておけ。俺は間に合った、とな」

「……えっ?」

「行け!」

「——ッ!!」

問いかける暇もない。既に争いは起こっていた。

鋼の打ち合う音を背後に、炭治郎は駆ける。

「……俺は、どうすればいいんだ……?」

既に彌豆子は眠っている。今までで一番大きなダメージを負ったから、眠るのがとても速かった。

しかし、眠っているということは回復しているということだから、気にはしない。

それでも、この状況下で一人というのは、少し心細いと感じた。

「……なんとか俺が逃げたとして、富岡さんはどうなるんだ? あの人は大丈夫なのか?」

この状況で他人の心配が出来る程度には余裕が生まれているが、しかしあの場に伊之助を置いてきた事、そして既に善逸の事が頭から抜け落ちていることにはまだ気づいていないようだ。

「——ッ!! 殺気!!」

明確な殺意……しかし、自分に向けられたものではない。

より正確に言うなら、自分の背、つまり眠っている彌豆子に向けて発せられたもの。

炭治郎は刀を構え、水の呼吸の構えを取る。

「……そこだー!」

「——ッ!」

背後から感じ取った気配に合わせ、回転するように刀を振るう。

互いの刃が打ち合い火花が散り、炭治郎の背後の人物をわずかに照らした。

視線の先には、鬼殺隊の隊服に白いケープを纏い、サイドテールに髪を結んだ、紫色の瞳をした少女がいた。

その手には淡い桃色に染まる日輪刀。口元にはうつすらと浮かぶ笑みが、夜の月の陰に隠れ怪しさを魅せていた。

「……覚えがある。俺と同期の子か……！」

名前は知らない。だが、印象的だったので、記憶に新しかった。

最終選別で唯一無傷、汚れ一つない状態で試験を突破した子。その実力は計り知れず、無意識に刀を握る手に力が籠もる。

「……、」

「くっ……！」

言葉を交わさない。無言のまま刀を振ってくる少女の機械染みた動きが、炭治郎に危機感を与える。

「水の呼吸……！」

「花の呼吸」

長引かせると不味い！

直感でそう判断した炭治郎は、勝負を決めるために技を繰り出そうとし、刀を構える。水の呼吸の壺ノ型の構えだ。

それを見た少女は、炭治郎の知らない、全く別の呼吸、未知の技を持って迎撃しようとする。

「【漆ノ型 雫波紋突き】ッ!!」

そこで、技の発動の直前に、咄嗟に構えを変え、漆ノ型を発動する炭治郎。

相手は人間だ。それ故、殺傷力が低く、スピードのある漆ノ型を使い、少しでも攻撃した後で逃げようという算段だ。

……だが。

「【陸ノ型 渦桃】」

炭治郎によって繰り出される最速の突き。

それを少女は、飛び上がり、空中で身を捻りながら回避し、炭治郎の背後を取る。

「……貴方、炭治郎？」

「……そうだ」

少女への警戒を少し緩めつつ、刀を収める炭治郎。

それを見た少女もまた、刀を鞘へと戻す。それを見た炭治郎はほと息をついて、箱を下ろして地面に寝転んだ。

もう、体力は限界だった。

「……どうなるんだろうな、俺達……」

きつと、届いてはいないだろうと理解しながらも、禰豆子へと話しかける炭治郎。

徐々に近づいてくる足音を聞きながら、ふと、思い出した。

「そう言えば、なんで富岡さん、善逸の事知ってたんだ？」

少し前。

「大丈夫かな、禰豆子ちゃんたち……」

ボロボロの傷だらけの善逸が、月を見上げて呟いた。

「……おい」

「ヒイツ!! な、何なの?! ……あ、人？」

「俺は富岡義勇。……何があった？」

「あ、えつと……」

富岡に問われた善逸が、自分が知りうる限りの情報を開示する。

それを聞いた富岡は、

「……そうか、よくやったな。もうすぐ隠のものが来るはずだ。そいつらに治療をしてもらうといい」

「あ、はい……えつと、貴方はどうするんですか？」

「無論、残りの鬼を斬る」

「そうですか……はっ!」

そこで、思い当たる善逸。この山にいる鬼は、敵の鬼だけではない。禰豆子も含まれるのだ。

つまり、彼女も殺される可能性がある。それだけは避けねばならない。

「あ、あのー！」

「? どうした?」

「あ、いや、そのう……もし、もしですよ!! もし、人を食べない、優しい鬼がいたら、どうしますか……?」

「?」

回りくどいが、いきなり本題を切り出しても仕方がない。それに、目の前の人物の鬼に対するスタンスを知らねば、話を切り出すことも出来ない。

「……そんな鬼はいない」

「うっ……そう、ですよね……」

「……一人を除いてな」

「えっ……?」

富岡は、昔を懐かしむように、空を仰ぎ、話しだした。

「これは他言無用で頼む。……二年前だ。俺はある任務で、山を訪れた。その近くで、鬼が出るという報告を受けたからだ。……そこには、確かに鬼がいた。だがそれは、鬼にされた少女だった」

「……、」

「そして、その少女を妹だと言って庇う、兄がいた」

「えっ」

どこかで聞いたことのある話に、善逸が声を漏らして驚く。

それに気づかない富岡は、彼を知る者がいたら驚くほど饒舌に語る。

「……その二人は、互いで互いを庇い合った。普通、鬼になったばかりの鬼は飢餓状態となり、家族だろうと容赦なく食い殺すはずなのに、妹は兄を庇い、兄はそんな妹を信じて、俺に立ち向かった。……俺は、この兄妹に可能性を見た。こいつらならば、何かを変えるのではないか、とな。俺はその兄妹に鬼殺隊になるよう促し——」

「あ、あの!! そ、それってもしかして、炭治郎と禰豆子ちゃんのことじゃ——!」

「!? ……知っているのか?」

「えっと、俺の……友達で、多分今、戦っていると思います」

「そうか、と。一言眩き、

「なら、任せろ」

「えっ……?」

「一度手を取ったからには、最後まで責任は持つ」

「! お、お願いします! あ、俺、我妻善逸っていいいます!」

「そうか、二人にも、お前の無事を伝えておく」

そういつて、あつと言う間にその場を去っていった富岡。

その次の瞬間、森全体に赤い光と謎の轟音が響き渡るが、不思議と善逸は恐怖を感じなかった。

「……大丈夫だよな、二人とも。それに、伊之助も……」

共に山へとやってきた仲間を憂う言葉が、夜空へと消えていった。

鬼殺の柱とお館様

那田蜘蛛山から帰還した（という名目で拉致された）炭治郎は、いつの間にかどこかの屋敷のような場所の庭に連れられていた。

そして、そんな彼の目の前には、八人の鬼殺隊士が、ジツと炭治郎を見ていた。

「頭悪そう……帰っていいですか？」

「ふぎけんなツツ!!!!」

「べぶらつちよ!!」

開口一番に炭治郎が言い放った言葉に、近くにいた隠かくしの男がその頬を殴りつけて黙らせた。

今、彼は鬼殺隊の「柱」という最高の地位にいる者たちによつて、裁判が行われていた。

その状況で帰っていいかななどと、ふぎけたことを抜かす炭治郎は相当疲れているのだろう。

「お、おま、お前!! は、柱の方々になんてことを……!! 取り消せば

カ野郎ツツ!!」

「いてて……」

「ハハハツ、随分と凶太い野郎だなオイ！」

「炭治郎君、でしたっけ？ 流石に目上の相手に対する態度がなっていないですよ？」

「嗚呼……、礼儀も知らないとは、なんと可哀そうな子供なんだ……」

「うむ。最早語るに落ちる！ これ以上の裁判は必要ない！ 鬼諸共、斬首にするべきだ!!」

上から順に、顔や体にきらびやかなメイクや飾りをした男、音柱・宇随天元。

那田蜘蛛山で出会った、胡蝶しのぶ。

額に傷のある、数珠を手を持つ大男、岩柱・悲鳴嶼行冥。

燃えるような赤い髪の炎柱・煉獄杏寿郎。

他にも、様々な「柱」たちが出揃っていた……ただ一人、風柱を除いて。

「そんなことより、富岡はどうするのかね。拘束もしていない様に、俺は頭痛がしてくるんだが？　胡蝶めの話によると、隊律違反は富岡も同じだろう」

遠くの木々の枝に寝そべっている蛇柱・伊黒小芭内が、離れた場所ですら一人佇む富岡を指差して、そう言った。

「どう処分する？　どう責任を取らせる？　どんな目に遭わせてやるうか？　……なんとか言ったらどうだ、富岡？」

「……、」

「と、富岡さん！　す、すみません……！　俺のせいで、巻き込んでしまい……!!」

「……気にするな。問題はない」

「オイ、こいつ俺たちのことは舐めてるくせに、富岡には敬語使ってるぞ……」

「私たちは富岡さんより下ということですか。これは舐められていますね。そのこの隠の方、少し強めに小突いください」

「えっ」

ゴスツ!! と。

見事な拳骨が炭治郎の脳天に突き刺さった。炭治郎はあまりの理不尽さに泣いた。

しのぶは隠の男に礼を言い、炭治郎に向き直って言った。

「富岡さんは大人しくついて来てくれましたし、後で構いません。それよりも、私は坊やの方から話を聞きたいですよ。坊やが鬼殺隊員の身でありながら、鬼を連れて任務に当たっている。そのことについて、当人から説明を聞きたい」

「……あれは、今から二年前のことです」

「そんなところから長々と話されても困ります。もっと簡潔に話してください。富岡さんといい、どうしてそう二年前から話したがるんですか？」

と言っても、全ての始まりが二年前であること。

炭治郎と富岡、禰豆子が接点を持ったのは二年前の時からそれつきりであり、それがすべての始まりである以上、そこ以外の話はする必

要が無いのだが、知らない人間には伝わらない。

故に、炭治郎は至って簡潔に、短く説明する。

「……富岡さんに発破をかけられて鬼殺隊になる決心をしました」

「富岡さんは切腹でいいですね」

「えっ」

「え、あつ。い、いやそうじゃなくて!」

まさか売られるとは思っていなかった富岡はつい間抜けな声を漏らし、しのぶの無慈悲な宣告を聞いて、言い方がまずかったのかと慌てて言いなおす。

「……妹と一緒に家の前で今後について話していたら、富岡さんが乱入してきて、それで発破をかけられて、俺は鬼殺隊に入り、妹と一緒に鬼と戦う決心をしたんです!」

「鬼を見逃したのなら、富岡さんは斬首でいいですね」

「あれ!」

何故か伝わらなかったようで、声を上げて驚く炭治郎。しかし、柱である人物が鬼を見逃したとなれば、重大な隊律違反であるのは事実なので、否定はできない。

そこで、恋柱の甘露寺蜜璃が聞き捨てならないと言った風に、口を挟む。

「妹と一緒に……? それってつまり、鬼になった妹さんと一緒に、今まで戦ってきたってこと?」

「! は、はい。そうです! 妹は戦えるんです! 俺と一緒に、鬼殺隊として!!」

ようやく見つけた突破口。逃しはしないと、炭治郎は禰豆子を鬼殺隊に残す利点を懸命に伝えようとする。

「ふん。くだらない妄言を吐き散らすな。そもそも、身内なら庇って当たり前。言うこと全て信用できない。俺は信用しない」

「嗚呼……鬼に取り憑かれているのだ。早く、この憐れな子供を殺して解き放ってあげよう」

「鎧鴉がつ! 鎧鴉なら、そのことについて正しく話せるはずです!」

鎧鴉は、鬼殺隊士が虚偽の報告をしないための対策としても存在す

る。

つまり、鴉の言うことには正当性があるのだ。それを、訴えられている側の炭治郎が切り出すということは、余程の自信があるのだろう。

伊黒と悲鳴嶼が押し黙るが、

「おい。鴉が証明できるのは、お前が鬼殺隊になってからだけだろ。さっきのお前の話じゃ、妹が鬼になったのは二年前。そこから鬼殺隊になるまでの間に、妹が人を喰わなかったことを証明できるのか？そもそも、これからも妹が人を喰わないというなら、口先だけじゃなくてド派手に証明してみろ」

宇随の言うこともまた、正論だ。

（いや、裁判って話し合いだから口先が一番重要なんじゃ……そもそも彌豆子いないから証明もなにもないんだが……）

そう思ったが、口には出さない炭治郎。

すると、再び甘露寺が口を挟んだ。

「あの……でも、疑問があるんですけど。……お館様が、このことを把握してないとは思えないです……勝手に処分しちゃっていいんでしょうか？ いらっしやるまでとりあえず待った方が……」

「ぴ、ピンクの人さん……！」

「ピンクの人?!」

「おい貴様、甘露寺を変な名前前で呼ぶな殺すぞ」

甘露寺が唐突につけられた渾名に驚愕し、伊黒が炭治郎に殺気を向ける。

しかし、そんなことは気にもせず、先程から何度も助け船を出してくれる甘露寺に、炭治郎の好感度はマックスだった。

別に女性として好きになるわけではないが、尊敬具合は富岡レベルだった。

そして、気づいた。

「……あれ、彌豆子の気配が……」

「おいおい。なんだか面白い事になってるな……鬼を連れた馬鹿隊員ってのアそいつかい？ 一体全体、どういうつもりだア？」

現れたのは柱最後の一人、風柱・不死川実弥だ。その手には、いつも炭治郎が背負っている禰豆子が入る箱があった。

「……不死川さん、勝手なことをしないでください」

「鬼が何だつて坊主？ 鬼殺隊として人を守るために戦える？ —— そんなことはなあ……有り得ねえんだよ馬鹿がッ!!」

グサリ、と。

日輪刀を逆手に持ち、箱越しに禰豆子を突き刺す不死川。

箱の中から、禰豆子の声にならない悲鳴が聞こえた。

そしてその瞬間、炭治郎の頭に血が上った。

「やめろーッ!!」

ブチイッ!! という音とともに、手に掛けられていた縄を引き千切って、不死川に向かつていく炭治郎。

それを見た不死川は、むしろ待つてましたと言わんばかりに刀を構え——

「くッー!」

「なっ——!」

炭治郎は足元の地面を蹴り、砂を巻き起こして不死川の視界を覆う。

普通ならば、絶対にありえないことだ。今彼らがいるのは、鬼殺隊の頭の屋敷。それを踏み荒らすどころか目くらましに使うなど、彼らからすれば正気の沙汰ではない。

実際、それを眺めていた柱のものは、顔をしかめ、中には刀を抜こうとしているものまでいた。

（チッ、今はそれは後回しだ！ こいつはどっちからくる……右か、左か!?!）

お館様、産屋敷家の庭を荒らしたこと、その絶対にありえない行動が、不死川の判断を鈍らせていた。

「はあーっ!!」

「なっ、正面……ガハッ!?!」

炭治郎は巻き上げた砂の中を通り、不死川の刀を持つ手を抑えたいので、その左頬を右の拳で殴りつけた。

殴られて、箱を落とした不死川が、壁に叩きつけられる。

そんな彼を見下ろしながら、炭治郎が叫んだ。

「俺の妹を傷つけるなら、例え柱であろうと容赦はしない!! ……貴方の意見が間違っているとは思わない。それでも、俺は戦う。俺は、俺の妹を守る為なら、誰とだって戦うツ!!」

「て、メエ……!! ぶっ殺してやるツ!」

炭治郎が拳を構え、不死川が刀を向ける。

一触即発の中、互いが動く……その時、

「そこまでだ。もうじき、お館様がいらつしやる。これ以上は許されないぞ」

「炭治郎、拳を引け。お前の気持ちは分かる……だが、庭を削るのはやり過ぎだ。後でお館様と庭に謝っておけ」

それを止めるために、煉獄と富岡が動いた。

「えっ、庭にも謝らないといけないんですか!! す、すみません庭さん!」

何故か地面へと頭を下げるといふ奇行を行う炭治郎だが、柱の中にはむしろ当然だと言わんばかりの表情をするものもいた。

どうやら、鬼殺隊は異常者の集まりらしい。

「お館様の、御成りです」

ほとんど同じ声帯が、庭に響く。

その声を聞いた瞬間、全ての柱が跪いて、富岡も無理やり、戸惑う炭治郎に頭を下げせた。

「——よく来たね、私の可愛い剣士たち。——おはよう、みんな。今日はとてもいい天気だね、空も青いのか? 顔触れが変わらずに、半年に一度の柱合会議を迎えられたことを嬉しく思うよ。そう言えば、さつき凄いい音がしたけど、何かあったのかな?」

「あつ、す、すみません! お館様のお庭を荒らしてしまい……!」

「炭治郎か。なあに、気にしないでくれ。庭なんて幾らでも直せる。君も元気いっぱい嬉しいよ」

「あ、ありがとうございます!」

庭の件を許してもらえ内心喜ぶが、同時に疑問に思った。何故、こ

の人は自分の名前を知っているのだろうか。

しかし、それには答えてもらえないまま、話は進む。

「お館様におかれましても、ご壮健でなによりです。益々のご多幸を、切にお祈り申し上げます」

（私が言いたかった！ お館様にご挨拶……）

「——恐れながら、柱合会議の前に、この竈門炭治郎なる鬼を連れた隊士について、ご説明いただきたく存じますが、よろしいでしょうか？」

「そうだね。驚かせてしまって、すまなかつた。炭治郎と彌豆子の事は、私が容認していた。そして、みんなにも認めてほしいと思ってる」

炭治郎、富岡を除く全員が、驚いた顔でお館様、産屋敷耀哉を見る。

嗚呼……例えばお館様の願いであつても承諾しかねる……」

「俺も派手に反対する。鬼を連れた鬼殺隊員など認められない！」

「私は、全てお館様の望むまま従います！」

「僕は反対です。お館様の庭を傷付けたソイツは、許せない」

ここで初めて喋った霞柱・時透無一郎が、舌を唱えた。

「無一郎、それは私が許したから、もういいんだよ」

「……なら、僕はどちらでも」

一時的には、従うようだ。

そして、しのぶと富岡は無言を貫き、

「信用しない信用しない。そもそも鬼は大嫌いだ」

「心より尊敬するお館様であるが、理解できないお考えだ！ 全力で反対する!!」

「鬼を滅殺してこそその鬼殺隊。竈門・富岡両名の処罰をお願いします」

反対派が多い、というかほぼ反対派しかない。

「——手紙を」

「はい……こちらの手紙は、元柱である鱗滝左近次様から、頂いたものです。一部抜粋して読み上げます」

『炭治郎が鬼の妹と共に在ることを、どうかお許してください。彌豆子は、強靱な精神力で人としての理性を保っています。飢餓状態であっても人を喰わず、さらには人間の頃の記憶を保ったまま。その状態で、二年以上の歳月が経過しました。にわかには信じ難い状況です

が、紛れもない事実です。もしも、瀬豆子が人に襲い掛かった場合は、
竈門炭治郎及び鱗滝左近次及び富岡義勇が、腹を切ってお詫びしま
す』

かつての師が、己が兄弟子が、自分たちの為に命を懸けていたとい
う事実には、感謝しか出てこない。

炭治郎は礼を言おうと富岡のほうを向き、

「富岡……さん……ありが——……あれ、あの……、なんか汗かいてま
せん？」

「……………気のせいだ」

会議の終わり

何故か富岡が焦っていた気がしたが、きつと気のせいだろう。

そう思い、炭治郎は一先ず、この裁判を乗り切ること集中するために思考を切り替える。

「切腹するから何だというのか……死にたいなら勝手に死に腐れよ！
何の保証にもなりはしません！」

「不死川の言う通りです！ 人を喰い殺せば、取り返しがつかない！
殺された人は戻らない！」

「確かにそうだね。人を襲わないという保証ができない、証明ができない。ただ——人を襲うということも、また証明ができない」

お館様の言葉に、否を唱え続ける二人が口ごもる……というよりも、不死川は驚愕で言葉が出ない。

「禰豆子が二年以上もの間、人を喰わずにいるという事実があり、禰豆子のために三人の者の命が懸けられている。これを否定するためには、否定する側もそれ以上のものを差し出さなければならぬ。それに、私の子供に伝えておくことがある。……この炭治郎は、鬼舞辻と遭遇している」

その瞬間、柱の全員……富岡までもが、驚愕に目を見開く。

「そんなまさか！ 柱ですら誰も接触したことがないというのに、こいつが!! どんな姿だった!! 能力は、場所はどこだ!!」

「戦ったの?」

「鬼舞辻は何をしていた! 根城は突き止めたのか!! おい答えろ!」

「黙れ! 俺が先に聞いてるんだ! まず鬼舞辻の能力を——ツ!」

質問攻めに遭う炭治郎だったが、お館様が口元で指を立てると、一瞬で静かになった。

「鬼舞辻はね、炭治郎に向けて追手を放っているんだよ。その理由は単なる口封じかもしれないが私は、初めて鬼舞辻が見せた尻尾を、掴んで離したくない。おそらくは、禰豆子も鬼舞辻にとつて予想外の何かが起きてると思うんだ。わかってくれるかな?」

「分かりません、お館様。人間ならば生かしておいてもいいが、鬼は駄目です！　これまで俺達鬼殺隊が、どれだけ of 想いで戦い、どれだけ of 者が犠牲になっていったか！　承知できない！」

不死川は引かない。

例え他の誰もが認めても、自分は絶対に認めない……そう言う確固たる意志を、炭治郎は感じた。

すると不死川は何を思ったか、自身の二の腕を浅く裂き、血を垂らす。

重力に従った鮮血が、不死川の足元の庭を赤く染め上げる。

「お館様、証明しますよ、俺が！　鬼というものの醜さを!!」

不死川が血の垂らす場所を、禰豆子の箱に変えた。

『くっさ！　酒くっさ!!　ちよ、誰よこんなところで酒飲んでるやつ!』

怒号が箱の中から聞こえた。

まるで酒に酔った親父に怒鳴る娘のような声色だった。

「……………」

不死川が固まる。

まさか、血を喰らうために扉を開けるところか、酒臭いなどと言われるとは思わなかったのだろう。

『つていうか、太陽の光が穴から差し込んでるし！　肌に当たったら

死ぬーっ!!』

「…………ちっ、お館様。失礼仕る」

不死川は禰豆子の入った箱を担ぎ上げると、一足跳びで日の当たらない屋敷内に行き、箱を下ろす。

そして、外から一方的に三度、その刃を突き立て、無理やり箱を開いた。

「やめろお前ッ！」

「炭治郎、落ち着け」

「富岡さん、でも——！」

「今は耐えろ」

「ぐっ…………禰豆子…………」

炭治郎は心配そうに禰豆子を見る。

そこでは、腕をぶんぶんと振る禰豆子が、心底疲れたような顔をしていた。

「どうした鬼？ 来いよ。欲しいだろう？」

口元が避けるかのような笑みを浮かべ、これ見よがしに腕を見せつける不死川。

それに対し、禰豆子は――

「かああ――ぺっ！」

――べちやつ、と。べたつくような音が聞こえる。

沈黙が、場を支配した。

「へっ、泣いて喜びな豚め」

下卑た笑みを浮かべる禰豆子が、嘲笑うように言い、箱に戻った。不死川はまたしても呆然としながら、己の腕をじっと見つめている。

傷口に纏わりつく痰、唾……。

「……えっと、どうしたのかな……？」

目は見えなくても、音は聞こえるのだろう。

お館様は、困惑しながらも自身の娘たちに状況説明を求める。

「……鬼の女の子は、不死川さんの傷口に唾を吐きつけました」

「……何故か誇らしげに胸を張っています」

「……そうか、ではこれで、禰豆子が人を襲わないことの証明ができたね」

お館様の言葉に、ほっと息をつく炭治郎。

信頼していなかったわけではない、ただ、ムカついたから殴る……

そんな些細な事でも、あつてはいけないのだ。

鬼はとにかく信用がない。故に、どれだけ傷つけられても、反撃してはならないのだ。

理不尽な話だ。人間はどれだけ鬼を傷つけても許されるのに、鬼が人間を傷つけるのは許されないなんて。

「炭治郎。それでもまだ、禰豆子の事を快く思わない者もいるだろう。鬼がもたらした業は、それほどまでに深い。君のやろうとしていることは、簡単に済むことじゃない」

「……分かっています。それでも、諦めるつもりはありません。必ず、禰豆子を人間に戻し、鬼舞辻を倒します!!」

炭治郎は再びお館様に頭を下げ、はつきりと言う。

その返しに、お館様は嬉しそうに微笑み――

「うん。流石に、入隊して僅かで十二鬼月を倒しただけあるね」

その言葉に、驚愕したのは富岡を除く全員だった。

当然だろう。炭治郎の階級は最下級の癸。しかもまだ入隊して一月も経っていないというのに、十二鬼月に遭遇し、あまつさえ倒したというのだから。

柱になる条件の一つに、十二鬼月を一人倒す、と言うものがある。そして、それは決して簡単な事ではない。今この場にいる柱達も、入隊前も、その後も。たゆまぬ努力の末に、十二鬼月を倒したのだ。

無論、炭治郎が努力をしなかったという訳ではない。慣れない剣術を、ひたすら錆兎との打ち合いで磨き、適性の違う呼吸で無理を続け、死の間際に限界を超えた力で、漸く己にあった呼吸を編み出し、下弦の伍を撃ち滅ぼした。

結局、十二鬼月を倒したというのは、それだけでその剣士の見方を変えるのだ。

「こんな奴が、十二鬼月を……?」

「ふーん」

「思ったより派手じゃねえか teme エ！」

「ええつと……」

いきなり自身を見る目が変わったことに、困惑するしかない炭治郎。

そんな炭治郎に、お館様が――

「鬼殺隊の柱達は、当然抜きん出た才能がある。血を吐くような鍛錬で、自らを叩き上げて死線をくぐり、十二鬼月を倒している。だからこそ。柱は尊敬され優遇されるんだよ。炭治郎、君も口の利き方には

気を付けるといい。十二鬼月を倒したといっても、それは柱への条件の一つに過ぎないからね」

「は、はい」

「それから実弥。余り下の子に意地悪しないこと」

「……………御意」

不死川が膝をつき、答える。

「炭治郎の話はこれで終わり。下がっていいよ」

「——でしたら、竈門君は私の屋敷でお預かりしましょう」

「えっ？ い、いや、そんな悪いですよ……俺は別に——」

「はい、連れて行ってくださいーい」

「あ、いや、だから別にあああああああああ——ツ!？」

あつという間に隠の男に担がれ、連れ去られる炭治郎と禰豆子。

「ちよ、痛いから！ 死んじゃう！ 長男だけど我慢できないの俺！

死ぬって!？」

「うるさい！ 柱の人凄い怖いんだよ！ なのに堂々と喧嘩売ってさあ!？ アンタの妹もそうだよ！ なんで睡なんて吐きつけるの？

もう意味分かんない！ 謝れ！」

「謝れ！」

「ええ……それは禰豆子に言ってくださいよ……」

「うるさい！ 下の責任は上が取るもんでしょ！ 謝れ！」

炭治郎は思わず天を仰いだ。

空は快晴だったが、炭治郎の心はどんよりしていた。

担がれながらの移動で、どれだけの時間がたっただろうか。

気が付けば、大きな屋敷の前で停止していた。

「ごめんくださいませー！ ごめんくださいませー！ ごめ……はあ」

「全然誰も出て来ねえわ」

「庭の方回って見ましよう」

「あの、まだですか？ なんか今になって体が凄い痛くなってきたん

ですけど……もしかして痛み止めの効果切れてきてませんか？」

「そんなの打ってないけど？」

「えっ?」

「えっ?」

沈黙。

圧倒的沈黙が、場を支配する。

「や、やばいんじゃないのそれ?! 痛みを感じないほどの傷って、え？」

これ、どうしたらいいの?!」

「は、早く誰か見つけなと!」

「し、死ぬう……!」

「ちよ、長男なんでしょ?! 耐えなさい!」

「いや無理。長男でも無理。……死んだら遺言にお二人の名前書きますね、名前教えてください」

「こんな名前を教えたくないと思ったことはないんだけど?! 誰かー?!」

あせあせとしながら、庭を駆け回っていると、沢山の蝶に群がられている少女を発見する。

「あれ? アイツは……」

「えつと……そうだ。継子の方だ。確か名前は……そうだ、栗花落力ナヲ様だ」

「なんで蝶に襲われてんの? 樹液の風呂に浸かってんのか?」

「お、お前! どこまで無礼なんだよ! 継子ってのは柱が育てる隊士だぞ?! 相当才能があつて、優秀じゃないと選ばれないんだ」

へえー、と。

話半分に聞き流す炭治郎。

「失礼します。栗花落様、胡蝶様の言いつけにより参りました。お屋敷に上がつても、よろしいですか?」

その言葉に、ニコッと笑みを浮かべるカナヲ。

……………。

「いやなんか言えよ!」

「どなたですか?!」

思わず炭治郎が叫んだ直後、背後から大声を掛けられ、ビクツとする三人。

「隠の方ですか？ 怪我人ですね、こちらへどうぞ」

蝶の髪飾りで髪をツインテールに結んだ少女、神崎アオイが、屋敷へ入るよう促す。

「……あ、ごめんもう無理」

「えっ、おいちよっど!!」

ついに色々と限界を迎えた炭治郎は、その場で意識を失った。

蝶屋敷

「……痛い」

「あつ、お兄ちゃん起きた」

全身で感じる苦痛とともに、炭治郎は最悪の目覚めを果たした。すぐ脇には、兄をジツと見つめる妹の姿。

「……今何時？」

「午後七時くらい」

「俺が寝てからどれくらい経った？」

「一週間くらい？ みんなてんやわんやだったよ。今は伊之助と善逸さんが機能回復訓練してる。もう二人とも全集中の呼吸・常中が出来るようになってたよ」

「そっか……えつ、二人ともここに居るの？」

「えつ、知らないの？」

心底驚いた表情で、きよんとする禰豆子。

「あれ？ もしかして原作……？」

「……因みに、何処まで覚えてる？」

「そもそも機能回復訓練って何ですか？」

「……」

何とも言えない表情をする禰豆子。

「……まあ、リハビリみたいなものだよ。善逸さんは蜘蛛の毒喰らってないから原作より早く復帰してるけど」

「蜘蛛の毒……？」

「……はあ、忘れて。……兎に角、お兄ちゃんも早く体治して、訓練に参加すること。あつ、私アオイさんの手伝いしてくるね」

そういつて、いそいそと部屋を出ていく禰豆子の後ろ姿を見ながら、ふと、炭治郎は思った。

あれ？ なにか思ったより馴染んでるぞあいつ、と。

原作は覚えていないが、鬼殺隊は基本、鬼への恨みなどを持つ人間が多い。

それもそうだろう。普通は、態々危険を冒して自分たちへの脅威

を、命懸けで取り払う存在になりたいなど、思うはずがない。

命懸けと言うのは、それだけ危険のある仕事だ。炭治郎も、自分が竈門炭治郎でなければ、禰豆子を人間に戻すという目的がなければ、鬼殺隊などならなかっただろう。

「……鱗滝さんも、富岡さんも……みんな、俺と禰豆子のために命張ってるんだよな……。何か申し訳ない」

寝ころび、天井を見上げる炭治郎がぼそりと呟く。

「……竜の呼吸、か……」

蘇るのは、那田蜘蛛山での一戦。累との戦いの記憶だ。

死が迫ったあの時、前世での最後を思い出し、同時に知らない誰か……いや、この体が知っている誰かの声が聞こえた。

ヒノカミ神樂が使えない理由は分からないままだ。竜の呼吸も、その技を瞬時に編み出したのはどうしてだ？

——考えても答えは出てこない。

「……寝るか」

つい先ほどまで眠っていたのに、再び眠りについた炭治郎だった。

翌朝、勝手に寝たことを怒られた。なんでも、起きたのなら先に言っただけのことだ。

因みに、骨が特別折れているわけでもなければ、毒を受けたわけでもないの、すぐに機能回復訓練への復帰を許された。

(あの戦いで骨もやってないのか……まあ、それでも体中傷だらけだったし、途中から痛覚飛んでたもんなあ……)

「よっ」

「!?」

湯呑をサイドテールの少女、カナヲの頭に置きながら、思考する炭治郎。

今彼がやっているのは、反射訓練。湯呑の中の薬湯をお互いに掛け合う訓練だ。

何の意味があるのと思うかもしれないが、反射神経はとても大事なのだ。

因みに、炭治郎は現在カナヲ相手に、十戦中八勝二敗という異次元の結果を叩き出している。

眠っている時も全集中の呼吸をしつかりできていたおかげか、昏睡状態でも土台となる体の力は鍛えられており、衰えが少なかったのだ。

柔軟もすぐに終え、反射訓練も最初の二回は負けてしまったが、それ以降は感覚を取り戻し、着実に勝率を上げていた。

「ほええ……よくやるよ炭治郎。俺達カナヲちゃんには全然勝てないのに」

「グソツ！ 次は俺様が勝つ！ 行くぞケバヲ！」

「カナヲちゃんだよ馬鹿猪!!」

意気揚々とカナヲに向かっていった伊之助が返り討ちにされる十秒前である。

そして、次は全身訓練。所謂、鬼ごっこである。

道場の中央で、カナヲと炭治郎が向かい合う。その中心で、アオイが審判を行った。

「全身訓練……始め！」

「！」

瞬間、弾かれたように高速で走る二人。

小回りの利いた素早いカナヲを、炭治郎が背後から追いかける。

そして、カナヲの左手に、炭治郎が右手を伸ばすが、カナヲはそれを咄嗟に跳躍して回避した。

しかしそれを予期していたのか、炭治郎はすぐに軸を回転させ、着地するカナヲのもとに駆ける。

「ここだ！」

「くっ!!」

勝った！ そう思った炭治郎だが、咄嗟に身を引いたカナヲに躲かれ、スっ転ぶ。

「あだっ!!」

嫌な音をたてながら、道場の床を滑る炭治郎。

そんな彼に、訓練の中断を指示したアオイが駆け寄る。

「だ、大丈夫ですか?」

「……へ、平気平気。大丈夫だつて。……さて、もう一戦……ッ!」
立ち上がるうとした炭治郎が転ぶ。

「どうやら、足を捻ってしまったらしい。」

「柔軟が足りなかったのでしょうか?」

「別にそう言うのじゃないよ。単純に、俺がしくじっただけだ。……ちよつと休むよ」

「そうしてください。悪化されるとそれこそ困るので」

炭治郎は足を引きずりながら善逸達のもとへ行き、足を安静にして座る。

「大丈夫か炭治郎?」

「ああ。休んでたら治るよ。善逸も頑張れよ、カナヲ凄いな」

「そのカナヲちゃんを追い詰めたのはどこの誰だよ全く……」

それから、機能回復訓練は続いた。

足を休めた炭治郎は、もう一度念入りに柔軟をし、カナヲとの勝負に明け暮れた。

善逸や伊之助も、徐々にカナヲに勝利を上げることが多くなっていった。全集中の呼吸・常中を完成させた影響だろう。

そんな生活を一か月ほど続けたある日。

炭治郎は、夜に一人、庭へ出て木刀を振っていた。

「ふっ、はっ!!」

機能回復訓練だけでは足りない。刀を振るのが、剣士の在り方だ。因みに、今彼の日輪刀は今までの激戦で酷く刃毀れしたため、刀鍛冶の里に送って錬磨してもらっている。

あのままでは、いずれは折れてしまうだろうから。

そうになったら、この刀を打った刀匠はがねづかは何と言うだろうか? 想像するだけでも身震いする。

尤も、刃毀れさせたという事実だけで突っかかってきそうだが。

「……すうー、ハァー……」

深呼吸。

余計なことは考えず、刀を振ることに集中する。もちろん、これから鍛えるのは竜の呼吸だ。

呼吸の仕方をイマイチ再現できないが、炭治郎の考え通りなら何とかなるはずだ。

「よし、行くぞ。……ゴオオオオ!!」

記憶にある、ヒノカミ神楽の呼吸を持って、再現をする。

「竜の呼吸【銀ノ舞 乱舞】……——ッ!?!」

あの時の感覚を忘れないように、技を発動しようとする……が。その時とは比べ物にならない苦しさに、思わず蹲る。

どうということだ? 一体何が違うんだ……??

「……くそつ、もう一度……!」

何度も。何度も。何度も。

繰り返す。銀^{ぎん}の舞を。……だが、成功しない。

「……呼吸の仕方が違うのか? 多分、ヒノカミ神楽に似てる呼吸だと思っただが……」

では、あの時はどういう呼吸をしたのか。

思い出せ。必ず何かあるはずだ。

「……うーん、ダメだ。分からない。那田蜘蛛山の時は感覚でやってたから余計になあ……けど、竜の呼吸自体は使えるようにならないと。このままじゃ、間違いなく善逸たちに追い抜かれる」

ヒノカミ神楽は使えない。

水の呼吸は適性外。

であれば、竜の呼吸が出来なければ、近いうちに炭治郎は頭打ちになる。

そうなれば十二鬼月も、ましてや鬼舞辻無惨を倒すこともできない。い。

「……水の呼吸と合わせてみよう」

とにかく、出来ることを試さなければ。

そう思って、水の呼吸の呼吸をしながら、何となくで分かる範囲の竜の呼吸を組み合わせる。

「……あれ？」

意外なことに。

今までの苦しみが、嘘のようになかった。

むしろ、今まで一番動きやすいとすら感じる。それこそ、那田蜘蛛山の時以上に。

ひとまず、何が出来たのかを、確認するために庭を駆け回る。

下弦の伍との戦いの時は、辺りを駆け回った。なら、この程度は何ともないはずだ。

「……ん？ あれ？」

走る。木を蹴って、壁を足場に。池を跳ぶ。

だが、その動き方は、那田蜘蛛山の時とは全然違っていた。

独特な歩法……これは、水の呼吸の動きだ。竜の呼吸とは違う。

しかし、体を感じる万能感の水の呼吸のものではないだろう。明らかにそれ以上の力を発揮している。

「……ふう」

呼吸を解く。

すると、今までの万能感が一気に霧散した。

念のために、水の呼吸を発動するが、やはりさっきのような万能感を生まれてこない。寧ろ頼り無さすら感じた。

「分からない……。とりあえず今分かっているのは、竜の呼吸に水の呼吸の要素を足すと上手く行くってことだけだな」

一つ分かっただけでも進歩だ。

とりあえずはそう、ポジティブに考え、思考を断ち切り、今のやり方を完璧にするまで鍛えた。

「それじゃあ、今日は私と鍛錬をしましょうか。ね？ 炭治郎くん」
「なんでよ」

道場の中央で木刀を構え笑顔を向けるしのぶを見て、炭治郎は引き
攣った笑みを浮かべた。

柱との稽古

件の問題見たる竈門炭治郎と竈門禰豆子が蝶屋敷にやってきて、一月以上たった時だった。

胡蝶しのぶは、任務帰りだった。

自身が所有する屋敷へと戻り、また次の任務に備えた準備を行おうとしていた時だ。

声が聞こえた。……いや、それは『呼吸音』だった。

奇妙な声だった。人間の声のはずなのに、どこか獣のような……いや、そんな表現では表せない、『何か』だった。

気になったしのぶは、音のする庭へと出た。

そして、見たのだ。

「ハアーツ!!」

まるで見えない敵と戦うように、木を蹴り壁を走り池を飛び越える、炭治郎の姿を。

流れるような水を思わせる、滑らかな動きだ。けど、荒々しい力強さを節々に感じる。

その独特な歩法は、水の呼吸のものであるということ、水の呼吸の派生を扱うしのぶにはすぐさま理解できた。

だが、それだけでは説明できない力を感じたのも事実だ。

それこそまるで……竜……。しのぶは改めて炭治郎の姿を見る。

水の呼吸には、生生流転と呼ばれる技がある。うねる龍の如く刃を回転させ、斬撃を重ねる技だ。

しのぶが扱う呼吸、蟲の呼吸は水の呼吸の派生であるため、その技についても既知だった。だからこそ言える。炭治郎がやってるのは、生生流転ではない。

生生流転は斬撃が龍のように見える技。しかし今炭治郎がやっているのは、炭治郎そのものが竜になってしているような動きだ。

新しい水の呼吸の技だろうか。ならば、十二鬼月を破ったのもその技なのか。

水の呼吸は本来、全部で十の技がある。だが、現水柱の富岡義勇に

よって、十一個目の技が作られた。ならば、あれはその先、十二の技になるのだろうか。

そんなことを考えていたしのぶだったが、炭治郎の発した言葉を聞いて、その考えを覆される。

「……よし、大分いい感じだ。もう一度……竜の呼吸!!」

(……えっ)

竜の呼吸。

今まで一度も聞いたことのない呼吸だ。一体何から派生したのかも想像がつかない。

炭治郎の口から、人の言葉とは思えない呼吸音が聞こえた。彼は、そのことに気づいているのだろうか。

竜の呼吸……というくらいなのだから、特別な技でもあるのかと思うが、出てくるのはやはり先ほどと同じ技。

つまり、しのぶが先ほど聞いた『何か』は、炭治郎の呼吸音だったのだ。

「……」

「ハアーツ!!」

鬼になっても人を食べない鬼。

見た事も聞いたこともない呼吸を扱う剣士。

謎が深まるばかりの兄妹だ。

「明日、少し試してみましようか。彼がどこまで出来るのか……」

しのぶはそっと、その場を後にした。

「うーん、やっぱりこの技、乱舞とは違うんだよなあ……なんだろう、この感じ……?」

そして、現在。

しのぶの前には、ポカンとした表情の炭治郎が佇んでいる。いきなり柱と手合わせするのだ、驚くのは当然だろう。

「さ、構えてください」

「えつと……本当にやるんですか？」

「ええ、勿論。……あ、ちゃんと全力出してくださいね？　気を付けはしますが……怪我すると危ないので」

刹那、しのぶの姿がブレた。

直感的に、炭治郎は木刀を横一線に振るう……が。

「遅いですよ？」

「な——っ?! ……がッ?!」

いつの間にか……本当にいつの間にか、しのぶは炭治郎の背後にいた。

それを認識した瞬間、右肩と左太ももに衝撃を受け、膝をついた。

恐ろしく早い突き……炭治郎は見逃してしまった。

(これが柱……那田蜘蛛山の時と全然違う——っ!!)

炭治郎は彌豆子を庇ってしのぶと打ち合った時を思い出す。

あの時は渡り合えていると思えたが……相当手加減されていたのだろう。

それを、今になって思い知らされた。

ゆっくりと、後ろを振り返る。

しのぶの姿は、生娘の様に小柄で、とても柱とは思えない体格だ。

だが、その小ささが逆に、あの目に見えない素早さを生み出しているのだろう。

(本気で来いって言ったのはそっちだ……あとで文句言わないでくださいよ)

「竜の呼吸……!」

未だに名のない技を持って、しのぶに相對する炭治郎。

だが、しのぶのほうはようやくか、といった感情で炭治郎を見ていた。

(十二鬼月を倒したという実力……見せてくださいよ?)

「はああああああ——ツツ!!」

まるで、水中を泳ぎ回る竜のような動きで、小回りの利いた動きでしのぶを追い詰めようとする炭治郎。

それは昨日見たものと同じ、炭治郎自身が竜になったようであり、さながら蒼い竜そのものだった。

だが、しのぶはそれを余裕の表情でいなし、躲し、捌き切る。

力では勝っている。けど、炭治郎はしのぶに一太刀も浴びせることが出来ない。

炭治郎の振り下ろしを、しのぶは横ステップで回避する。その際、炭治郎は体制を崩し転げそうになるが、壁を蹴って足場になることで持ち直した。

一連の動作を自覚しながら、炭治郎は考える。

(やつぱり……この技、乱舞とは違うな)

那田蜘蛛山の時は、どちらかと言うと小回りの利かない、戦車のような戦いをした。

累の逃走を阻止するために走った時も、木の枝や葉の束を突き抜ける形で突貫したせいで、余計な傷を増やした。

だが、あの時この技を使っていれば、そのような事態にはならなかっただろう。

「考え事とは、随分と余裕ですね？」

「ガッ……!!」

瞬く間に三撃、炭治郎の体に打ち込まれる。

自分から言っても追いつけない。

だったら、おびき寄せるしかない！

炭治郎はわざと膝をつき、隙を見せる。

「ふっ——！」

(今だ！)

膝をついた炭治郎に追い打ちをかけようと、しのぶが正面から接近する。

その時、炭治郎はしのぶに隙を見つけた。

ならばあとは、それを突くだけ。

炭治郎は立ち上がり、自身の懐に飛び込んでくるしのぶを薙ぎ払うように、横一線に木刀を振るう。

「甘くびすよ」

「!?!」

しのぶは炭治郎の斬撃を跳躍して躲し、意図も容易く背後を取った。

見抜かれていたのだ。炭治郎の咄嗟の思い付きは、柱からすれば簡単に読めるものでしかなかった。

完全に追い詰められ、焦りを募らせる炭治郎に対し、しのぶは——
(……ふむ、カナヲ相手に優勢で勝利できる……私の動きについてこれるだけの身体能力……確かに、十二鬼月……下弦の鬼ならどうこうできそうですね)

けど、それだけでは駄目なのだ。

十二鬼月は下弦のほかに、上弦の鬼という存在がいる。その鬼は、下弦とは比べ物にならないほどに強い。

今の炭治郎では足元にも及ばないだろう。

(いいやまだだ……まだ終わってない!!)

キツ、と。奥歯を噛みしめ、右足を軸に重りを引っ張るような動きで回転する。

「!」

その時、しのぶは幻視した。

炭治郎の姿が、今までの蒼い竜と違い、銀色の竜……ほんの一瞬だったが、それは現れた。

ビクン、と。しのぶの方が僅かに震えた。

まるで十二鬼月と対峙しているかのような怖気が、その小さな背筋を駆け抜ける。

「おおおおおおおお——ツツ!!!!」

獣の唸り声のような叫びを上げ、横一線に斬撃を放つ。

だが、炭治郎が木刀を振り抜いた先に、しのぶの姿がない。それと同時に、振り抜いた刀が何故か重く感じ、視線をずらす。

「なっ!?!」

——いた。

木刀の上につま先立ちで乗り、いつの間にか炭治郎の首元に矛先を突きつけている。

完敗だ。それを悟った炭治郎は、戦意を消失させた。

それを察したのか、しのぶも木刀から飛び降りる。

「……はあ、全然敵わなかったなあ。新技も役に立たないし、やっぱり柱ってすごいですね」

「ふふつ、炭治郎くんも凄いですよ？　一瞬とはいえ、最後は私も本気になっちやいました。うっかりです」

「えっ、今までは本気じゃなかったんですか？」

今明かされた衝撃の事実には、炭治郎の口の端が引きつる。

冗談ではないだろう。そんなことを言う意味はないし、しのぶが変に見栄を張る人間んでないなら真実として捉えていいだろう。

「そろそろ私は行きますね。これから頑張ってください」

「あ、はい！　ありがとうございます！」

「よし、相談があるんだ禰豆子」

「は？　今忙しいんだけど。あ、なほちゃん。こっちの洗濯物干してきて。私外出れないから」

「分かりましたー！」

「……なあ、ずっと思ってたんだけど、なんでそんなに馴染んでるのお前？　言ったら悪いけど、鬼でしょ？」

「女の友情に種族の垣根なんて関係ないのよ」

「女の友情は壊れやすいって話聞いたことあるけど」

「迷信よ多分」

炭治郎の無駄話には付き合ってもらえないと、禰豆子は朝食の準備に取り掛かっている。

因みに、彼女が厨房を使用している間は、窓など外の光の差し込むものはすべて遮られるため、明かりは電球などを使わなければいけなくなる。

包丁などは使うと危ないかもしれないが、鬼は再生できるので関係

ないらしい。

トントントンと、まな板を叩く音が厨房で響く。

「それで、話って何？」

「新しい技の名前で悩んでるんだ。一緒に考えてくれ」

「禰豆子さん！ お手伝いにきました！」

「ありがとうきよちゃん。早速だけどその馬鹿追い出して」

「えっ、あ、ちよ！ 待って禰豆子ア”ア”ア”ア”——ツ!!」

幼女に引つ張られ厨房を追い出されるお劳しい兄を流し見て、作業に戻る禰豆子。

「まったく……ふあゝ、眠い」

鬼は夜型……というより、夜を主な活動時間とするため、昼夜が逆転してしまう。

つまり、禰豆子はとても眠い。だが、お世話になる以上は働かないといけないし、最近は時間の感覚も人間のものと同じになっている。

さほど気にすることでもないだろう。

そんなことを考えていると、厨房の扉が開き、外からアオイが入室してきた。

「あ、すみません、手伝ってもらって」

「気にしないで。私が好きでやってるだけだから」

アオイも禰豆子の隣に並び、朝食の準備を始める。

黙々と二人は料理をし、会話が一切発生しない。流石に気まずいと思っただのか、禰豆子が話を振った。

「えつと……気を付けてね、暗いし」

「ご心配なさらずに。これくらいは問題ありません」

そこで、会話が途切れる。

重い沈黙が続いた。

「その……アオイさんは、私の事、嫌いですか？」

「えっ……？」

意を決して、禰豆子がずっと聞きたかったことを問う。

虚を突かれたように、呆然としていたアオイだったが、すぐに再起動し、悩みながら答える。

「そうですね……私は、鬼が嫌いです。憎いです」
「っ」

当然だ。鬼は人から幸せを奪っている。
彼女も、奪われた側の一人なのだ。

「でも、禰豆子さんのことは……嫌いにはなれません」
「……えっ?」

ポカンとした顔で禰豆子がアオイを見る。

「え、どうして……?」

「こうやって家事をして、他の事笑い合って……そんなあなたが、鬼らしくないから、ですかね……?」

「うっ……」

「それに、羨ましいです」
「?」

表情を暗くさせたアオイに、禰豆子が首を傾げる。

「私は、鬼と戦うのを恐れる、腰抜けですから……貴女のように、戦えないから……」

「そんなことないよ」

アオイの独白を、禰豆子がバツサリと否定する。

えっ? といった表情で禰豆子を見るアオイ。

「アオイさんは戦ってるよ、今も」
「……」

「本当に戦わない人は、鬼殺隊に手を貸すこともしないよ。だから、アオイさんは今のままでいいと思う。あなたがここにいるから、救われた命だつてあるはずだから」

禰豆子の言葉に、アオイはただ呆然としていた。

後方支援と言うのは、前線で戦うものから見れば臆病者に映るかもしれない。

だが、彼らの努力なくして前線は成り立たない。

「私は鬼を殺す為に戦うんじゃない、人の命を救うために頑張るアオイさんの方が好きだよ?」

「!」

まるで太陽のような笑みが、そこにあつた。

何故か照れ臭くなつたアオイは、咄嗟に顔を背けながら、

「……は、早く終わらせましょう！」

「うん、そうだね」

焦りながら言うアオイに、朗らかに笑う禰豆子が答えた。

胡蝶の夢

「……暇だなあ」

深夜。

蝶屋敷の屋根で月を眺める炭治郎が、不意に眩いた。寝そべりながら言う炭治郎の表情は、退屈に満ちている。

ここは大正時代だ。平成でも令和でもない。現代の娯楽なんて一つもないのだ。

「……鍛錬しかない、か……そう言えば、刀はどうなんだろう……鋼鐵塚さん、怒ってないといいけど」

鱗滝さんですら刀を折ったら骨を折るとか言ってきたのだ。刀匠だとどうなるか想像も出来ない。

「——こんばんは。今夜は月が綺麗ですね」

「うおっ?! ……し、しのぶさん……ビツクリさせないでくださいよ……」

いつの間にか、寝そべる炭治郎の後ろに、しのぶがいた。

音もなく背後に立たれると心臓に悪い。

しのぶはニコニコと屈託のない笑みを浮かべて炭治郎の横に腰掛ける。

「そ、それで。一体どういったご用件で……?」

「そう固くならないでください。……少し、貴方と話がしたくて」

話? 炭治郎が不思議そうに首を傾げる。

「……そう言えば、どうして俺たちをこの屋敷に連れてきたんですか?」

「彌豆子さんの存在は公認になりましたし、君たちは……というか、特に君は怪我が酷かったですしね」

「うっ……」

「それから……君には私の夢を託そうと思って。——そう、鬼と仲良くする夢です」

あっけらかんとしのぶが言う。

「鬼と……?」

「ええ。彌豆子さんと一緒に頑張る貴方を見ていると、もしかしたら……って思えるんです」

やはりニコニコと笑みを浮かべるしのぶが言う……だが。

「難しい……と思います」

炭治郎は顔を俯かせたまま答えた。

意外な返しに、しのぶの表情が僅かに揺れる。

「彌豆子が特別なだけなんだと思うんです。あの娘だけが人を喰わな
いでやっていけるだけ。……しのぶさん、俺は……鬼が人を喰うこと
は仕方ないと思ってます」

その時、初めてしのぶの笑みが引きつった……気がした。

「……どうして、そう思うんですか……?」

「……だって、同じですよ、俺達と。俺達は人間以外の生き物を糧に今
日を生きてる。自分たちより弱い生き物を犠牲にしてるんです」

しのぶは、炭治郎の持論に反論しない。

「鬼からすれば、人間にとつて食料が、食料として見れないだけ。人間
がその対象になってしまった。本来なら、俺達が食べる生き物たち意
思があれば、俺達みたいに反抗するでしょうし」

「……」

「多分、そう言うことだと思っんです」

「だったら、なんですか? 鬼のすることを認めると、そう言うんです
か……?」

震える声でしのぶが言う。

そこにある感情を、炭治郎はすぐに理解できた。

「……怒ってますか?」

「……ええ、ええ! ……怒ってますよ、ずっと怒ってます。鬼に最愛
の姉を惨殺された時から、鬼に大切な人を奪われた人々の涙を見るた
びに……! 絶望の叫びを聞きたびに、私の中に怒りが蓄積され続け
膨らんでいく。体の一番深い所、にどうしようもない嫌悪感がある
……他の柱達もきつと似たようなものです」

所々に怒りが滲め出て、語気が強まっていた。それを聞いて、なん

となく炭治郎は思った。

きつと、それが本当のしのぶさんなんだな、と。

本当は怒りをぶつきたい……今すぐ鬼を殺したい……そんな復讐心で溢れてるのに、何かが彼女を引き留める。

それはきつと……。

「俺に託したい夢って……そのお姉さんとの……？」

「……はい。姉は、優しい人だった。鬼に同情していた。自分が死ぬ間際ですら鬼を憐れんでました」

鬼殺隊は、鬼に怒りを、憎しみを持つ人が集まる。

命を懸けてでも守りたいものを持つ者もいれば、命を懸けてでも鬼を殺したいと思う……それほど強い思いがなければ、務まらない。

簡単に命を奪われる。だが、その度に人は憎しみを募らせる。

負の輪廻が完成しているのだ。

「……私は、そんな風に思えなかった。人を殺しておいて可哀想……？ そんな馬鹿な話はないです」

「そうですね」

あつさりと肯定する炭治郎に、しのぶが困惑する。

「……え、でも……さつき、仕方のないことだって……」

「ええ。人を喰うことは仕方のない事です。……けど、悪戯に、悪意を持って人を傷付けることは許されない。人間にだって同じことが言えます。自分以外の生き物を傷つけていいわけじゃない……」

炭治郎にとつての線引きは、そこだろう。

人を襲うことに、悪意を持っているのか否か……それだけが、鬼を許せるか許せないかの違いだ。

だから、炭治郎は否定しない。

悪意を持つ鬼に悪意で対抗する……もしかしたら、意味のない事なのかもしれない。それは、怪物同士の諍いなのかもしれない。

けど、憎しみも怒りも……心を持つ生き物が当たり前に抱く、当然の感情だ。それを否定するのは違う。

「だからきつと、どれだけ悲しい過去のある鬼がいたとしても、その鬼が悪意を持って人を傷付けたなら、償わないといけない……そして、

やり直して欲しい」

「……やり直す……？」

「ええ……もし、生まれ変わりなんてものがあるなら、殺された鬼にも機会を与えて欲しい。人として、やり直す機会を……」

勿論、悪戯に人を……他の生物を傷付ける罪は重いだろう。

でも、だからこそ。その罪の重さを理解し、やり直すのが、生まれ変わるのに、一番大事な事だと、炭治郎は言う。

「……けど……」

納得のいかなそうな顔をするしのぶ。

そんな彼女に苦笑しながら、炭治郎は奇妙な結論を語った。

「鬼って言うのは、単純に生き物の事を現すんじゃないと思うんです」
「？」

「多分……上手く言えないけど、鬼は鏡なんですよ」

「鏡……？」

「はい。……俺達にんげんの心を映す鏡……俺達が鬼に対しどんな感情を抱くのか、明確に示すための」

仮に、鬼がもう人を喰わないと誓い、本当にその手段があつたとしても、
よう。

対面するのは、鬼に家族や恋人を奪われた鬼殺隊で、彼の手には日輪刀があり、しかし目の前の鬼は家族恋人の仇ではない。

鬼は心を改め、改心しようとしている。さて、その剣士は鬼をどうする……？

答えは二択……けど、この問いに間違いはないのだ。

つまり、生かそうが殺そうが、それは人の感情次第……だが、どちらかを選べば、その剣士の本性が現れる……それだけの問いだ。

鬼が善となる可能性を潰すか、鬼の悪を潰すか。

「だからきつと、しのぶさんのお姉さんは凄い人です……鬼が改心する可能性を、人と仲良くできる可能性を信じ続けた人なんですから」

「……」

「……信じるだけなら自由です。例えば裏切られるとしても……本当に裏切られるまでは分からないですし。……多分、分からないって言う

のは、一番大事な事なのかもしれないです」

「貴方も十分、凄いですよ……。私はやつぱり……。姉さんみたいになれないのでしょうか……？」

「それも、しのぶさん次第だと思います。……。しのぶさんの導く答えを否定するつもりはないです。けど、どうせなら……。しのぶさんが、お姉さんに胸を張れる生き方をしてほしいです。……。お姉さんに、頑張ったねって言うて貰えるような生き方を……。すみません、偉そうに……」

「——いいえ、大丈夫ですよ」

すると、しのぶは腰を上げ、立ち上がる。

「……ところで、随分と姉に詳しいですね。お姉さんでもいらっしやったんですか？」

「……ええ、けど、俺の姉は……。人間に……」

「!? ……すみません、私……」

「いえ、構いません。……。だからだと思っんですよね。俺が鬼に対し否定的になれないのは、人間と鬼のやることに、殆ど差がないって実感してるから」

炭治郎はよっこらせと、重い腰を上げた。

「……湿っぽくなっちゃいましたね。じゃあ、俺はそろそろ……」

「炭治郎くん」

「？」

屋根を降りようとした炭治郎は、しのぶに引き留められ振り返る。

「えっ……？」

しのぶは、笑っていなかった。

いつもの微笑みは完全に消え去り、少し眉間にしわが寄っている。端的に言えば、怒っている……。炭治郎は、そう感じた。

「やつぱり、私の……。ううん、姉さんの夢は貴方に託すわ。私には叶えられない」

「えっと……。しのぶさん……？」

話し方まで変わっており、炭治郎はますます困惑する。

「しっかりしてよね。貴方はこれから、禰豆子さんを守っていくん

だから！」

「えっ、あ……は、はい！」

「よろしい。……ふふっ、どうでした？ 昔の私は多分、こんな風だったと思うんですが……」

「え、あー、えっど……」

しどろもどろになる炭治郎を、しのぶは面白そうに見つめている。

「それじゃあ、明日も頑張ってくださいね」

そういつて、しのぶはその場を去っていく。

炭治郎は、しのぶのいた場所を呆然と見つめていた。

花の心

先日、研ぎ終わった刀が返却された。

刃毀れでも鋼鐵塚がぶちギレて包丁を振り回したのは言うまでもない。

伊之助も新たな日輪刀を手にしたが、石で刃毀れさせて刀匠に殺されそうになったが、それ以外は特に問題なく進んだ。

既に全員万全の状態まで回復しており、いつでも任務に出れる……そんな状態の時だった。

「朝ダー！ 起キロー!!」

朝と言っても午前四時くらいの時間帯で、炭治郎の鎧鴉が叫ぶ。

「……無理い……つていうか、まだ暗いじゃん……いつからお前は目覚まし鴉になったんだよ……」

「無限列車ノ被害拡大。四十名以上ガ行方不明。現地ノ煉獄杏寿郎ト合流セヨ。直チニ西ヘ向カエーっ!!」

どうやら新たな任務のようだ。

炭治郎は眠気眼をこすり、洗面台へと向かう。ついでに善逸と伊之助を起こしながら。

修繕してもらった隊服と羽織を纏い、日輪刀を腰に携える。

いつでも戦いに出れる……その前に、蝶屋敷の人に挨拶をしようと思っただ。

これくらいは社会人の常識だろう。そう思い、まずは怪我を直してくれたアオイとしのぶ。次にきよ、すみ、なほへと挨拶に向かった。

「これで一通り……ああ、最後にアイツ残ってたなあ……」

うんざりした様子で、炭治郎は空を仰ぐ。

思い浮かべるのは、常に人形のような無機質な笑みを浮かべた少女、栗花落カナヲだ。

正直に言うと、炭治郎はあの少女が苦手だ。人間であるはずなのに、まるで現代のアンドロイドを相手にしているような違和感を感じた。

なのに、節々から人間らしいところも感じた。失礼だが、変な奴だ

と思ったのだ。

だから、なるべく会わないようにしていた。意図的に避けていたのだ。

(……ああ、挨拶しなきゃよかったかなあ……う?)

重い足取りで、炭治郎はカナヲのもとへ向かった。

「……いた。おい、カナヲー!」

「……、」

庭の縁に腰掛ける少女は、声を掛けられ振りむく。

相変わらず機械染みた笑みで、カナヲは炭治郎を見る。

「……あー、その、何ていうか……ありがとな。色々」

目を逸らし、気まずさから口下手になりつつもお礼を言う。

すると、カナヲは何を思ったのか、コインを取り出して指で弾く。

コインは高速回転しながらカナヲの手の甲に納まり、裏と書かれた面を出した。それを見たカナヲは、意を決して炭治郎のほうを向き、

「師範の指示に従っただけなので。お礼を言われる筋合いはないから。さよなら」

淡々とした返しだ。しかし、初めて声を聞いた気がする。

不思議と、炭治郎は今までの忌避感が消えるのを感じていた。カナヲのことを、しっかりと見れる気がした。

「えっ、今の何?」

「さよなら」

「もしかしてコイン? よくそんなの持つてるな?」

「さよなら」

「……実は超電磁砲撃てる?」

「なにそれ?」

どれだけ別れを告げられても、根気強く粘る炭治郎。

そんな彼に根負けしたのか、カナヲはコインを見せながら話をした。

「指示されてないことは、これを投げて決める。今、貴方と話すか話さ

ないか決めた。話さないが表、話すが裏だった。裏が出たから話した」

「ふうくん」

「さよなら」

「いやいやいや……ここまで来たならそう簡単には帰らないぞ。どうしてコインを使うんだ？ 別にコインじゃなくても自分で決めたらいいじゃないか」

「……どうでもいいの。全部どうでもいいから、自分で決められないの」

「どうでもいいかあ……まあ、気持ちは分かる。どっちでもいい時つであるよなあ……夕食とか」

明らかに二人の認識はズレているが、お互いに気にする様子はない。

「そうだ。どうしてカナヲは鬼殺隊に入ったんだ？ コインを投げて決めたのか？」

炭治郎としては、この機会にカナヲへの抵抗を完璧に失くしておきたい。

だから、なるべくカナヲのことを知らなければいけないのだ。

カナヲに聞けることは聞く。知れることは知る。そうして、人は互いに理解し歩み寄れるのだ。

「……………」

「あれ？」

だが、何故かカナヲは黙り込んでしまった。

いや、よくよく考えれば、鬼殺隊に入る理由なんてそこまでバリエーションがあるわけでもない。

きつと彼女にもやんごとなき事情があるのだ。個人に深入りするのは駄目だろう。

そこまで思い至り、炭治郎は話題を変えようとするが、

「あ、その……不躰だったよな？」

「……………」

「えっ……………」

「——分からない……コインで決めたわけじゃないの。師範から、最終選別を受けることは禁止されていたから」

初めて、カナヲの顔に、笑み以外のモノが浮かんだ。

（そうだ。私は、認められていなかった。だから、技も盗み見て覚えて、それで……）

勝手に最終選別へと向かった。

思い出すのは、そこから帰った時のことだ。

みんな、泣いていた。師範はいつもの笑みを消して、本気で怒っていた。

（でも、分からない。どうして今、そのことを思い出すの？ そこに何があるの……？）

「……分からない？」

「うん……考えても、分からない……」

「それでもいいんじゃないかな？」

カナヲは、心底不思議そうな顔で炭治郎を見た。

炭治郎は、穏やかな笑みを浮かべたまま言う。

「分からなくても、カナヲはそれをどうでもいいと断じてない。コインでどうこうしてない。……だから、カナヲは全部どうでもいいなんて思っていないんだよ」

「……………え」

まるで雷に打たれたかのような衝撃が、カナヲを襲った。

違った？ どうでもいいと思っていなかった？ 本当に？

どこに、どうして……？

（……………あ）

蝶屋敷。

自分の帰る場所。

それを思い出し……思わずコインを落とした。……だが、それを拾おうとはしなかった。

動かないカナヲに代わり、炭治郎がコインを拾い上げる。

「本当に大事なものは、ちゃんとカナヲの胸の中にあるさ。だから、コインなんてあってもなくても変わらない。分からなくてもいいんだ。

——心が教えてくれるからさ。カナヲにとって大事なものを」
コイン越しに空を見上げる炭治郎。

彼の脳裏にあるのは、亡き家族の姿。

今までも、道を見失いそうになった時はあつた。でも、その度に呼び戻してくれた家族がいた。

負けそうなときに、自分の背中を押してくれた家族がいた。心が、その存在を明確に示してくれた。

炭治郎はコインをカナヲの手に戻し——

「頑張れよカナヲ。きつと見つかる。カナヲが大事にしてきたもの、これからも大事にしたいもの、心の底から求めているもの。……応援してる」

それじゃあ、と。それだけ告げた炭治郎は、いそいそとその場を去る。

後には、そんな彼の去った場所をジッと見つめるカナヲがいた。

無限列車

「おい……おいおい、なな……、なんじゃこの生き物はああ——
——ッッ!!?!」

次の任務の為に無限列車までやってきた炭治郎達。

切符を購入し、駅から停車している汽車を見て、伊之助が驚愕の声を上げる。

「こいつはあれだぜ……この土地の主、この土地を統べる者——ッッ
!!!! この長さ、威圧感……間違いねエ。今は眠ってるようだが、油
断するな!!」

「いや汽車だろ。知らねーのかよ」

一人で盛り上がる伊之助に、善逸が呆れた視線を向ける。

「まず一番に俺が攻め込む!!」

「落ち着け伊之助、よく見るんだ」

「そうそう、どう見たってこれは生き物じゃない——」

「この黒光り、見た目……きつと、この方はこの土地の守り神、下手に
攻撃すると罰が当たるぞ」

「なんでだよ?! いや音で分かるぞ、お前分かってて言ってるよな?!」

善逸の非難の視線から逃げるように顔を背ける炭治郎。

たまには自分だって気の抜けたことを言いたいのだ。

すると、炭治郎たちの話を欠片も聞いていない伊之助が、とうとう
感極まって汽車に頭突きをかました。

「猪突猛進ッ!!」

「やめろ馬鹿恥ずかしい!」

「俺の頭突きが効かねえ……だと……!!」

「当たり前だ! 人間の頭突きで壊れる汽車があつてたまるか!」

「何をしている貴様ら?!」

流石に不審者と思われたのだろう。

車掌らしき男性が二人、炭治郎たちを見て怒鳴り散らす。

傍らの男性が、三人を見て叫んだ。

「こいつら刀持ってるぞ?! 警官だ、警官を呼べーっ!」

「おっと、これは流石にやばいな……にしても対応が素早い……流石だな……」

「感心してる場合か?! 早く逃げるぞー!!」

現代と違つて対応の素早い車掌に感心する炭治郎に、伊之助を脇に抱える善逸が叫ぶ。

そして、色々あつて時間は過ぎた。

「伊之助のおかげでひどい目に遭つたぞ、謝れ!」

「ハア?! だいたい、なんで警官から逃げなきやならねエんだ?!」

「政府公認の組織じゃないからな、俺達鬼殺隊。堂々と刀持つて歩けないんだよほんとは。鬼がどうこう言つても、なかなか信じてもらえんし、混乱するだろ」

「……俺、前に浅草で鬼と戦つたことがあるんだ」

「は?」

「しかも、そこでは沢山の人がひしめき合つてる街中で――」

「お前やつぱり馬鹿だよね?! 人前で堂々と刀振つて戦つたつてこと?! よく指名手配されてないな!」

「多分、鬼の衝撃が強すぎて、対応に困つてるんだろかなあ……」

「伊之助以上にやばい奴がいたよ……とにかく、刀は隠そう」

幸い、炭治郎と善逸は隊服の上に羽織を着ている。

羽織に隠れるように刀を持てば、一般の人にも見られることはないだろう。

「ふっ」

どこか得意げな雰囲気を感じるともしない伊之助が、後ろ腰に刀を差している姿を見せる。

「丸見えだよ馬鹿」

「伊之助は服着てないからなあ……」

善逸はやはり毒を吐き、炭治郎は苦笑いを浮かべた。

途端、発射を知らせるベルの音とともに、プシューツ!! という汽笛の音が駅中に響き渡る。

「やばっ、もう出発だ! 警官いるかな……」

善逸が隠れていた物陰から顔を出し、恐る恐る周囲を窺う。

今のところ、時間帯が夜であることもあつてか、駅に人は少なく、警官らしき人物は見えない。

「どつちにしろ出発だ。いたとしても振り切れる。行くぞ二人とも」

「おっしやー！ 勝負だ土地の主!!」

「えっ、おいちよつとお!!」

一気に飛び出て汽車の最後尾の車両に乗り込む炭治郎と伊之助を見て、善逸が慌てて追いかける。

だが、出だしが悪かったせいも、善逸は乗り遅れ、レールの上を走つて列車の後部デッキの細い柵を追いかけている。

「ちよ、炭治郎、伊之助えー!」

「やばっ、早く手を!」

柵にしがみ付いた善逸が、泣きながら手を伸ばす。炭治郎たちはその手を互いに握り、一息で善逸を引っ張り上げた。

多難ではあつたが、三人は無事、汽車に乗り込むことに成功した。

まるでそれを確認したかのように、列車は加速する。

「ふう、危ない。危うく善逸だけ置いていかれるところだったな」

「もう最悪。これも全部あのバカのせいで目を付けられたからだよお

……もうホント最悪。早く中に入ろうぜ」

「うっひよー! 速えぜ!」

「……悪い、善逸。先に入っていてくれ。伊之助が飛び降りそうだ」

「……はあ、この馬鹿猪は……そっういや炭治郎、本当によかつたのか?」

「ん?」

善逸が思い出したように、炭治郎に問いかける。

「ほら、禰豆子ちゃん連れてきて。蝶屋敷の子とも仲良くなつてたし、置いてきたほうがよかつたんじゃないか?」

「……確かに、そうかもな」

否定はしない。

鬼との戦いは今後、さらに苛烈を極めるだろう。今まで以上に危険な任務がやってくるかもしれない。

いくら鬼が不死身と言っても、苦痛を感じはするのだ。そんな思

い、出来る事ならしてほしくない。

——けど。

「でも、いいんだ。危ないことがあるなら、守っていけばいい。それが出来るくらい強くなればいい。……善逸や伊之助も一緒なんだしな」
「えっ、俺も?!」
「べ、別に俺はそこまで強くはないし……そのお……」
「それに、置いていったら泣くかもしれないしな」

どうして汽車に連れて行ってくれなかったのうわーん! と。泣き叫ぶ姿が目には浮かぶ炭治郎だった。

「さて、そろそろ中に入ろうか。ほら、伊之助も」

「ん? おう、主の中に入るのか! よっしやあ、行くぜえ!」

「こいつは本当に……」

「ははは……」

相変わらず元気溢れる伊之助に、二人は苦笑した。

客車の引き戸を開けると、既に座席の半分以上が埋まっていた。

車内にはいろんな人がいた。仕事で移動中らしき男性、旅行者とおぼしき老夫婦。仲睦まじい男女に、子ども連れの家族など。

誰もが同じ目的地を指しているという訳ではないだろう。しかし、彼らの表情は、遠目から見ても弾んでいるのが分かる。

「うおっ?! うお! うほ!!」

そんな車内が物珍しいのか、伊之助は先ほどよりも浮き立った声を上げている。

きよろきよろと周囲を観察し、興奮気味に近く窓へと張り付いた。伊之助に割って入られた乗客が、突然の乱入者に怯える。

「うはははは!! 速えー!! うははははは——ツツ!!」

「すみません! すみません! おい、いいからこっち来いバカ!!」

「速えぜ! ぬハハハ!!」

善逸は驚く周囲の乗客に謝りながら、伊之助を半ば羽交い絞めにし、窓から引き剥がす。

だが、余程列車に乗ったことが嬉しいのか、伊之助はそこまでされ

ても上機嫌のままだった。

そんな二人を置いておいて、炭治郎はと言えば――

「よつと。これでいいか?」

「おお、ありがとうねえ」

「若いのに偉いのう」

「これくらいなんてことないですよ」

――老夫婦の荷物を柵の上のせていた。

今までの戦いですっかり成長した炭治郎は、老人に優しくする気づかいを完璧にものにしていた。

そして、興奮冷めきらぬ伊之助を引きずる善逸とともに、車内を移動する。

目指す場所は、合流予定の炎柱・煉獄杏寿郎のもとだ。

「柱だっけ? その煉獄さん。顔とか分かるのか?」

「ああ、多分……派手な人だったから、会えばすぐに分かると思――」

「うまい!!」

炭治郎の言葉は、突如奥から響いてきた声に掻き消された。

室内で発する声量とは思えないほどの音量の高さに、善逸だけでなく、炭治郎までも委縮してしまう。

恐る恐る扉を開け、車両の奥へと進む。

「うまい!・うまい!・うまい、うまい!!」

同じ声が、何度も同じ言葉を発している。

炭治郎たちが進んでいくと、一心不乱に牛鍋弁当を食べる、二十代の男性がいた。

ところどころ赤く染まった金髪。大きく切れ上がった双眸に太い眉。炎を思わせる羽織の印象的な男だ。

「あ、そっちか」

「えっ」

ぽつりと洩らした炭治郎の言葉を聞いて、善逸がマジかといった視線を向ける。

因みに、炭治郎の考えていた派手な人とは、銀髪で宝石などの装飾品を備えた派手が口癖の男である。

「うまい！」

煉獄の隣には未開封の弁当が、その反対側には逆に食い終えて空になった弁当が積まれていた。

まるでブラック企業の仕事量を思わせるその弁当タワーに、炭治郎たちがどころか周囲の人も引いていた。

しかし、そんな彼の異様の雰囲気当たられたのか、それとも単に関わるのを避けたいのか、誰も車内で叫ぶ彼を咎めようとはしなかった。

「うまい！ うまい！ うまい！ うまい！ うまい！ うまい！」

一口食べるごとに連呼している。

それならいつそ全部食べ切ってから言った方がいいのでは？ と、

炭治郎は思った

「なあ、あの人が炎柱？ でいいんだよな？」

「……多分」

善逸が疑惑な視線を向けて、声を掛けあぐねる炭治郎に問う。

「うまい！ うまい！」

「……ただの食いしん坊の人じゃなくて？」

「……隊服着てるし……とりあえず声かけてみる」

炭治郎が煉獄に近づき、声を掛ける。

「あの……すみません、煉獄さん」

「うまい！」

しかし、煉獄は炭治郎の声が聞こえていないのか、箸を止めない。

再び炭治郎が、少し大きめに声を掛けると――

「うまい！！」

「……あ、さいですか……」

炭治郎のほうを振り向いてとどめのように叫んだ。炭治郎は考えるのをやめた。

夢幻の世界

あれから、大量に積まれていた弁当を全て食べ終えた煉獄は、炭治郎の姿を見て思い出したように呟いた。

「君は、お館様の時の」

「あ、はい。竈門炭治郎です。こちらは友人で、我妻善逸と嘴平伊之助です」

「そうか！ それで、その背負っている箱に入っているのが……」

「はい、妹の禰豆子です。今は眠っているようなので、挨拶はまた次の機会に……」

「うむ、あの時の鬼だな。お館様がお認めになったこと、今は何も言うまい」

正直、不安はあった。

柱の中では、炭治郎たちはとにかく印象が悪いだろうから、どんな嫌味を言われるかと若干身構えたいのだ。

だが、蓋を開けてみれば、煉獄は禰豆子の存在に嫌悪の色を見せず、ただ見守ってくれている。

その対応が、炭治郎はただ純粹にうれしかった。

すると、煉獄が自身の隣の席をポンポンと叩き、座るように誘った。炭治郎はそれに従い、向かいの席に箱を置いて腰掛ける。

そんな彼らを他所に、伊之助は煉獄たちとは反対側の席では子供のようにはしゃいでいた。

「ぬはっぬはっ、すげえ！ 主の中すげえ!! ぬはははっ!」

まるで何かと力比べでもするかのよう、窓ガラスをバンバンと叩き続ける伊之助。

「割れるだろガラス!!」

「ぬははははは!」

「少しは落ち着けよ……」

「あ、はは……」

「君たちはどうしてここにいる? 任務か?」

伊之助の奇行を見て苦笑していた炭治郎に、煉獄が問いかける。

炭治郎は、鎧鴉からの報告で無限列車の被害が拡大し、現地の煉獄と合流するよう命じられたことを伝えた。

「うむ、そういうことか。承知した！」

「あ、はい」

やけにあつさりと頷く煉獄に、炭治郎はつい、この人ちゃんと考えてるのかな？ と、思った。

隣ではやはり上機嫌に暴れる伊之助を、善逸が押さえつけている。

「溝口少年、君は十二鬼月を倒したそうだな？」

「えっ？ あ、はい……えっ、溝口？」

突然話を振られ、戸惑いながらも答える。

何故か名前を間違って覚えられていたので、その訂正も忘れずに。

「うむ。頼りにしているぞ！」

「あ、それはどうも……」

「俺の継子になるといい！ なんなら君の友人も含めてな！ まとめて面倒を見てやるぞ！」

「えっ、何その急展開。話の方向が明後日どころか銀河系まですっ飛んでるんですけど」

見れば、善逸は奇怪なものを見る目で煉獄を見ている。伊之助は相も変わらず窓にべったりだ。

「炎の呼吸は歴史が古い」

またしても唐突に煉獄が話のレールを切り替えた。

その判断の速さには鱗滝どころかトロツコ問題もビックリだろう。

「炎と水の剣士は、どの時代でも必ず柱に入っていた。炎・水・風・岩・雷が基本の呼吸だ。他の呼吸はそれらから枝分かれしてできたもの。霞は風から派生している」

「聞いてないんですけど」

「竈門少年！ 君の刀は何色だ!?!」

「銀です」

途端、勢いのある煉獄の会話が途切れた。

「……そうか。銀……初めて聞いたな」

「……えっと、その……俺は、竜の呼吸というのを使っている」

「竜の呼吸！ 初めて聞いたな、一体どの呼吸の派生だ!!」

「……その、我流です。俺は竜の呼吸を扱う前は水の呼吸を扱っていたのですが、水の派生とはとても言い難いので、恐らく……」

「なるほど！ ならば、俺のところで鍛えてあげよう!! もう安心だ！」

今気づいたが、煉獄の視線が明後日の方向を向いている。

猪の被り物をしている伊之助と同じくらい、どこを向いているか分からない。

「すっげえすっげえ！ はっえええ!! わはははは！」

当の本人は叫び声を車内に轟かせている。

気付けば、列車は山間を駆け、上機嫌が最高潮に達した伊之助は、窓から身を乗り出していた。

「俺、外に出て走るから！ どっちが早いか競争する!!」

「馬鹿にもほどがあるだろう!!」

善逸が全力で怒鳴りつけた。

すると、今までそんな二人に何も言わなかった煉獄が、初めて彼らに向けて言葉を発した。

「——危険だぞ」

だが、それは先ほどと比べてトーンが幾分か低く、鋭い刀のような声音だった。

「いつ鬼が出てくるか分からないんだ」

「……えっ?」

煉獄の言葉に、善逸がギョツとして振り返る。

目にも止まらぬ速さで煉獄ににじり寄り、

「嘘でしょ?! 鬼でるんですかこの汽車?!」

「出るー!」

自信満々に答える煉獄に、善逸は頭を抱えた。

恐怖のあまり身をくねらせ、絶叫を上げた。

だが、煉獄はそんな鬼殺隊にあるまじき姿を見ても気にする風ではなく、簡潔に状況を説明する。

「……ん？」

少年は、暖かい布団の中で目を覚ました。

眠気眼をこすりながら、周囲を見渡す。勉強用の机に、散らかった床。クローゼットに、放り投げられた学生靴。

そう、そこはどこからどう見ても、少年の部屋で——

「——ッ!？」

少年……竈門炭治郎は、驚愕しながら飛び起きた。

そこは、かつての自分……前世の世界で、住んでいた家。平和で退屈で、だからこそ愛おしいと気づかされた、もう戻りはしない失われた幸せの空間だ。

周囲には誰もいない。伊之助も善逸も、禰豆子も、煉獄さえも——

(どういうことだ?! 俺はさつきまで無限列車にいて、それで……)

腰にある日輪刀を確認し、柄を握りながら警戒する。

目の前の異常事態に、パニックを起こしそうになるのを堪え、観察する。

部屋の形は間違いなく、前世の自分の部屋だ。だが、今の自分の恰好は、鬼殺隊の隊服、市松模様の羽織、銀色の日輪刀。

それだけが、自分の現状を明確に示す証拠だった。

「くそつ、血鬼術か?! とにかく、一度外に出て態勢を——」

「あれ? もう起きてんのお兄ちゃん」

この時、炭治郎は全集中の呼吸・常中すら忘れ、完全に止まっていた。

ギギギ、と。壊れた絡繰り人形のような動きで、首だけを動かし、声の主を見る。

「……」

「えつ、何固まってんの? 一人だけ時間停止してる?」

少女……白銀美優しろがねみゆは、己が兄、白銀竜也しろがねりゅうに困惑の視線を向ける。

「ちよつと、何やってんの美優? さつさと起こし——」

美優の後ろから、エプロンを身につけた黒髪ロングの女性、白銀華しろがねはなが姿を現した。

竜也は、呆然と二人を見つめていた。

彼は気づいていないが、いつの間にか彼の姿は変わっていた。

現代的な寝間着。ボサボサの茶色が混ざった黒髪。僅かに鋭い目つき。

恐る恐る、竜也は二人に近づきそれぞれ頬に手を触れる。その行動に戸惑いを見せる二人に構わず、限界だとばかりに泣きだした。

竜也は二人を抱き寄せ、倒れながらその温もりを感じ、大粒の涙を流した。

「う、ああああああ……！ ああああああああああああああああ
あーっ！！」

「えっ、ちよ、お兄ちゃん!？」

「は？ おま、ちよ、やめ——!？」

「ごめん……」

突然のことに驚き、困惑する二人を他所に、竜也は謝り続ける。

「ごめん、ごめん……ごめん……!! うわああああああ!!!!」

もはや、その言葉にどんな意味があるのかすら、竜也は理解できなかった。

それでも、叫び続け、泣き続けた。

竈門炭治郎

「ホント意味分かんない！ 急に抱き着いて、いきなり泣き出すんだもん！」

「……悪かったって」

「ははは、まあいいじゃない。ほら、ちやちやつと準備しろ」

服を着替え、華の作った朝食を食べる。

「でも、ホントに大丈夫なの？」

「大丈夫だって。心配性だな美優は」

「——べ、別にお兄ちゃんを心配してる訳じゃないんだからね！ ただ、お兄ちゃんが変なことしていると、妹の私の評判まで悪くなるから、仕方なく——」

顔を真っ赤にしてそっぽを向き言い訳を重ねる美優に、竜也が微笑む。

いつも通りの朝……当たり前の世界だ。

(なのに、なんでこんな久し振りに感じるんだろ……疲れてんのか?)
そして学校に行き、授業を受け、帰ってきて今度は夕食にする。

風呂に入って就寝し、また新しい一日が始まる。

何気ない、誰もが過ごす当たり前の日常だ。

でも、竜也にはそれがとても尊いモノのように思えて仕方がない。

姉の声を聞きたびに、胸が締め付けられそうになる。

妹の姿を見るたびに、後ろ髪を引かれる気持ちになる。

二人が当たり前に過ごすこの家にいると、暖かいのに悲しい気持ちになる。

「ふう……」

自室に戻った竜也が息をつく。

部屋は綺麗に片づけられており、壁には美優が幼少の頃に描いた絵が飾られている。

中心には竜がいて、その周囲で炎や水、雷に風が吹き荒れている。一体、幼い頃の彼女は、何を思っってこんな絵を描いたのか、それは

本人も分かっていない。

「……歯、磨くか」

何故だろうか。

いつもはその絵を見ると微笑ましい気持ちになるのに、今は一目見る気にもなれなかった。

気分を変えるために、竜也は洗面所へと向かう。

「……………はっ？」

竜也が停止する。

まるで幽霊でも見たかのように、固まってしまっていた。

「……………誰、だ……………お前……………？」

竜也の視線の先には、鏡がある。

鏡は光の反射で、自分自身を映し出すものだ。だから、その鏡面に映るのは竜也でないとオカシイ。

なのに、鏡には全く関係ない人物が写っていた。

無造作に伸びた髪を後ろで一つに括り、作務衣さむえの上にはんてんを羽織り、首巻を絞め、藁わらぐつを履いている。

額の左側には火傷痕のような痣があり、目や髪は若干赤が入っている黒。

知らない人だ。竜也には何の関係もない……………はずだ。

なのに、その姿を見ていると頭痛がしてくる。その、何かを訴えるように、叫んでいるかのように口を動かす少年を見ると、何か忘れていたような気持ちになる。

竜也の本能が訴えている。関わってはいけない、今すぐここを離れろと。

なのに、彼の足は石造のように固まって動かない。

その額から、冷や汗が流れ落ちる。

『……………きゃ……………きゃん!!』

少しづつ、少年の声が聞こえるようになってきた。

焦った様子で何事かを叫んでいる。

『起きろ、お前がいるのは夢の中だ!』

刹那、竜也の体が鏡に引きずり込まれた。

「う、があああ!!」

そこは、暗闇の世界だった。

だが、あちこちに鑑が設置されており、まさしく鏡の世界と呼べる場所だ。

「起きろ！ 攻撃されてる!! 今すぐ覚醒するんだッ！」

「……お、前は……？」

「！……そこまで……」

竜也が理解の追いつかない現状に困惑しながら問いかけると、少年は心底困った顔をしていた。

悩みながらも、少年は己の名を語る。

「俺は……竈門炭治郎」

「……は？」

竈門炭治郎と名乗った少年に困惑する竜也。

彼はその名を知っている。

「鬼滅の刃……いや待て、だから何だ。お前は一体何なんだ?! ここは何だ?! 家は、みんなは……ッ?!」

情報量の多さにパニック寸前になりながら、ヒステリックに叫ぶ。

「俺の話聞いてくれ! 今君は、鬼の血鬼術に掛かり、夢の中にいるんだ!」

「?!」

「思い出せ!」

竈門炭治郎の叫びに答えるように、周囲の鑑に映像が映し出された。

雪の中で目覚めた自分。鬼となった禰豆子との出会い。富岡義勇との邂逅。他にも、鱗滝に錆兎と真菰、善逸や手鬼。謎のモヒカン少年にカナヲ。鎧鴉に沼鬼、鬼舞辻無惨、毬鬼や珠世に愈史郎。矢印鬼や響凱に伊之助。累に母蜘蛛、しのぶや村田。柱のみんなやお館様、アオイや蝶屋敷の三娘……たくさんの人との出会いがあった。

これは間違いなく現実で、今いる世界は夢であり、幻だと決定づけていた。

「だから、今すぐここから脱出しろ! 俺の予想では、この術を破る方

法は——」

「——嫌だ」

竜也がぼそりと呟いた。

その言葉を聞いた炭治郎は固まる。

「……………は？」

「……………嫌だ、絶対に嫌だ！ 出るもんか！ ここには二人がいる……いるんだよツ!! 失った、俺の家族がツツツ!!」

力の限り、竜也は叫ぶ。

瞳から涙が零れ、足も生まれたての小鹿のように震えている。

怖いんだ。この幸せを取り上げられるのが。

一度失って、失う悲しみを、辛さを知ってしまったから。

竜也はどうとう、頭を下げた。額を地面に擦り付けた。

「頼む……俺からもう、家族を奪わないでくれ……!!」

悲痛な懇願だった。

見ているだけで胸が締め付けられるほど苦しくて、聞いているだけで躊躇ってしまう。

「……………ダメだ」

だが、炭治郎は認めなかった。

なにより、目の前の少年がそんなことを言うことを、認められなかった。

「失ったモノは……戻ってこないんだ」

「——ツ！ 失ってない！ ちゃんとあそこに——ツ!!」

竜也が炭治郎の言葉を否定しようとして、止まる。

炭治郎も泣いていた。瞳から一筋の雫を流しながら、それでも惨めに蹲る竜也を見下ろして、優しく諭す。

竜也の気持ちに分からないワケじゃない。

むしろ、分かるから……自分だって、ずっとそこに居たいって思えるから……だからこそ、引き止めるのだ。

そこに居ることは、どれだけ幸せでも間違いで、どれだけ辛くても、現実に戻らないといけない理由があるから。

「壊れた幸せは直らない。だから、新しく創り直すしかないんだ。一

から……これまでの思い出と一緒に……」

「……思い、出……？」

「……ああ」

途端、周囲の鏡に、またしても映像が流れた。

『主人公とか、そんなの関係ない。貴方は貴方だから』

『……もし私が、人を喰ったら、どうするの？』

『お兄ちゃん!!』

ああ……と。竜也の口から洩れた。

そうだ。現実には、禰豆子がいるんだ。何度も自分を助けてくれた、今度こそ守ると誓った少女が。

いつの間にか、涙は止まっていた。竜也はゆっくりと立ち上がる。

「……お前は」

「？」

「……炭治郎、お前はそれでいいのか？ 俺が出たら、お前はまた……」

竜也の問いかけに、炭治郎が押し黙る。

何となく察していた。炭治郎はずっと自分の中にいて、少なからず彼の精神に影響を与えていたのだ。

精神の世界には、無意識領域と言うものがある。人が知覚できない、認識できない深層心理を表した空間だ。

恐らく炭治郎は、竜也の憑依によってずっとそこに押し込まれていた。ならば、今はチャンスのはずだ。竜也から主導権を奪い返すことも出来るだろう。

「いいんだ」

なのに、炭治郎は蹴った。

一切の躊躇いもない、確固たる意志を持って拒否する。

「……どうして……？」

「確かに、君が戻ったら、俺は無理やり無意識領域に押し込まれるのだろう。けど、この体は既に君のモノになっている。もとより、そういう性質だったんだと思う。他を受け入れ、染まる。だから、俺は今のままにいるのが正解なんだ」

「……何だよ、それ……。——おかしいだろ！俺みたいな情けない奴に乗っ取れて、好き勝手されるのが正しいなんて、そんなの——」
「君だから、俺は受け入れたんだ」

炭治郎は、一切の悲しみの色を見せなかった。

むしろ、誇らしさすら感じる微笑みだった。

「家族を大切に出来て、その尊さを良く知っている。そんな君だから、俺は受け入れられたんだ」

「……………」

「余り自分を卑下するな。君は今までよくやってきた。これからも、君は絶対に折れない。もう何度も折れてきた君は、そう簡単には折れないさ」

「……俺は……」

「必ず、彌豆子を……君の妹を人間に戻すんだ」

「？ それ、どういう——」

竜也が問いかけようとした……その時。

空間が途轍もない揺れに襲われ、周囲の鏡が次々に割れていく。

「——ッ!! 早い、もう干渉されたのか……!!」

「ちよ、何が……ッ!!」

「時間がない！一度しか言わないからよく聞いてくれ！この夢の世界から脱出する方法は一つだ！それは——!!」

炭治郎の口から聞かされる方法に、竜也は黙って頷いた。

それを見た炭治郎は安堵し——

「よかった……頑張れ、君は今までよくやってきた。これまでも、これからも！」

屈託のない笑みを浮かべ、言葉で餞別を送るのだった。

目覚め

無限列車内部は、驚くほどに静かだった。

異様な出で立ちと雰囲気纏っていた鬼殺隊の四人も、座席の上で眠りこけている。

だが、眠っているのは彼らだけではない。

見れば、車内の乗客全員が、同じように眠っていた。

幾らなんでも、これはおかしい。人が眠る瞬間など個人差が出るだろうに、全員が同じ時間に同時に眠るとするのは奇妙な現象だ。

「……何、コレ……？」

その異様な現象を、禰豆子はただ一人、呆然と眺めていた。

彼女は今まで、炭治郎の背負っていた箱に入っていた。だから、血鬼術発動のある条件に引掛からなかったのだ。

禰豆子は焦りながら、鬼殺隊に四人を起こそうとする。

「ちよ、起きてお兄ちゃん！ 善逸さん！ 伊之助！ えつと……あ！ 煉獄さん！」

一瞬、名前の分からない誰かがいたが、すぐにそれが炎柱であることを思い出す。

しかし、今回の敵はそれほどまでに強力なのか。柱ですら手玉に取られるほどに……。

というか。

「何この状況。こっちの方が意味不明」

何故か、煉獄は眠ったまま少女を締め上げており、他にも鬼殺隊の三人に縄で腕を繋いで少年少女が隣にいる。

ハッキリ言って、理解不能だった。

禰豆子は兄のほうを見た。

「……お兄ちゃん、泣いている……？」

炭治郎は何かをうわごとのように呟きながら、ボロボロと涙を溢していた。

悪夢でも見ているのだろうか。もしや、それが敵の力なのだろうか。ならば、自分はまずどうしたらいいのか？

考えて考えて考えて……結論に至った。

「燃やそう」

……決して、正気を失ったとかそういう訳ではない。

禰豆子の血鬼術・爆血は、鬼に関する者のみを焼き尽くす性質を持つている。よって、人には一切危害がない。

人を守るといふ、禰豆子の信念を映し出した力だ。

禰豆子は自信の手首を裂き、血を流す。それを燃やして、炭治郎を炙った。

「……早く起きてよ」

竜也は、いつものように日常の中に居た。

妹がソファアの上でテレビを見て、姉が家事をしている、その風景を見ていた。

そして、悩んでいた。

(どうする……俺に出来るのか、そんなことが?)

炭治郎に示された脱出方法を前に、竜也は一向に動けずにいた。

それもそうだろう。その脱出方法は、とてもじゃないが実践しづらい。リスクもある。

だからこそ、竜也は一步を踏み出せないでいた。

「——ッ!!」

だから、だろう。

それは、間違いなくきつかけになった。

「お兄ちゃん!!」

「ちよ、竜也!! 大丈夫か!」

「……禰豆子の、炎……?」

突如、竜也の体が紅蓮の炎に包まれた。

驚くほど燃え盛っているのに、周囲には引火せず、竜也を温めている。

火は、間もなくして消えた。

だが、そこにもう、白銀竜はいなかった。

「えっ、お兄、ちゃん……？」

「……どう、いう……？」

姉と妹は、竜也の変化に戸惑っていた。

若干赤が混ざる黒い髪。額に出来ている大きな痣。黒い制服の上から羽織る緑と黒の羽織。腰に携える日輪刀。

そこに居たのは間違いなく、鬼殺隊・竈門炭治郎だった。

「これは……そっか。お前も待ってるのか」

何かを確信するように、炭治郎が呟く。

突如姿を変えた兄に、美優は戸惑いながら問いかけた。

「……お兄ちゃん、なの……？」

「……ごめんな、美優」

「……えっ？」

突然、悲しそうな表情をする炭治郎が、謝りながら美優を抱き寄せた。

美優は焦りや恥ずかしさよりも先に、困惑で胸を埋め尽くした。

「守ってやれなくて、ごめん」

「……お兄ちゃん？」

「……でも、今度は守る。ようやく分かったんだ。俺は、全部失ってたワケじゃないって」

分からない。

何を言いたいのか、何も伝わらない。

なのに、何故だろうか。今の彼を止める気になれない。

「……お兄ちゃん。どこかに行くの？」

「……うん」

「……ちゃんと、『ここ』に戻ってくる？」

「……ごめん」

「…………そっか」

炭治郎の言葉に、小さく頷く美優。

「……まったく、お前らは……」

そんな二人を、華が纏めて抱き寄せる。

「……義理だからってなあ……ダメだろう？　ほ、ほんとに……！」
華は、泣いていた。

きつと、分かっているのだ。もう、二人と一緒に居られない、この
幸せが終わることを。

それは、二人も同じだった。

美優は泣きじやくり、炭治郎は懺悔の言葉を叫ぶ。

「ごめん……！　守れなくて……本当に!!」

「……もういいんだ。お前にはいくところがあるんだろ？　——な
ら、行って来い！」

「言つとくけど、負けたら承知しないからね！」

涙を拭い去り、華と美優は精一杯のエールを送った。

「……ああ！」

二人の応援を背に、炭治郎は家を出た。

たくさん、ありがとうと思う。

たくさん、ごめんと思う。

でも、戻れないと分かってしまったから。

進むしかないから。

せめて、その道が明るくなるように。

絶望のゴールじゃない、希望への活路を開く刃を振るう。

「行ってきます」

玄関の扉を閉じると同時に、炭治郎は、己が日輪刀で自決した。

「……うっ」

「あ、起きた？」

最悪の気分で、炭治郎は目を覚ました。

やはり、夢とはいえ自殺するというのは精神的に良くない。

くらくらする頭を抑えながら、炭治郎はゆつくりと、重い腰を上げる。

「……禰豆子、大丈夫か？ さっきのは……」

「あれ見て」

「禰豆子が突如、通路の方を指差す。

言われたとおりに、炭治郎が視線を向けると、

「……はい？」

煉獄が、一人の娘の首を締め上げていた。

その剛腕を持つて、軽々と少女を持ち上げていた。

「ちよ、煉獄さん!! それは流石に……あれ？ 何だこの縄……？」

手首に違和感を感じ、炭治郎が目線を落とす。

右手には、焼き切れた縄が括りつけられていた。これも敵の仕業なのだろうか。

見れば、煉獄だけでなく、善逸や伊之助の腕にも巻かれていた。その縄の先には、他のものと同じように眠る少年少女がいた。

だが、彼らはどちらかと言うと魘されており、悪い夢でも見ているかのようだ。

「禰豆子、縄と一緒に、三人を起こすんだ。俺は鬼を——」

「う、ああああああ!!」

「なっ!!」

煉獄に締め上げられていた少女が、苦しみから解放されるや否や、炭治郎に向けて鋭い刃先を持つ錐きりを向けてきた。

咄嗟に娘の一撃を回避し、禰豆子を脇に抱えて炭治郎は距離をとる。

警戒を怠らずに、低い声で問いかけた。

「……何のつもりだ？」

少女の呼吸が荒い。相当焦っているようだった。

額から冷や汗を滝のように流し、白い肌は精神の不安定さが滲み出ているのか、青白くなっている。

体を震わせ、怯えながらも憎しみに満ちた目付きで、炭治郎を睨んでいた。

それを見て確信する。この少女は、自分の感情に従って動いている。これは、彼女の意志なのだ。

「邪魔しないでよ！　あんたたちが来たせいで、夢を見せてもらえないじゃないっ!!」

「……」

ふと、視線を逸らす炭治郎。

よく見れば、彼の背後に善逸と伊之助と繋がっていた子供たちが立ち塞がっていた。

同じく錐を持って、今にも炭治郎を射殺さんばかりの殺意を向けていた。

「何してんのよ、あんたも起きたなら加勢しなさいよ！」

三つ編みの少女は、炭治郎の前の座席で座っている、やせ細った青年に怒鳴り散らす。

「結核だか何だか知らないけど、ちゃんと働かないなら、あの人に言っ
て夢を見せてもらえないようにするからね!!」

罵声を浴びせられた青年は、無言で立ち上がった。

だが、隈の濃いその瞳には、三人と違い一欠けらの敵意も殺意も、憎しみすらもなかった。

そんな少年に、炭治郎は逆に困惑した。

恐らく、この子供たちは、鬼と共謀している。自分たちを殺すことを条件に、鬼にあの夢を見る血鬼術を掛けてもらおうとしているのだろう。

「分かるよ」

炭治郎が、ぼそりと呟いた。

「俺も居たかった……あの夢の世界。とても幸せで、満たされた……」
心からの言葉だった。

実際、炭治郎は戦いを、現実を諦めようとするほど、あの夢に心酔していた。

しかし、それと同時に分かった、学んだのだ。

失ったモノは、絶対に戻らない。どれだけそっくりに見せても、心はどこか虚しさを感じ取って、満たされた器を破壊する。

「えっ……?」

「行つてください……どうか、気をつけて」

いきなり礼を言われ、戸惑う炭治郎だが、すぐに顔を引き締め、無言で頷く。

「禰豆子、この四人を守つてやつてくれ」

「……いいの? この子たちは……」

「ああ。何かあつても、責任は俺が取る。……じゃあ、行つてくる」

「あ、ちよつと待つて!」

禰豆子に呼び止められた炭治郎が、振り返ろうとし、

「――!」

「……えっ?」

耳元で囁かれた言葉に、炭治郎が驚きを見せる。

「それって……」

「わざわざ私が辞書引いて調べたんだから、感謝してよね! ま、頼まれたから仕方ないし?」

「……変わらないな、お前は……なあ、美優」

一瞬、禰豆子は何を言われたのか理解できなかった。

「この戦いが終わったら、ちゃんと話をしよう」

そんな禰豆子に構わず、炭治郎は列車の外へと向かった。

「……お兄ちゃん?」

――病を患う青年は、つい先ほどまでの出来事を思い出していた。血鬼術で、ある青年の精神世界に介入した時だ。

最初は、見た事もない建物や車、空を飛ぶ鳥のような何かや、待ちゆく人が猫背になつて一心不乱に見つめる板に戸惑いを見せたが、すぐさま心を切り替えて果てを目指した。

そして、青年は見えない壁へとたどり着いた。

途端、鋭い目つきで懐から錐を取り出し、壁へと突き立てた。空間に裂けめのようなものができ、青年は中へと侵入した。

そこは、混沌とする異世界だった。

ある所では煉獄の如き炎が燃え盛り、またある場所では湧き水が噴き出していた。ある場所では雷が落ちて雷鳴が轟き、ある場所では獣が走り回る。

ある場所では美しい花が咲き誇り、またある所は霧に覆われ、ある場所では竜巻が吹き荒れていた。

空は黒い雲で覆われながらも、所々虫食いのように穴が開いていて、太陽の光が差し込んでいた。

どこまでも矛盾に満ちた世界で……そこは、地獄と天国を両立していた。

そんな世界が、何処か幻想的で……青年は、ただ呆気に取られるだけだった。

青年は、『精神の核』という、人間の心の原動力を破壊するために行動していた。

自身が抱える病、結核。その苦しみから逃れるために、夢に逃げようとしていたのだ。

『……』

……だというのに、少年は一步も動けなかった。『精神の核』を見つけようと思うことも出来なかった。

ただ立ち尽くすだけだった青年……だが。

『……——ッ!』

見た。

異世界でただ一人……一匹で、世界を守護するかのように静かに佇む銀色の竜の姿を。

恐らくは、この無意識領域の化身だ。

すると、竜も少年に気づいたのか、のそりと起き上がり、少年に近づいていく。

『……』

『……』

竜の顔が、青年の鼻先まで迫った。

青年は僅かに上ずった声を上げるが、次の瞬間、竜に衣類を啜えられ、背中に乗せられた。

『? 君は、何を……』

竜は無言のまま、遙か上空に向けて飛び上がった。途轍もない速さなのに、風を一切感じない……不思議な飛行だった。

あつという間に、彼らは雲を抜けた。

穢れ一つない太陽が、青年を出迎えた。

『……なんて綺麗なんだ……』

ぽつりと言う。

すると、竜はまたしてもどこかへ向かった。

暫くの間飛び続け……そして、何かが見えてきた。

ボロボロの塔だ。

石造りで、至る所が欠けていて、雲を突き抜けるように聳え立っている。

その頂上に、竜は着陸した。

『これは……宝箱?』

塔の頂上、その中央に、鍵の掛かっている箱があった。

竜はその宝箱の後ろに行き、体を休めた。

青年は、恐る恐る宝箱を開いた。

『! ……これは……』

それは、一枚の絵だった。

目の前にいる竜とそっくりな生き物が中心に描かれ、他にも無意識領域と同じ現象があちこちに描かれている。

直感的に、青年は察した。これが、あの緑と黒の羽織の少年の『精神の核』なのだ。

あの少年を形作っているのは、たった一枚の絵だった。子供が描いたものなのだろう。一流の絵師が見れば、駄作だと破り捨てるかもしれないソレ。

しかし、結核の青年には、これ以上に尊い絵はないのではとすら思えた。

『……どうして、僕をここに……？』
だからこそ。

竜の真意を測りかね、少年は問いかけた。
竜は答えず、ただジツと少年を見つめている。

『……まさか、信じているのか？ ……僕は、これを壊す為に来たというのに……?!』

青年は狼狽した。

だって、あり得ないだろう。あつて間もない、それどころか、本来は敵である自分を信じ、この場所に連れてくるなんて。

竜は微動だにしない。青年がどんな結論を導こうとも、それを受け入れると言わんばかりに。

『……ああ、どうして……!』

青年は、己のしようとしたことへの恥ずかしさから、膝を折って蹲ることしかできなかった。

——青年の意識が、現実上浮上する。

「……優しい貴方、どうかご武運を……」

いつの間にか、塔から青年の姿は消えていて。

代わりにとばかりに、そこには竈門炭治郎が佇んでいた。

無言のまま、澄み渡る空を眺めている。

「……よかった、貴方が道を踏み外さなくて」

竜が、炭治郎に頭を差し出す。

それに答えるように、炭治郎は竜の頭を撫でる。

彼らはまるで、竹馬の友のように分かり合っていた。

「……竜也には、無理をさせてばかりだなあ……」

炭治郎は、自身が奪った未来の知識の事を思い、表情を曇らせる。

白銀竜也が原作知識を僅か二年で喪失したのには、明確な理由があった。それは、竈門炭治郎による介入だ。

彼は、竜也が知識だけに頼り、経験が追い付かなくなることを恐れ

た。

一寸先は闇、という言葉がある。未来はどれだけ知っていても、完全にその通りにはならない。

だからこそ、いざという時に対応できるよう、未来を分らないようにし、竜也を鍛える必要があった。

竜也は見事炭治郎の願い通り……いや、それ以上の成長を遂げた。

だが、それでも人の記憶を奪うという行為には罪悪感はある。知識があれば簡単に乗り切れた場面もあっただろう。

それでも、炭治郎は自分の行いに後悔はなかった。

「頑張ってくれ、竜也……」

竈門炭治郎の祈るような言葉は、空へと溶けていった。

下弦の壺

列車の外に出た炭治郎は、途轍もない突風で飛ばされそうになり、咄嗟に身を屈め、屋根にしがみ付いた。

強風に耐えながら、悍ましい気配を感じ取る。

近くに鬼はいない。だが、列車の先頭の方から気配を感じる。

「……………この気配……………十二鬼月か？」

以前戦った下弦の伍・累を思い出す。

あの時よりも濃密で、体の芯から震えそうになる。

今までと違い、格段に恐怖を感じる。

(……………そうか、アイツが無意識領域で俺の精神に影響を与えていたから……………これまでも、恐ろしい鬼とも戦えた。……………ここからは、俺だけで行けっということなんだな)

もしそうだというなら、白銀竜也にとって、これが初の鬼退治となるだろう。

思わず唾を呑む。手汗が止まらない。今なら善逸の気持ちも分かる。鬼と戦うことの恐ろしさが、本当の意味で自分を襲っている。

死神の鎌が、今にも己が首を裂かんと、こちらを虎視眈々と狙っているかのようだ。

それでも、炭治郎は前に出た。

体を起こしたことで、強風が全身を煽る。少しでも気を抜けば、列車から振り落とされるだろう。

炭治郎は僅かに姿勢を低くし、風の影響を最小限にする動きで、前方車両へと駆けた。

鬼の気配が、さらに強くなる。

「！」
見つけた。

鬼も炭治郎に気づいたのか、ゆっくりと振り返る。

炭治郎でも気を抜いたら飛ばされそうになるほどの風を一身に受け、余裕そうにする洋装姿の男。

その水色の左目には、“下壺”という漢数字が禍々しく刻まれている。

た。

確信する。やはり十二鬼月だった。それも、下弦の鬼の中で最強格の。

「あれえ起きたの？ おはよう」

気の抜けるようなのんびりとした口調で、下弦の壺は場違いな挨拶をする。

下弦の壺は、炭治郎にひらひらと手を振って、

「まだ寝ててよかったのに」

炭治郎に掌を向ける。

左手の甲には口がついていた。

(戦え、戦えー！ 戦え!!)

震える精神を叱咤し、刀の柄に手をかける。

全身の震えは止まっていた。いつでも戦闘に移れる。

そんな炭治郎の気配を感じ取ったのか、下弦の壺は――

「なんでかなあ？」

――とても、不思議そうに言った。

「せっかく良い夢を見せてやっていただけでしょう？ お前の家族みんな、惨殺する夢を見せることもできたんだよ？ そっちの方がよかつた？ 良い訳ないよね。その辛さは、君はよく知ってるだろ？」

粘っこい笑みで、下弦の壺が告げる。

そんな鬼の前に、炭治郎は言葉を失っていた。

何なんだこいつは。本当に、元は人間だったのか。どうしてそんな残忍なことを平気で口にする。

口調、声色で十分判断できる。こいつの言ってることは真実だ。だからこそ、腸が煮えくり返りそうだ。

「じゃあ、今度は姉の結婚式でも見せてやろうか？ よかったね、君にお兄さんが出来るよ」

「――ッ!!」

限界だった。

炭治郎は堪忍袋の緒が切れ、怒りのままに日輪刀を引き抜く。

(……まずいな。まだ、まだだ……もう少しだけ、時間を稼がないと)

不気味な笑みを浮かべつつ、内心は僅かに焦る下弦の壱は、話を切り替えた。

なるべくこの少年の注意を引く話をしなければ。

「俺は下弦の壱、厭夢^{えんむ}」

「……竈門炭治郎」

真面目なのだろうか。

厭夢が名乗ると、炭治郎も社交辞令で名乗り返す。

だが、にじり寄る足を止めない。

「少し、話をしようか」

炭治郎の歩みが止まった。

「俺はね、本当は人に幸せな夢を見せた後に悪夢を見せてやるのが大好きなんだ。人間の絶望に歪む表情がたまらない」

瞬間、炭治郎は本当に、呼吸すら忘れ絶句していた。

あわや風で吹き飛ばされそうになるほど、厭夢への理解が及ばず、放心していた。

「だからね、君が見逃したあの子たちにも、ちゃんと悪夢を見せてやるつもりだったよ？ いいよね、幸せな夢が見れると思って、幸福に満たされていた子供たちが、失神するほどの惨劇に遭い、それでも夢の中だから意識を失うことが出来ないなんて……どれだけの絶望があるの子たちを襲うんだろう……考えるだけでも、夢見心地だよ」

大仰に手を広げ、演説でもするかのように、狂ったことを告げる下弦の壱。

そして、彼は感じた。その身に、途轍もないほどの殺意と憎悪がぶつけられていることに。

どす黒い感情を放っているのは、間違いなく目の前の少年だ。

「……でも、最初はちゃんと幸せな夢を見せるよ。少なくとも、まだ幸せな夢を見るだけの時間は与えたのに、なんでお前はここにいるんだ……」

「決まっているだろう」

炭治郎の銀色の日輪刀が、夜の闇の中で鈍い輝きを放つ。

「人の幸せを踏み躪る、悪魔^{あくま}を斬るためだ!!」

厭夢を烈火の如く睨み、停止していた全集中の呼吸を再開する。

「竜の呼吸——」

(彌豆子……ありがとう)

心の中で、妹に感謝の言葉を述べる。

(お前の名付けてくれたこの技で、アイツを討つ!!)

思い出すは、数分前。

自身に耳打ちしてきた言葉が脳裏によぎる。

『いい、一度しか言わないからよく聞いて。新しい技の名前は——』

「【水ノ舞 みくまりのかみ 水分神】 !! !! !!」

その瞬間、厭夢は幻覚を見た。

一瞬だが、炭治郎の姿が蒼い竜となった幻だ。

しかし、すぐに厭夢はそのことを忘れ、炭治郎のある一点に釘付けになった。

(あれえ？ 耳に花札みたいな耳飾り……へえ、運がいい。早速俺のここに来たんだ)

鬼舞辻無惨は言った。

耳に花札のような耳飾りを付けた鬼狩りを殺せば、さらに血を分けてやると。

いざその時に立ち会う前に、実際に血を分けてもらった時の歓喜と興奮が厭夢を襲う。

既に分けてもらっていたのに、そこからさらなるご褒美を受けるとなれば……その上、今蓄えている餌があれば、上弦との入れ替わりも夢じゃない。

厭夢は恍惚とした表情で、自身に向かって駆けてくる少年へと左手を向けた。

「血鬼術、強制昏倒催眠の囁き。お眠りイイイ」

これで終いだ。

現に、目の前の鬼狩りは意識を失い、今にも倒れそうになっている。こいつを殺し、眠っている柱や鬼狩りを殺した後に、列車内にいる

人間を全て喰らえば……。

そう、厭夢が次の予定を考えていた時だった。

「……くっ!!」

「なっ——」

あと少しで倒れるという瞬間に、炭治郎は踏み止まった。

再び射抜くような視線で厭夢を睨み、その頸を斬らんと刃を振るう。

思いのほか鋭い太刀筋に目を見開くが、宙に飛んで身を捻り回避する。

列車の屋根に右手をついて優雅に着地し、再び炭治郎に左手を向けた。

「眠れ」

厭夢が新たに術をかける。

炭治郎は大きく仰け反り、白目を剥いている。

今度こそ、間違いなく術に掛かった。そう確信し、ほくそ笑む厭夢。

——だが。

「まだ、だあ……ッ!!」

(……あり得ない。いくらこいつが、未来人だとしても……それ以外に何か特別な何かがあるわけじゃない……何故効かない?)

「眠れ。眠れえ。ねえむうれええええ!!!!」

何度術をかけても、どれだけ倒れそうになっても、炭治郎は起き上がる。

不可解極まりない現象だ。

見極めるため、厭夢は炭治郎をじっくりと観察する。

「ハア、ハア、ハア……!」

炭治郎は肩で息をしていた。

顔色は青を越えて真っ白。冷や汗を滝のように流し、体を震わせている。

寒さ……ではない。間違いなく、恐怖の色だ。

(こいつ……やはり術に掛かっている。かかった瞬間にそのことを認識し、覚醒の為の自決を繰り返しているんだ)

何度も、何度も、何度でも。

夢の中の自分を殺し、立ち向ってくる。

だが、夢とはいえ自分自身を殺すと言うのは、相当な胆力が必要だろう。現に、炭治郎は厭夢が眠らせるだけで、覚醒の為に首を斬り、勝手に精神的に追い詰められている。

しかし、異常なのはその後だ。

自分の死を実感し、まともな人間なら座り込んで、肩を抱いた震えるのが関の山だろう。

なのにこいつは、座るところか走ってくる。

何が、この少年を動かすんだ。何故、その瞳は未だに、自分を睨んでいる？

「チー！」

ならば、と。厭夢は炭治郎に見せる夢を変えた。

こいつは絶望に弱い。

厭夢の血鬼術は、術に駆けた相手の記憶を見ることが出来る。そこで情報を集め、被術者の望む幸福の夢を見させることが出来るのだ。だから、厭夢は知っている。炭治郎……白銀竜也のことを。彼の生前、転生前の人生を。

転生が真実がどうかは関係ない。どうでもいい話だ。重要なのは、この少年を止める方法だ。

厭夢が炭治郎に見せたのは、家族が惨殺された日の出来事。そして、その状況で、守れなかったと後悔する男が、守ってもらえなかった者たちに責められたら、どうなるのか。

答えは簡単……精神崩壊だ。手加減はしない。今できる全力で、少年の心を折る。

これで少年は終わる……はずだった。

「…………ふざけるな」

そこ冷える声で、炭治郎が言う。

その瞳には、一つの感情しか残っていないかった。

「言うはずがないだろ、そんなことを！ 姉さんが、美優が!! ふざけるのも大概にしろツツ!!!」

折れない。

むしろ、炭治郎の怒りを増長させるだけだった。

その事実気づいた時には、もう遅い。

既に炭治郎は厭夢の懐に潜り込んでいる。その頸元に、刃を添えて
いる。

「三流演出家が……凶に乗るな——ツツツ!!!!」

炭治郎の怒りを乗せた刃が、厭夢の頸を跳ね飛ばした。

悪夢の延長と目覚める者たち

辛い。苦しい。怖い。

悪夢によつて眠らされ、その度に覚醒のために自殺する。きつと、こんな追い詰められた状況でなければできないだろう。だが、一瞬でも覚醒の為のタイミングがズレれば、その先に死が待つ。一秒たりとも無駄にはできない。

「……………!!」

「なっ——」

倒れる寸前で起き上がった炭治郎に、悪夢が驚きの声を上げる。炭治郎は悪夢に刃を振るうが、悪夢の身のこなしに軽く躲される。そして、再び血鬼術を掛けられ、夢の世界に送られた。また、斬る。己の首を。

起き上がり、鬼へと駆ける。眠らされる。死ぬ。起きる。眠らされる。死ぬ。起きる。

同じことの繰り返し……炭治郎は自分の精神がすり減っていく音を聞いた。だが、それでも止まらない。止まらない、止まるわけにはいかない。

炭治郎を動かすのは、憎しみでも正義の心でもない……ただ、単純な怒りだ。

許せないという思いが、炭治郎に一步を踏み出させる。

「……………え」

再び眠らされた。

だが、そこは先ほどまでの夢とは決定的に違っていた。荒らされた家。血濡れたリビング。死に体の家族。

「なんで助けてくれなかったの?」

片足の無い妹が、何も映さない瞳で、抑揚のない声色で言った。

「私たちが殺されてる時、何してたの?」

妹の言葉に、炭治郎はただ立ち尽くすしかなかった。

不意に、部屋が暗転し、妹ではなく姉が立っていた。

姉は鋭い目つきで炭治郎を睨みながら、呪いの呪文でも唱えるかの

ように言った。

「お前は何のためにいるんだ。屑が、お前が死ねばよかつたのに」

その瞬間、炭治郎の怒りは、頂点を越えた。

「…………ふざけるな」

どす黒い炎が、すり減った精神を焦がす。

現実の炭治郎は、顔色の白さが失せ、視線だけで人を殺せそうなほど強烈な目付きで、厭夢を睨んでいる。

「言うはずがないだろ、そんなことを！ 姉さんが、美優が!! ふざけるのも大概にしろツツ!!!!」

怒声を上げ、屋根を蹴り、厭夢に向かって刃を振りかざす。

「三流演出家が…………凶に乗るな——ツツツ!!!!!!」

心の底からの罵倒とともに、厭夢の頸を跳ね飛ばした。

宙を舞う頸が、鈍い音を立てて屋根の上へと落ち、頭と泣き別れた胴体が崩れ落ちた。

それを冷めた視線で流し見ていた炭治郎は、ふと我に返る。

(…………待て、一撃? たったこれだけで倒れるのか…………?)

那田蜘蛛山の時の十二鬼月は、もつとずっと強かった。

水分神は、累との戦いのときに使用した乱舞よりも攻撃力が弱い。だからこそ、あっさりとは片付いたことに違和感を覚える。

そして何より、冷静さを取り戻したから分かることがあった。

(まだ…………あの悍ましい気配が消えてない。奥の車両から…………)

「あの方が」

「——ッ!!」

どこからか、あの忌々しい声が聞こえた。

幻聴ではない。やはり、戦いはまだ終わっていない。

炭治郎は、瞬時に周囲を警戒する。

そんな彼に構わず、声はどこからともなく木霊する。

「柱に加えて耳飾りの君を殺せって言った気持ち、今凄く分かったよ」
声の主は、ずっと炭治郎の近くに居た。

屋根の上に転がる厭夢の頭部が、ひとりでに会話を続けていたのだ。

だが、その声には僅かにいら立ちが帯びている。

「存在自体がこう、とにかく癩に障る感じい」

「なっ——」

夢から何度も目覚めることに驚いていた厭夢とは逆に、今度は炭治郎が言葉を失っていた。

厭夢の胴体が肉の塊に変質し、屋根に根を張った。触手のように伸びて、頭部を天高く持ち上げる。

「何とか間に合ったよ。……そう、そう言う顔が見たかった」

頸を斬ったのに、鬼が死なない。

突然の事態に驚き、困惑する炭治郎を眺める厭夢は、ねっとり笑みを浮かべる。

「うふふ。頸を斬ったのにどうして死なないのか、教えて欲しいよね？ でも、ダメ。俺は君が凄く嫌いだから、何も教えないよ」

そう言うと、厭夢の頭部が触手に呑み込まれ、消える。

残った触手は、炭治郎を列車から突き落とさんと牙を剥いた。

「チッ！」

思わず舌打ちしながら、炭治郎は触手を両断する。

（まずい、どうしてだ。考えろ……間に合った？ 何かを待っていたのか？）

触手を捌きながら、思考を加速させる。

何かあるはずだ。厭夢が行った頸を斬っても死なないカラクリが。

しかし、考えてる間にも触手は次々と襲ってくる。

（……前提を誤るな。鬼は日輪刀で頸を斬ったら死ぬ。さっきので死ななかつたってことは、あれは頸じゃない……頸じゃない？）

手応えのない鬼。倒した後も感じる邪悪な気配。鬼の言葉。

全てを照らし合わせ、結論を出す。

「……そうか。お前は待っていたんだ。列車と完全に融合する瞬間を！ さっきのは囷、本体じゃない！」

「——あれえ？ もう気づいちゃった？」

炭治郎の背後から声が聞こえた。

振り返ると、厭夢が屋根の中から文字通り顔を出していた。

「そう、君と余計な話をしている間に、融合を完全に終えた！ この列車すべてが俺の血であり肉であり、骨となったんだ！」

「——ッ?！」

「その顔！ 分かってきたね？ つまり、この汽車の乗客が二百人余りが俺の餌であり……人質だよ」

全身から嫌な汗が噴き出る。

厭夢の言葉に嘘はないだろう。だが、それ故に不味い。

今この瞬間にも、鬼の血鬼術に掛かり眠ってしまった乗客が、消化されるかも分からない。

「ねえ、守り切れる？ 君一人で、この汽車の端から端までうじゃうじゃとしている人間たち全てを、俺にお預けさせらるかなあ？」

「くっ——！」

炭治郎が日輪刀を振りかぶるが、その時にはすでに厭夢の頭部は屋根の中に消えていた。

「……まずい、まずいまずい!! 煉獄さん!! 善逸、伊之助ーっ!! 起きろオオオオオオオーッ!! 攻撃されてる!! 早く!!」

自分一人で全員を守ることなど到底不可能。

ならば、頼るしかない。

炭治郎は風の音で掻き消されないよう、全力で叫び続けた。

「オオオオオオオオオオオオオ!!」

猛々しい雄たけびとともに、屋根を突き抜けて何かが現れた。

猪の頭、半裸の肉体。刃毀れし、鋸のようになっていた日輪刀。

「ついてきやがれ子分共!! ウンガアアア!! 爆裂覚醒猪突猛进!!」

!! 伊之助様の、御通りじゃアアア——ッッッ!!!!!!」

嘴平伊之助。

ここにきて、頼もしい味方の増援だ。

「伊之助ー! この汽車は鬼と融合している! もう安全な所が無いんだ!! まずは眠らされている人たちの安全を確保するぞ!!」

炭治郎の言葉に、伊之助が体を震わせる。

だが、それは恐怖からではない。むしろ、歓喜と闘争心が湧き溢れる。

「やはりな……俺の読みが正しかったんだ！　つまり、俺が親分として申し分ないということ！」

そういえば、と炭治郎は思い出す。

列車に乗る前から、伊之助はやたらと列車に戦意を燃やしていた。単純に未知への興味からだと思っていたが、もしや無意識に鬼の存在を察知していたのか？

すると、伊之助は自分の開けた穴から再び車内に戻る。

「行くぜ。獣の呼吸【伍ノ牙 狂い裂き】!!」

カアアアアという独特な呼吸音とともに、車内をいつの間にか覆い尽くしていた四方八方の触手を切り倒す。

さらに車内を駆け回り、一度で捌き切れなかった触手を次々切断し、乗客を器用に避けて、止まることなく刃を振るい続ける。

「どいつもこいつも俺が助けてやるぜ!!　須らくひれ伏し、崇め讃えよこの俺を!!　伊之助様が通るぞオオ!!」

行く手を阻む戸を、肉の壁ごと蹴破り、高らかに叫んだ。

「車内は大丈夫……か？」

伊之助一人で大丈夫なのだろう。

別に、伊之助の実力を疑っているわけではない。だが、いくら何でも一人と言うのは無理があるだろう。

だが伊之助が起きているなら、他のみんなも目覚めているのではないか？

「——ッ!!　くっ!!」

考えていると、触手が攻撃してくる。

よく見れば、列車が厚い肉の塊に覆われ、すっかり変形していた。

炭治郎は次々迫ってくる触手を斬りながら、悩み続けた。

禰豆子は、乗客に襲い掛かる謎の触手を迎撃していた。

いつの間にか発生していたそれは、鬼の気配を放っていた。

禰豆子は乗客を守る為に拳を握り、血を零す。

「血鬼術、爆血!!」

紅蓮の炎が、禰豆子の拳に灯る。

「――爆血拳!!」
ばっけっけん

禰豆子の剛腕によって放たれた炎の拳が触手を焼き尽くしていく。すぐさま再生しようとしていた触手だが、一向に傷が治らないことを不思議がっていた。

それもそうだろう。禰豆子の血鬼術には、鬼の再生を阻害する力がある。ある意味、親殺しともいえるその力は、人を守る為に振るわれていた。

「ハアーツ!!」

だが、出血するうえ、血鬼術は禰豆子の体力を多く消費させる。それでもなお力を使うのは、単純の計算の上での行動だ。

禰豆子一人で乗客全員を守り抜くのは至難の業。なるべく敵の手数減らす必要がある、その結論が再生阻害だった。

「くっ――!!」

暴れ回っていた禰豆子を、複数の触手が絡めとる。

凄まじい力を持って、禰豆子の全身の骨をバラバラにしようとした

……その時。

「雷の呼吸【壱ノ型 霹靂一閃――】」

稲妻が車内を縦横無尽に駆け巡る。

「――六連」

遂には禰豆子を縛っていた触手を細切れにし、雷は禰豆子の目の前で着地した。

「禰豆子ちゃんは、俺が守る」

「……善逸さん?」

「ぐがー」

禰豆子の目が点になる。

善逸は眠っていた。眠ったまま戦っていた。

いや、起きて戦う方が珍しいだけであり、普段からこういうのだ。

今までは極限まで精神を追い詰められ、気絶する形で意識を失っていたが、今回は鬼の力で強制的に眠らされている。

端的に言えば、今回の鬼の血鬼術と善逸は相性抜群だった。

「……そうだ」

禰豆子は思いついたように、善逸の刀に自身の血を流し、燃焼させる。

すると、鮮やかな黄色に輝く日輪刀が朱く染まった。

爆血刀。禰豆子の血鬼術によって日輪刀が熱せられ、発動する炎の刃。

善逸が迫る触手を居合斬りで両断すると、再び触手の再生が鈍る。

「行きますよ、善逸さん！」

「——ああ。雷の呼吸【壱ノ型 霹靂一閃】」

「爆血蹴り!!」

赤い雷と、炎を纏った蹴りが、列車を揺らした。

悪夢の終焉

炭治郎たちが乗客を守る為に戦っている最中。

この男も、目覚めていた。

「うーん、うたた寝している間にこのようなことになるうとは、よもやよもやだ!!」

大声で独り言ちる煉獄の足元には、ここに来るまでに切り刻まれた無数の肉の破片が転がっていた。

「柱として不甲斐なし。穴があつたら——」

刀を右肩に置き、左手を前に突き出す。

途端、その全身に紅蓮の如き炎の鬨気が満ちた。

そんな彼を恐れてか、触手は乗客より先に煉獄を始末せんと、一斉に襲い掛かる。

「入りたい!!」

叫びとともに、煉獄の技が触手を薙ぎ払う。

自身に迫る触手だけでなく、窓、天井、床に浮き出た鬼の肉と、続けざまに斬撃を放ち、列車を大きく揺らした。

「む?」

目の前に触手と戦う剣士を見つけた。

額に火傷のような痣のある、銀色の日輪刀を持つ少年。

「竈門少年!」

「!? れ、煉獄さん!? 目覚めたんですね!」

振り向いた瞬間、目の前に煉獄の顔が現れたことに驚く炭治郎。

「ここに来るまでにかなり細かく斬撃を入れてきたので、鬼側も再生に時間が掛かると思うが、余裕はない!! 状況は把握できているか!?」

「あ、えつと……相手は十二鬼月、下弦の壺です! 人を眠らせる血鬼術を使い、この汽車と融合しています!」

「なるほど! 列車との融合は推測通りだが、人を昏倒させる血鬼術か! これほど容易く掛かってしまうとは、不甲斐ないばかりだ!」

すると、煉獄は片手を広げ、炭治郎の鼻先につきつける。

「いいか、この汽車は八両編成だ。俺は後方五両を守る。残りの三両は黄色い少年と竈門妹が守る。君と猪頭少年は、その三両の状態に注意しつつ鬼の頸を探せ」

頸……そういえば、汽車の前方で嫌な気配を感じたが……。

顎に手を添える炭治郎を見た煉獄が、

「心当たりがあるのか？」

と、問いかけた。

「あ、はい」

「うむ、では任せるぞ！」

「——はい!!」

煉獄の指示は的確だ。

全員の実力を正しく判断した上での無駄のない作戦。

一人で五両もの車両を守る途轍もない実力。

これが、鬼殺隊の『柱』。

(遠い……だけど、今は感心してる場合じゃない！)

煉獄は既に後方へと向かっている。

自分がここで立ち止まっているわけにはいかない。

炭治郎は前夫へと続く戸の前に行き、鬼の肉で固められた戸を蹴破る。

通路を抜け、再び列車の屋根へと上る。

「伊之助、居たのか！」

「うるせえ、ぶち殺すぞ！」

呼びかけると、何故か不機嫌そうな声が返ってきた。

「ギョロギョロ目ん玉に指示された！ ギイイイ〜!!」

伊之助は常に唯我独尊という言葉を地で行くような男だ。

他人に指示されるのは我慢ならないようで……しかしどこか湧き上がる興奮を抑えているようだった。

「なんか……なんか凄かった。腹立つう……！俺だっていつかあれくらいやってやるわ！ 親分だからな!!」

「そうか！ よし、行こう。恐らく鬼の頸があるのは……」

「おう！ 全力の漆ノ型で見つけた。この主の急所だ!!」

伊之助は迷うことなく最前方……石炭の積まれている場所へと駆ける。

炭治郎もそれについていき――。

「……か」

二人は炭水車の石炭の上で立ち止まった。

目下からは、特別気色の悪い気配を感じる。

「オリヤアアア!!」

石炭の上から宙へと舞った伊之助が、二本の刃で運転席の屋根を切りつけ、吹き飛ばす。

伊之助が「オツシヤアア!!」と雄たけびを上げながら室内へ降り立つと、そこに居合わせた運転手が驚いた顔を向ける。

炭治郎もそれに続き侵入すると、蒸し暑さを感じた。石炭を燃やし続けているからだろうか。

だが、それとは別の気持ち悪さが、部屋全体から漂っている。

「怪しいぜ怪しいぜ、この辺りは特に!!」

運転手の背後の機械の手前辺りを刀でさすと、傍にいる運転手が「なんだお前は! で、出ていけ!」と喚く。

無論、伊之助の眼中には運転手はいないし、炭治郎も、運転手の顔色の悪さから、あの子供たちと同じ事情なのだろうと悲痛な表情をする。

炭治郎はまず、その運転手に被害が行かないよう、気絶させ脇に抱える。

背後では、既に伊之助が大きく刀を振りかぶっており――

「キモッ?! あっちいけ、シツ、シツ!」

振り下ろそうとした瞬間、室内に鬼の肉がボコツと浮き出た。

一気に膨れ上がったそれは、伊之助目掛けて一斉に襲い掛かる。

肉の塊から生えてくる腕には、さしもの伊之助もギョツとし、しゃにむに刀を振り回す。

刀に当たった触手が床に落ちるが、腕は次々生えてきて留まることを知らない。

遂には伊之助の両手両足を掴み、身動きを封じた。

「手エ多過ぎだろ!!」

とどめとばかりに伸びてきた二本の触手が、伊之助の頭部を掴み、握りつぶそうとする。

(しまっ——)

「させるか!」【水の舞 水分神】——ツ!!」

運転手を気絶させ、安全の場所まで運び戻ってきた炭治郎が、伊之助を縛っていた腕を全て斬り落とした。

鬼の腕がボロボロと崩れ落ちる。

「伊之助、大丈夫か?!」

「お前に助けられたわけじゃねえぞ!!」

刀を下ろした炭治郎に案じられるが、伊之助は悔しきからつい憎まれ口を叩いてしまう。

しかし、炭治郎はむしろいつもの調子の伊之助に安堵した様子だった。

そして、キツ、と伊之助が怪しいと睨んでいた場所を視線で射抜き

「伊之助頼む!」

「おう! 親分に任せな! 獣の呼吸【式ノ牙 切り裂き】!!」

伊之助の放った斬撃が、運転室の床に炸裂した。

文字通り大きく切り裂かれた床から、真っ白な蒸気のようなものが噴き出てくる。

「……骨?」

思わず、背筋が震えた。

床下には、隠れるように巨大な骨が埋まっていて、ドクンと脈打っている。

「くっ——!」

咄嗟に炭治郎が刃を振るう……が、一瞬遅かった。

炭治郎が攻撃していた時には、既に骨は床から生えた腕に守られていた。

思わず奥歯を噛みしめっていると、鬼の腕が炸裂したかのように四方に伸びた。

二人は次々と襲い掛かる腕を掻い潜り、一度、屋根の上に戻る。

「まずい……こつちの攻撃より早く、腕が骨を覆う……！」

「はっ！ だったら腕が出るより先に骨を斬りゃいい！」

「そんな簡単に……いや、それだ！ 伊之助、同時に攻撃して、どちらかが頸を斬れるように呼吸を合わせるんだ！」

「なるほどな、いい考えだ。褒めてやる!!」

伊之助が愉しそうに応じる。

「ああ！ 行くぞ……！」

炭治郎の掛け声とともに、互いに鬼の頸へと駆けだす。

その間に、炭治郎は伊之助に厭夢の情報を伝える。

「いいか伊之助。相手は俺達を眠らせる血鬼術を使う、奴の声が聞こえて、何かしらの要因で夢の世界に送られたら、即座に自決するんだ。覚醒できる！」

「テメエに言われるまでもねえよ!!」

——強制昏倒睡眠・眼。

刹那、厭夢の声が聞こえたような気がした。

それに合わせるように、無数の目が備わった触手が、炭治郎へと迫る。

先程聞こえた言葉の内容……今まで見た事のない触手。

炭治郎はほぼ直感で叫んだ。

「目を見るな!!」

叫びながら、炭治郎は目を閉じた。

既に空間の把握は終わっている。目を閉じて戦っても問題はない。

「うるせえ!! 命令すんな、お前に言われなくても分かっただよ!!」

伊之助は術に掛かる様子を見せない。

そういうえば、と炭治郎は思い出す。伊之助は常に猪の被り物をして
いるから、この術に掛からないんじゃないのか？

実際、その読みは当たっていた。何度か二人の前に目の付いた触手が現れるが、二人の勢いを止めることができない。

気配で伊之助の大立ち回りを認識しながら、勝利を確信する。

(行ける……！)

「止めだ！」

「おっしやあ!! 終わりだ鬼イ!!」

炭治郎は迫りくる触手を切り裂き、続く攻撃を宙へ飛んで回避し、石炭の上へと着地する。

伊之助もまた、襲い掛かる触手を次々と避けながら、炭治郎の隣に着地する。

あとは肉を裂き、骨を断つだけ。

すると途端に、頸を守っていた肉が大きく膨れ上がった。

炭治郎は気配でそれを察知し、咄嗟に飛び上がる。

伊之助もそれにつられ飛び、その直後に二人のいた足場を、触手が石炭ごと薙ぎ払った。

だが、上空へと逃げた二人を、数多の触手が追いかける。

「く、そお……！」

たまらず、炭治郎は目を開けた。

気配を探るだけで対応するには、数が多すぎる。気配が混同してしまうため、第六感ではなく五感に頼るしかない。

自由の利かない空中で、それでも伊之助と連携して応戦する。

そんな二人を囲むように、巨大な二つの肉塊が出現した。

(まずっ……！……！ 今眠らされたら、例え覚醒しても潰される……!!)

「くそがあっ!!」

青ざめる炭治郎だったが、間一髪で伊之助に救われた。

猛然と周囲の目玉を切り刻み、伊之助は二本の刀で突き刺す形で両足を付けると、そのまま肉の表面を削ぎ落しながら駆け下りた。

「行くぞ、ついていけ!!」

「ああ!!」

炭治郎は重力に身を任せながら刀を頭上に構える。

伊之助の体は肉塊を離れ、運転室へと頭から飛び込んだ。

真下にあるのは鬼の頸。

「獣の呼吸【肆ノ牙 切細裂き】!!」

地獄の連鎖

途轍もない絶叫とともに、のたうち回るように跳ね上がった汽車が横転しようとする。

骨は列車の連結部分と重なっていたようで、運転席が独りでに独走していく。

「まずい……い……」

「おい権太郎!!」

足場が不安定になり、ふらついていた炭治郎に、伊之助が手を伸ばした。

炭治郎は咄嗟にその手を掴もうとし――。

「あ……」

「――ッ?! 炭治郎ーッ!!」

珍しくしつかり名前を呼んだ伊之助に内心感心しながら、炭治郎は浮遊感を全身で感じていた。

列車から勢いよく投げ出され、刀を落とし、羽織が脱げた。

これ以上は危ないと、咄嗟に受け身を取る。

「あぐっ!!」

背中から落下し、肺の中の空気がすべて吐き出される。

脳が揺れる。目眩が止まらない。

朦朧とする意識の中、列車は金属の擦れる音を反響する音が耳を刺す。

(……うっ……生き、てる……?)

目眩が取れ、視界がハッキリとしていく。

炭治郎は重い足取りで進む。列車が脱線していないか確認しなければならぬ。

途中、落とした日輪刀を見つけた。

腰を下ろして拾い上げようとすると、背中から激痛が走る。

うっ、という苦悶の声を漏らしながらも、刀を拾い上げ、周囲を見渡す。何も無い場所だ。線路以外は森があるだけ。

近くに列車が見えないということは、脱線は免れたのだろうか。

「……あ、羽織どつか行つたな……まあいいか」

黒と緑の羽織。

あれは、自分が竈門炭治郎となつてから、最終選別の時以外ずっと身につけていたものだが、実はそこまで愛着があるわけではない。

だから別に、今紛失しようとしてそこまで必死になつて探そうという気にはならなかった。

「……一瞬、衝撃みたいなのがあつた。煉獄さんか……？」

あの人のことだ。きつと、こちらの失態の尻拭いをしてくれたに違いない。

戻つたらお礼を言おう。そう思い、炭治郎は刀を杖のようになして一歩ずつ歩いていき――

「――ッ!?」

唐突に、何かが接近してくる気配を感じた。

慌ててその方向を振り向くのと、謎の飛来物が土煙と衝撃波を発生させるのは、全く同時だった。

「ぐっ……何が……っ!」

鬼の気配。

それも、今まで感じたことがないほど強く、濃厚で、邪悪な気配だ。体が震える。冷や汗が止まらない。今にも膝から崩れ落ちそうだ。

だが、相手が鬼なら戦わなければ。

炭治郎は杖代わりにしていた日輪刀を構え直す。

「……は？」

――おかしい。こんなはずじゃなかった。

何度考えても、これだけはあり得ない。あり得てはならない。

中型の獣程度の肉塊となつた厭夢は、己の肉体が崩れ落ちるのを感じながら、疑問の渦の中に居た。

(体が崩壊する……再生できない。……負ける？ 俺が？ ——馬鹿な、俺はまだ全力を出せていない!!)

その気になれば、いつでも列車内の人間を皆殺しに出来たんだ。

なのに、たった四人の鬼狩りに邪魔をされた。

(こんな姿になつてまで……！ これだけ手間と時間をかけたのに……！ アイツだ、アイツのせいだ！)

厭夢の脳裏に、炎のような髪型をした男の姿がよぎる。

(二百人も人質を取っていたようなものなのに、それでも押された。抑えられた。これが柱の力……？ アイツ、アイツも速かった。術を解け切れてなかった癖に……!!)

新たに、目を閉じたまま車内を稲妻のように駆け巡る黄色い少年が浮かぶ。

そして、その傍らに居た鬼の娘の姿も。

(しかもあの娘、鬼じゃないか！ 鬼狩りに与する鬼なんて、どうして無惨様に殺されないんだ!!)

くそお、と呻く。

同時に、全ての発端となった耳飾りの少年の姿が思い出され、憎しみが込み上げてくる。

(そもそもだ。アイツに術を破られてから全てが狂った！ すべてアイツのせい……どこにいる……!!)

必死になって周囲を見渡すが、件の少年は影の形もない。

(いや、あのガキだけなら殺せたんだ！ あの時の猪が邪魔さえしなければ……!)

そうだ、アイツの邪魔がなければ。

そんなことを考えていたせいだろうか。

「ん？ 何だこいつ？」

青い髪の筋肉質な少年に見つかった。

腰には刃毀れの酷い日輪刀を携え、猪の被り物を脇に抱えている。所々土で汚れているが、間違いない。

「お、前は……!」

「あ？ その声……あつ、さっきの主か!!」

途端、少年の顔に獰猛な笑みが浮かぶ。

「ハハハッ、なんだその恰好！ ダツセエ！」

(……………は?)

何だこいつは、何故嗤っている。

——いや、違う……………こいつは、自分を嗤っている。

醜い小動物のような姿になりながら、崩壊していく自分の姿を見て、侮辱しているんだ。

怒りで頭に血が上りそうだった。だが、上らせる血もない。

「ふぎ……………おま、えの……………せい、だあ……………!!」

「はっ、知ってるぜ。そう言うのは、負け惜しみつつうんだろ？ ガハハッ!!」

違う。オカシイ。

何故お前が、鬼狩りおまえが嗤うんだ？ そこに立っているのは自分であるはずだろうか？

悔しきで涙すら出てくる。よりもよって、この男に嗤われて死ぬことになるなんて。

信じられない、まるで悪夢だ。

「あばよ主ー」

少年は悪夢を振り返ることなく去っていく。

そんな後姿を呆然と眺めながら、止めすら刺してもらえない悪夢は塵となって消えた。

——晴れていく土煙の中から、そいつは姿を現した。

人形のような無表情を顔に浮かべ、心底つまらなそうにしている若い男だ。

紅梅色の短髪に中性的な顔立ち、細身ながらも筋肉質な体格の若者とといった外見で、顔を含めた全身に藍色の線状の文様が入っており、

足と手の指先は同じ色で染まっている。

両目に数字が刻まれており、服装は、上は素肌
に直接袖のない羽織、下は砂色のズボンと両足首に数珠のようなものを着けているだけの軽装。

(……竜の呼吸——!!)

“上弦の参”。

男の瞳に刻まれた数字から、その情報が読み取れた。それと同時に、炭治郎は全力を出す。

余力など残せるはずがない。むしろ、全力でも敵うかどうかかわからない。

それでも、やれることはやらなければ。

「……あ？」

だが、炭治郎は何故か空を見上げていた。

仰向けに寝ているのだろうか。ならば、何故背中から地面の感触がしないのか。

口の端から赤い液体が伝う。手足に力が入らない。

(あ……)

そこでようやく思い出した。

そうだ、一步を踏み出した瞬間、あの鬼に殴り飛ばされ、気を失ったのだ。

恐らく、気絶していたのはほんの数秒だろう。何故なら、空中にいる状態で、自分は目を覚ましたのだから。

「あの方からの命令だな。貴様は優先的に殺せと言われている。理由は知らんが、俺もお前のような弱者には虫唾が走る。特に、お前を見ていると、な」

空中を舞っていた炭治郎よりも高い場所で、鬼が拳を構えていた。

(動け、動け、動け!!)

「……竜の、呼吸……」

「竜だと？ 貴様のような弱者にはまるであっていないな！」

駄目だ、向こうのほうが早い。

それに、刀を握る手に力が入らない。

炭治郎は自身に迫る拳をただ眺めることしかできず――

「やめろクソ野郎オオオオオ!!」

「炭治郎!」

咄嗟に、炭治郎は善逸に拾われ、伊之助が鬼に刃を振るっていた。その刀は何故か赤く染まっており、しかし刃は鬼に掠り一つ付けな
い。

「ふざけた刀だ。その刃毀れ、弱者の証だ」

「ン、だとオ——ッ!」

「失せろ」

鬼が伊之助に蹴りを放った。

蹴飛ばされた伊之助は、凄まじい勢いで地上へ向かう炭治郎と善逸
に衝突した。

三人はもみくちやになりながら地面へと墜落し――

「うっ、いてて……あれ? どうなってんの?! なんで外にいんの?!

っていうか何この音?! ……うっ」

「あゝあゝ……あ? ギョロギョロ目ん玉? ……んで、ここに……」

善逸と伊之助が気を失った。

そのすぐそばには、三人を受け止めている煉獄がいる。

「うむ。三人とも無事だな!」

気絶する二人を見て、煉獄が軽快に告げる。

傍らには、突然の事態にオロオロしている禰豆子がいる。

「ほう……その闘気、練り上げられている。至高の領域に近い。お前
は柱だな?」

鬼が、笑顔で煉獄に問いかけた。

それとは真逆に、煉獄はどこまでも無表情で鬼に答える。

「そうだ。俺は炎柱・煉獄杏寿郎」

「俺は猗窩座」

名乗ると、煉獄は即座に猗窩座と名乗った鬼に攻撃を仕掛けた。

猗窩座はまるでかつての旧友と出会ったかのような笑みを浮かべ、
応戦する。

炎のように赤い日輪刀と、鬼の拳が衝突した。

「いい刀だ」

猗窩座の腕が、煉獄の刃に負け千切れ飛んだ。

「……ん？」

そこで、猗窩座は失った己の腕を見ながら、不思議に思った。

（腕が再生しない……？）

おかしい。上弦の鬼である自分の再生力ならば、この程度の傷は瞬きの間に治るはずなのに。

これは、明らかに何らかの力が働いている。ならば、それを仕掛けたのは誰なのか。

「何をした？ 杏寿郎」

「馴れ馴れしく名を呼ばないでもらいたい……俺の力ではない。竈門妹の血鬼術だ」

「血鬼術……？」

猗窩座が、唯一鬼狩り達とは違う気配を放つ少女を見た。

なるほど確かに。彼女は鬼だ。ならば、血鬼術を使えて当然だろう。

……だが。

「何のつもりだ？ 何故鬼狩りであるお前が、鬼の力を借りて戦うのだ？」

「確かに彼女は鬼だ。だが、彼女は人を襲わない、喰わない」

煉獄は、揺るぎない、信頼に満ちた声で断言する。

煉獄の言葉に、炭治郎と禰豆子は驚いてその背中を見る。

柱合会議では、煉獄は禰豆子を殺処分すべきと訴えていた。今まであくまでもお館様の命で黙認していたにすぎない。

なのに、今の煉獄の言葉には、自らの意志で断言している節があった。

「なぜ断言できる？ 人を喰わない鬼がいるとでも？」

「俺も、つい先日まではいないと思っていたさ。だが、彼女はそんな俺の認識を変えた」

俺は見たのだ、と煉獄が続ける。

「彼女が血を流し、それでも人を守る為に戦い続ける姿を。たくさん

の人を守り続け、仲間を背を預けながら戦う姿を」

煉獄の脳裏に、死に物狂いで鬼の触手を燃やし続ける禰豆子の姿が再生される。

その瞬間を思い出し、やはり自分の考えは間違っていないと、改めて確信し、告げる。

「ならば、彼女は鬼殺隊だ。俺が守るべき存在であり、頼るべき仲間だ」

煉獄の言葉は、一切の躊躇いがなかった。自分の信じる者を信じる……そう言う思いが見え隠れしていた。

その禰豆子への信頼の厚さに、炭治郎は泣き出しそうになった。

「まあいい」

しかし、一切興味が無いのか、猗窩座は戦闘を始めた。

今度は猗窩座の拳が、とてつもない速度で放たれ――

「炎の呼吸【弐ノ型 昇り炎天】」

その片腕を煉獄の斬撃が弾き飛ばす。

猗窩座は失った両の腕を見て、確信した様子で会話を始める。

「杏寿郎、お前に提案がある?」

「提案?」

「ああ――お前も鬼にならないか?」

「ならない」

躊躇いなく、煉獄が淡々と即答する。

しかし、断られた猗窩座は相変わらず楽しそうな笑みを浮かべている。

「気が合うと思うのだがな」

「ないな。初対面だが、俺は既に、君のことが嫌いだ」

「何故だ?」

「君は先ほど俺と打ち合った時、竈門少年を狙っただろう? 逆に問うぞ、何故手負いの者から狙う?」

「邪魔だから……まあ、その小僧に関しては、あの方からの命令があるのだ」

「鬼舞辻無惨か」

すると、猗窩座が最初に失った左腕が再生された。

それを見て、煉獄が刀を構え直す。

「ならば、竈門少年を殺させるわけにはいかない。猗窩座、彼を殺したいなら、まず俺を倒せ」

「いいだろう」

徒手空拳の構えで、微笑む猗窩座。

「鬼にならないなら殺す」

「その前にお前を倒す」

全く同時に、二人は駆け出した。

猗窩座の神速の貫手が、煉獄の鳩尾を貫かんと繰り出される。煉獄はその拳を柄で弾き、回転しながら頸の右側に斬撃を放つ。

綺麗な曲線を描く斬撃を、猗窩座は僅かに仰け反る形で回避し、回し蹴りを放つ。

煉獄はその回し蹴りを刃で受け止め、大きく振りかぶった一太刀を浴びせようとする。

しかし、猗窩座は咄嗟に飛び退いて煉獄の一撃を躲した。

どちらも一步も譲らない、接戦だった。

「俺の言ったことを覚えているか杏寿郎？」

再び衝突しながら、猗窩座が煉獄に問いかける。

「なぜ、お前が至高の領域に踏み入れないのか教えてやろう。……人間だからだ」

心の底から侮蔑を持って、猗窩座が吐き捨てるように言った。

「老いるからだ、死ぬからだ。……鬼になろう。そうすれば、百年でも二百年でも鍛錬し続けられる。強くなれる」

猫撫で声で誘う。

だが、その声はどこか凍てついたように冷たく、感情の底が知れない。

満面の笑みで放たれる拳をいなしながら、煉獄はハッキリと告げた。

「老いることも死ぬことも、人間という儂い生き物の美しさだ。老いるからこそ、死ぬからこそ、堪らなく愛おしく尊いのだ。強さと言う

ものは、肉体に対してのみ使う言葉ではない」

猗窩座の肉体に傷を入れ、煉獄が強い口調で告げる。

「長い時を過ごしていたのだろうか？ その割に、君は世界を知らなすぎる。もう少し勉強しておくべきだったな」

「杏寿郎、俺は悲しいよ。お前の理解が得られないことが」

今までと違い、心底悲しそうに表情を曇らせ、治った腕を胸に当てながら猗窩座は言う。

「せめて、強いお前のまま……死んでくれ」

その瞬間、猗窩座の空気が変わった。

足元に雪の結晶のような方陣が展開され、その身に纏う覇気がより一層強くなる。

「術式展開 破壊殺・羅針」

にいつと嗤い、猗窩座は煉獄に拳を繰り出した。

夜明けの時

猗窩座が血鬼術を発動し、煉獄へと迫る。

繰り出される拳を、煉獄は【壱ノ型 不知火】で迎え撃つ。

猗窩座は煉獄の放つ鋭い斬撃を紙一重で躲し、間髪入れずに攻撃に転じる。

息もつかせぬ連撃を、煉獄は振り向きざまに斬撃で受け流す。

「今まで殺してきた柱達に炎はいなかった!」

絶え間なく拳を繰り出しながら、猗窩座が楽し気に言う。

顔の前に刀を構え拳を受けた煉獄は、そのまま切り伏せようとするが、猗窩座の拳が強い力で押し返してきた。

「そして俺の誘いに頷く者もなかった!!」

弾かれるが、再び刀を振るう。

煉獄の一撃を、猗窩座見もせず躲し、すかさず彼の頭部に手刀を放った。

素早く刀を振り上げた煉獄が猗窩座の手を切り裂く。

猗窩座は後方に飛びながら、弾かれた腕を掴み、傷口に擦り付けた。

「なぜだろうな? 同じく武の道を極める者として理解しかねる。選ばれたものしか鬼にはなれないというのに!」

無理やり引っ付けられた腕が、傷口と接合する。

再生力が高い……だが、それでも隙はある。絶望的と言えるほどではない。

彌豆子の血鬼術による再生阻害は間違いなく効いている。今の猗窩座の再生は下弦程度のものでしかない。

そして、それは猗窩座も理解していた。

(思いのほか厄介だ……本来なら瞬時に治せる傷も、僅かとは言え時間をかけないと修復できないとは)

「素晴らしき才能を持つ者が醜く衰えてゆく。俺は辛い、耐えられない!」

叫びながら、猗窩座が鋭い拳を放つ。

煉獄もそれに合わせるように刃を叩き込んだ。

猗窩座が煉獄の眼前に自分の顔を寄せ、至近距離で睨み合う。

「死んでくれ、杏寿郎。若く強いまま」

「はあっ!!」

煉獄が刀を振り上げる。

同を狙った太刀を猗窩座は背後に大きく飛んで躲し、宙に浮かんだまま拳を構えた。

「破壊殺——空式!!」

「——ッ!?!」

空中で拳を振るう猗窩座に違和感を覚え、煉獄は咄嗟に刀を体の前で構える。

直後だった。拳によって発生した圧と言うにはあまりに重く、鈍い衝撃が伝ってきた。

再度、猗窩座が拳を振るう。

放たれる一撃を刀で受け止めながら、冷静に思考する。

(なるほど……)

どうやら、虚空を拳で穿ち、その衝撃を遠方に放つ技のようだ。しかも、その速度は僅かにも満たない。

術の仕組みを見抜いた煉獄が、改めて日輪刀を構える。

「炎の呼吸【肆ノ型 盛炎のうねり】——ッッ!!」

巨大な渦のように宙をうねる炎の刃が、猗窩座の連撃を防ぐ。

だが、それでも攻撃はやまない。

(向こうは再生を阻害できる刃を警戒して距離をとっている……このままでは頸を斬ることも困難……ならば——!)

煉獄が重力に従って落下する猗窩座へ合わせるように飛び、一息の間に間合いを詰める。

至近距離から刃を振るう。だが、それを紙一重で躲し、堪えきれないとはかりに笑みを漏らす。

「この素晴らしい反応速度! この素晴らしい剣技も失われていくのだ、杏寿郎! 悲しくはないのか!?!」

「誰もがそうだ、人間なら!! 当然のことだ!!」

激しく打ち合い、叫び合う二人。

そんな彼らの姿を、炭治郎たちはただ見ていることしかできない。

「クソツ……!」

「お兄ちゃん、動いちゃダメ……」

「分かってる……分かってるよ……でも……」

炭治郎の視線の先では、煉獄と猗窩座が死闘を繰り広げている。

その移動の速度は尋常ではなく、炭治郎は目で追うことしかできない。

「……何か、ないのか？ 俺に出来る事……何か……!!」

「……お兄ちゃん」

悔しそうに地面に拳を叩きつける炭治郎を、禰豆子がそっと抱きしめた。

「……禰豆子……?」

「大丈夫……お兄ちゃんは休んでて」

「……ちよつと待て、お前なにを——」

すると、禰豆子がのっそりと立ち上がる。

一度、炭治郎に、泣きたくなるような笑みを向けると、猗窩座に向かって駆けだした。

「禰豆子——ツツ!! ——ぐっ!!」

叫び、炭治郎がその背中を追いかけようとするが、足が纏れて倒れこむ。

「はああああ——ツツ!!」

「——ツツ!!」

突然の乱入者に、二人の戦士が驚愕する。

驚き、後退する猗窩座に、禰豆子は血を出しながら拳を構える。

「爆血拳!!」

叫んだ途端、禰豆子の拳が発火した。

その拳が猗窩座の左頬を捉え、渾身の力で振り抜いた。

「ぐっ……!! おのれ、邪魔を……!」

「炎の呼吸【参ノ型 気炎万象】!!」

仰け反る猗窩座の隙を縫うように、高く跳躍する煉獄が、赤き刃を振り下ろす。

燃え滾るような斬撃が、猗窩座の右肩から脇腹までを袈裟斬りにした。

猗窩座は苦悶の声を漏らし、技を放って隙が出来た煉獄の中腹を蹴りつける。

「うぐつ——!!」

「煉獄さん!? こ、のお……!!」

「ええい、邪魔をするな小娘!!」

大きく拳を振り上げ、禰豆子の拳が猗窩座の右頬を捉える。

だが、猗窩座は僅かに仰け反るだけで、大して意に介した様子を見せない。

禰豆子はそんな猗窩座に驚愕する間もなく、鳩尾を殴りつけられ、唾を吐き出した。

「が……っ!?」

「俺と杏寿郎の時間を邪魔するな、娘」

感情の読めない冷たい目で、蹲る禰豆子を猗窩座は見下ろす。

その衣の襟を掴み、投げ飛ばそうとした……その時だった。

『やめて! ■■さん!! 貴方はそんな人じゃないでしょう!!』

——幻聴が、猗窩座を止めた。

「……?」

猗窩座は何かを確認するように、周囲を見渡す。煉獄、禰豆子、炭治郎、伊之助、善逸……この場にいるのは、この五人だけだ。

だが、今聞こえた声は、その誰のモノでもない。ここにはいない、別の誰か……。

気のせいか……そう結論付けた猗窩座の頭蓋に、割れるような痛みが走った。

「うっ……!!」

その余りの痛みにも、両手で痛み頭を抱えて座り込む。

おかしい、鬼になった自分に、この程度の痛みは大したものではないはずだ。そもそも、怪我などすぐに再生する。

「——っ、チッ!」

「くっ!」

蹲る猗窩座に、煉獄が横一線に刃を振るう。

しかし、一体いつ察知したのかと言うほど完璧な動きで、猗窩座は攻撃を回避した。

痛みはもうない。幻聴も聞こえない。ならばあとは、全力で拳を振るい、目の前の男を殺すだけだ。

「破壊殺・乱式!!」

「炎の呼吸【伍ノ型 炎虎】——ツ!!」

途轍もない速度の連撃と、煉獄の烈火の猛虎を生み出すが如く刀が、咬みつくかのように振るわれた。

「……ハア、ハア……!」

「……鬼になれば、杏寿郎。そして俺とどこまでも戦い、高め合おう」

猗窩座は斬り付けられた自身の肉体を見ながら、惜しむように誘う。

煉獄は肩で息をしていた。

仕方のない事だろう。鬼と違い、人間の体力は有限だ。先程の打ち合いで体に拳撃を打ち込まれ、今にも倒れそうになっている。

だが、猗窩座のほうは、あと数秒もすればたちまち治るだろう。

猗窩座は、少しづつ塞がれていく傷をこれ見よがしに見せつけながら、再び誘いを掛ける。

「その資格が、お前にはあるんだ」

「断る。もう一度だけ言うが、俺は君が嫌いだ。俺は鬼にはならない」煉獄は刀の柄を握りしめ、毅然とした態度で立ち上がる。

夜明けは……まだ遠い。

——真つ暗な世界だ。

深層心理の世界と言う奴だろうか。

彌豆子は薄れゆく意識の中で、ぼんやりとそんなことを考えていた。

眠い……体力が限界だ。これ以上は立てない。

……すると。

『……がい、お願い！ もう貴女しかないの！』

声が、聞こえた。

知らない人の声だ。でも、すごく優しそうな……女性の声。

『……お願い、■■■■さんを助けて、もうやめさせてあげて!! もうこれ以上、彼を苦しめさせないで!』

何故だろうか。

その声を聞くと、不思議と立ち上がった。

心が、燃えるのを感じる。

血鬼術によつて失われたはずの体力が、戻っていく。むしろ、今までよりも増えると感じるほどだ。

「……任せて、知らない誰かさん」

禰豆子は立った。

拳を握り締め、大地を踏みしめる。

強い視線で、己が立つ戦場を睨んだ。

「! ……禰豆子、起きたんだな?! よかった……」

「……お兄ちゃん」

「今は見て居よう。きつと、煉獄さんなら——」

「ごめんね。またもう一度、戦う理由が出来ちやった」

「えっ……」

呆気にとられる炭治郎を無視して、禰豆子はゆっくりと立ち上がる。

すると、その肉体が徐々に変化していった。

額の左側に、角のようなものが生えた。体は今よりも数年経った女性のように成長し、全身に花のような形をした紋様が駆け巡っている。

右目を覆うように、氷の結晶の形をした痣が出現して、牙が剥き出しになっていた。

「ふっ——!」

「何——ッ?!」

目にも止まらぬ速さで猗窩座に肉薄し、その胴体を蹴り飛ばした。

「竈門妹！ 無事だったのか?!」

「はい……煉獄さん、下がってください。……このままでは、貴方が死んでしまう」

「む？ 少し雰囲気……いや、それよりも……悪いが、柱である俺が、ましてや女性を矢面に立たせるわけには——」

「……お願いします」

禰豆子は頑として譲らない。

その目は真つすぐと煉獄を見据え、何かを訴えるようであった。

さしもの煉獄も、その意志の強さに根負けしたのか——

「……危ないと思ったら、すぐに退くのだぞ」

「はい……ありがとうございます」

刀を下ろす煉獄に、禰豆子が頭を下げて感謝する。

そして、猗窩座のいる林へと足を踏み入れた。

「……!」

「小娘エ!!」

木々の合間を抜け、森の奥へと進む禰豆子に、突如現れた激高する猗窩座が拳を振るう。

禰豆子はそれを紙一重で躲し、己の左側にある木を回り込み、手刀でその剛腕を叩き折った。

今までとは格段に違う動き、力に、猗窩座がギョツとする。

（馬鹿な、何処にこんな力が……?! この力は、上弦並——）

「……目を覚ましてください、狛治さん」

誰かの名を呼び、禰豆子の燃える拳が、鳩尾を貫く。

「……血鬼術・氷血!!」

途端、猗窩座の傷口が凍り付いた。

（なっ……こいつの血鬼術は炎のはず……二つ目の属性……あり得ん、二つ目の血鬼術だど?!）

「貴様、何をした?!」

猗窩座が禰豆子の持つ力に違和感を感じ、その額にある角をへし折ろうと横から殴りつける。

禰豆子はその一撃をわずかに仰け反る形で回避し、凍り付いた傷口

を再び燃焼させる。

凄まじい熱さに、猗窩座が苦悶の声を漏らした。

「思い出して、狛治さん……」

「誰だそれは!? そんな奴は知らん!!」

「……いいから、思い出せつつてんだよ馬鹿座ア——ツ!!!!」

貫いた鳩尾から右手を引き抜き、その顔面を力の限り殴りつけた。

——その時だった。

猗窩座の脳は、奇妙な感覚を得ていた。それは、懐かしさ。

その拳は初めて受けたのに、まるで今までも受けたことがある……

そんな、懐かしさを。

(なんだ……これは、男? それに、花火……女……いや、恋雪さん……)

『猗窩座、命を果たせ。私の言葉に従え、貴様は何も考えるな』

(……誰なんだ、この人は……とても、暖かい……俺は、何かを忘れて
いる……?)

「竈門妹! すまないが夜明けが近い! 既に日が昇っている!! 早

急に決着をつけるぞ!!」

「えっ、そんな!」

「……くっ!」

日が上ったという情報に加え、煉獄が姿を現した。彼一人ならともかく、上弦に匹敵する力を持つ禰豆子まで相手取るとなると、分が悪い。

即座に判断し、猗窩座は驚異的な脚力でその場を脱した。

後には、突如撤退した猗窩座に驚きつつも安堵する煉獄と、その姿を呆然と見つめる禰豆子だけが残っていた。

新たな決意

ただ、膝をついて見ていることしかできなかった。

煉獄が傷つき、ボロボロになりながらも、一步も引かずに刃を振るう姿を。

妹が捨て身で飛び込み、自分たちと煉獄を救うために戦う姿を。

涙が出た。悔しきで死にたくなかった。己の無力を、これでもかと言うほど悔やみ、呪った。

(どうして……俺は、こんなにも弱いんだ。何も出来ないんだ)

いつそのこと不思議でしようがない。

どれだけ努力し、鍛錬を積み、いざ戦場に出ても。

目の前には常に高い壁が聳え立ち、炭治郎を塞ぎ止める。その先で戦う仲間のもとへ行かせてくれない。

「竈門少年」

顔を俯かせていた炭治郎に、煉獄が声を掛ける。

肩から羽織っていた羽織がない。恐らく、彌豆子を太陽の光から守る為に貸し与えたのだろう。

体中傷だらけで、間違いなく骨の一本や二本は折れている。

しかし、その表情は、どれだけ傷つきながらも、とても穏やかなものだった。

「よく生き抜いた」

煉獄としては、褒めたつもりだったのだろうか。

だが炭治郎は、逆に辛くなった。

「……生きてるだけです。俺は、何もできなかつた……猗窩座を倒すことも、煉獄さんを手伝うことも——彌豆子を守ることだって!!」

「悔しいか?」

「……はい」

静かに問いかけた煉獄に、炭治郎は頷く。

すると、煉獄はふっ、と笑い——

「その悔しさを忘れるな。いつか必ず、強くなった未来の君を支える柱となるはずだ」

「……俺は、強くなれるんですか？」

「当たり前だ。自分の弱さを知るものが、強くなれないはずがない」

煉獄は至極当然のように断言する。

しばらく、炭治郎は呆然と煉獄を見つめていたが、やがてその瞳に溜まる涙を振り払い、はつきりと告げる。

「煉獄さん、お願いがあります」

「何だ？」

「俺を——！」

「うおおおおお!! どこだ鬼イイイイ——ッ!!」

「ちよ、待ってって伊之助エ——!!」

何かを頼もうとした炭治郎の声を遮るように、いつの間にか起きていた伊之助と善逸がやってくる。

「うお!! ギョロギョロ目ん玉どうした!!」

「えええええ!! なんでそんなボロボロなの!! 何があつたわけマジで!!」

「は、はは……」

「……竈門少年」

いつもの二人の様子に、炭治郎が毒気を抜かれたように肩をすくめる。

これでは締まらない。頼むのは次の機会にしよう。

そう思っていると、煉獄に名を呼ばれたので、目を合わせる。

「一つ言い忘れていたことがある」

「えつと……」

「俺は君の妹を信じる」

「！」

炭治郎が両目を見開く。

続いて、伊之助と善逸も、唐突な煉獄の宣言に黙り込んだ。

「多くを語るつもりはない。君の妹を信じたお館様の判断は正しかった。君の信じる妹は間違っていない。胸を張って生きろ」

「……………はい……………! ……あつ、でも……………」

「強くなれるか自信が無いなら、俺の継子になるか? 君たちなら大

歓迎だ」

「……えっ、よろしいんですか？ 俺なんかで……」

「ああ」

曇りなき眼で、煉獄が言う。

炭治郎は姿勢を整え、深く頭を下げた。

「——お願いします……！」

「おい待て！ お前だけ強くなるうたってそうはいかねエぞ！ 俺だってムカゴになる!!」

「継子だつての！ それに、誘われてるのは炭治郎だけで、俺達は——」

「構わんぞ？ むしろ、俺は三人共を継子にする気だったのだが」

「つしやああ!!」

「えええ!! い、いいのそれ!! ていうか、俺も入ってるの!!」

再びギヤーギヤーと騒がしくなる場を、炭治郎は苦笑して眺める。

だが、それを見てようやく、炭治郎は思い出した。

戦いが終わった……夜が明けた事を。

無限列車の任務は、無事に終了した。

乗客も隊士も一人も欠けることなく、さらには上弦の鬼と遭遇し生き延びるといふ、大戦果であった。

上弦の鬼に遭遇したものは、柱であろうと例外なく殺される。

だからこそ、此度の任務は鬼殺隊の歴史を動かす一歩となるだろう。

「……で？」

禰豆子がむすつとした表情で、蝶屋敷の寝所で包帯グルグル巻きで横たわる炭治郎を見やる。

「で？ と言われましても……」

禰豆子に見つめられる炭治郎が、困ったように呟く。

さつきからずつとこの調子なのだ。むしろ怒りたいのはこっちの方なのに、禰豆子の無言の圧がそれを許さない。

「どうして、私の本名知ってたの？」

「あ、それか……いや、別に説明しなくても分かると思うんだが……」
「本当にお兄ちゃんなの？」

僅かに目付きを鋭くし、値踏みするように禰豆子が問いかける。

「……白銀竜也、それが俺の名前だ」

だが、炭治郎は特に気にした様子もなく、穏やかに答える。

すると、ブワツと禰豆子の瞳から大粒の涙が溢れ出し――

「うわああああああ!! 馬鹿野郎! 馬鹿野郎!! そうならそうって言つてよオー!」

……全力で炭治郎に抱き着いた。

「うぐぐ……!! 死ぬ、これ死ぬ!!」

「あ、ごめん」

禰豆子が炭治郎からバツと離れる。

「うう……でも、いざそうなつても何話せばいいのか分かんないや」

「ははっ、俺もだよ。……でも、そうだな……」

炭治郎は窓の外を見ながら、悲しそうに呟いた。

「姉さんも一緒だったらよかったのに……」

「……もしかしたら、姉さんもどこかにいるんじゃない?」

「……そうかな?」

「そうだよ! 私たちだけ転生して、姉さんだけ仲間外れなんておかしいもん!」

落ち込む炭治郎を励ますように、禰豆子が明るく言う。

それもそっか、と。炭治郎は納得し、頬をパチンと叩いた。

「よし、明後日からは俺も機能回復訓練に参加して、その後はみんなで煉獄さんの家に移動だ。禰豆子も忘れ物ないようにするんだぞ?」

「学校の遠足か、別に持つてるものなんてない……あつ、そうだ」

すると、禰豆子が思い出したように手を叩き、自身が入る箱を漁った。

突然の行動に首を傾げる炭治郎だが、禰豆子が箱の中から取り出し

たものを見てギョツとした。

「ちよ、それ……！」

まるで炎を思わせる外套。それは、煉獄が身に付けている羽織だった。

「うん、太陽が昇った時に、煉獄さんに渡されたの。危ないからって」

「いや、それは分かるけど……というか、早く返さないと」

「お兄ちゃんに渡してくれって」

「……えっ？」

『あ、煉獄さん！』

『む？ 竈門妹か！ どうかしたのか？』

蝶屋敷の廊下を歩いている煉獄に、禰豆子が話しかけた。

非常に痛々しい姿だ。体の至る所に包帯が巻かれており、片手で松葉杖をついている。

『これ、この前お貸し頂いたものです』

それは、綺麗に折りたたまれた煉獄の羽織だ。

差し出してくるそれを、煉獄はジツと見つめ……。

『いや、それは竈門少年にくれてやってくれ』

そういった。

『えっ、どうしてですか？』

『なに、新しい羽織はまた用意すればいい。彼は先の任務で羽織を紛失していただろう？』

『それこそ、また新しいモノを買えば……』

『聞いているぞ？ 君たちの家庭のことは。そんな余裕はないのではないか？』

確かに、竈門家はそこまで裕福ではない。新しい羽織にも、着物には金を使えないほどには。

『……でも』

『ふむ、実はな……。その羽織は、代々煉獄家に伝わる、炎柱のみが羽織ることを許される由緒正しい証なのだ』

『えっ!?』

突如明かされた煉獄家の伝統と、その羽織の価値に彌豆子が慄く。

『そ、それだったら尚更駄目じゃないですか!!』

『……だが、竈門少年が着なければ、もう誰もその羽織を羽織る者はいなくなるだろう』

『……えっ? でも、確か煉獄さんって弟さんがいらっしやいますよね? 先日も見舞いにいらっしやってましたし』

『……ああ。だが……。こんなことを言いたくはないが、弟……。千寿郎には、鬼殺の剣士としての才能がない。千寿郎が日輪刀を握っても、刀の色が変化しなかったからな』

『そんな……』

『それに父上もあんな状態だ。……。俺も柱として復帰できるようになるか分からん……。恐らくは不可能だろうが』

『……』

それは、敢えて誰も触れていなかった事実だ。

煉獄は上弦の参、猗窩座との戦闘で深い傷を負った。内臓にも傷がいつており、蝶屋敷に来た時点では本当に危険な状態だった。

それでも、煉獄の驚異的な生命力で危機を脱することはできたが、柱としての復帰は難しいだろうとのこと。

『……胡蝶が言うのだ、間違いあるまい。……。だからこそ、俺はこの羽織を、竈門少年に託したい』

『……』

『俺は彼の瞳に希望を見た。その奥で燃え上がり始めている炎きぼうを。俺は、彼がこの羽織を持つに相応しいと思っている』

『けど、煉獄家のしきたりは……』

『なに、千寿郎も……。黄泉の国に住まう母上も分かってくれるさ。』

……。父上は興味も示さんだろうがな……』

煉獄は空いている手で彌豆子の頭にポントツと手を置き、

『これは、俺の、君たち兄妹への信頼の証だ、どうか、受け取ってはくれないか?』

「——って、そう言われて……断れなくて……って!!」
「ううう……!」

彌豆子が煉獄との話を炭治郎に聞かせていると、感極まった炭治郎は泣き出した。

「ちよつともう、しっかりしてよ。そんなに涙脆かった? ……いや、結構涙脆かったわねお兄ちゃん」

「……そんなに大事なものを……俺に……」

炭治郎が自分の右手を見つめる。

本当に、そんな資格が自分にあるのだろうか? 煉獄家の伝統を曲げてまで、大切な羽織を預けてもらうだけの価値が、自分に……。

そんな炭治郎の不安を見透かしてか、彌豆子は、

「……悩んでもしょうがないよ。煉獄さんが渡すって決めたんだもん、弟子のお兄ちゃんはそれに従うだけでしょ?」

「それは……」

「らしくないなあ。不安ならやることなんて一つでしょ?」
「?」

ビシツ、と炭治郎の鼻先に人差し指を突きつけ、

「その羽織に相応しくなるくらい強くなりなさい! もう誰にも負けないくらい!」
そういった。

余りにも自信満々に言う彌豆子に、炭治郎は思わず笑みを零す。

「——ははは! ……そっか……、そうだな。それしかないもんな」
「そうよ!」

「……ふっ、じゃあ、早いとこ体治して、また鍛え直すか!」
「おーう!」

二人は互いに拳を打ち付け合い、太陽のような笑みを浮かべた。

為すべき事

「ア——!!」

「何叫んでんだお前気持ち悪い」

「あ、はは……」

善逸の絶叫を聞いた伊之助が気味悪そうにタンポ頭を見やる。

その隣では、手拭で額の汗を拭う炭治郎が曖昧に笑っている。

そんな二人に対し、納得がいかないとばかりに善逸は突っかった。

「いやお前ら……お前ら！ ホントお前ら……お前ら！」

「何回お前らって言うんだよお前」

「うるせえよ！ これが叫ばずにやってられっか！ 煉獄さんの継子になって早二か月……もうキツイ！ しんどい！ 泣きそう！ てか泣く!!」

迫真だった。

頭を抱える善逸に、炭治郎は同情しながらこれまでの鍛錬内容を振り返る。

「……屋敷の外周百五十週、素振り五千回、本気の禰豆子との試合……」

確かに、ちよつとキツイな」

「ちよつとどころじゃねーよ何言ってるんだよお前。……なんで柱って継子あんまり取らないんだろって思ってたけど、なんか分かった気がする」

「大変……だもんなあ。二年前の修行を思い出すよ」

「お前こんなこと二年もしてたの？」

善逸が人外を見る目で炭治郎を見つめる。

「ん？ 流石にここまでではキツくないぞ？ 精々空気の薄い山を重りを背負って何十往復したり、素振り千五百回やったり、滝修行したり……」

「いや十分だよ。むしろ十分すぎるよ感覚狂ってるだろお前」

「そうか？」

「そうだよ！ ……はあ、禰豆子ちゃんが応援してくれなかったら俺

も逃げ出してたぞホントに……」

「彌豆子は渡さん」

「お願いしますお義兄様俺に妹さんをください！」

全世界土下座選手権で満点を取れそうな美しい土下座が、炭治郎の前に繰り出された。

「君にお義兄様と呼ばれる筋合いはない！ 柱になって出直して来い！」

「自分は柱になってない癖に!!」

「条件の一つは満たしてるから大丈夫です」

「ぐがー」

炭治郎がいやらしい笑みを浮かべ善逸を挑発する。

二人の諍いに興味が無いのか、伊之助は疲れを癒す為にいびきをかいて眠ってしまった。

「ちよつと何言い合いしてるのよ二人とも」

「何かありましたか？」

「あ、いや大丈夫だよ千寿郎君」

彌豆子と一緒に、丁度煉獄杏寿郎が小さくなったような姿をした少年も顔を出した。

煉獄千寿郎。

杏寿郎の実の弟であり、彼らの世話をしている少年だ。

因みに、最初に彼を見た時、伊之助は「おつ？ ギョロギョロ目ん玉が小さくなったぞ？ ケツ子と同じか？」と言って炭治郎に叩かれたのは余談である。

「もうすぐ夕食です。伊之助さんを起こして居間でお待ちください」

「いつもありがとう、千寿郎君」

「いえ、お安い御用です。それに、前まではここまで忙しいことはなかったですから」

過去を憂い、僅かに表情を曇らせた千寿郎だが、直ぐに明るさを取り戻し台所へ向かった。

炭治郎と善逸も、伊之助を引っ張りながら居間へと向かう。彌豆子は普通の食事はできないので、既に就寝している。

「にしても、もう二か月か。随分と経ったなあ。無限列車での戦いが昨日のことみたいだ」

「むしろその時に戻ってやり直したいくらいなんだけど」

来る日も来る日も鍛錬鍛錬、たまに鴉が任務を持ってきて出発、この繰り返しだ。

「あ、榎寿郎さん」

「む、竈門君か」

煉獄榎寿郎。

杏寿郎と千寿郎の父にして、元炎柱。

最近までは鬼殺隊としての活動意欲を無くし、杏寿郎に席を譲ってからは毎日のように酒に入り浸る日々を過ごしていた。

が、炭治郎達が来てから彼は変わった。

尤も、出会いは最悪であったが。

「そうだ、日の呼吸について何か分かりましたか？」

「……すまん、進展はない」

「そうですか……まあ、榎寿郎さんが資料をゴミのように破きましたしね」

「ぐはっ」

榎寿郎、吐血。

炭治郎の言葉の刃が、榎寿郎の心に昇り炎天を放った。アップバーカット

「お待たせしました、今夜は鍋です……あれ？　どうかなさったのですか父上？」

「い、いや……なんでもない、何でもないんだ……うん」

料理を持ってきた千寿郎が、部屋の片隅で項垂れる榎寿郎を不思議そうに見る。

だが、そんな彼を見て、やはり変わったなと思い、無意識に口の端が吊り上がる。

以前の父はこんな姿を見せなかった。だんまりか酒の二つで、いぎ顔を合わせても会話すらなかった。口を開けば剣士になるのを諦めさせるようなことばかり言う。

けど、今はどうだ？　酒をやめ、過去を悔い、今の自分に出来るこ

とを精一杯やっている。

戻ってきた。一体何度、その時を待っただろうか。

(本当に……炭治郎さんには感謝しかありません)

二か月前のことだ。

兄である杏寿郎が炭治郎たちを連れてきたとき、槇寿郎は炭治郎を見て妙なことを口走りながら彼に突つかかった。

曰く、彼の花札のような耳飾りは、始まりの呼吸の剣士が身につけていたものと合致する。

ならば、彼は始まりの呼吸……日の呼吸の使い手だ、と。

しかし、炭治郎は日の呼吸など使わなかった。だが、炭治郎の言葉に耳を貸そうともしない父は、遂に彼の胸ぐらを掴み上げる。

その口から勢い任せに、命懸けで戦い抜いた杏寿郎や努力し続ける千寿郎を侮辱する言葉が飛び出した時――。

――炭治郎が怒りを露わにし、槇寿郎を殴りつけた。

事態はさらに混濁し、乱闘騒ぎとなった。

杏寿郎は怪我が治っていないため止めるに止めれず、結果善逸と伊之助が二人を引き剥がし、無理やり落ち着かせる。

外では何だということで屋敷の中で、冷静になった槇寿郎から話を聞いていく。

日の呼吸。詳しくは分かっていないが、どうやら既存の呼吸はすべて、その呼吸の派生であり、鬼舞辻無惨を倒すにはその呼吸が必須らしい。

槇寿郎がやる気を失ったのも、派生である自らの炎の呼吸では、直ぐに限界が来ることを知ってしまったからのようだ。

そこへ追い打ちをかけるように、母である溜火の死。……なるほど、理解はできる。これだけの不幸が重なって、荒むなというほうが酷だろう。

『分かったか！ 貴様らが何をしようと、すべて無駄なんだ！ 分かっただらさっさと失せろ！ 気分が悪い！』

槇寿郎の言葉だ。

本当に、かつての父とは思えないほど憎しみの籠った目付きで、炭

治郎の耳飾りを睨みながら告げた。

『俺は鬼舞辻無惨を倒します』

短く、断固たる意志で告げた炭治郎の言葉だ。

『日の呼吸がどうか、そんなことは関係ない。日の呼吸じゃないとだめなら、人間はとつくの昔に鬼に負けている』

『できないから諦める……そうじゃない。みんな、自分に出来ないことがあるから諦めるんじゃない。自分に出来ることを全力でやった』

『それが、今日までの鬼殺隊を支えた。そして、これからもそうだ』

『例えば日の呼吸が使えなくても、誰が何と言おうと……俺は必ず、鬼舞辻無惨を倒します』

きつと、彼の言葉は、槇寿郎の心には届かなかったのかもしれない。

それでも、間違いなく救われた者はいる。千寿郎もその一人だ。

彼には呼吸の才能がない。どれだけ修練を重ねても、日輪刀の色を変えることが出来なかった。

それでも、出来ることはあると。自分に出来ないことがあっても、やるべきことがあるのだと教わった。

千寿郎は剣の道を捨てる。それは兄にも父にはも話した。剣士ではなく、自分にしか出来ないことで、支えになると誓った。

(ありがとうございます……炭治郎さん)

ドンドン喧しくなっていく炭治郎たちを見ていた千寿郎は、朗らかに笑い、心の内で感謝を述べた。

鬼の始祖の現状

とある日の夜。

大きな屋敷の一室で、一人の少年が本棚を漁っていた。

整った髪と顔立ちに、まるで包帯のように白い肌。寡黙な雰囲気
纏い、冷めた視線で熱心に何かの書物を探している。

「御報告に参りました」

そんな少年のもとに、刺青の入った男が窓の外から声を掛けた。

猗窩座。

「上弦の参の名を冠する鬼であり、つい先ほどまで鬼殺隊と死闘を演じた男だ。

それ程の猛者が、恭しく頭を下げ、敬語で話しかける少年は一体誰なのか？

「無惨様」

「……例の物は見つけたか？」

無惨……すなわち鬼の首領、鬼舞辻無惨。

この小さな少年が、あの鬼舞辻無惨なのだ。今はとある製薬会社の家系の養子の少年に擬態しているようだ。

「いえ、調べましたが、確かな情報はなく、存在も確認できず……」青い彼岸花は見つけれませんでした」

「で？」

猗窩座の報告に、間髪入れずに催促を促す無惨。

あまりにもあんまりな塩対応に、猗窩座は眉一つ動かさず、

「……無惨様の御期待に応えられるよう、これからも尽力しま——」

「期待に応える？ 貴様のような愚かな男がか？」

瞬間だった。

猗窩座の衣服が裂け、その身が糸で引き絞られているかのように軋む音を立てる。

無惨の攻撃が、彼を苦しめているのだ。

常人ならば発狂死し、普通の鬼でも即死するであろう激痛に、猗窩座は動じることなく耐える……ただひたすらに。

「話を逸らそうとしているな？ 貴様には“青い彼岸花”以外にも、柱を殺すこと、耳飾りの小僧を殺すことを指示したはずだ。なのに貴様は、柱どころか小僧一人殺せず、あまつさえ逃れの鬼に苦戦を強いられ、結局あの場の人間をだれ一人殺すことが出来なかった。……貴様は私の命令を何だと思っている？ 最低限柱は殺さねば駄目だろう、馬鹿でもわかる。私の望みは鬼殺隊の殲滅……一人残らず叩き殺して二度と視界に入らせないようにする事……この単純な命令の、何が理解できないのだ？ なあ、猗窩座……いや、敢えてこう呼んでやろうか？ ——馬鹿座」

いつの間にか、猗窩座の肉体はボロボロになっていた。

腕は腐ったように落ち、顔の面積の八割がひび割れて埋め尽くされている。足もひしやげて、既にまともにも立つことすらできていない。そんな状態でも……上弦の鬼の矜持なのか、彼は悲鳴の一つも上げなかった。

ふん、と無惨は鼻を鳴らし、

「お前には失望したぞ。貴様のような患者に座らせてやれるほど、“上弦の参”は安くない。これ以上失態を犯せば、上弦であろうと始末する……肝に銘じておけ。……下がれ」

死に体の猗窩座が、小さく一礼し、部屋を去る。

その姿を横目で見届けた無惨は、先の戦闘で起こった猗窩座の変化について考えていた。

（猗窩座……人間の頃の記憶を取り戻しかけた瞬間、私の呪いを外しかけていた。……念のため、記憶は封印したが……あの状態では、気休めか）

あれほど愚かだ何だといっていたが、無惨は上弦の鬼の中では猗窩座は一、二を争うお気に入りだ。

だからこそ、猗窩座にはなるべく裏切つて欲しいとは思わない。命令に忠実なのはいいことなのだ。

（にしてもあの小僧……猗窩座の視点越しだったが、何も出来ずに這いつくばるしかない姿は実に滑稽だったな。……あの化け物と同じ耳飾りをしているということまで警戒していたが、あの様子なら問題は

ないだろう。……問題は、奴の妹のほうだ。あの小娘、人間を一人も喰らうことなく、既に上弦並の力を付けている……これは由々しき事態だ。鬼の常識は通じない存在……要警戒対象だな。……待てよ？）
無惨の本を捲る手が止まる。

（あの小娘は、元来の鬼とは異なる変化を遂げている。……ともすれば、太陽を克服する可能性があるのでは……？ あの耳飾りを受け継いでいる小僧の妹なら、それぐらいの予想外はあって然るべき……）
無惨の目的は太陽の克服。そのために、己では出来ない太陽を克服する鬼の誕生を待ち続けて、既に千年が過ぎた。

無論、本気で禰豆子が太陽を克服する鬼となると信じているわけではない。

しかし、無惨本人ですら予想だにしない事態が彼女の身に起こっているのは確固たる事実。

今まで影の形も掴めなかった、もう一つの太陽を克服する鍵である“青い彼岸花”よりも、禰豆子のほうはまだ可能性がある。

「……ふむ、禰豆子とかいう小娘に少々人員を割くべきだろうか？」

無惨が今後の計画を練っていた……その時。

コンコン、と。

彼の部屋を小さく叩く音が聞こえた。

「坊ちやま、夕飯のご用意が出来ました」

「——分かりました、直ぐに向かいます」

今までの傲岸不遜な態度が一変、紳士然とした雰囲気ですべてきた使用人の女性に應對する無惨。

彼は人間に化ける。鬼殺隊の目を欺くため、必要な物資や資金を揃えるために……そのためなら、己の性別や年齢、性格すら欺く。

こうして、鬼の始祖は人の世界に身を隠していき……影も形も掴ませないのだった。

なああああああ—— ツツツ!!!!!!」

「いや怖い怖い怖い怖い!!」

幽鬼のような表情で、ゆらゆらと揺れながら二人に接近する炭治郎。

村田と尾崎は身を寄せ合って涙を流すしかなかく——

「うわあああああ!! 最近、禰豆子が反抗期なんですよおお!!」

「……………へっ?」

雰囲気とは裏腹な内容に、二人は思わず間拔けな声を出した。

話を聞いて見ると、最近炭治郎の妹が反抗期……という、思春期ならよくあるやつに突入したらしい。

今まではしつかり言うことを聞いてくれて、自分の言葉に笑顔で答えてくれた妹の反抗期……。

「長男だから耐えられるわけじゃない! むしろ長男だから耐えられない!!」

「知らねえよ、心配して損したぞこのヤロウ」

「はあ……びつくりさせないでよ」

「っていうか、さつきから知り合いみたいな雰囲気です話してますけど、別に知り合いじゃないですよね?」

「知り合いだよ!」

へ? と炭治郎は小首をかしげる。

本気で忘れてんのかコイツ……! 村田は先輩としての威厳がドンドン失われていることを嘆いた。

道の端でいじけている村田を流し見て苦笑いする尾崎が、

「あ、えーっと……ほら、私はあれよ、那田蜘蛛山の時に貴方に助けられた——」

「……那田蜘蛛山?」

「そこからか」

尾崎は遠い目で空を見上げた。

「あーっ！ いたいた、いましたね！ すいません、すっかり忘れてました」

「いいのいいの……うん、影薄いよね私」

「だ、大丈夫ですって……村田さんよりはマシですから」

「オイコラ」

曖昧な笑みから放たれた毒に、村田は真顔でツツコミを入れる。

「む、村田よりマシな程度なんだ……はあ……」

「落ち込むトコそこ!？」

「村田さん、女の子落ち込ませてはいけないと思います」

「原因作つたの、お前!」

あまりにも理不尽な仲間に、村田の精神は崩壊寸前だった。

そうこうしているうちに、鴉の指定した町まで到着する。

「あ、この辺だな……丁度夜だし、まずは鬼探しとしますか」

「……単独行動で行きますか?」

神妙な顔つきで、炭治郎が問いかける。

いざという時に気持ちを切り替えられるのなら、問題ないだろう。

と、村田は内心安堵する。

「……そうだな、分散したほうが早く見つけられるだろ。とりあえず、

一刻経ったらもう一度この場所に集まろう」

「了解、それじゃ、先に言ってるわね」

そう言くと、尾崎はあつという間に先に行く。

「おつ、早いな……じゃ、俺も行くわ。お前も気を付けろよ」

「あ、はい……」

少しでも拳動不審に見える炭治郎に、村田は安心させるように笑いかける。

(緊張してんのかな? へっ、これは先輩としての威厳を取り戻すいい機会かもな!)

若干の下心とともに、村田も鬼を探す為に町の深くに踏み込んだ。

「……さて」

ようやく一人になれた、と言わんばかりに、炭治郎の纏う空気が一変した。

普段から着ていた市松模様の羽織はない。本来なら煉獄の羽織を着るはずだが、炭治郎は「自分にはまだ重い」と断っている。

よって、今の彼の恰好は鬼殺隊の隊服のみであるが……それでもなお、彼がただの隊士でないと感じさせる、貫禄があった。

「……そこか、出て来いよ……そこにいるんだろ？」

炭治郎は目を閉じ、何かに気づいたように右側の路地裏の一角を鋭い視線で睨む。

すると――

「へえ、俺の気配に気づくのか。さっきの二人とは別格のようだな……こりや、楽しめそうだ」

薄暗い影から、男が現れた。

茶色い癖っ毛に、強気の言葉……とは裏腹に、割と身長の高い小男だ。

目を黒い目隠しで覆っているのは特徴的である。

「つか、テメエどこ向いてんだ？俺はこっちだぞオイ、舐めてんのか？」

「……………いえ、別に」

炭治郎は気まずそうに、自分の背後の路地裏へと通じる道から出てきた男……否、鬼に向き直る。

「ごほん……俺は鬼殺隊、階級丁、竈門炭治郎だ。今からお前を斬る」

「丁寧な挨拶どうも……生憎、あの御方からはまだ名を授かっていないでな。名乗ることはできない」

「そうか……」

鬼は鉢巻の奥から殺気を飛ばし、炭治郎を睨む。

それに合わせ、炭治郎も刀の柄に手をかけた。

(……強いな、こいつ)

それは、炭治郎の純粋な評価だった。

並の鬼とは比べ物にならない殺気……間違いなく、十二鬼月に相当する実力者だ。

これは炭治郎のあずかり知らないことだが、もし仮に下弦の鬼が解体されていなかったら、彼が空席に入っただけでもおかしくはない……それほどの力を感じる。

ギリツ、と炭治郎は奥歯を噛んだ。それだけの強さを得るために、どれだけの人間を犠牲にしたのか……彼の糧となった人達を思うと、悔やみきれない。

「行くぞ」

「上等、返り討ちにしてやる」

戦いの火蓋が切られた。

最初に仕掛けたのは炭治郎だ。得意の竜の呼吸で、一気に勝負を決めに懐に潜り込む。

〔水ノ舞 水分神〕——！〕

「血鬼術……」

ボソツと鬼が呟く。

炭治郎は僅かに目を細め、攻撃の手を止めた。

この瞬間での血鬼術……果たしていかなる効果があるのか……。それを見極めようと、攻めの姿勢を崩した。

その崩れた隙間を縫うように、鬼は鋭い貫手を繰り出した。

「——ッ！！」

咄嗟に刀の柄の底を使って拳を受ける……が。

ドガツ！ 防御した柄が、更なる衝撃を受けて弾かれ、体が仰け反る。

「なっ——！！」

衝撃の風圧からか、炭治郎の髪が不自然になびいた。

「隙——ッ！」

困惑する炭治郎の顔面に向け、強烈な左拳が放たれる。

炭治郎は咄嗟に身を屈め躲すが、それでさらに大きな隙を晒し、突かれる。

即座に鬼が蹴りを入れ、炭治郎を壁へと吹き飛ばした。

「ガハッ——！！」

「……やるな、後方に飛んで威力を最小限にしたか。だが、今は相当

効いたはずだ」

鬼の言葉通りだ。炭治郎はほぼ無意識で攻撃を迎撃しようとしたが、それでも間に合わず、強烈な一撃をまともに食らった。

しかも、壁に叩きつけられたことで肺の中の酸素がすべて吐き出された。つまり、今だけは肉体は鍛えた一般男性程度。

そして、その隙を見逃すほど、生易しい相手ではない。

「死ねエ!!」

「くっ……!」

再び放たれる拳、拳、拳。

炭治郎はゴロゴロと転がり、柄の底で受け止めを繰り返す。

だが、やはり受け止めた時に、奇妙な遅れる衝撃が発生して、炭治郎の防御を妨害する。

(くそっ、この遅れてやってくる衝撃はなんだ? これがアイツの血

鬼術か? ……いや、待て……)

「……お前、どうして目隠しをしているんだ?」

「――」

一瞬、鬼の肩が揺れた。

「……テメエには、関係ねエ話だアアアアーツ!」

そして、何故か途轍もない激高とともに、炭治郎に向けて拳を放つ。今までは比にならない速度、威力……まともに食らえば頭はトマトのように潰れて死ぬだろう。

食らうわけにはいかない。炭治郎は下がろうとし、驚愕した。

(後ろに壁!! くそ、地形把握を怠った!)

焦る。だが、その間にも拳は迫り続けている。

どうする、どうすれば抜け出せる……!! 炭治郎が必死に思考を回

転させ、

「! コ、コかあ――っ!」

「な――」

炭治郎は敢えて鬼へと接近し……その股の下を滑って通り抜ける。

空を切った拳が、行き場を無くし壁に叩きつけられる。凄まじい脅力を持って放たれた一撃は、壁と、それを支えにしていた民家……幸

い、売家だが、それをボロボロに破壊した。

やはり躲してよかった。あれを受ければ、自分が民家の中に叩きつけられ、崩壊の巻き添えになったかもしれない。

ずんっ！ と。辺りを覆い隠していた土煙が、凄まじい突風で吹き飛ばされ、その中心で鬼は突っ立っていた。

「……やるな、まさか今のが回避されるとは……」

「……う？」

今の発言に、何かが引つかかったのか、炭治郎は眉をひそめる。

普通に考えれば、予想外の一手を打たれたら、そのような方法で躲すとは、くらいで十分だ。今の発言では、躲したのは分かるが、どうやって躲したかは分からないと言っているようなものだ。

(……まさか)

しかし、本当にそんなことが？

鬼は不死者だ。太陽と日輪刀以外では決して死なず、どんな傷も再生し、病にも罹らない。だから、本来ならそんなことはあり得ない。

しかし、あの目隠しと言い、先ほどの発言と唐突な激高……炭治郎の疑問は、半場確信に変わりつつあった。

「お前……」

故に、炭治郎は疑問の解消のため、即座に切り出した。

「……目が、見えないのか？」

ドクン、と。

鼓動の音が、夜の町に木霊した。

盲目の鬼

唐突だが、昔話をさせて欲しい。

とある町に、一人の少年が生まれた。だが、少年は生まれながらに足枷ハンデを背負っていた。

少年がこの世に生まれ落ちた時、少年の父は、彼を不浄の子だと吐き捨て、蔑んだ。

産婆でさえ、顔を真つ青にしてそそくさと場を去るほどだ。周囲の者は、少年を嘲り、忌み子だと石を投げた。

何故、少年はそこまで苦しめられたのか？ その理由はただ一つ。

——少年には、生まれつき眼がなかった。

現代では、無眼球症とも呼ばれる。

視力が低下して目が見えないとか、そういう次元の話ではない。本当に、眼が形成されていないのだ。

本来人間にあるべき物がない。それは、少年の人生を大いに苦しめてきた。

……それでも、少年は強く生きてきた。

少年の存在を認める、ただ一人の人間がいたからだ。

「お前、目が見えないのか？」

「……触れたな」

？ 炭治郎が首を傾げる。

対する鬼は、顔を俯かせ、肩を震わせている。

「俺の禁忌に触れた……お前は確実に消す。死体になろうとぐちやぐちやに叩き潰す!! 染みになろうと殺し尽くす!!!!!」

怒声と同時に、鬼が超速で肉薄する。

もはや無意識に近い動きで、炭治郎は鬼を迎撃した。

横一線に振るわれた刃……それを鬼は空中に飛び上がって躲し、背後から腕を引き絞った。

(その位置から攻撃……? どう考えても当たらない——)

そこまで考え、否定する。

以前相まみえた上弦の参も、虚空に拳を打ち込むことで遠距離攻撃を可能としていた。

ならば、距離だけで決め付けるのは早計に過ぎる。炭治郎は咄嗟に後方に飛んだ。

ほぼ同時に、先ほどまで炭治郎のいた場所が、強烈な圧でへこむ。

(やっぱり……コイツ、遠距離攻撃も出来るのか!?)

今のは恐らく、奴の血鬼術の特性だろう。

だが、血鬼術の正体が分からないままでは、それを見極めることも出来ない。

「お」

だが、分からないから放置するわけではない。

むしろ、簡単に見極められないなら、速攻でケリを付けるべきだ。

「おおおおおおおおおおおおおおおおお——ッ!」

重い踏み込み。

その足が地を蹴った瞬間、地面が抉れ、肉体が風を裂くような速度が生まれた。

炭治郎の高速の突進により、彼我の距離はほぼゼロ距離まで詰められた。

鬼は迎撃してくる様子はない。炭治郎の速度に対応できていないのかはあずかり知らぬところだが……好機であることは間違いない。

「はあああああああ——ッ!」

炭治郎の刃が、鬼の頸を捉える——

「……は?」

——はずだった。

「……残念だったな」

刃は通っていない。

だがそれは、鬼の頸が固くて斬れないとか、そういう話ではないのだ。

届いていない。

刃が、頸に到達する前に、空中で停止していたのだ。弾かれる音も立てていない、不自然な停止……。

「ふ——」

「ぐっ！」

直後に放たれた電光石火の連撃。

それらをすべて刃で受け切り、逆に反撃カウンターを行う……しかし。

「また……！」

「無駄だ！ お前の力で、これは突破できない！」

何度放つても、空中で攻撃が停止してしまう。

いや、この感覚は……。

(何かに、押し返されているのか……?)

事実、炭治郎の刀が停止するとき、ぶるぶると震えていた。まるで、二つの力が正面から向き合っているかのようだ。

例えるなら、斬り合いの際に、刀が打ち合うと、火花を散らせて力タカタと震えるような感覚だ。

強い力が正面から打ち合うと、二つの力が脇へそれてしまいそうになり、それを縫い止めるためにさらに力を使う。

つまり、ここから推察されるのは。

(何か、不可視の力が、俺の刀を押し返している。そして、その力こそが、奴の血鬼術！)

だんだんと、敵の手の内が見えてきた。

(けど、その力の性質が見えない……不可視の力ってなんだ？ 超能力か?)

この時代に超能力の概念があると思えない。

そもそも、そう言った類たぐいの力を血鬼術と片づけてしまうのだろう。

だから、別にあるはずだ。不可視の力の正体が。

(まずは情報を整理しよう)

鬼の攻撃を躲し、反撃を入れる……が、やはり空中で停止した。炭治郎の脇腹に槍のように鋭い拳が放たれ……紙一重のタイミン
グで、炭治郎は刀の柄でそれを受ける……その瞬間。

ドガッ！ 忘れていた、遅れてくる衝撃に吹き飛ばされる。

「ぐっ……………」

(この遅れる衝撃…………これも不可視の力が関係しているのか…………!?)

これまで分かったことを纏めると。

盲目。遅れる衝撃。不可視の力。凄まじい圧力……。

「……………待てよ」

何となく、それを思いついた炭治郎は、即座に行動に移した。

「ふっ！」

ボロボロの跡地を、音を大きくならして破壊。即座に、音もなくその場を立ち去る。

目が見えない…………その状態で戦うならどうすればいいか？ 炭治

郎は、脳裏に善逸を思い浮かべた。

彼は盲目ではないが、睡眠状態で戦闘を行うことが出来る。それは、周囲から発生する“音”を聞き分け、状況を把握しているからだ。

もし、あの鬼が“音”を聞き分けているとしたら…………間違いなく家屋に飛び込むだろう。

だがもし…………。

「音で俺を誘おうとしても無駄だぞ？」

足音も立てずに下がる炭治郎に、鬼は鋭い剃刀のように鋭い踏み込みから、拳が放たれる。

それを見た炭治郎が…………笑った。

「とんでもない、待ってたんだよ！」

「……………ぐっ！」

炭治郎は拳を最小限の動きで避け、その二の腕を切断した。

攻撃が通った…………不可視の力による妨害はない。

「お前の血鬼術…………それは」

炭治郎は謎を暴いた探偵のような口調で言う。

「風……だな？」

「……………」

鬼は無言……だが、それはもはや肯定だった。

「目が見えない……その枷を覆すために、お前は風……空気の流れから周囲の状況を把握していた。遅れてくる衝撃は、拳に風を纏わせ、俺が防御した瞬間に、風を分散させることで、解放された拳が直撃することで発生する、血鬼術の副産物だろ？ 不可視の力による防御は、限界まで圧縮した空気の壁が、刃を拒んでいた……だが、腕を切断できたということは、お前は風を部分的にしか纏えない。だって、そうだろう？ 全身で纏えるなら、風の鎧を常に着込むだけで、お前はほぼ無敵なんだ。それをしない理由がない、俺でもする」

思えば、土煙を吹き飛ばしたのは、空中に舞った砂が状況把握に邪魔だったからなのだろう。

砂の中には微小の小石なんかも含まれる。それらが正しい空間把握を邪魔していた。

（もし仮に風を全身に纏えたら……俺じゃ勝てなかったかもな。風の全身装備とか、攻略のしようがないし……）

案外、圧縮した風すら押しつけるほどの力で攻撃すれば、突破できるかもしれないが、今の炭治郎には酷な話だった。

「だから、どうした？」

鬼はただ一言、悠然と告げる。

「お前に……俺の風を突破することはできない！」

そう言つて、鬼は神速の右ストレートを放つ。

感覚で分かる。その拳にも風が乗っている。まともに打ち合っても弾かれるだけだ。

「けど、俺だって強くなるために磨いてきたんだ……」

炭治郎は姿勢を低くし、右手を引いて左手を前に。まるで弓を引くかのような構えを取った。

「負けるつもりはない。……竜の呼吸」

四ヶ月の成果……それが今、ここに開放される。

「けだもの獣ノ舞 がじゅうとつ牙獣突」!!」

風の拳と、限界まで引き絞られ、弾けるゴムのような動きで放たれた鋭利な突きが、衝突した。

栗花落カナヲは、任務を完了し蝶屋敷への帰路についていた。

右手の中には、亡き姉、胡蝶カナエから貰ったコインが一つだけ。それを眺めながら、カナヲは思考を巡らせる。

(……私が大事にしたいもの……心の底から求めているもの……か) ずっと、だ。

竈門炭治郎という少年に言われた言葉が、頭から離れない。何度も何度も、頭の中を反芻している。

このままでは師範に怒られる、と気を引き締め直そうとするカナヲ……だが、その度に炭治郎の顔が、言葉が邪魔をする。

「……っ！」

どうでもいいと思えない。それがとても苦しい。……なのに。

(苦しい事なのに、失くしたいって、消したいって思えない……どうしたんだろう。一度、師範に聞いてみよ——)

「イヤアアアアアアアア——ツツツ!!!!!!」

突如。

蝶屋敷の玄関から悲鳴が聞こえた。

「——ッ!?!」

カナヲが門から中を覗き込むと、高い背丈に、宝石の装飾品を身につけた大男が蝶屋敷の少女たちを攫おうとしていた。

袖の部分を切り落としているが間違いない鬼殺隊の隊服。しかも、

カナヲはその人物に覚えがあつた。

(あれは……音柱・宇随天元……上官の人……どうして?)

「やめてください! 離して、私……この子は……ッ!!」

「うるせえな、黙つとけ」

低い声で泣き喚く少女たちを黙らせようとする宇随。

攫つておいてその言い草は何だと思ひ、カナヲが止めようとするも

(……いいの? 相手は上官、多分任務……命令されたら私は——)

『心が教えてくれるからさ。カナヲにとって、大事なものを』

再び反響する炭治郎の言葉。

しかし、今はそれが、苦しさではなく、安らぎを。勇気を与えてくれる。

宇随天元は強烈な殺気を感じ思わず飛び下がった。

瞬間、先ほどまで宇随の居た場所に蹴りを放った姿勢で停止する少女の姿があつた。

昼間なのに敵襲か?! と慌てて身構える宇随だが……。

「あん? よく見たらためエは、胡蝶の継子の……お前、何のつもりだ? それが上官に対する——」

宇随の言葉は、カナヲの右拳によつて遮られた。

尤も、カナヲの拳もまた、宇随の手によつて止められたが。

腕を使ったことで、右脇に抱えられていた、なほが地面に落ちる。

「あぐっ!」

「……と、突撃いいいいいい!!」

「カナヲさまに続けええええええ!!」

「猪突猛進——ッッ!!」

どこかの猪侍いのすけのようなことを叫びながら、宇随にしがみつつきよとすみ。

ついでにカナヲもまだ抱えられるアオイを助け出そうと取っ組み

かかった。

「ちよ、てめーら、いい加減にしやがれ！」

「それはこちらの台詞ですよ、宇随さん」

その場の全員が、全く同じタイミングで動きを止めた。

底冷えするような冷たい声。背後から掛けられる凄まじい重圧。宇随天元は過去最大級の死を感じ取った。

一瞬でその場を退き、屋敷の天井に上り詰める……が。

「そう簡単に逃がすとお思いで？」

「チツ！」

いつの間にか隣に並び立っていたしのぶの姿を見て、宇随は舌打ちしながら数メートル下がり、向かい合う。

「……戻ってたのかよ胡蝶」

「つい先ほど。……それで？」

「悪いがコイツを借りてく。異論は認めん」

「ふざけないで！ アオイさんを返してこの変態!!」

「そーよそーよ！」

「てめーらコラ！ 誰に口利いてんだコラ!! 俺は上官、柱だぞ小娘

ども!!」

「今の貴方の柱としての威厳なんて紙屑未満ですよ」

宇随が怒り心頭で叫ぶが、この場合悪いのは九割九分彼の方である。

「俺は任務で女の隊員がいるんだよ！ 継子のほうは胡蝶の許可がいるから、帰ってこねーうちに攫って来ようと思ってたのに！」

「目ん玉抉られたいんですか？ というか、どうして女性の隊員が必要なんですか？ そろそろ私も我慢の限界ですよ？」

見れば、胡蝶は額に青筋を浮かべ、左の拳で虚空を殴って気を静めようとしていた。

いつ暴発してもおかしくない爆弾が隣に設置されていることに、ようやく気が付いた宇随。

しかし、彼にも彼の事情がある。引くわけにはいかない。

「うつせえ、とりあえずコイツは連れて行く。役に立ちそうもねえが、

こんなのも一応隊員だ」

「待てやゴリアア!!」

宇随の右側から怒鳴り声が響いた。

振り向けば、猪の被り物をした隊士が彼の行く手を阻まんと立ち塞がっている。

さらに背後を振り返れば、金髪のタンポポのような髪をした少年が、奇妙な箱を背負って佇んでいる。

「彌豆子ちゃんとともにいる俺は無敵だ。消えな、ぶっ飛ばされんウチにな（嫌アアアア!! 柱、怖っ?! つか、なんだあの筋肉達磨^{ダルマ}気持ち悪っ!!）」

「アオイを返して」

正面にはカナヲ。

四方を囲まれた宇随は、暫く睨み合っていたが……分が悪いと判断したのか、

「ちっ、ぬるいな。このようなザマで地味にぐだぐだしているから鬼殺隊は弱くなつていくんだろうな」

捨て台詞とともに、納得のいかなそうな表情でアオイを解放した。

「アオイ!」

「……それで、どういうつもりなんです?」

「今回の任務の行き先がちよいと特殊だな。内容からどうしても女の隊員が必要だった」

「行き先……?」

「ああ」

宇随は屋根の上から降りつつ説明を始める。

それに続くように、しのぶたちも屋根から降りた。

「鬼の住む遊郭だよ」

満を持って、宇随はその行き先を口にした。

祭りの神

取りあえず、宇随の任務にはしのぶと善逸、伊之助とカナヲが助っ人としてついていくことになった。

伊之助と善逸は一応、名義上は煉獄の継子なので連絡を取ったが、二つ返事で了承を得た。

なので、早速移動を開始することになったのだが……。

「いいか？ 俺は神だ！ お前らは塵だ！ まず最初はそれをしつかりと頭に叩き込め、ねじ込め！！ 俺が犬になればと言ったら犬になり、猿になればと言ったら猿になれば！！ 猫背で揉み手をしながら俺の機嫌を常に窺い全身全霊でへつらうのだ！！ そしてもう一度言う……俺はか——」

「子供に何教えてるんですか貴方は」

「あだだだだだだッッッ！！~~？~~」

頭のおかしなことを平然と、決め顔で叫ぶ祭りの神に、人の鉄槌しのぶ（関節技）が放たれた。

（……なんだこいつ）

善逸が呆れた視線を宇随に向けている。

普段からどこに出しても恥ずかしい剣士として自覚のある彼だが、流石に受け入れられなかった。

「俺は山の王だ、よろしくな祭りの神！」

何故か伊之助が張り合おうとそんなことを言う。

「あだだだッ……あ？ 何言ってるんだお前、気持ち悪い奴だな」

「いやアンタ（貴方）とどっこいどっこいだろ（ですよ）~~？~~」

「私は森の精霊である」

言い出したのはカナヲだった。

しのぶと善逸が驚いたようにカナヲを見る。

彼女は自分の顔を覆う程大きな葉っぱを、目と口の部分だけ繰り抜いて仮面のように身につけている。

そしてどこか得意げな雰囲気だった。

「……一応聞きます、カナヲ。それは誰に教わりましたか？」

「？ 勿論……炭治郎です」

「あの馬鹿覚えてろ」

もはや口調がブレるほどのしのぶの怒りは限界点を越えていた。

「……ま、まあ……兎に角だ。花街までの道のりの途中に藤の家があるから、そこで準備を整える。ついてこい」

瞬間、宇随の姿が消えた。

突如消失した宇随にギョツとするカナヲたちだが、しのぶは呆れたようにため息をつき、

「……相変わらずですね」

「あの、師範……音柱様は何処に？」

「どこって……あそこですよ。あとカナヲ、その葉っぱの仮面取りなさい」

しのぶの指さす先には、いつの間にか胡麻粒のように小さくなって、今にも見失ってしまいそうな音柱がいた。

「えっ、はやっ!!」

「あの人は元忍で、足が速いんです。短距離ならいざ知らず、長距離の走行となると柱の中でも一、二を争う速さですよ」

「これが祭りの神の力……!」

「つと、追わないとですね。行きますよ三人共」

そして、藤の家に到着した四人。

一室を借り、そこで任務について詳しく話してもらったこととなった。

「ふああ……あれ？ これどう言う状況？」

疲れが取れたのか、目覚めた禰豆子が眠気眼で問いかける。

善逸が状況を説明する中、宇随が本題を切り出した。

「遊郭に潜入したらまず俺の嫁を探せ。俺も鬼の情報を探るから」

「とんでもねえ話だ!」

「あゝあ?」

「ふぎけないでいただきたい! 自分の個人的な嫁探しに部下を使うとは!」

「あの、善逸くん……」

「止めないでしのぶさん。これだけは言わないといけないんです……アンタみたいな奇妙奇天烈な奴はモテないでしょうとも!! だがしかし、鬼殺隊員である俺たちをアンタ嫁が欲しいからって——!!」
「馬ア鹿テメエ! 俺の嫁が遊郭に潜入して鬼の情報収集に励んでんだよ! 定期連絡が途絶えたから俺も行くんだっての!!」
「そういう妄想をしていらっしやる……?」
「殺す」

「あの善逸くん……信じられないかもしれませんが、彼に言ってることは妄想ではないんです……信じ難いですが」

「胡蝶、てめエも地味に煽ってんなオイゴラ……!」

ピクピクと額を引くつかせる宇随が、懐から紙の束を取り出し善逸に投げつけた。

「読め、それが鴉經由で届いた手紙だ」

「え、多くない? どんだけ長い間遊郭にいたの?」

「そりや多いだろ、三人分なんだ。てか、お前本気で平気なんだな竈門 禰豆子」

「ちよつと待つて三人分……?」

「察しが良いな。そう、俺には三人の嫁がいる」

「さ——!?!」

またしても善逸が発狂しながら叫ぼうとするが宇随に物理的に黙らされた。

宇随の嫁の三人。

彼女たちは俗にいう女忍者の『くの一』で、客よりも内側に潜入する……つまり、店側、遊女として調査を行っていたのだ。

宇随が絞り出した候補は三つ。〃 ときと屋〃の「須磨」、〃 荻本屋〃の「まきを」、〃 京極屋〃の「雛鶴」——

「嫁もう死んでんじやねえのか?」

「ふん!」

「いっ——!?!」

縁起でもないことを口走った伊之助も腹を殴られた。

すると、部屋の戸を叩く音がし、外から藤の家の主人が宇随の手配

した着物を持ってきた。

「……なんですかこれ？」

「言っただろ？ 遊女として潜入しろって」

「着ろと？ 誰が？」

「お前とお前の継子。あと……」

「禰豆子ちゃんに遊女なんてさせないぞ！」

復活した善逸が宇随に牽制を入れる。

「えー！ 私もたまにはいつもと違う着物が着たい！ お兄ちゃんは
そう言うの全然買ってくれないし、そのくせ無駄に過保護だし！」

「そ、それは禰豆子ちゃんが大事なだけで……で、でも、禰豆子ちゃん
の新しい衣装……」

「絶対来てね、善逸さん！」

「ぶ——！！」

善逸、鼻血とともに気絶。

いきなり倒れた善逸を、伊之助が指で突っついている。

「……やるんだな？」

「勿論！ むんっ！」

(……まあ、使えるなら使うか)

こうして、遊郭への潜入が決まった。

。

盲目の鬼と炭治郎が、互いに背を向けた状態で立っている。

炭治郎は刀を突きの状態にしたまま制止。

対する鬼は……。

「……あり得ない」

震える声で、鬼は言う。

「何がだ？」

「俺の拳は風で防御されている。刀が触れたらその勢いを殺す……だ

から」

恐る恐る、鬼は自分の右腕を見て。

そして、叫んだ。

「なんで……俺の右腕は切断されてんだよ!!」

鬼の言う通り、彼の右腕は……肘から先が消失していた。

正確には、彼の足元に、先程まで在ったはずの腕が落ちている。

「別に、大したことはしてないよ。ただ、圧縮した風を破壊しながら攻撃しただけ」

「出来るはずがねえ！ お前に、俺の風を破壊するだけの力なんざあ……!!」

「確かに、俺一人じゃ無理だな」

風は拳に乗せられている。

それは、握り拳の、直撃する正面の部分に。

炭治郎の刃は風の塊に向かって直進し、その真逆の位置から鬼の拳が圧力をかけていた。

つまり、双方向からの圧力に耐えられなかった風は、挟まれた瞬間に瞬時に破裂したのだ。

ようは風船と同じだ。

風船は、空中から衝撃を受けても、例えそれが金属バットによるものであろうとも割れることはない。威力を外部に逸らすことが出来るからだ。

だが、地面に置き、上から座れば破裂する。圧力を逃がすことが出来ないから。

また、別に座らずとも、爪楊枝の一つで割ることも可能だ。

炭治郎は、自身の刀を爪楊枝に見立て、双方向からの圧力により風の塊を破壊。切っ先によって文字通り風穴を開けられた塊はそこから瞬時に分散し、威力に消えなかつた炭治郎の一撃が鬼の腕を刺し貫いた。

「……クソがアアアアあ!!」

仕組みは理解できない。原理は説明できない。何が起こったのか分からない。

それでも、自身の技が破られた。それが意味するのはつまり――

「銀ノ舞 乱舞」――！」

滅茶苦茶な軌道で放たれた斬撃に、鬼の血が宙を舞う。

部分的にしか装備出来ない風は、急所の頸以外を守らせていない。それを見抜いている炭治郎の攻撃に、鬼はドンドン追い詰められている。

無論、傷は治る。鬼は不死だ、この程度はなんて事ない。だがそれ以上に、二人の間には隔絶した経験の差が、地力の差があった。

再生するといっても、痛みがないわけではない。攻撃を続けられれば、頸の守りが消えてしまう恐れがある。

(……なんで、俺がこんな目に……)

左腕を斬り飛ばされながら、鬼は思った。

こんなはずじゃなかった。もっと、上手くやれるはずだった。

そもそも、鬼になれば目も治る……そう聞いた。

(? ……聞いたって、誰に……?)

「――ッ!」

その時。

鬼の脳裏に、流星のような速度で、一人の人間の記憶が巡った。

貧しい暮らしだった。

夫に出ていかれ、女手一つで息子を育てる母がいた。

彼女は苦勞した。金もない、住処もボロボロ。そして何より……彼の息子には、両目がなかった。

生まれつきだった。夫が逃げたの理由の一つだ。産婆すら顔を青くし、何も言わずに去っていった。

近所の人間の噂を耳にした。子供が呪われている。関われば自分たちも目を奪われる、と。

『……大丈夫、アンタは呪われてなんかない。いつかきつと、みんなもあんたのことを分かってくれるさ、勇希』

息子は、母にだけ心を開いていた。

その母は、息子を捨てることはなかった。どれだけ苦しい生活であつても、常に息子のことを思っていた。

例え目が見えなくても、息子はそれを分かっていた。心で感じていた。

……だからこそ、息子は目が欲しい、と心の底から思った。

迷惑を掛けたくない。一人でも頑張れるところを見せて、安心させてあげたい。それだけが、息子の……少年の願いだった。

時は流れる。

少年……風魔勇希かざまゆうきは家事をしていた。

目がない生活にも十分慣れ、構造を把握した家の中では自由に動き回れるようになっていた。

外も、近所であるなら問題なく動け、最近では目がない自分を氣遣つてくれる人物も増えた。

母の言葉に嘘はなかった。それを実感した勇希は、より一層、母の助けになりたいという思いを強めた。

そんなある日だ。母は病を患った。遠くの町で医者と呼ばねばならない重症だ。

しかも都合の悪いことに、自分たちに理解を示してくれる人たちも遠出しており、それ以外の人は未だを自分を忌避している。

医者を呼ぶにしても、薬を買いに行くにしても、薬草を取りに行くにしても、自分がやらなければならない。状況は最悪。しかし、同時に好機だと勇希は思った。ずっと助けてくれた母に恩返しができる。

だが、彼は目が見えない。薬も医者も金がないのでどうしようもない以上、行先は決まっている。

山の中に入った勇希は、案の定転落した。

頭から血が流れ、骨は曲がってはならない方向に曲がっている。見えはしないが、薄れゆく意識が勇希に死を悟らせた。

そんな時だ。

男の声が聞こえた。

『ほう、目の無い怪物がいると聞いて来てみたが……すでに死に体か。

つまらぬ』

『……誰、だ……？』

『私に問いを投げるか？ 不敬な……だが、私の姿が見えぬのでは仕方あるまい。一度目は見過ごす、次はない』

二度目の問いはなかった。そもそも、そんなことを言う気力すら勇希にはなく、男の声はもう聞こえていなかった。

『心臓も肺も止まったか……だが、細胞だけは生きているな。その生への執着……気に入った。間に合うかは知らんが、私の血をやろう。上手くいけば、お前は鬼になる。ともすれば、失われた目も治るやもしれんぞ？』

男が手首を薄く切り、勇希の頭の傷口に数滴、己が血を流し込んだ。途端、勇希の体が不規則の動きを見せた。

声にならない悲鳴を上げ、あちこち転がりながら全身に砂を付け……止まる。

『……む？ 鬼となっても目が再生しないのか。そうか、目が無いのは生まれつきであったか。再生はあくまで元の状態に戻すもの。元から目がないのであれば、治らないのも道理か。……それにしても、いつになったら太陽を克服する鬼は生まれるのやら』

ため息をつきながら、男はその場を去っていく。停止していた勇希の体に、変化が訪れたのは直ぐだった。

『……』

相変わらず目のない顔。

しかし、口元からは獰猛なオオカミのような牙、垂れる涎……まるで飢えた獣のような佇まい。

もう、かつての風魔勇希はどこにもいなかった。

そして、盲目の鬼は駆ける。己の食欲を満たすため、掠れ、消えかけている記憶を辿る。

『……勇希？ ぼほっ、も、戻ったの……？』

鬼となった勇希には、布団の上で苦し気にしながら起き上がる女性が誰か分からなかった。

だが、この時確実に分かっていたのは――

『……喰わないと』

視えたもの

「——ッ!!」

その時。

炭治郎は無意識に攻撃の手を止めていた。

理由なんてない。ただ、何となく……これ以上攻めるのはまずいと。

そう、思ったただけだ。

そして、その予感は的中した。

「あ」

「？」

「あああああああああ！ あああああああああああああああああああああ!!!! あああああああああああああああああああああああああああああああ—— ツツツ
!!?! ☒」

悲鳴にも似た絶叫。

街の中心で、静まり返っているせいかよく反響する。

(……待て、おかしくないか？ これだけ暴れてるのに、どうして人が集まってこないんだ……?)

不自然だった。

既に戦闘が始まって十分以上経っている。いくら夜だといっても、これだけ派手に暴れ、大きな音を出したら野次馬の一つや二つできてもおかしくはない。

だと、言うのに。

彼らの周囲には人っ子一人いない……まるで、この街には誰もいないかのように。

「……そうだ、ここだ……ッ！ ここが、俺の住んでた……!!」
「は？」

「そうだ……こっちだ……俺の家は……母さんは……ッ!!」

ドンッ!! 蛙のような跳躍力で鬼が跳ぶ。

空中で風を起こし、方向を調整しながらの飛行している。

(なっ……あそこまで操作性能が……!?)

思わず愕然とする。だが、それを眺めている場合ではない。

「やばっ……追いかけないと!」

急いで足を動かす。

家の屋根を伝い、姿を見失わないように走る。走る。走る――

「あ、村田さん、尾崎さん!」

「うっ……!」

道中。

ボロボロになって横たわっている村田と尾崎を発見した。

彼らのいる道は、まるで大きな風が直線で突っ切ったかのような穴が出来ている。

間違いない、あの鬼の仕業だ。

幸い、風に吹き飛ばされただけのようで、二人の怪我は軽傷だ。このまま安静にしておく方がいいだろう。

「……ッ!」

ふと、右手を見た。

震えている。得体の知れない狂気を感じた心が、恐れを抱いてしまった。理解のできない存在を無意識に排泄しようとしている。

「……耐えろ、戦え! あいつを野放しにはしておけない! 行くぞ、竈門炭治郎!!」

己を鼓舞し、右手を膝に叩きつける。

そして、悠然と風穴へ向かって歩いていく。

「……ああああ……!!」

「……いた」

鬼は、壊れた家屋の前で膝をついていた。

覚えがある。あれは一番最初の戦闘で、あの鬼が吹き飛ばした売家だ。

「……おい!」

「……、お前のせいか……?」

「えっ……?」

「お前のせいで、みんな死んだのかアアア――ッッ!!」

激高しながら襲い掛かってくる鬼の姿に、炭治郎が驚愕する。

鬼は、泣いていた。

目なんてないはずなのに。

眼球の無い虚空から、一筋の涙を。

余りにも哀れな姿を前に、炭治郎は身動きが出来ず固まってしまい

「ガッ——!?」

無防備のまま、鬼の拳を受けてしまった。

激痛から、膝をついて蹲る炭治郎を、追い打ちをかけるように鬼が蹴飛ばす。

「あが、あ……………ッ!」

「殺すウ……………!! お前だけは、お前だけは——!!」

「何、の……………話だ——!」

「とぼっけんじゃねえ——!」

馬乗りにした炭治郎に、鬼は容赦なく拳を振るう。

何度も。何度も。何度も。

「……………ハア、ハア、ハア……………くそ、なんで……………なんで死なねえんだよ!」

ボコボコに殴られた炭治郎は、それでも息をしている。

鬼を烈火の如く睨みつけ、虎視眈々と反撃の機会を窺っていた。

「お前が……………お前のせいで——!」

ヒュオオオオ!! 風の音が木霊する。

凄まじい勢いで、鬼の拳に風が収束するのが分かった。

これを受ければただでは済まない……………そういう直感染みた推測も。

焦った炭治郎は、鬼を振りほどこうとするも、受けた傷の痛みでまともに体を動かせない。

ここまでか? 炭治郎は、襲い掛かる拳を前に、身を固くすることしかできず——

「……………?」

しかし、鉄槌はこない。

風の拳は、いつの間にか止まっていた。不自然な停止だ。まるで、何かに掴まれているかのようなだった。

鬼の様子もおかしい。ずっと虚空を眺めたまま動かない。信じられないものでも見たかのように、石造のように停止していた。

「……………」
鬼は、幻を見ていた。ありもしない幻想を……心で。

『ダメ……もう、いいの。終わりにしよう？ 一緒に行こ、ね？』
知らない女性……だが、懐かしい声だった。

そもそも、誰かを『視る』という行為が、鬼にとっては新鮮な行為だった。

そして何より……鬼は知っていた。

見たことはない。目が見えないのだから。それでも、分かった。分かってしまった。

「……………あさん……………」

『もう終わりにしましょう』

優しい声が、鬼をそつと抱き寄せて――

「ぐああああああああああ！！！！」

そこで、彼の意識は現実に戻った。

それと同時に、拳を地面に叩きつける……が。

「……………いねえ。……………そこか」

「ハア、ハア、ハア………危ない」

本当に危なかった。

あの時拳が止まっていなければ、潰されて終わりだっただろう。

ともかく、最悪は回避できた。

ならばあとは、勝ちに行く。

「竜の呼吸【花ノ舞 紅蓮華】！！」

振るわれる、新たな技。

炭治郎の刃が紅の花を纏い、弧を描く形で斬撃を放つ。

その刃が鬼の頸を捉える……その瞬間に。

鬼の周囲から凄まじい暴風が発生した。

「ぐっ……………」

……鬼の頸が落ちた。

「……………」

浮遊感。

それと同時に感じる、身に迫る死の気配。

凄まじい喪失感が鬼の心を襲った。

だが。

(なんだ、この……妙な安心感は……?)

まるで。

これ以上罪を犯すことがない事を、喜んでいるような。

ようやく、母がいる場所へと逝ける——そんな、安堵があった。

「……………」

気が付けば。

鬼は、見知らぬ場所に立っていた。

見渡す限り闇。足場すら目に見えない、虚無の世界。

ふと、ある場所に視線を向けた。

そこには、花畑があつた。色鮮やかに咲き誇る花の群れ。まさしく

百花繚乱。余りの美しさに、目を奪われた。

そこで気づく。

自分が、何かを視ていることに。

「……………見える……………でも、どうして」

『勇希』

ばっ、と。

名を呼ばれた鬼が、勢いよく振り返る。

奇妙な女性だった。髪を後ろで纏め、若干ボロい着物を身に付けている。

『ごめんね。私のせいで……………』

「……………そんな」

女性の声に、勇希は覚えがあつた。

何しろ、彼は。

その声の主の為に、人生を尽くすと誓ったのだから。

「母さん……!!」

初めて見た母親に、勇希は泣いて縋り付く。

彼の口からは、懺悔の言葉が留めなく溢れた。

それは、彼女に向けるべき言葉ではないと分かっているけれど。

自分が殺した者にこそ向けるべき謝罪であるけれど。

『もういいの。アンタはよく頑張った』

「そんなことない……俺は、俺は……ッ!!」

『キチンと罪を償おう、ね? 私も、一緒に行くからね』

二人は、互いに抱き合ったまま。

その身を、地獄の業火で焦がすのだった。

「……ハア、ハア、ハア」

炭治郎は過呼吸気味に、息を吸って吐いてを繰り返していた。

彼の右手には、鬼の血の入った採血のような小刀が握られている。

既に鬼の肉体は灰となってい消えていた。

戦いは終わった。

それでも、炭治郎の心は晴れない。

「……鬼は、虚しくて、悲しい生き物、か……」

唐突に、そんな言葉が頭に浮かんだ。

あの鬼がどんな業を抱えていたのかなんて分からない。彼は鼻が

利くわけでもないから、他人の感情を読み取ることなんてできない。

それでも。そんな炭治郎でも。

あの鬼が、何か、辛い境遇にいたであろうことは……十分、推測できた。

「それでも、折れるわけにはいかない」

既に決意は固めた。

ここで立ち止まっていたは、何も守れない。

そう、己を叱咤し、立ち上がろうとした……その時。

「ニャーオ」

「……お前は、えっと、茶々丸だっけ？」

「ニャー！」

名を呼ぶと、三毛猫は嬉しそうな鳴き声を上げる。

そして、炭治郎から血を受け取ると、何処かに去ろうとし、

「ニャー」

「……？ ついて来いってことか？」

「ニャー」

普段、茶々丸は採決を終えると現れ、血を受け取ったら消えてしま
う。

だが今回は、消えることなく、自身のついてこいというのだ。

炭治郎は、鴉に報告と救護班の要請を行い、茶々丸についていくこ
とにした。

。

吉原・遊郭。

男と女の見栄と欲、愛憎渦巻く夜の街。

遊郭・花街はその名の通り、一つの区画で街を形成している。ここ
に暮らす遊女たちは、貧しさや借金などで売られてきた者が殆どで、
沢山の苦勞を背負っているが。

その代わり、衣食住が確保され、遊女として出世できれば裕福な家
に身請けされることもあった。

中でも遊女の最高位である“花魁”は別格であり、美貌・教養・芸
事、全てを身に付けている特別な女性。

位の高い花魁には簡単に会うことすらできないので、逢瀬を果たす
為に男たちは競うように足？く花街に通うのである。

「とまあ、そう言う訳でさ。どいつか買つてかない？ 安くしとくよ？」

言ったのは、鬼殺隊・音柱の宇随天元だ。

普段の隊服や化粧は見る影もなく、サラサラの髪に高級そうな着物に身を包んでいる。

ぶつちやけ、普段より十倍男前だった。

彼は今、あらかじ予め目星をつけていた候補の店に、潜入捜査用の人員を送るために変装をしているのだ。

傍らには、三人の女性がいる。

一人は栗花落カナヲ。普段の隊服姿ではなく、女性用名の着物に身を包み、髪を後ろで括っている。口元に浮かぶ微笑は、妖艶な美を漂わせている。

その隣には、彼女の師である胡蝶しのぶ。やはり隊服姿ではなく、普段結んでいる髪をおろしており、着物の上に蝶のような羽織を纏っている。普段から浮かべている笑顔が、美しい蝶を連想させた。

最後に竈門禰豆子。髪はツインテールの形で、高級そうな着物に身を包み、元気な町娘を思わせる笑顔を浮かべている。

「むう、選り取り見取りだねえ。どの娘も別嬪さんばかりなんだけど、先日も新しい子が一人入ったばかりだしねえ」

「まあでも、一人くらいならいいんじゃない？」

彼らと取引しているのは、“ときと屋”の女将と旦那だ。

ここで躓いては話にならない。

「じゃあ、その端の、元気な子を買おうよ。いくらだい？」

「毎度あり。じゃあ一人頼むよ奥さん」

「頑張りますー！」

禰豆子、就職決定。

「いやー、幸先上場だな。この調子なら、お前ら二人もすぐに売れるだらーよ」

三人はときと屋を出て。

は次の目的地である荻本屋へと向かっていた。

「ちよつと宇随さん。目的を忘れないでくださいね？」

「分あつてるよ。おつ、お前ら見ろ、花魁道中だ。通つてるのはときと屋の“鯉夏花魁”だな」

「話を逸らさないでください」

「おやおや？」

しのぶが宇随の態度を咎めようとすると、脇から声を掛けられた。

知らない声だ。恐らく、しのぶの美しさに見惚れた男が手を出そうとしているのか。

彼女は鬱陶しそうに声の主に振り返り……言葉を失った。

「うーむ、何処かで見た事あるような気がするんだが、どこだったかな？　むう、もう少しで思い出せそうなんだが」

「おい兄さん。悪イがこいつも立派な売り物なんぞな。手を出すなら遊女になつてからにしてくれや」

「おつと、これは失敬」

宇随に止められた男は、困つたような笑みを浮かべ謝罪をする。

奇妙な男だった。

頭から血を被つたかのような赤い紋様のある髪に、虹色の目をした洋服の着物を着た男だ。左手には日傘を持ち、日の光を遮っている。

右手には黄金の扇を、口元に浮かぶ笑みを僅かに隠すように持っている。

「まだ遊女じゃないなら、その子が売られた時、是非その店を紹介してほしいな」

「そんなに気に入ったのか？　物好きだねえ」

「いやなに……ちよつとした気まぐれさ」

それだけ言つて、一瞬ちらつとしのぶを流し見た男は、人混みに紛れて消えていった。

「何だつたんだアイツ？」

「師範、どうかしましたか？」

カナヲがしのぶの身を案じるが、しのぶはやはりいつも通り笑顔を浮かべている。

「……いえ、大丈夫。大丈夫だから」

それは、カナヲを安心させるというよりは、自分自身を自制してい

るかのような口振りだった。

だが、二人ともそれに気づくことなく、

(見つけた)

しのぶは、自身の胸に憎悪が巡るのを感じていた。

あの男で間違いない。黄金の扇、頭から血を被ったような髪。数字こそないが、あれは間違いなく、

(姉さんを殺した鬼……！ まさか、こんなところにいるなんて……ッ!!)

本当なら、今すぐその頭蓋に毒を打ち込みたい。

だが、ここで戦うのは危険だ。まだ人が大勢いて、戦うのに向いていない。

待つしかない。殺すことが出来る、その瞬間まで。幸い、自分が売られた時にあの男が来るのは分かっている。決戦の場は、そこでいいだろう。

しのぶは密かに誓った。

必ずこの遊郭で、姉の仇を取る、と。